
夏の疾走～夏休みを手に入れろ！～

イチゴダイフク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の疾走〜夏休みを手に入れる！〜

【Nコード】

N3601I

【作者名】

イチゴダイフク

【あらすじ】

超能力を持つ子供たちは隔離されていた。外界とのコミュニケーションは遮断され、夏休みになっても遊びに行けない。そんなところに、一通のメールが届く。

——鬼ごっこで一週間逃げ切れば、一週間の間外に出られる——
夏休みを賭けた鬼ごっこ。与えられるミッションをクリアし、一週間逃げ切ることが出来るのか？

姉のため、約束のため、父親を殺すため……それぞれの思いを抱いて疾走する！

超能力×鬼ごっこ×バトル×恋愛の物語、スタート！

連載が不定期になりました……すみません。

夏の疾走 プロローグ（前書き）

とあるテレビ番組を見ていてひらめきました。初心者ですが、よろしく願いします。高校入試の前に完結できるかどうか……がんばります。

夏の疾走 プロローグ

ボクは記憶力がいい。あの日も確か、暑い夏の日だったと思う。

あの日は外国に住んでいた両親が帰ってきて、ちょっとしたパーティーを開いたりした。そして、その日の夜――

「馬鹿！　せつかくお父さんとお母さんが帰ってきたのに、あなたのせいで、またみんなバラバラじゃない！」

普段優しい姉が、すごい剣幕で怒鳴り散らしていた。止めようとする母を突き飛ばし、綺麗な顔をぐしゃぐしゃにして泣き叫ぶ。

「あなたがそんな能力手ちからに入れなければ……あたしたちは、また、一緒に暮らせたのに！」

姉さんは、「化け物」と、消え入りそうな声でつぶやいた。それを聞いて、おとなしくしていたボクもキレる。

「うるさい！　こんなチカラ、ボクだって欲しくなかったんだっ」

掴みかかってこようとする姉に、右手をかざす。姉はおびえて立ち止まった。そのときの表情が、瞳が、ボクを哀れんでいるようで、蔑んでいるようで、酷く苛立った。舌打ちする。

壊してやる。思い出も、絆も、未来への楽しい希望も、なにもかも。

「あああああああああ！！！！」

自分のものとは思えない叫び声を上げて、右手を振りかざした。
バン！ と力いっぱい床に叩きつける。家全体が震えた。

「ぶっ壊してやる」

右手から閃光が迸った。フローリングの床が砕け、壁と天井が吹き飛ぶ。椅子やテーブルや調度品がバラバラになりながら転がった。家族が逃げ惑う中、家がバラバラと崩れ落ちていく。ボクは降り注ぐ家の残骸を右手で破壊しながら、狂ったように暴れまわった。

そして、やっと怒りが収まりかけた頃、瓦礫の山を見て立ちすくんでいると、だんだん頭が冷静になってきた。冷静になると今度は、自分がしたことを客観的に眺めて絶望した。家族が、おびえた目でこちらを見ていた。

「あつ、あは……ははは……あははははっ」

頭のねじが抜け落ちたみたいで、ボクは泣きながら笑った。失くしてしまった、と思った。

思い出も、絆も、未来への希望も、家族の暖かさも、帰るべき家も、約束も――

――何もかも、壊してしまった。

「ははははっ、あはは、はは……っ、がっ……！？」

笑い続けていると、突然視界が歪んだ。身体中に、骨が砕けるような痛みが走る。苦しい。吐き気がする。平衡感覚が失われて、そ

の場に崩れ落ちた。

だんだんと鈍っていく意識の中で思った。

——ゴメン、姉さん。

あるとき、日本中に超能力を持った子供たちが現れた。政府はこの異能の子達を脅威とみなし、一箇所に隔離して研究することを決定した。

能力者隔離地区は東京都の約三分の一の広大な敷地で、小中高一貫の学校がいくつも並んでいる。大人も存在するが、彼らは学校の教師、もしくは隔離地区内に出店している店の店員だ。

ある程度の生活費は支給され、子供たちは寮生活をする。ただし勉強やスポーツで好成績を収めた優秀な生徒はそれぞれの家を与えられていて、支給される金額も高い。そのため隔離地区内の子供たちは皆、勉強かスポーツに打ち込んでいた。

隔離地区では定期的に超能力や身体能力などを検査している。能力者の存在は世界中の学者たちの研究の的であり、危険な実験をすることもあった。

日の光を反射してきらめく海。砂浜ではしゃぐ子供たちの歓声。ビーチバレーをしている女性を眺めるエロ親父。どの顔も笑顔、笑顔、笑顔——

「くだらない」

朝倉音亜はテレビを切った。海水浴客が楽しそうにしている様子が流れたからである。夏休みの様子なんて見ても、ただ苛立つただけだった。

音亜はソファに寝転がった。隔離地区外には電話もメールもできない携帯電話をもてあそぶ。暇にしていると、先ほどテレビで見た夏休みの様子を思い出してしまい、心の中で舌打ちした。憧れたつて、手に入りはしないのだ。

音亜は超能力者だ。小学六年生のとき超能力者になり、中学進学と同時に能力者隔離地区に送られた。

隔離地区は外界と遮断されている。隔離地区から外に出ることは許されず、電話やメールはもちろん、手紙ですら連絡を取ることも出来ない。テレビやインターネットも政府によって制限がかけられている。そして、外から隔離地区内の情報を知ることが出来ず、完全に外界と遮断されていた。

こうして夏休みでも遊ぶことが出来ない、退屈な生活を余儀なくされる子供たちは、必然的に勉強か運動に打ち込むことになってしまっている。

「勉強つていつてもねえ……」

勉強なんてやらなくても平気だ。自分で言うのもなんだが、音亜は頭がいい。運動もそれなりに出来る。テストの順位はいつでも二位だった。

いつでも二位。そのことを思い出し、また心の中で舌打ちした。

音亜がいつも二位なのには、理由がある。それは、一位が常に決まっているからだ。

あの天才金髪美少年の少女のような笑顔を思い浮かべるたびに、音亜の胸は締め付けられる。短く呻いて寝返りを打った。

天才金髪美少年——神前燕かんざきつばめは、音亜と同じ中学三年生だ。勉強、運動ともに優秀で、テストでは常に満点に限りなく近い点数を取っている。容姿も整っていて、小さな顔に大きな目。色白で細い身体。金髪碧眼のハーフである。長く伸ばしたサラサラの金髪をポニーテールにしている、より女の子っぽさを引き立てているのだが、本人はそれに気づいていない。

「ん？」

不意に思考を中断された。携帯電話にメールが届いたらしい。ソファに起き上がって確認する。

「……何、これ」

メールは隔離地区を取り締まる政府からのものだった。

「……『ゲーム』？」

メールを読み進めていくうちに、自然と鼓動が速くなっていく。読み終えて、思わず自分の頬をつねった。夢じゃない。

外に、出られるかもしれない。

夏の疾走 プロローグ（後書き）

読みづらいところや誤字脱字など、改善点があればぜひ教えてください。

説明会（前書き）

頭がぼうつとします。新型インフルで出席停止なので、書けたところまでまとめて投稿します。

説明会

神前燕は、能力者隔離地区第三中学校に来ていた。夏休みで授業は無く、部活や委員会に加入しているわけでもないのだが、学校に来ているのには理由がある。

体育館に向かいながら、昨日送られてきたメールの内容を思い出す。

メールには、「夏休み」を賭けた「ゲーム」を行う、とあった。「ゲーム」の内容は鬼ごっこ。一週間かけて行われる、大規模なものらしい。最初は「暑いのに外で走り回るなんて」と思ったが、メール読み進めていくと気が変わった。

「ゲーム」に勝つと、一週間だけ、隔離地区の外に出られる。

能力者である子供たちは、隔離地区から出ることは出来ない。たまに脱走を試みるものもいるが、警備がかなり厳重なため、抜け出すことは不可能だ。それに、仮に抜け出せたとしても、日本中を追われることになる。

だが、この「ゲーム」に勝てば……一週間鬼ごっこで逃げ切れれば、一週間の間外に出られる。

メールを読みきったとき、燕は一つの目的を見出していた。

「神前くん」

体育館に入ろうとしたところで呼び止められた。振り返ると、長

い黒髪の少女が立っている。中性的な顔立ちの美少女で、男女共に人気がある。人気があるのだが、周りに冷たいところがあった。名前は朝倉音亜。同じ第三中学に通う能力者で、実は三年間一緒だったりするのだが、喋りかけても冷たい態度をとられてしまっていた。こういうのをなんて言ったんだっけ？ ええと……

「今、私のことツンデレだと思ったでしょ？」

そうだ、ツンデレだ！ と思い、どこにデレがあるんだろう？ と悩んだ。

「ツンデレだなんて、とんでもない。そんなこと思っていないよ」

「嘘はつかないで。『千里眼』の前では無意味だから」

「……………はい」

音亜の両目が妖しく光っていた。音亜の能力は「千里眼^{クレアボヤンス}」。相手の思考を読み取ることが出来る。

「ここに来てるってことは、朝倉さんも『ゲーム』に参加するんだよね」

「当たり前でしょ。せつかく外に出られるんだから」

なに当たり前のこと訊いてるの？ というような冷やかかな視線を投げかけてくる。

「それより、早くしないと説明会が始まるよ」

今日は「ゲーム」の説明会と受付がある。隔離地区内のそれぞれの学校で行われるので、こうしてやってきたのだった。

蒸し暑い体育館には、すでに大勢の生徒が集まっていた。「ゲーム」には参加しないだろうと予想していた、スポーツが苦手な生徒もいる。空いている席は少なく、音亜と隣になってしまった。

「暑いね」

燕がつぶやくと、「髪を短くすればいいのに」と音亜が言った。

しばらくして、説明会が始まった。どこかのお偉いさんの話を聞き流し、「ゲーム」の説明に聞き入る。体育館に集まった生徒たちは、黙って真剣に耳を傾けていた。

まず、「ゲーム」が行われることになった理由は、能力者たちやその親族による強い要望からのことだった。そしてテストの一つとしてこの「ゲーム」を行うため、スポーツ関係の成績にも含まれるらしいということ。成功すれば成績が上がり、失敗しても成績に影響が無い。どうりでスポーツが苦手な生徒もいるわけだ。

そして、「ゲーム」のルール。期間は一週間。午前九時から午後六時まで。能力者たちは全員逃げる側で、鬼は政府が集めた大人たち。範囲は隔離地区全域で、学校やショッピングセンターなどの一部を除いた住居への立ち入りは禁止。

「ミッションか……厄介ね」

隣で音亜がつぶやいた。燕も同意する。

鬼の数は二十人。しかしそれは最初のことと、後からメールで与えられるミッションをクリアしないと、どんどん増えていくらしい。

「それでは、『ゲーム』に参加する人は申込用紙を記入して、提出してください」

前に出て説明していた大人の指示で、みんな一斉に記入用紙を書き始めた。燕も必要事項を記入する。

「ねえ」と音亜が訊ねてきた。「なに？」と顔を上げずに応じる。

「神前くんは、外に出て何をするの？」

「ボクは……」

言葉を切った。このことを他人に言うべきか迷う。

——ボクは、謝りに行くんだ。

急に黙った燕を、音亜が不審そうに見る。質問には答えずに立ち上がり、音亜の視線から逃れるように、立ち去った。音亜が慌てて追いかけてくる。訊ね続けてくるので、あいまいに受け流す。

——早く、謝りに行かないと。

心の中で、つぶやいた。

安藤紀彦は、あんとうのりひこ「ゲーム」の申込用紙を手に立ちすくんでいた。

必要事項を記入した所までいい。ただ、提出する直前になって、急に参加する気がなくなってきたのだ。

外に出られるといつてもたった一週間の間だけだし、「ゲーム」に負ければそれまで参加した時間と体力の無駄になる。それに、外に出たいと思う理由が、参加を拒む大きな理由だった。

——親父を、殺したい。

安藤の父はロクデナシだった。酒癖が悪く、働きもせずに威張り散らし、母や自分や兄弟たちに暴力を振るい続けた。人間のゴミだった。

だが、人殺しは犯罪で、仮にも自分の親を殺すというのは抵抗があった。能力者になり、人を簡単に殺せるチカラを手に入れた。しかし、能力者になっても考え方が変わるわけではなく、自分は臆病者だった。

「ちよつと、神前くん。なんで『ゲーム』に出るのか、理由くらい教えてくれたっていいじゃない」

不意に、目の前を歩いていく二人に目が留まった。なにやら言い争っているが、申込用紙を提出し終わって帰る所らしい。一人は金髪碧眼の美少年。もう一人は長い黒髪の少女だった。少女に目が吸い寄せられる。

朝倉音亜。隔離地区第三中学校に入学したときから、密かに思いを寄せている相手だ。成績優秀で、運動もそこそこ出来る。容姿も整っていて、安藤以外にも思いを寄せている男子たちが大勢いた。

安藤は、音亜の隣のハーフの少年に目を向けた。長い髪を後ろで一つに束ねていて、女子のようなかわいい外見をしている。神前燕。学年トップの天才で、朝倉音亜が思いを寄せる唯一の男子。

安藤は、普段は冷たくて周囲から距離をとっている音亜が、燕と話しているときだけは楽しそうにしていることに気づいた。燕への嫉妬心が生まれるのを認識する。

勉強も運動も出来て天才と呼ばれ、外見もよく、音亜にも好意を寄せられている燕。あんな恵まれているやつには、自分の気持ちは分らない。そう思った。

「あと五分で、申し込みを締め切ります」

アナウンスが流れた。体育館には、もうほとんど生徒は残っていない。

父の顔を思い出し、続いて自分が父を殺す場面を想像した。おびえる父。汚い血の噴水。泣きながら笑う自分――

「やってやる」

申込用紙を見つめ、提出しに向かう。静かにこぶしを握り締め、低く、小さくつぶやいた。「……絶対に外に出る」

憎い父親の馬鹿面を思い浮かべ、心に誓った。

――親父を、殺す。

一日目？（前書き）

よろしくお願いします。読み終わった後、感想等いただければ幸いです。

一日目？

時計を見る。八時四十分。もうすぐだ。

今朝は、朝早く起きすぎてしまった。シャワーを浴び、早めの朝食を食べて、何もすることが無いので部屋の掃除をして過ごした。緊張しているのだ。何かしていないと、落ち着かない。

今日は「ゲーム」の一日目だ。一週間、隔離地区から出られる夏休みをかけた、鬼ごっこ。情報は少ないが、がんばろう。ニュースが流れているテレビを消して、燕は成績優秀者に与えられる家から出た。

靴紐を縛りなおして、トレードマークの小鳥の絵柄のハンチングを被りなおす。昨日一日考えたスタート位置まで移動する。見晴らしがいいところがいいと思った。

五分ほどで、隔離地区のほぼ中央に位置する円形の公園に出た。広い石畳の真ん中に、綺麗な噴水がある。そこを通り過ぎて、大通りに出た。燕のほかにも、「ゲーム」に参加する子供たちがうろついている。皆一様に緊張していた。

軽くストレッチして、開始時刻を待つ。金髪を縛りなおして、またハンチングを被りなおした。腕時計を見る。八時五十八分。あと少し。

目を閉じて、この「ゲーム」に参加する目的を思い出した。そう。謝りに行かないといけない。早く、謝りに……

不意に携帯電話が鳴った。政府から「ゲーム」用に支給されたもので、ミッションなどの連絡に使われる。画面には、「ゲームスタート」の文字。

「始まった……」

ぐつと息を呑み、ぐるりと周囲を見回す。誰もが慌しく動き始めていた。どこから来るか分からない鬼に対して、細心の注意を払う。

——一分が経った。鬼は来ない。

——さらに一分。まだ来ない。

——そして、十五分が経過した。

「はあ……鬼、来ないなあ……」

燕は道端に座り込み、自販機で買ったオレンジジュースをちびちびと飲んでいた。「ゲーム」はすでに始まっているのだが、鬼が来ないので緊張感が沸かない。おまけに暑いので、喉が水分を欲していた。他の子供たちも同じようにしている。

オレンジジュースを口に含み、ハンチングを深く被った。軽く目を閉じようとして、

「鬼だあ！ 逃げろっ」

左側から聞こえた声に跳ね起きた。声のほうに目をやると、あち

らにいた子供たちが逃げてくる。後ろには、全身黒ずくめの大人が二人。鬼だ。

燕も出遅れながらも逃げ出す。ちらりと振り向いた。早速一人捕まっている。と、鬼の一人と目が合った。一瞬の空白の後、長身の鬼がこちらに駆けてくる。

「ボク!？」

反射的に細い路地に飛び込んだ。奥まで進んでいき、すぐに後悔する。——行き止まりだ。

「っ……………!」

振り返ると、鬼はまさしく鬼のような形相で疾走してくる。手に持っていた、飲みかけのオレンジジュースの缶を投げつけた。頭部にカッン、と当たり、鬼の漆黒のスーツに黄色い液体が広がる。鬼は一瞬動きを止めた後、胸元からナイフを取り出して襲い掛かってきた。

「げっ……………」

忘れていた。鬼を妨害した場合、反撃されるのだった。

ナイフが振りぬかれる。水平に一閃。燕はしゃがんでかわし、顎に向かって掌底を叩き込んだ。よろめいた鬼の手を狙い、鋭く蹴り上げる。ナイフを弾き飛ばした。距離をとり、落ちたナイフを拾う。

キレた鬼が飛び掛ってくる。触れられたら負けだから、かわさなければならぬ。タイミングを計る。

ちらりと右手を見た。一瞬迷い、決心する。身体を捻り、鬼の腕をかわした。

「ゴメン」

つぶやいて、右手を突き出した。鬼の腹に当て、踏み込む。

路地裏を、閃光と爆音が駆け抜けた。

「ゲーム」が始まって十分が経過した頃。

音亜は、隔離地区のほぼ中央に位置する公園に向かっていった。辺りに鬼の姿が見受けられないため、リラックスしている。見晴らしの良いところにいれば、鬼の姿をすぐに確認できるだろう。

それにどうやら、公園には大勢の子供たちが集まっているらしいかった。もしかしたら、燕もいるかもしれない。そう思って小走りに駆けていく。

と、大通りに出たとき、公園から大勢の子供たちが駆け出してきた。「鬼だ!」「逃げろ!」といった叫び声が聞こえる。いよいよ本格的に始まったらしい。

音亜は集団にまぎれて逃げることにした。押し流されるようにして走っていく。逃げながら周囲を見回したが、燕の姿は見えなかった。思わず落胆する。

そのとき、公園近くの路地裏から閃光が弾けた。青白い光が天を

貫き、一瞬遅れて爆音が轟く。なんとかその正体確かめようと、人の流れから抜け出した。公園の方向に向かって走り出す。

集団はいくつかに別れて逃げていたから、鬼が別の集団を追っていったことを期待した。人ごみを抜け、視界が開ける。

「鬼……………！」

目の前に、長身の鬼が迫っていた。黒いサングラスの奥で、目が笑ったように見えた。わざわざ捕まりに来た獲物に、余裕綽々の様子で飛び掛る。

音亜はとつさに能力を使った。「クレアボヤンス千里眼」。鬼の思考を読み取り、とつさに転がってかわした。すれ違いざまに、腰のホルスターから拳銃を抜き取る。

「来ないで！」

慌てて振り返る鬼に拳銃を向けた。引き金に軽く力をこめる。鬼が後ずさった。「千里眼」を使い、鬼に反撃の意思が無いことを確認すると、音亜は再び走り出した。

貴重な武器を手に入れた。弾が入っていること確認し、ポーチにしまった。

幸い他の鬼は見当たらず、問題なく公園の近くまでたどり着いた。先ほど閃光が弾けた場所を確認し、路地裏に入っていく。小走りに進むと、すぐに行き止まりだった。こちらに背を向けて、ポニールテールの金髪が揺れている。

「神前くん!？」

どうしてここに。驚いて呼ぶと、燕がこちらを振り返った。何かを引きずっているようだ。

「何してるの？」

「あつ、朝倉さん! いや、そのう、見ないで！」

「ん？」

見ないでといわれると余計に見たくなる。回り込んで覗いてみた。
——一瞬。

硬直し、絶句し、頭が真っ白になった。身体がバランスを保って
いられない。

「朝倉さん!？」

フラリ。バランスを崩して倒れる音亜を、燕が慌てて支えた。音
亜はそのまま意識を失った。

——燕が引きずっていたのは、白目をむき、涎と鼻水と吐しゃ物
にまみれた、全裸の中年男性だった。

一日目？（前書き）

頭が、くらくらします……。

一日目？

全裸の男を見て気を失った音亜が、目覚めて不機嫌そうに言い放った一言は、「神前くんって……同性愛^{ホモ}だったの？」だった。

その言葉を全力で否定し、鬼に追い詰められて闘ったことを説明した。もちろん、能力を使ったことは言っていない。音亜にもしくく訊かれたが、なんとか話をそらした。拳銃で脅されたときはさすがにビビツたが。

「まったく……初めからこんなことで、大丈夫なのかな……」

「まあ、何とかなと思うよ」

「神前くんは気楽すぎじゃない？ さっき追われたばかりなのに」

「でもボク、足の速さには自信があるんだ」

二人は公園のベンチに座り、ジュースを飲んでいた。辺りに人影は無い。みんなバラバラに逃げたようだった。

「それじゃあ、そろそろ移動しようかな。隠れる場所があったほうがいいだろうし」

「……私もいく。ずっとここにいたら、見つかるし」

燕は音亜と連れ立って公園を出た。初めに鬼が来た方に歩いていく。隠れ場所には、いくつか候補があった。

「ねえ、神前くんは、隠れ場所の当てがあるの？」

「まあね。隔離地区に来たばかりのとき、秘密基地を造ったんだよ」

「秘密基地って……子供っぽくない？」

あきれた様子の音亜に、少しだけムツとした。「どうせボクは子供ですよー」といじけてみせる。

交差点に差し掛かる。そこで、後ろから近づいてくる足音に気づいた。慌てて振り返る。

「鬼だっ」

「え？」

燕の声に音亜も振り返る。長身の鬼が一人、全力で駆け寄って来ていた。音亜に「逃げて」と囁く。

「神前くん!？」

逃げ出そうとしない燕に、音亜が振り向く。時間が無いので簡単に説明した。

「あの鬼が狙ってるのは、ボクだから」

迫ってくる長身の鬼は、先ほど路地裏で撃沈させた鬼だった。とりあえず放置していたのだが、服を着替えて追いかけてきたらしい。

「じゃあね」

「ちよつと、神前くん！」

燕は交差点の左に向かつて走り出した。鬼は立ち止まっている音
亜に目もくれず、真っ直ぐ燕を追いかけてくる。狙い通りだ。

逃げながら右手を見た。また能力を使わなければならないのだろ
うか。乱暴な手は、なるべく使わないようにしたい。

どうやって鬼を撒くか、次々と思考をめぐらせる。頭の中に隔離
地区の地図を思い浮かべた。この先にあるのは――

一瞬迷い、行き先を決めた。秘密基地の方へ向かう。スピードを
上げ、自動車が通っていない道路を横切る。アスファルトの照り返
しが辛かった。シャツの袖で汗を拭う。

振り返り、鬼を見た。距離はそこまで離れていない。右手を振り
かぶる。鬼が一瞬おびえた。燕はしゃがみこみ、右手を地面にたた
きつけた。

直後、閃光が弾けた。アスファルトの地面がひび割れていき、鬼
の足元が崩れ落ちた。砕けたアスファルトに足をとられ、鬼が転ぶ。
その間に距離を稼いだ。

この先には大きな池（湖？）がある。池の周囲には背の高い草が
生い茂っていて、上には大きな橋がかかっている。夏場には、小学
生たちが遊んでいることがある。

そのとき、背後で銃声が轟いた。反射的に身をかがめる。耳元を
弾丸が掠めていった。振り向くと、息を切らした鬼が銃を構えてい

た。

「しぶといですね。さっき服を壊したことは謝るんで、許してくれないませんか？」

右手をひらひらと振りながら提案する。しかし、当然この誘いに乗ってくるはずが無く、銃を乱射しながら駆け寄ってきた。

「そんなことしたって意味ないですよ。無意味な争いはやめましょう？　次は、手加減できないかもしれませんし」

銃弾を避け、右手で壊し、近づいてきた鬼の側頭部を蹴り飛ばした。仰向けに倒れた鬼の目の前に、右手を近づけていく。

「もう、ボク 능력의 正体に気づいてるんでしょう？　知らない記憶は消しておかないと」

「ひつ、や、クラッ……」

鬼の頭に、右手を乗せた。

安藤は、一人の少年と一緒に逃げていた。

「野々山。お前、速すぎ……」

「ゴメンゴメン。だけど、ちゃんと逃げ切れたでしょ？」

「ああ。さすがだよ」

安藤と向かい合っているのは、背の高い少年だった。野々山椿。ののやまつばき

安藤たちが通う隔離地区第三中学校で、神前燕の次に足が速い能力者だ。陸上部のエースである。ナルシストだが、一緒に逃げるパートナーとしては申し分ない。普段は礼儀正しいが、「まあ、俺より走るのが速いやつなんて、隔離地区にはいないんだけどね。……神前？ ああ、あいつが速いのはまぐれだよ、まぐれ」というのが本音である。

二人は今、隔離地区の端のほうまで来ていた。反対の方角には大きな池があるのだが、隠れる場所が多いこちらに来ていた。周囲には大きな倉庫が立ち並び、昼間なのになんとか薄暗い。埃っぽいにおいがした。

「ここでいいんじゃない？」

鍵がかかっている倉庫があったらしく、野々山がシャッターを押し上げている。腕時計で時間を確認し、まだ正午にもなっていないことを知る。こんなに早く隠れ家を見つけれるとはラッキーだ。

「いやあ、ラッキーだったね。ま、俺のおかげでもあるんだけど？ あはははは！」

調子に乗る野々山に適当に相槌を打ち、安藤も倉庫に入った。大きな木箱がたくさん積み重ねられていて、隠れるにはぴったりだ。ここなら、万が一鬼が来ても奇襲をかけることも出来る。

「……奇襲？」

安藤はその場で足を止めた。ふと思いついた可能性を考え、その先に進むことを躊躇する。

「何してるの、アンドー。早く行こうよ」

「いや、ちょっと待て……」

そのとき足元を見たのは偶然だった。そして、埃が積もった地面に、三種類の足跡がついているのを見つけた。暗くて気づかなかったが、確かに三種類、足跡が残っている。

「三種類……？」

一つは野々山。もう一つは安藤。そして、そうこの先へと伸びているもう一つは——野々山の前にある木箱で、途切れていた。

「逃げろ、野々山！」

「は？ 何言ってるの、アンドー……」

笑ってこちらを振り向いた野々山の肩に、鬼の手が触れた。

一日目？（後書き）

改善点等、ご指摘願います。

一日目？

「え？」

薄暗い倉庫の奥を振り返った野々山の肩に、鬼の手が置かれていた。野々山の携帯電話のブザーが鳴り、失格を告げる。

「え。ちよつ、なんで？ おいアンドー。なんでここに鬼がいるんだよ……？ なんで……」

状況を把握できずにいる野々山を置いて、安藤は身を翻した。やはり罠だった。早くここから出なければならぬ。

「！」

逃げようとする安藤の前で、シャッターが音を立てて閉められた。外から鍵をかけられる。外にいた他の鬼が閉めたのだろう。

「くそっ……」

逃げ場を失った安藤に、周囲と同じ黒色に身を包んだ鬼が駆け寄ってくる。後ずさり、唇をかみ締めた。

能力を使えば逃げれる。しかし、安藤の能力は危険だ。加減を間違えれば鬼の命が危ないと思うと、ためらってしまった。

だがそれも一瞬のことで、次の瞬間、安藤は右手をかざした。バチツと電気がはじける。それを見て動きを止めた鬼を睨み、右手に力をこめた。

「目を閉じる、野々山！」

一応注意だけはして、能力を使った。安藤も目を閉じ、左腕で庇う。倉庫の中に稲妻が現れ、閃光と轟音が駆け抜けた。鬼の手的確に打ち抜く。

鬼が動きを止めている間にシャッターに右手を向け、再び能力を使った。右手から放った雷でシャッターを破り、外に転がり出た。先ほどシャッターを閉めた鬼が、突然の出来事に呆然としている。

「よし」

今のうちにと逃げ出す。しかしそこで鬼が追いかけてきて、銃撃してきた。弾丸が太もをかすめ、鋭い痛みが走る。

「っあ！」

こらえきれずに転倒した。首だけ振り向いて鬼を見る。すぐ側まで来ていた。にやにやと、薄い笑みを浮かべている。

その鬼の顔が——他人に暴力をふるって楽しんでいる笑みが——一瞬、父親の顔と重なった。

「くっ………そ、がああああ……!!」

右手を突き出した。さつきよりも強力な雷が放たれ、鬼の身体を射抜く。焦げ臭いにおいがした。

安藤の能力は「鬼神の雷」。雷を操る能力で、安藤の怒りに呼応

して威力が上がる。

痛む傷口を押さえ、ふらつきながら立ち上がった。誰に言うともなく呟く。

「悪いな……俺は、外に出なきゃいけないんだ」

匿名で救急車を呼び、その場から離れた。

午後五時。音亜は、燕の姿を探していた。

午前中、最初に会ってから別れたきり燕とは会っていない。携帯電話の番号は知らないのに、連絡の取り様が無かった。彼はあの後、無事に逃げ切ったのだろうか。隠れ場所の候補があるといっていたから、そこにいるのだろうか。

「はあ……疲れたあ」

音亜は、隔離地区中央の公園まで戻ってきていた。周囲に人影は無い。みんな、ここは危険だと思っているのだろう。静かな公園に、噴水の音だけが響いていた。

ベンチに腰掛け、自販機で買ったお茶を口にする。しばらくの間、ぼんやりと過ごした。

今日は、特に何も起こらなかった。何度か鬼に追われることもあったが、「千里眼」クレアボヤンスの能力と鬼から奪った拳銃で脅すことで、無事に切り抜けた。ミッションも行われなかったので、鬼が追加されることも無かった。

不意に、後ろで足音が聞こえた。ベンチから立ち上がり、ポーチから拳銃を取り出して構えた。

「……朝倉？」

そこに立っていたのは、同じクラスの安藤だった。不良顔とツンツンに立てた髪が、その性格を表している。

「安藤くん。どうしたの、その怪我……？」

安藤の右太ももの辺りが血で汚れていた。銃をしまつて駆け寄る。

「別に。ただ、鬼に撃たただけだ。手当てはしたし、大丈夫だろ」

安藤はわずかに右足を引きずりながらベンチに向かった。少し間隔を取って音垂も座る。お互いに何も喋らないので、しばらく沈黙が続いた。

「ねえ」ふと思いついて、燕のことを訊ねてみる。「神前くん、見かけなかった？」

「いや、見てねえよ」

「そう……」

予想通りの返答に落胆する。やはりどこかに隠れているのだろうか。また訪れた沈黙を破り、安藤が訊ねてきた。

「なあ、前から訊こうと思ってたんだけど、朝倉と神前ってどうい

う関係？ 付き合ってるの？」

「なっ……！？」

思いがけない人物からの思いがけない問いかけに、軽いパニックに陥った。

「なな、何言ってるのっ、安藤くん！ なななんで私が、神前くんなんかと……！」

なななと連発して混乱する音亜を見て、安藤はうれいような悲しいような表情をしていたのだが、音亜はそれに気づかなかった。

「あんな女の子みたいなかわいい系男子の、どこがいったって言うのよ！」

「こんな女の子みたいなかわいい系男子で、悪かったね……」

突然背後から聞こえた声に振り返った。小鳥の絵柄のハンチングの下から、碧みどりの目が上目遣いにこちらを見ている。

「神前くん！」

ベンチから立ち上がる。燕はベンチを飛び越えて、音亜の目の前に着地した。ポニーテールの金髪が揺れる。

「探したよ、朝倉さん。ケータイの番号も知らないし、連絡の取り様が無くてね」

「それはこっちの台詞よ。あの後ずっと探してたのに見つからない

から、捕まったんじゃないかって……」

「心配してくれてたの？ 朝倉さんって、意外と優しいよね」

「意外とって何？ 喧嘩売ってるの？」

拳銃をちらつかせると、燕はあっさりと話題を変えた。

「それより、この辺りにも鬼がいるよ。さっき二人見かけたんだけど、早くここを離れたほうがいいかも」

公園を立ち去ろうとする燕に、音亜もついていく。一人別方向に向かう安藤に訊いた。

「安藤くん、一緒に逃げないの？」

「俺は一人で充分だ。仲間なんていらねえ」

なんだかいつも以上にツンツンしている安藤に、音亜も追求するのをやめた。「千里眼」を使えば分かることだが、あまり他人の心を盗み見るのはよくない。燕が呟いた。

「ボク、嫌われてるのかなあ……」

「え？」

「何でもないよ。それより、早く逃げよう」

燕の顔に、わずかに疲労の色が浮かんでいたのを、このときはまだ気づかなかった。

一頁、終了。

一日目？（後書き）

やっと、一日目が終わりました。
……早くインフル治らないかなあ
……

二日目？（前書き）

「ゲーム」二日目です。

二日目？

「ゲーム」二日目。燕は時間ギリギリに起床した。身体の節々が痛かった。だるくて動きたくない。

「うう……」

眠たいまぶたをこすりながら、肩掛けポーチに荷物を詰めていく。準備を終えると八時五十六分だった。接近している台風について話しているテレビを消し、急いで家を飛び出す。今日は体力を温存するために、秘密基地に隠れるつもりだった。

公園に着くと、音亜がベンチに座って待っていた。

「おはよう、神前くん」

「おはよー……」

「？ どうしたの、元気ないじゃない」

「うん……まあ、疲れてね」

二人とも、一日目は無事に逃げ延びていた。走るのも速いほうだし、何とかなるだろう。そう気楽に考えていた。

「そういえば昨日、怪我した鬼がいるんだって。感電した人が二人、重傷だった」

「へえ、物騒だねえ」

あいまいに返事してお茶を飲んだ。音亜が続ける。

「それからね、記憶喪失になった人がいるって」

「じふっ!？」

思わずむせた。怪訝そうにこちらを見る音亜に、「なんでもないよ」と言う。

「それで……その、鬼を怪我させた人は見つかったの？」

念のために訊ねるが、幸い見つかっていないということだったので安心した。

他愛の無いことを話している間に「ゲーム」がスタートした。公園内の雰囲気が一瞬張り詰める。燕は一度周囲を見回し、鬼の姿が見受けられないことを確認した。しかし、なんだか違和感がある。その違和感の正体を探ろうとするが、なかなか分からない。

しばらくしてあきらめると、暇になってしまった。

「鬼、来ないね」

「そのほうが楽でいいじゃない」

「そうだけど……」

昨日と同様、なかなか鬼が現れない。今のうちに秘密基地に向かおうと、腰を浮かせた。

「?」

歩き出そうとして、携帯電話が鳴った。メールが届いている。

「『ミッション』……」

全員に同じメールが届いているらしく、皆携帯電話を見つめていた。ミッション――

――隔離地区内に設置された十個のスイッチを探しだして押せ。制限時間は三時間。達成できなければ、スイッチ一つにつき十人の鬼を放出する――

「どうする？ 朝倉さん。探しに行く?」

「もちろん。スイッチを押さないと、最大百人も増えるんでしょ？ 止めない」と

「他の人たちも探すんだろうけど、手分けして探したほうが効率がいいね。ミッションが終わったら、連絡するよ」

燕と音亜は別れてスイッチを探し始めた。特に行く当ても無いので、燕は秘密基地のほうへ歩き出した。

スイッチは一体どこにあるのか、考える。立ち入り禁止の住居内はありえないが、「ゲーム」の最中でも営業しているショッピングモールなどはあるかもしれない。ただ逃げ場が制限されるので、なるべく後にしようと思った。

「鬼だ、逃げる！」

交差点に差し掛かったところで、正面から聞こえた声に思考を中断した。交差点の向こうから、鬼が二人駆けてくる。中学生くらいの男子が三人、こちらに逃げてくる。燕は交差点を右に曲がった。

左右に薄汚れたビルが立ち並ぶ道を真っ直ぐ駆け抜けていく。振り返ると、鬼が一人追いかけてきていた。シャツの袖で汗を拭い、ハンチングを被りなおす。呼吸がわずかに乱れていた。

「くっ……」

そこで正面からも鬼が走ってきた。挟み撃ちにされた格好になる。反射的に、近くの廃ビルに転がり込んだ。エレベーターは無い。階段に向かった。

「はっ、はあっ……」

脚が重たい。これの原因が疲労によるものだけでないことを燕は知っているが、どうしようもない。必死に階段を駆け上がった。

薄暗い階段を二段飛ばしで駆け上がる。後ろから鬼の足音が追いかけてきて、三人の足音が階段にこだまする。

どれだけ階段を上ったろうか。ビルの屋上へ通じるドアの前までたどり着いた。鍵がかかっているドアを右手で粉碎し、屋上に躍り出た。後ろから、階段を駆け上がってくる足音が聞こえてきた。

「うっは……」

ぐるりと辺りを見回して位置を確認した。燕が通う第三中学校の近くだ。逃げ場を探し、隣の廃ビルが目にとまった。瞬間、決断し、薄汚れた屋上を駆け抜ける。距離はあるが、仕方が無い。鬼と戦えばいいだけだが、無駄な争いはしたくなかった。

屋上は背の低いフェンスで囲まれていた。一度立ち止まり、正面のフェンスを右手で壊した。バラバラに吹き飛んだフェンスの破片が、ビルの間に落ちていく。

「よし……」

屋上の真ん中辺りまで下がり、十分な距離をとった。走り出したとき、鬼が屋上にたどり着いた。フェンスが無い部分に全力疾走する燕を見て、思わずその場で固まる。そんな鬼たちを横目に、燕は屋上を駆け抜けた。目の前に空が迫ってくる。恐怖に固まりそうになる脚を無理やり動かした。

とべる、トベル、跳べる、飛べる……

「いつ……けええええ!!」

最後の一步を全力で踏み切り、燕は虚空へ飛び出した。左手でハンチングを押さえ、何かを掴もうとした右手が宙をかく。そして、一瞬の浮遊感の後、燕の身体は落下を始めた。景色が上に流れていき、隣のビルの窓が目の前に迫った。反射的に右手を突き出し、激突の瞬間、閃光と共に窓を吹き飛ばした。文字通り粉々になったガラスがきらきらと舞う。

「わああああ!?!」

体勢を崩しながら着地した。床を転がることでなんとか衝撃を減らしたが、部屋の反対側の壁まで転がって、やっと止まった。

「た、助かった……」

吐き気をこらえながら立ち上がり、部屋の外に出た。汚い階段を駆け下りていく。なんとか撒いたが、鬼もすぐに追ってくるだろう。休んでいる暇はない。閉じた自動ドアを右手で壊し、夏の日差しの下へ躍り出た。

二日目？（前書き）

さっき母親から、学級でたくさん休んであることを知りました。インフルと不登校です。……大丈夫か、三年三組……

二日目？

燕は、隔離地区第三中学校にやって来ていた。夏休みだが、「ゲーム」で負けた生徒や参加しなかった生徒たちのために解放されている。グラウンドでは、「ゲーム」で負けた野球部の一年が守備練習をしていた。

先ほど廃ビルで追いかけてきた鬼たちは完全に撒いたが、体力的なことを考えて、なるべく目立たない場所を通って移動して、時間をかけて学校にたどり着いた。ミSSIONの開始から、もうすぐ一時間が経とうとしている。

「ない……」

校内を一周した燕は、思わず肩を落した。せっかく時間をかけたのに、スイッチは全く見つからない。このままでは、鬼が大量に増やされてしまう。

あきらめて校舎を出て、正門に向かう。そこで、正門の前を鬼が通るのを見た。まだ距離はあるが、反射的に右手を構える。しかし、鬼はこちらに気づかない様子で通り過ぎていった。

「こっちはやめた方がいいかな……」

目立つ正門から出るのはやめて、校舎の裏側から出ることにする。フェンスがあるが、身長よりも少し高いくらいだから乗り越えられる。

念のため、一度周囲の安全を確認してからフェンスを越えた。そ

の着地の際、疲労のせいで膝が崩れた。思いのほか疲れていることに驚く。

そのとき、視界の端に映った何かが気になり、右を振り向いた。フェンスの下のはうは雑草が生い茂っているのだが、そこに一つ箱が落ちている。

「？」

手にとって見ると、中身は空なのかとても軽かった。綺麗な赤色に塗られた木箱で、ふたの部分に黄色い「？」のマークがある。なんとなく興味が湧いて、そつとふたを開けてみた。

「なに、これ」

中身は一枚の紙だった。「ヒント」と書かれている。

——ヒント2

2番目のスイッチは、第三中学校付近のショッピングセンターの何処かにある——

「ショッピングセンター……か」

この情報が本当かは分からないが、行ってみる価値はあるだろう。携帯電話で確認すると、今の時点で解除されているのは1番と9番だけだった。ショッピングセンターに向かって走り出す。

だいぶ疲労がたまっているが、今はミッションをクリアすることだけを考えることにした。

時を少し遡り、燕が廃ビルで逃げている頃。

安藤は、隔離地区中央の公園に来ていた。他の場所にスイッチを探しに行っているのだろう、安藤以外には誰もいなかった。

この公園は割と多くの参加者がスタート地点に使っているため、すでに公園内は探されているだろう。しかし、安藤がここに来たのには理由がある。

「ちくしょう……ぜんぜん見つかんねえ」

安藤はミSSIONの開始早々、1番のスイッチのヒントを発見していた。それによれば、この公園にあるらしい。携帯電話で確認しても、まだ誰もスイッチを見つけていなかったから、公園内にあることは間違いない。

しかし、植え込みの中、木の根元、ベンチの裏、ゴミ箱の中まで探したが全く見つからなかった。ただ時間ばかりが過ぎて、もともと少し短気な安藤はすぐに作業をやめ、ベンチに座り込んだ。

ヒントは偽物だったかもしれないし、もうここはあきらめて他の場所を探そうか。それとも、探すのは他のやつらに任せて、逃げることに集中しようか。

とりあえず移動しようとして、なんだか違和感を覚えた。さっきから薄々感じていたことだが、その正体がわからない。安藤は公園内を見回した。

いつも通りのベンチ、植え込み、木々、自販機。変わっていると

ころなど――

――あつた。

「もしかして……！」

ふと噴水に目が留まり、思いついた。慌てて駆け寄っていく。安藤は、違和感の正体に気づいた。

今日は、噴水が一度も水を噴き上げていないのだ。

どうして気づかなかったのだろう。公園の噴水はちょっとしたアトになっていて、水を噴き出す位置が高いところにある。子供の身長では一番上は見えない。

「よしっ」

噴水をよじ登ると、安藤の予想通り、水を噴き出す場所にスイッチはあった。ヒントの入っていた箱と同じ赤色だ。スイッチの台座が、水が通る穴にぴったりと合っている。赤い円形のスイッチを思い切り叩いた。

スイッチ1、解除。

二日目？（後書き）

二日目？

燕は、ショッピングセンター内を迷走していた。

冷房が効いているので外よりは体力の消費が抑えられるが、ここで鬼に見つかりと逃げ場が無くて危険だった。絶えず周囲に気を配りながら移動するため、精神的に疲れる。

「どこだろ……？」

ヒントのおかげでショッピングセンター内にスイッチがあることは分かったが、範囲が広すぎる。二階のゲームコーナーから出て、二階にある店舗は全て見て回ったことを確認した。女性用のトイレだけは調べていないが、さすがにあそこは無いだろう。

通路の手すりにもたれて一階を見た。本屋に目が留まる。ここの本屋は割りと大きいので、スイッチを隠すにはちょうどいいかもしれない。そう思って手すりから離れる。そのとき、一階の通路に鬼の姿を見つけた。こちらには気づいていないが、本屋に入っていく。本屋は後回しにすることにした。

鬼が出て来るのを待ちながら休憩する。椅子に腰掛け、小さなテーブルに両肘を付いて本屋を眺めた。数分経っても鬼が出てこない。ので、若干集中力が途切れがちになる。暇を持て余していると、携帯電話が鳴った。

「もしもし？」

「もしもし、神前くん？ 私だけど」

音垂だった。話を聞くと、スイッチが見つからないので知恵を求めてきたらしかった。

「あいにく、ボクもスイッチを見つけてないんだ」

「天才少年なのにな？」

「周りが勝手に言ってるだけだよ、学年二位の優等生さん」

そのとき、本屋から鬼が出てきた。二階に来るらしく、エスカレーターに向かっていく。見つかる前に反対側の階段に向かおうと席を立つ。

「っ!？」

突然、全身に痛みが走った。激しい痛みに思わずうずくまり、携帯電話を取り落とす。すぐに痛みはなくなり、携帯電話を拾う。

「どうしたの、神前くんっ。ねえ……」

「ゴメン、ちょっと転んじやった」

電話の向こうの音垂に謝り、立ち上がろうとする。そこで、思いがけないものを見つけた。

テーブルの裏に、赤い円形のスイッチが取り付けられている……

「あつたあーっ!？」

思わず叫んだ。2番のスイッチを叩き、電話の向こうの音垂に伝える。

「あつたよ、スイッチ！ 2番のスイッチ解除したよ！」

「本当？」

立ち上がって喜んでいると、視界の隅に黒い影を捉えた。こちらに接近してくる。

「うそっ……？」

叫んだせいで早く気づかれたらしい。鬼がこちらに走ってきていた。階段に向かって走り出す。電話に早口で告げる。

「ゴメン、鬼に見つかった。スイッチの場所のヒントが入った、
？」マークが書かれた赤い箱……探して！ またあとで！」

電話を切ってポーチに突っ込み、通路を駆け抜ける。人が少ないので走りやすかった。階段の手すりを跳び越えて下りる。全力で駆け抜け、再び夏空の元に飛び出した。

ところどころ身体が痛む。ミッションの終了まで時間があるが、もう休んだほうがいいかもしれない。秘密基地に向かいながら、どうやって鬼を撒くか思考をめぐらせる。

とりあえず、スイッチ2、解除。

音亜は携帯電話をしまい、路地裏から出た。夏の日差しが容赦なく照り付けてくる。

燕は鬼に見つかってしまったようだったが、大丈夫だろうか。無茶をして捕まらなければいいが。

先ほどの電話で燕が言っていたことを思い出す。赤い箱を探せと言っていた。それにヒントが入っているらしい。

スイッチと赤い箱を探して行動を始めた。この近くに大きな池があるので、その辺りを探してみようと思っていた。背の高い草がたくさん生えているので、スイッチや箱を隠すにはちょうど良いのではないか。

周囲を警戒しながら歩いていく。遠くに鬼を見つけ、近くの公園に隠れた。そこで携帯電話を開き、どのスイッチが解除されたか確認する。燕が解除したという2番を含めて五つだった。こうしている間にも、残り時間は確実に減ってきている。早く見つけたいといけない。

鬼の姿が無いことを確認してから公園を出た。池に向かって歩き出す。そのとき、足元に転がっているものに気がついた。

「あれ？」

赤い箱だった。すでにあけられている。疑問に思いながらも取り上げ、中に入っていた紙を取り出す。

——ヒント10

池にかかった橋の真ん中——

「10番？」

携帯電話で確認すると、10番はまだ解除されていなかった。解除されていないということは、先にヒントを見た人はスイッチを解除しに行かなかったのだろうか。

「……行こう」

池にかかった橋とはつまり、先ほどから向かおうとしている池にかかった橋のことだろう。昨日手に入れた拳銃を確認しようとして、

「あれ？ ない……！？」

公園に戻り、ポケットやポーチの中身を全てぶちまけて探す。ナイフ、爆竹、発煙管、痴漢撃退用スプレー……拳銃だけ、ない――

――家に忘れた……。

昨日の夜眺めていて、おそらくベッドに置いたままだ。しばらくの間、ショックで呆然としていた。

「まあ……しょうがないか……」

いざというときの武器が無いのは心細いが、仕方が無い。迷った拳銃、痴漢撃退用スプレーの缶を一つ忍ばせて、音亜は橋に向かった。

二日目？

音亜は、池にかかる橋が見えるところまで来ていた。建物の陰に隠れて様子を伺う。

「こういうことが……」

橋の両端には、一人ずつ鬼が立っていた。絶えず周囲を見回して見張っている。橋は池のほぼ真ん中にかかっていて、かなりの距離がある。「千里眼」を使って脇を抜けたとしても、真ん中にあるスイッチにたどり着く前に追いつかれてしまうだろう。

鬼が見張りをしているため近づけない。ヒントの箱が開いていたのにスイッチが押されていなかったのは、おそらくこのせいだ。

ミッションの残り時間を確認して、しばらく迷う。携帯電話で残りのスイッチを確認すると、10番も合わせて三つだった。このままミッションが終われば、三十人の鬼が追加されてしまう。それは避けたいが、自分が捕まっては意味が無い。

「どうしよう……」

一か八か、10番のスイッチを狙うのか、それともあきらめて他のスイッチを探すか。燕に相談しようとして電話するが、逃げている最中なのか通じなかった。

時間は無い。一度「千里眼」を使い、鬼の心を読んだ。ミッション開始時から交代せずに続けているらしく、監視の目は緩くなっている。もう一度時間を確認して、決心する。音亜は呼吸を整え、一

気に駆け出した。

真っ直ぐ鬼に向かって走っていく。鬼はこちらを見つけたが、動かずにその場で待ち構えていた。手を伸ばせば届くような距離になって、鬼に触れられる直前に得物を突き出した。痴漢撃退用スプレーを鬼の顔面に浴びせ、その横を駆け抜けた。

これで、橋に侵入するまではうまくいった。スプレーを投げ捨て、ナイフを取り出す。橋の反対から、こちらの様子に気づいた鬼が走ってくる。音亜は足が速いほうだが、成人男性と女子中学生では歩幅も筋力も違う。橋の真ん中に赤いスイッチが見えたが、そこにたどり着く前に鬼が来た。先ほどの鬼と違い、いきなり飛びついてくる。

昨日鬼から銃を奪ったときと同じように、「千里眼」を使って動きを読む。フェイントをかけて鬼の脇を潜り抜け、ふくらはぎにナイフを突き立てた。音亜の目が妖しい光の尾を引く。

「ごめんなさい」

呟いて、スイッチまで駆け寄る。10番のスイッチを押した。しかし、ナイフで刺された鬼が銃を構えていた。殺意があることを読み取り、反射的に柵を乗り越えた。

「あ」

一瞬の浮遊感の後、落下が始まった。景色が上へと流れ、水面が近づいてくる。

「きゃ……！」

悲鳴は途中で切れた。視界が気泡と水で覆われる。酸素を求めて水面に向かうが、服に水が染み込んで重たい。必死にもがいて浮上した。

鬼はさすがにここまで追ってくるつもりは無いらしく、銃撃も無かった。とりあえず岸まで泳ぎ、背の高い茂みの中を進んでいった。靴が片方脱げてしまっていて、足の裏がくすぐつたい。目の前の草を掻き分けていくと、突然視界が開けた。

「？」

草が生えていない地面が円形に広がっている。背の高い草に囲まれているのと真上にかかる橋のせいで周りからは見えないようになっていた。ぽつかりと開いたそこは、秘密基地のようだった。

「そうだ、荷物……！」

慌てて荷物を確認する。爆竹などは使えなくなっていたが、幸い携帯電話は使えた。しかし、タオルも濡れてしまっていて、身体をふけない。服も自然に乾くのを待つしかないだろう。

「ここなら……まあ、大丈夫よね……」

外からは絶対に見えないことを確認して、服を脱いだ。さすがに下着はつけたままだが、とりあえず、このまま服を乾かすことにした。

「大丈夫……たぶん……」

改めて周囲を見回し、安全を確認する。

スイッチ10、解除。

燕は秘密基地に向かっていった。つい先ほどミッションが終了したところである。結果、一つだけ残して解除し、十人の鬼が解放されることになった。

体力の消耗が思いのほか激しいため、鬼が増えた中を動き回るのは危険だ。音亜に連絡を取ろうかとも思ったが、一度秘密基地で休むことにした。

池にかかった橋の両端の辺りの草は背が高い。辺りに鬼の姿が無いことを確認して、燕は茂みに入ってしまった。

ちくちくするが、それは仕方が無いので我慢する。一度立ち止まって位置を確認し、わずかに右に曲がった。草を押し倒し、円形に開けた場所に出る。そこが秘密基地だった。自分ひとりの空間である。

しかし、燕以外に人の姿があった。思わず声を上げ、それがお互いに重なった。

「「あ……」」

音亜だった。長い黒髪からわずかに水を滴らせていて、白い肌のはほとんどが露出している……下着姿だった。

何でここに？ いやいや、何で下着姿？ 何で……

「きゃ—————っ！！！」

凄まじい悲鳴の直撃を喰らい、驚きと恐怖と好奇心とそれまでの疲れが合わさって、燕は一瞬意識を失った。

二日目？

二人の間には、微妙に気まずい沈黙が流れていた。お互いに背を向けて、蹲つまずっている

「あ、あのう、朝倉さんっ」

何か喋ろうとして、声が裏返ってしまった。

「何っ、神前くん？」

答える音亜の声も裏返っていた。お互いに先ほどの出来事が頭を離れず、ろくに会話が出来ない。

「あのさ……何で、ここに？」

「……飛び降りたの。スイッチを押して、そのまま橋から」

「……………」

どうやら音亜は、10番のスイッチを押す際に鬼を攻撃し、そこから逃げるために橋を飛び降りた……らしい。

「神前くんは、何でここに来たの？」

「え？ ああ、ほら、昨日言ってたでしょ、隠れる場所に心当たりがあるって。ここ、隔離地区に来了頃に見つけた秘密基地なんだ」

「へえ」

また沈黙が流れた。ぼうつとしていていつの間にか音亜の下着姿を思い描いていて、それを必死に振り払う。それを何度も繰り返し返している、音亜から「もういいよ」と声をかけられた。ゆっくり振り向く

と、まだ生乾きの服を着た音亜がタオルを振っていた。

「タオル、貸してくれてありがとう」

「いや、別にいいよ、そんなの」

「これ、ちゃんと洗濯して返すから」

とりあえず音亜が服を着たことで、先ほどからの気まずい空気は少しだけましになったように思えた。それでもなんとなく距離をとって座る。

「……神前くん、一つ訊いてもいい？」

「何？」

「何のために、『ゲーム』に参加してるの？」

「それはやっぱり、外に出るために……」

「そうじゃなくてっ」

音亜が若干距離を詰め、上目遣いに覗き込んできた。

「外に出て、何をしたいのか。『ゲーム』に参加する目的は？」

「あー……」

目的。確かに目的はあるが、それを音亜に教えるべきなのかどうか迷った。この話は、あまりしたくない。

「……ボクが外に出るのは……」

しばらく迷って口を開いた。音亜に教えるためではなく……自分を反省するために。

「姉さんに、謝りに行くためなんだ……」

あの日。姉さんと喧嘩して、そのまま隔離地区に送られたことを音亜に教えた。能力者になったせいで、家族全員と一緒に暮らすという約束が果たせなくなったこと。隔離される前に、姉さんだけ話せなかったこと。

「あと、これのお礼も言わないと」

頭に被ったハンチングを指した。小鳥の絵柄が描かれている。燕のトレードマークだった。

「これはね、隔離地区に送られてきた荷物に入ってたんだ。姉さんからのプレゼントだった。喧嘩のことを謝る手紙と一緒に入ってた」

だから、外に出ないといけないのだ。外に出て、謝って、ありがとうと伝えるのだ。

燕の能力に関する、家を壊したことなどは言わなかった。この乱

暴な能力は、人に知られたくない。知られば、その人との絆だつて壊れるかもしれないのだから。

「まあ、これがボクの原因かな。……朝倉さんは？」

逆に訊ねてみると、音亜の表情が曇った。

「……私、目的なんてないの。ただ、ここにいるより、外のほうが楽しそうだから。……神前くんがうらやましいよ。ちゃんと目的を持って、それに向かって走ってる。私はただ、逃げてるだけだから」

燕は若干驚きながら、隣に座る少女を見た。いつでも大人びていて、しっかりしている音亜の、意外な一面を見た気がした。

「別に、しっかりなんてしてないよ」

いつの間にか、音亜の目が怪しく光っていた。燕の思考を読み取って、首を振る。

「ただ、あまり他人と近づきたくなって。冷たい態度をとれば、普通は誰も近づかないでしょう？」

音亜は「千里眼」を手に入れたとき、ただ悲しかったと言った。

「この能力をちから手に入れるまでは、私だって、ちゃんと他の子と遊んでたし、そういう楽しそうな友達の輪に入ってた。『千里眼』を手に入れても、しばらくは隠してた。何でも相手の考えてることが分かるし、嘘も見抜けるし、便利だったよ」

音亜は、自嘲気味に笑った。目の光が消える。

「でもね……他人の心が読めるっていうのは、いいことばかりじゃなくて。むしろ、悪いことのほうが多かった」

能力を手に入れたばかりの頃は、今のようにつまく使えず、ふとした瞬間に使われてしまうことがあったらしい。燕にもあの日、覚えがあった。

「朝食のときテレビを見てて、ニュースで街頭インタビューをやってた。そのとき、他人の暗い感情……怒りとか、憎しみとか、妬みとか。そういうのが、頭にたくさん流れ込んできたの。テレビに映ってた人たちの心が一気に流れ込んできて、気持ち悪くなって、そのまま吐いた」

そして、「千里眼」が家族にばれてしまい、噂は瞬く間に広がった。

「学校にも行けないし、家にもいられない。隔離地区に来るまでの間、すごく辛かった。まあ、こっちでも辛いことに変わりは無かったけど」

音亜が話し終えて、しばらく二人とも黙っていた。お互いの辛い過去を知って、何て声をかければいいのか考える。

「ねえ、朝倉さん」

音亜の方を見ずに、提案する。こういうことは、気恥ずかしい。

「目的が無いって言ってたけどさ……じゃあ、外に出たら、ボクとどこか遊びに行かない？ 今の時期、ボクの家で近くで夏祭りとか

あるんだけど」

「……………」

「……………」

反応が無いので、横目に見る。音亜も、こちらを見ていた。上目遣いに睨みつけるような視線なので、少し後ずさる。

「……………いいよ」

「え？」

「そんなに言うなら、夏祭りでもなんでも、一緒に行つてあげる。別に……………暇だし」

燕は「ゲーム」の説明会をのときを思い出した。あの時燕は思ったのだった。ツン……………

「誰がツンデレよ！」

思いつきりビンタされた。

人気の無い道を、燕は歩いていた。二日目の「ゲーム」が終了し、家に帰るところである。音亜と一緒に帰ろうと誘ってきたが、断つた。

「は……………はあ、はっ……………」

脚が、腕が、背中が、頭が、全身が痛い。先ほどから悪化してきたのだが、だんだん呼吸も辛くなってきた。重たい身体を引きずるようにして歩く。右手を恨めしそうに見た。

家にたどり着くと、ふらふらとリビングに向かった。ソファにすわり、テレビをつける。しばらく休むと収まってきた。

天気予報では台風についてやっていた。それが終わると、シャワーを浴びて、すぐに眠りについた。かなり早い時間帯だが、仕方が無い。燕は明日の「ゲーム」への不安でいっぱいだった。

どうしよう。まだ二日目なのに……

二日目、終了。

二日目？（後書き）

やっと二日目が終わりました……。。

三日目？（前書き）

三日目です。インフルが治ったので、今日から学校です。

三日目？

「ゲーム」三日目の朝。燕は開始時刻ぎりぎりに起床した。

寒気がする。身体中が痛くて、ベッドから起きるとふらついて壁にもたれた。昨日はかなり早く寝たが、それだけではやはり意味が無かったらしい。

荷物をまとめ、外に出る。接近する台風の影響か、曇り空だった。ハンチングを被り、秘密基地に向かう。今日は秘密基地で音亜と待ち合わせていた。

急ぎ足に秘密基地に向かっていると、「ゲーム」が始まった。また昨日よりも人数が減ったように思える。昨日のミッションで鬼が十人増やされているので、普通に逃げていてはきついだろう。体調的にも不安があるので、秘密基地で休むことにした。

橋のところまで来た。鬼の姿が見えないことを確認し、茂みに入っていく。背の高い草を抜けると、すでに音亜が到着していた。

「おはよう、神前くん。遅いから捕まったかと思ったじゃない」

「ゴメン。ちょっと寝坊しちゃって」

笑顔をつくろって歩いていくと、音亜が心配そうにこちらを見ていた。

「……大丈夫？ 顔色悪いけど……」

「ん？ 別に、これくらい」

平気だと言おうとして、突然の痛みに立ち止まった。呼吸が苦しくなり、視界が歪む。すぐに立っていられなくなって、倒れた。

「神前くん！？」

音亜が慌てて駆け寄ってくる。朦朧とする意識の中で思った。

——もう、駄目かもしれない。

「ゲーム」をクリアすることはできないだろう。そんな予感がした。

音亜は、突然倒れた燕に驚いて駆け寄った。

「神前くんっ、大丈夫？」

燕を助け起こし、秘密基地の奥のほうへ連れて行く。芝生の上に寝かせた。

「ゴメン、朝倉さん。……ちょっと、体調が悪くて」

そう呟く燕の様子は、明らかに悪かった。色白の顔が真っ青で、苦しそうに荒い呼吸を繰り返している。身体が痛むのか、碧の目にわずかに涙がたまっていた。

「大丈夫だよ……少し休めば治るから」

「ぜんぜん大丈夫そうじゃないよ！ どうしたの、なんでこんな…

…」

音亜はパニックに陥っていた。額に手を当てると、かなりの熱だった。

「そうだ、救急車……！」

携帯電話を取り出す。しかしその手を、燕が止めた。

「だめだよ。病院に運ばれたりして『ゲーム』に参加できなかったら、失格になっちゃう……」

「じゃあどうすれば？」

「大丈夫、大丈夫だから……」

そう言っている間にも、燕の顔色はどんどん悪くなっていく。その様子を見ていて、嫌なイメージが次々と浮かんでくる。

苦しんでいる燕を前に、音亜は何も出来なかった。

午後三時。音亜は、眠っている燕の横に寄り添って座っていた。額に乗せた水でぬらしたタオルを交換し、ときどき汗を拭ってやる。それくらいしか出来なかった。

このまま燕が回復しなかったらどうしよう。明日以降の「ゲーム」への参加は諦めたほうがいいのではないか。

額のタオルを交換していると、携帯電話にメールが届いた。嫌な

予感を感じながらメールを確認する。

「！ 何でこんなときに……」

——ミッション

午後三時半より、ミッションを開始する。制限時間は一時間。ランダムで選択された十人の能力者を捕まえて、その携帯電話から指定のアドレスにメールを送ればクリア。捕まった能力者は失格。一人捕まえるごとに鬼を一人減らす。ミッション開始から一分間の間、携帯電話に十人の位置情報を送る——

ここまで読んで、音亜は少し安心した。この内容なら、自分たちが参加しなくてもクリアできるだろう。開始時に相手の位置が分かるし、人数的にも追う側が圧倒的に有利だ。十人全員捕まえれば、昨日のミッションで増えた鬼を全員減らせる。

しかし、メールを読み進めて、音亜の思考は凍りついた。

「……え？」

逃げる十人の能力者の名前が並んでいる。その中の一つに目が留まった。

——逃走者

……… 神前燕 ……

三日目？

音亜は、絶望的な感情に包まれていた。

これから始まるミッション。その逃走者の中に、「神前燕」という名前。それぞれの逃走者の顔は写真で確認することができるので、名前を知らない相手でも捕まえられる。おまけに目立つ金髪なので、燕が狙われるのは確実だった。

「ねえ、神前くん。起きて！ 大変なの！」

「う……何？」

燕を助け起こし、ミッションについて説明する。黙って説明を聞いていた燕は、話が終わると立ち上がった。

「そういうことなら、ボクは逃げるよ。……じゃ、また明日」

「ちょっと、神前くん！？ 逃げるって言ったって、その身体じゃ……」

「でも、開始時に位置が知らされるんでしょ？ ここにいたら、この場所ばれちゃうし」

燕はハンチングを被りなおして、ふらふらと歩いていく。慌てて追いかけた。

「待ってよ。今の神前くん、一人で逃げれる状態じゃないでしょ？」

「十人対他の能力者全員じゃ、どっちにしる勝ち目無いんじゃない？」

「私が一緒に逃げるよ。神前くんが逃げるのを手伝ってあげる」

「……朝倉さんが？」

燕はわずかに顔をしかめた。自分を追う側の相手に協力を申し出られても、信じられないのだろう。若干むっとした。

「神前くんを捕まえるつもりなら、ミッションのことなんて知らないで、とっくにケータイ奪ってるでしょ？」

「そうだけど……」

反論しようとしたところで、燕は頭を押さえて蹲った。痛みをこらえて立ち上がるうとする燕に、手を差し伸べる。

「私たちは仲間でしょ？ 違う？」

燕は苦しそうに呼吸を繰り返している。小さくうなずいたのを見て、音亜は笑った。

「一緒に行こう？」

燕が手を握り返した。二人連れ立って歩き出す。

「私が、神前くんを守るから」

ミッションが始まってすぐ。安藤は、早速一人追い詰めていた。携帯電話で確認したとき、幸運にも近くの路地裏にいたのだった。

「逃げ場なんてねえぞ。さっさとケータイ寄せ」

しかも幸いなことに、相手は三日目まで残っているのが不思議に思えるくらい太っていて、なおかつ気弱そうだった。しりもちをついて携帯電話を差し出してくる。

近づいていき、それをひったくる。デブに背を向けて立ち去り、先ほどのメールにあったアドレスにメールを送信する。

「がっ……！？」

メールを送信しようとして、突然後ろから吹き飛ばされた。強烈な一撃に一瞬意識が飛ぶ。

「て、めえ！」

立ち上がり、右手を振り上げる。しかしそこに、デブの一撃が飛んできた。腹に直撃を受け、壁に叩きつけられる。

「まったく。デブで気弱そうだからって、何でみんな簡単に油断するかね。雑魚に威張られるのって、むかつく」

デブは右手と左手を打ち鳴らした。キンと、金属がぶつかる音が響く。デブは、全身が金属光沢を放っていた。おそらく、身体を金属に変える能力か何かだろう。

「くそっ」

反撃しようとするが、次々と飛んでくる強烈なパンチに、意識が朦朧とし始めた。デブはいたぶるように、手加減して殴っていた。

「よっこいしょ、と」

安藤の腕を掴み、そのまま投げ飛ばす。仰向けに倒れた安藤に、デブが近寄ってくる。

「何か言い残すことはあるかな、不良君？」

「……っ、うつせえよ、黙れメタリックデブ。はげ頭が輝いてるぜ」

「な……デブって、言うなあ！」

デブは咆哮し、安藤の上に跳躍した。落下してくるデブを転がってかわす。強烈なボディプレスが空振りし、大地が震えた。

「そんな隙が大きい攻撃、他人に逃げられるだけだぜ、デブ」

距離をとり、両手を構える。バチリと鳴った。

「だから、デブって言うなあーっ!!」

足音を響かせて近寄ってくるが、遅い。

「くらえっ！」

最大まで力を溜め、両手を突き出した。安藤の怒りに応じて強く

なる雷が放たれる。二本の電撃の槍がデブを貫いた。路地裏を轟音が駆け抜ける。

「……たく、手間取らせやがって」

地面に転がっていたデブの携帯電話を拾って、路地裏を後にした。

「次は……」

先ほどのメールを思い出す。逃走者の中に、知っている名前があったのだった。そして安藤は、今朝そいつを見かけていて、具合が悪そうにしていたことを知っている。

「……神前」

安藤は、燕を探し始めた。

一人目、クリア。

三日目？（前書き）

今朝、塾に行ってきました……眠いです。受験、嫌ですねえ……

三回目？

音亜と燕は、人通りの多い道を避けて移動していた。曇り空のおかげで昨日までのような暑さは無いが、確実に燕の体力は奪われている。

「大丈夫？ 少し休憩しようか」

「……平気。まだ歩ける」

燕に肩を貸して歩いていく。しかし、数メートル進んだところで燕が倒れた。膝から崩れ落ちる燕を、とっさに支える。

「はあ、はっ……ゴメン、朝倉さん。やっぱり、少し休ませて」

「うん……」

座り込んだ燕の代わりに、周囲に注意をめぐらす。早めに秘密基地を離れて移動していたので、割と離れたところまで来ていた。幸い他の能力者や鬼の姿は見えず、燕の隣に座った。

「……朝倉さん」

「何？」

「ゴメンね、迷惑かけて。今朝からずっと助けてもらって」

「……そんなことないよ。秘密基地でも、ほとんど何もしてあげられなかったし」

「でも、すごく助かってるよ。……たぶん、ボク一人だったらもう捕まってたんじゃない？」

燕は苦しそうに笑った。ふらふらと立ち上がり、早く行こうと促す。

「うん」

立ち上がり、肩を貸そうとして、突然燕が蹲った。

「うっ、ああ、く……ああああー!!」

「神前くん!？」

燕は身体を抱きしめるようにしてうめいている。歯を必死に食いしばり、痛みに耐えているようだ。大粒の涙がぽつぽつと落ちる。

「どうしたの？　ねえ、しっかりして!」

呼びかけるが、燕はただ荒い呼吸を繰り返すだけで、反応しない。どうしようかと迷っているところに、視界の隅に人影を捉えた。そちらを振り向き、追う側の能力者だと確認する。距離があるが、燕はおそらく動けない。

「神前くん、逃げるよ!」

音亜は燕をおんぶして走り出した。燕の身体は軽いから、何とか逃げ切れるかもしれない。

幸い相手は、それほど足が速いわけではなかった。距離をつめられる前に右に曲がり、路地裏に逃げこんだ。燕を降ろして休ませる。拳銃を取り出して構えた。

「来ないでっ」

追っ手が路地裏に入ってきた瞬間に銃口を突きつけた。一瞬動きを止めたが、それでも近づいてこようとするので足元に一発撃つ。

「ひっ……」

「来ないで！」

二回目の忠告でようやく追っては離れていった。「千里眼」で戻ってくる意思が無いことを確認し、ほっと一息つく。燕の横に座った。

「大丈夫……？」

燕はさつきよりは幾分ましになったようだったが、それでもまだ辛そうにしていた。こぼれた涙が地面を濡らしている。

「ねえ、そろそろ秘密基地に戻ったほうがいいんじゃない？ あそこだったら誰にも見つからないだろうし……」

「……うん……」

自分で歩こうとする燕を手で制し、もう一度おんぶした。燕を早く休ませるため、秘密基地に急ぐ。

安藤は、燕を探していた。開始時には池から少し離れた辺りにいたはずだったが、さすがに移動したのだろう。隠れるなら路地裏かと思ったが、池の周辺にはいなかった。

「どこだ……」

先ほど携帯電話で確認したところ、安藤が倒したデブも含めて四人捕まえていた。もうすぐ残り三十分になるから、まずまずのペースだろう。

隠れていそうなところを適当にいくつか選び、近くからしらみつぶしに探していくことにした。

安藤が燕を狙う理由は、音亜と親しくしているのが気に入らないということだった。それだけである。特に燕に恨みがあったりするわけではない。子供じみていると自分で思うが、こういう性格なのだから仕方が無い。別に音亜は安藤の彼女でもなんでもないのだが、自分の好きな女と親しくしているのを見るのは癪に障る。

安藤が始めて音亜を見たのは、二年生になって同じクラスになったときだった。一目ぼれだったのだが、そこで、誰とも親しくしていない彼女が燕とだけ楽しそうに喋っているのを見てしまった。

「……ん？」

頬に冷たいものが触れた。空を見上げると、小雨が降り出している。そういえば、今朝のテレビで台風についてやっていた。

「くそっ、もう降り出したか」

天気予報は見てきていたが、「ゲーム」の邪魔になるだろうと思
って傘を持ってきたくない。折りたたみのものでも持つてくればよ
かったと後悔する。風邪を引くのは御免なので、コンビニでビニル
傘を買っ
た。

時間を確認して外に出る。そのとき、視界の隅に金色が揺れた。

「！」

車の走っていない道路を横切り、右に少し行ったところで路地裏
へ入る。燕の姿は無い。しかし、確実にここへ入っていったはずだ
った。奥へと進んでいく。思わず顔がほころんだ。

雨は、勢いを増しつつある。

三日目？

「危なかった……」

路地裏を何度も曲がり、行き止まりになっているところまで来た。燕を座らせ、横に腰を下ろして拳銃を確認する。

先ほどコンビにの前を通ったとき、安藤の姿を見た。こちらには気づいていないようだったが、慌てて逃げてきたのである。

「大丈夫？ 神前くん。少し休む？」

燕はつかれきった様子でうなずいた。痛みは引いたようだったが、発熱がひどい。雨脚も強くなってきているし、悪化しないか心配だった。傘がないので、頭の上からタオルをかぶせている。

しばらくして、燕がこちらに寄りかかってきた。驚いて見ると、どうやら疲れて眠ってしまったようだった。

時間を確認する。ミッションは残り半分の三十分を切っていた。このまま隠れながら逃げれば、何とか鳴るかもしれない。音亜は少しでも希望を抱いていた。

不意に、その希望を打ち砕く音が聞こえた。近づいてくる足音に顔を上げる。

「……朝倉？」

「安藤くん……」

安藤だった。なんで音亜がいるのか、状況を理解しようとしている。

「なんで神前そいつといるんだよ。ケータイ奪ったのか？」

黙って首を横に振る。近づいて来ようとした安藤に、拳銃を向ける。

「……何のつもりだよ、朝倉。お前は追う側だろ？ 神前を助けるのか？」

「来ないで？。近づいたら撃つから……！」

安藤はその場で立ち止まった。右手がバチリと電気を発する。今まで知らなかったが、安藤は電氣の能力を持っているのだろう。

「そんなに神前が大切なら、さっさとケータイ寄せ。感電するぞ」

燕に向かって右手をかざしている安藤を見て、それから燕を見た。ミッシヨンの前に交わした約束を思い出す。

音亜は、燕を庇うようにして立ちふさがった。

「何やってんだよ、朝倉。殺すぞ？」

殺す。安藤に言われると恐ろしいが、しかし音亜は、その言葉が本心からのものではないことを知っている。

「安藤くん、私は殺せない」

「！ てめえ……」

音亜は「千里眼」を使って安藤の心を読んでいた。他人の思考が流れ込んでくるのはあまり気持ちの悪いことではないが、この状況を乗り切るためには必要だ。

「知ってたよ……安藤くんが、私のこと好きだったこと。私のことで、神前くんを避けてることも」

安藤は黙っている。しばらく呆然としていたが、やがて唇がわなわなと震えだした。「どけ」と呟く。

「そこをどけっ。どけよ！」

「いや！」

腹に痛みが走った。蹴りつけられた部分を押さえて転がる。燕に近づこうとする安藤の足を掴んで引き止める。

「どけっつってんだろ！」

手を振り払われるが、すぐに安藤の前に立ちふさがる。泣きながら、音亜は拳銃を構えた。安藤が殴り、蹴り、電気で脅してくるが、音亜は燕の前を離れない。

「私が……神前くんをつ、守るから……」

「くそっ」

銃を蹴り飛ばされ、武器を失った。突き飛ばされ、燕の横に倒れた。それでも立とうと腕に力をこめる、なかなか立ち上がれなかった。

「くっ、そがぁあぁ！」

安藤が吼えた。泣きながら振り上げた右手に電気が集まっていく。これから訪れるであろう痛みに備えて、音亜は目を閉じた。轟音が轟く。……しかし、雷は当たらなかった。

「？」

振り向くと、呆然とたたずむ安藤の前に、燕が立っていた。安藤の右手の目の前に、自分の右手を突き出している。

「神前くん！？」

「ははっ、ゴメンね、朝倉さん。ちょっと休憩しすぎちゃったみたいで」

ポニーテールの金髪を揺らし、燕が振り返る。笑っていた。

「神前……ケータイ寄せ」

「やだ」

下をちらりと覗かせ、音亜に手を差し出す。その手をとって立ち上がる。

歩き出そうとして、再び安藤が右手を振り上げる。雷の槍が放た

れ、それは燕の右手に当たって消えた。安藤も音亜も呆気にとられる。

「じゃあ、行こう」

音亜の手を引いて歩いていく。路地裏から出ようとしたところで、安藤が声とも叫びともれない咆哮を上げ突進してきた。

「離れて」

燕は地面に右手を叩きつけた。閃光が走り、安藤の足元の地面が碎ける。それに足をとられ、安藤は転倒した。そのうちに逃げる。

燕に手を引かれ、秘密基地に向かって走る。降りしきる雨の中、全力で駆け抜けた。

ミッション、終了。

三日目？

音亜は、動けない状態の燕を背負って秘密基地を出た。

先ほど安藤から逃げるときに全力で走っていたが、秘密基地に戻ってからすぐにまた悪化した。熱と痛みを必死でこらえているようだった。

「神前くんの家、どこ？」

家の場所を訊ね、ここからだと言った燕の家の方が近いことが分かった。教えてもらった道を走っていく。雨はますます強くなっていて、風も出てきていた。

音亜は走るスピードを上げた。さっきから燕の具合がどんどん悪くなっていつている。音亜に掴まる手に力が入っていない。耳元にかかる息が熱かった。苦しそうな呼吸を繰り返している。

「ねえ、朝倉さん……」

後ろで燕が呟くように言った。

「本当にゴメンね……今朝からずっと、迷惑ばかりかけて」

「そんなことないよ」

「さっきも助けてもらったし」

「……別に……約束したじゃない、私が守るって」

「ありがとう……」

まわされた燕の腕に、わずかに力がこもった。

やっとの思いで燕の家にとどり着いたとき、二人は雨でびしょ濡れだった。燕に早く着替えるように言って、音亜は外に飛び出す。自分の家に向かって走った。

自分の家に着くと、着替えをビニル袋に突っ込んですぐに燕の家に向かう。辺りはすでに暗くなっていて何度かつまずいたが、何とか転ばずに走り抜ける。

「おじやまします……」

服にたまった水を絞り、燕の家の玄関を開ける。

「神前くん!？」

パジャマ姿の燕が倒れていた。慌てて駆け寄ると、燕は自力で立ち上がった。

「驚かせちゃってゴメン……こけただけだから大丈夫だよ」

自分の部屋に行くという燕に、シャワーを使っていいか訊いて、脱衣所に向かう。

びしょ濡れの服を脱ぎ、シャワーを浴びる。雨で冷え切った身体に、熱いお湯が心地よかった。

「ふう……」

家から持ってきたパジャマに着替えて、二階に向かう。燕の部屋に入る。電気は消されて真っ暗だった。

「神前くん、具合はどう……？」

返事は無かった。眠ってしまったらしく、起こさないようにそつとベッドに近づく。まだ熱はだいぶ高い。苦しそうな吐息が漏れていた。

ベッドの側に寄り添って看病した。看病といっても大したことは何一つ出来ないのだが、自分から勝手に押しかけていて休んでいるだけなのも癪だった。とにかく思いつく限りのことをしていると、慌しかったからか、燕が起きてしまった。

「あ……ゴメン。起こしちゃった？」

「ううん。雨音がうるさくて」

上半身を起こし、ベッドに腰掛けた。音亜もその隣に座る。燕が、外の雨音にかき消されそうな声で言った。

「……ボク 능력はね、『クラッカー破壊者』っていうんだ……」

暗い部屋の中、ぼんやりと見える右手を見つめて言う。

「ボクが壊したいって思えば、何でも壊せちゃう。手で触れるもののほうが壊しやすいんだけど、それ以外でもほとんどのものは簡単

に壊せるんだ……空気でも、電気でも、地面でも、記憶でさえ壊せる」

「神前くん……」

自分の能力について話している燕の顔がとても悲しそうで、音垂は何と声をかければいいのか分からなかった。燕は続ける。

「この能力……たぶん、かなり強いんだと思う。やろうと思えば簡単に人を殺せるし、どんな攻撃だって打ち砕く。でも、強さには代償が必要なんだ……」

燕はこちらを見た。大きな瞳が濡れている。

「『破壊者』の能力は、反動が強力なんだよ。使えば使うほど、こうしてボクの身体を蝕んでく」

時間が経てば自然と治るけど、と付け足した。

「こんな能力を持っているから……ボクは『独り』じゃなきゃいけない。一緒にいたら、他人との絆だって壊れちゃう」

目に浮かんだ涙を拭い、軽く微笑んでベッドにもぐる。

「じゃあ、おやすみなさい。リビングのソファでも客用の布団でも、何でも勝手に使っていいから」

「ありがとう。……おやすみ」

しばらくして、寝息が聞こえてきた。ソファで寝ようかと思った

が、なんとなく部屋から立ち去れないでいた。

ベッドの脇に腰を下ろし、燕の少女のような寝顔を眺める。秘密基地から連れて帰る時、背中に感じた燕の感触が思い出される。あのときの燕のか細い声が聞こえてくる。「ゲーム」が始まって三日、これまでのことを一つ一つ思い出していった。

「神前くん……」

さっきの言葉を思い出す。「こんな能力を持っているから……ボクは『独り』じゃなきゃいけない」

独りじゃなきゃいけない。それは、どんなに辛いだろう。音亜は、「千里眼」を手に入れたばかりの頃を思い出した。そして、中学校に入学したとき。

あのとき、独りでいた音亜に声をかけてくれたのが燕だったのだ。

「お願い……」

音亜はいつの間にか泣いていた。そつと燕の頬に触れ、聞いていないと知りながらも願う。

「……私を、『独り』にしないで」

三日目、終了。

休憩日？（前書き）

ついに学級閉鎖です。いやあ、テンション上がりますねー。

休憩日？

「ん……？」

音亜は、外から聞こえてくる大きな雨音で目を覚ました。ぼんやりした頭で台風の影響だと気づくのは、かなりの時間を要した。

昨日の夜、あの後そのまま眠ってしまったらしい。とりあえずベッドから起きようとして、腰の辺りを掴まれていることに気づく。目を凝らしてみると、燕が抱きついていて、ぴったりと、完全に密着している。

「あ……えと、神前くん……」

小声で呼びかけるが、燕は目を覚まさない。音亜に寄り添って、気持ちよさそうに眠っている。よく見てみると、二人で一つの毛布に包まっていた。近い。近すぎる……

燕が離れないので、ベッドの脇においてあったはずの携帯電話に手を伸ばす。台風関係で「ゲーム」に変更があるかもしれない。そう思って見てみると、予想通りメールが一通届いていた。

——本日の「ゲーム」は、台風の影響により明日に延期します——

「やったあ！」

思わず声に出して喜んでいた。一日だけでも燕を休ませてあげれるのはうれしい。

と、抱きついている燕が動いた。どうやら起こしてしまったらしい。

「あ、神前くん、ゴメン。もう一回寝てていいよ」

「……………」

眠たげな表情で見つめてくる燕に、携帯の画面を見せる。

「今日の『ゲーム』は台風で延期になったの。今日は休んでて」

そう言っただけで音垂はベッドを降りる。さすがにこのまま一緒に寝るのはまずいだろう。しかし、パジャマのすそを燕が掴んで放さない。

「ちょっ、神前くん……………」

「ん……………」

抗議しようとする、そのまま抱きついてきた。少女のような眠たげな顔で、そっと身体を寄せてくる。

「ちょ、まっ…………… ななな何よ、やめ……………」

「ん……………」

二人で寄り添ってベッドに寝ている格好になってしまった。暗い部屋の中、燕の寝顔がすぐ側にある。

——まさか、寝ぼけてる……………？

パニックの中、ようやくそこまで思考が到達したとき、

「……んっ」

燕が、音亜の胸に頬をうずめた。

「……は？」

頭の中で、何かが壊れる音がした。顔が真っ赤になって熱い。そのまましばらく硬直し、一度冷静に状況を確認した。

「か……」

「ん？」

「神前くんのっ、ばかぁ!!」

一撃。

午前十一時。燕は音亜に殴られた頭をさすり、ベッドに腰掛けた。

「ねえ、朝倉さん。何でいきなり殴るの？ 酷いよ」

「……本当に、何も覚えてないの？」

「うん。『千里眼』で確認すればいいじゃん」

先ほど燕は、寝ているところをいきなり音亜に殴られて目を覚ま

した。理由を訊いても答えてくれず、しきりに「覚えてないの？」と訊ねてくる。

「ねえ。ボクが寝てる間に何かあったの？」

「なな、何でもないって言ってるじゃない！」

音亜は本棚の前に立って、燕が集めた本を眺めていた。ときどき手にとって、ぱらぱらと捲っている。

「神前くん、ケータイ小説とか読んだ……意外」

「暇だから、いろいろ読むんだよ。隣の部屋にまだ置いてあるよ」

「ふーん……やっぱり神前くんって、女の子みたいだね」

「えーっ、そんなこと無いでしょ」

音亜はしばらく本を眺めていたが、興味があるものは一通り見たらしく本棚を離れた。燕の前までやって来る。

「そろそろお昼にする？ おかゆでも作ろうか？」

「いや、いいよ。料理くらいボクがやるから……」

昨日からずっと音亜に頼りきりだった。最低限のことは自分でやらないといけない。

「！」

立ち上がって部屋を出ようとし、踏み出した足に痛みが走った。
膝から崩れ落ちる。

「いててて……」

「大丈夫？ やっぱり、まだ休んでた方がいいんじゃない？」

「うん……そうする。ゴメンね、迷惑かけて」

「別にいいよ。……じゃあ、ちょっと待っててね」

音亜が一階へ下りていった。部屋に取り残された燕は、机の引き出しから写真を一枚取り出した。ベッドに横になって眺める。

写真には、家族四人が笑って写っていた。真ん中で寄り添って立っているのが燕と姉だ。その二人を抱きかかえるようにして、金髪の女性と黒髪の男性が立っている。二人ともまだ若い。燕がまだ小学校に入学した頃のものだ。

「姉さん……」

平和だったあの頃を思い出し、呟く。写真をしまい、そつと目を閉じた。

——大切な友達ができたよ、姉さん。……最初は冷たい子だと思ってたけど、実はすごく親切で優しい、いい子だった……

そう、音亜は優しい。こんな壊れ物の自分と一緒に逃げて、守ってくれた。本当に、いい子だ。

「ボクには、もったいない」

心配だった。また傷つけてしまうのではないか。身体だけでなく、心や、互いの絆まで壊してしまうのではないだろうか。

誰も、傷つけない。

燕には昨日、音亜の姿が姉の姿と被って見えた。外見は全く違っているのに、どこか似ている。

「どう思う？　姉さん……」

明るく答えてくれる姉はここにはいない。分かっているが、それでも訊ねる。口元をゆがめて晒わらった。

「ボクに、幸せになる権利なんて……あると思う？」

この疑問について、燕の中ではすでに答えが出ていた。

——幸せになる権利なんて、無いに決まってる。

「ボクは、『独り』だ」

暗く重い雨は、まだ止まない。

休憩日？（前書き）

一週間、学級閉鎖です。宿題満載です。

休憩日？

夕方。すでに台風は過ぎ去り、雨は止んでいた。

「ねえ、神前くん。晩ご飯はどうする？」

「ああ、それはボクが作るよ。……今度こそ！」

気合を入れて立ち上がり、ふらつきながらも一人で歩き出す。部屋から出ようとして、呼び止められた。

「そうじゃなくて、何を作るか訊いてるの。冷蔵庫の中、もうほとんど無いんだけど？」

「え？」

そういえば、最近あまり買い物に行った覚えが無かった。「ゲーム」が始まってからは、忙しくて外に出かけていない。

「雨も上がったし、買い物に行こう？ まだ身体がきつかったら休んでいいけど」

「もう大丈夫だよ。じゃあ、準備するから待ってて」

すぐに着替えて外に出た。道のあちこちに大きな水溜りが出来ていて、夕日を反射している。まだところどころ痛むが、体調もだいぶ回復していた。

「二人乗りして行こう。神前くんは後ろに乗って」

伸びをしていると、音亜が自転車を引いてやってきた。その荷台に飛び乗る。ふらつきながら走り出す。

「ゴメンね……やっぱり、ボクが前に座ろうか？」

「だ、大丈夫、大丈夫。神前くん軽いからっ、平気だよ！」

「でも、ふらついてるし……疲れてるんじゃない？ ほっぺた赤いよ」

「別に、なんでもないよつ。……ていうか、ほっぺたって……かわいい言い方するね。女の子みたい」

「女の子みたいだなんて、言わないでよ。気にしてるんだから」

初めはふらついていた自転車は、次第に快適に走り始めた。二日目にミッションで走ったショッピングセンターに向かう。鬼はいないしミッションも無い。平和だった。

人気の無い道を走りぬけながら、他愛の無いことを喋った。そのたびに互いに笑いあう。音亜の髪が、頬を優しくくすぐった。

平和な時間は、瞬く間に過ぎ去っていく。

買い物を終えてショッピングセンターを出ると、すでに日は暮れかかっていた。

「よし、じゃあ帰ろうか」

食材とお菓子をかごに入れて、家に向かって走り出した。やっぱり代わるうかと言ったが、「けが人は休んでなさい」と叱られてしまった。荷物が増えて、来るときよりも走りづらそうにしている。もう一度交代を申し出ようとしたとき、音亜が言った。

「ねえ。一つ訊きたいんだけど」

「何？」

「『ゲーム』のこと」

音亜の背中にしがみつき、薄闇の中を進んでいく。こちらを振り返らずに続けた。

「神前くん的能力……『破壊者』^{クラッカー}だっけ？ あれって、何回くらい使ったら身体に影響が出るの？」

「んー……力の大きさにもよるし、数えたことないからね。わかんないよ」

これまでも何度か、能力の反動で昨日のようになったことがあったが、正確な回数などを数えたことはなかった。それに大抵は熱で意識が朦朧としていて、そのときのことをほとんど覚えていないのだ。

音亜はしばらく黙った後、少し小さな声で言った。

「神前くん。……明日からの『ゲーム』、能力を使わないで」

「え……？」

「なるべく、能力を使わないようにして欲しいの。神前くん自身のために」

「でも……能力なしだと、いざというときに困るよ。また厄介なミSSIONがあつたら……」

「だから、なるべくって言ったでしょ。乱発したりしないように気をつければいいじゃない」

「だけど……」

「だから！」

自転車が急に止まった。惰性で前につんのめり、音亜に強く抱きついてしまう。慌てて離れた。

「だから……昨日、言ったでしょ」

音亜は振り返り、こちらを見つめてきた。暗くてぼんやりしているが、その表情は真剣だった。わずかに顔を近づけ、上目遣いに覗き込んでくる。

「……何？」

「だから……っ」

音亜の目が一瞬怪しく光り、すぐに消えた。またしばらく沈黙したあと、自転車を降りた。

「やっぱりいい……前、交代して」

「？ うん」

前後を交代して再び走り出した。なかなか大変だが、すぐに慣れてくる。

沈黙の中、音亜が少しだけ強く抱きついてきた。

午後九時を少し回った頃。夕食と入浴を済ませ、二人はソファに座っていた。バラエティを見てクスクスと笑っている燕に、音亜は冷たく冷えた缶を差し出す。

「何、これ」

「見てのとおり、お酒」

チューハイの缶を押し付け、自分の分を開けた。ポカンとしている燕をよそに、一気に喉へ流し込む。

「朝倉さん……お酒は、やめたほうが……」

「別に隔離地区^{（二）}じゃ、これくらい咎められることはないよ。みんな普通に飲んでる」

「いや、そうじゃなくて……」

「いいからっ。神前くんも飲みなさいよ」

「ちょ、やめて……っ」

嫌がる燕に無理やり飲ませ、音亜も自分の分を飲み干した。ふと隣を見て驚く。

「神前くん……もしかして、もう酔った？」

「んー……？ らいしょうふらよう（訳・大丈夫だよ）」

燕の白い顔が赤くなっていた。舌も回っていない。碧の目がぼんやりとしていて、まぶたが半分閉じていた。

「もうひよつと飲もうかにやあ（訳・もうちょっと飲もうかな）」

「いや、もうやめたほうがいいんじゃない？」

「らいしょーふらつて（訳・大丈夫だつて）……」

酒を飲ませたことを後悔する音亜を置いて、燕はフラフラと立ち上がった。そのまま三步も歩かないうちに倒れる。

「ちょっと、神前くん……っ」

「うー？」

仕方がないので、燕を部屋に連れて行くことにした。背中におぶつて廊下に出る。燕が顔を寄せて抱きついてきたので、思わず頬が紅潮する。燕はなにやら呟いていた。

「朝倉さんてさあ、やさしいよねえ……」

心臓の鼓動を抑えながら階段を上り、燕の部屋に入った。ベッドに寝かせて、横に座る。すぐに燕は寝てしまったので、一階に下りた。冷蔵庫からもう一缶取り出し、ソファに腰掛けてちびちびと飲む。

「やさしい、かあ……」

燕の弦きを思い出す。自分は本当に、燕が言ったように優しい人間だろうか。

人の心を知ることを恐れて、他人を遠ざけていた自分が、そんなに優しい人間なのだろうか。

「私には、わかんないよ……」

小さな弦きは、静寂の中へ解けていった。音垂は残りのチューハイを一息に飲みきると、そのままソファに寝転がった。

四日目、延期。

四日目？

一日延期されて、「ゲーム」四日目の朝。燕が起きると、音亜はすでに家を出ていた。机においてあったメモによると、一度家に帰って荷物を置き、拳銃やスタンガンを取ってくるそうだ。ありがたいことに、朝食まで用意してくれている。

「あとで、ちゃんとお礼しないとなあ……」

サンドイッチをかじりながら呟き、昨日のことを思い出す。昨夜は音亜に飲まされた酒に酔ってしまい、あまりはつきりとした記憶がない。目覚めたらきちんとベッドで寝ていたから、音亜が運んでくれたのだろう。一昨日から世話になりっぱなしで、申し訳なかった。

メモには秘密基地で待ちあわせようと書いてあったので、急いで準備する。動きやすい服に着替えて外に出た。空はすっかり晴れ渡っている。

公園を横切りながら辺りを見回し、初日より大幅に人数が減ったことを思い知る。残った者も、ぴりぴりと緊張した雰囲気を感じていた。なんだか近寄りづらい。早足に公園を抜けた。

ハンチングを被りなおし、秘密基地に急ぐ。

「ゲーム」開始前。安藤は、燕と音亜の姿を探していた。

一昨日のミッションを思い出す。あの時、安藤の雷は打ち消され、

まんまと逃げられた。手負いの状態の燕を取り逃がしたことが腹立たしく、その手助けをした音亜にも同じく怒っていた。

——安藤くんは、私は殺せない

安藤の前に立ちふさがった音亜の言葉が、心に重くのしかかってくる。

——私が……神前くんを、守るから……

銃口をこちらに向け、必死に燕を守ろうとする音亜の泣き顔が、鮮明に思い出される。

「なんでだよ……！」

なんであるとき、音亜は燕を庇ったのか。なんでボロボロになりながらも、必死に立ち上がったのか。友達だから？ 仲間だから？

……燕のことが、好きだから？

考えるほどにむしゃくしゃし、近くのゴミ箱を蹴り飛ばした。中に入っていた空き缶が、音を立てて飛び散る。

安藤の目的は、ここから出て父親を殺すことだ。そんな暗い目的しか持たない安藤から見ても、燕は恵まれていた。

そこまで思考が及んだとき、携帯電話が鳴った。「ゲーム」開始の合図である。当てもなく歩き出すと、すぐにまた携帯電話が鳴った。

「……もしもし」

「安藤紀彦くんですね。こちら、能力者隔離地区担当のものです……」

隔離地区を担当する政府からの電話だった。こっちは「ゲーム」の最中だというのに、一体何の用だというのだろう。抑揚のない声が続ける。

「先ほど、外から連絡がありました」

外からの連絡。なんだか分からないが、それを聞いた瞬間、たしかに悪い予感がした。

残念ながら、悪い予感というものは結構当たるもので、このときそれを思い知った。

「安藤くんのお父様が、今朝、亡くなられたとのことです」

「……は？」

時間が、止まった。

時計を見ると、時刻はすでに十時を回っていた。父が死んだと知らされてから、ずっと路地裏に座り込んでいた。流れ落ちる汗もそのままだに、うつむいてぼんやりと思考する。

親父が死んだ　クソツタレが死んだ　やつはもうこの世にいない
消えてしまった――

——もう、この手で殺すことは出来ない……

「ははっ、いい気味だ……」

あの父親が死んだのはうれしい。うれしくて涙が止まらない。しかし、これで自分は、目的を失ってしまった……。

涙と汗を乱暴に拭い、立ち上がった。何度も躓きながら路地裏を出る。そのまま、当てもなく歩き出した。

——もう、「ゲーム」を続ける意味はない。

燕と、音亜と、鬼の姿を探す。

携帯電話がメールを受信したが、おそらくミッションか何かだろう。もう自分には関係ない。

「ははは……っ」

なんだか笑えてきた。正面から近づいてくる足音に顔を上げると、鬼が一人駆けてきていた。

「あはは、はは……」

右手を突き出し、鬼を見据える。口元を大きくゆがめて晒った。笑いをこらえることが出来ない。

雷の槍が、鬼の身体を貫いた。アスファルトに崩れ落ちた鬼を蹴り飛ばし、進んでいく。

自分は強い。誰よりも強いのだ。目的を失った今、やるべきことは一つ……

「勝負だ、神前……！」

握り締めた右手で、雷がはじけた。

四日目？（前書き）

昨日、学級閉鎖から学年閉鎖になりました。インフル大流行です。

四日目？

音亜は、スイッチを探していた。

先ほど始まったミッションで、二日目と同じような内容である。違うのはスイッチの数と場所だけだった。

「あと……十分っ」

残り時間は少ない。音亜はすでに一つ解除していたが、まだ二つ残っている。ヒントは手に入れたが、だいぶ焦っていた。

音亜は今、秘密基地のある池の反対側、隔離地区の端のほうに來ていた。大きな倉庫が並んでいて薄暗い。

そのとき、前から近づいてくる人影に足を止めた。一瞬鬼かと思つて身構えるが、相手が顔見知りなので緊張を解く。

「安藤くん」

うつむいた安藤が歩いてくる。なにやら呟いていたが、聞き取れなかった。

「安藤くん……？」

スイッチのことを訊こうとして、なんだか様子がおかしいことに気づく。いつもと雰囲気違った。

不審に思い、一瞬「千里眼」を使った。安藤の思考を読み取り、

思わず後ずさる。すぐに身を翻して逃げ出した。

「っあ！」

脚に痛みが走り、こらえきれずに転倒した。一瞬遅れて、電撃を食らったのだと気づく。

「くっ……」

すぐに身体を捻って拳銃を構えた。引き金を引こうとして、手を思い切り蹴り飛ばされた。拳銃が遠くに飛ばされる。それを拾おうとして、腹を蹴りつけられた。

「……ろす……ぶ、こ……っ……」

ぶつぶつと呟きながら、安藤が執拗に攻撃してくる。何度も腹を蹴られて、胃液を吐き出した。

「かはっ……は、はあ……な」

なんでこんなことを。そう訊ねようとして、背中に安藤の右手が触れた。電気が流れ、びくんと身体が跳ねる。

「ぶっ殺す……っ」

安藤の言葉が聞き取れた。低く暗い声が、音亜の心を締め付けてくる。

「朝倉あ……痺れる快感、もっと味わってみるか……？」

「あっ！」

また身体に電気が流れる。痛みと恐怖に涙がにじんできた。地面に転がってうめきながら、助けを求める。

「助け、て……神前くんっ……」

声は、届かない。

ミッション終了後、燕は秘密基地で音亜を待っていた。

「音亜、遅いなあ……」

ミッションが終わって三十分が経とうとしている。遠くのほうまで探しに行ったのだろうか。携帯電話も通じないし、心配していた。

「もしかして、捕まったんじゃない……！」

捜しに行こうと立ち上がり、携帯電話が鳴った。

「もしもし？」

「……神前、くん？」

「朝倉さん？」

電話の相手は音亜だった。荒い呼吸を繰り返していて、不安が膨れ上がる。

「ねえ、どうしたの朝倉さんっ？」

「……助けて……」

今にも消え入りそうな声だった。泣いているのか、小さな嗚咽が聞こえてきた。

「安藤くん、捕まって……縛られて、倉庫に閉じ込められてる」

ゴメンねと、弱弱しい声が聞こえた。

安藤。まさか、一昨日のことで音亜を襲ったのだろうか。秘密基地を飛び出し、場所を訊く。

「隔離地区の……秘密基地の反対側の端のほうに、大きな倉庫が並んでるところがあるの……」

「わかった。今行く」

走り出そうとして、電話の相手が代わった。低い少年の声が聞こえる。

「よお、神前。お姫様は預かったぜ」

「安藤くん！？ どうして朝倉さんを……っ」

「どうして？ 一昨日のことに決まってるだろうが」

「だけどっ……こんなことして何に……」

「勝負しようぜ、神前」

燕の質問を遮って、安藤が言う。安藤は晒っていた。

「俺にはもう、『ゲーム』に参加する目的はねえ……だから最後に、お前と決着を着けたい」

「決着って、一体何の……」

「一昨日は逃げられたからな。……今回は逃げるなよ？ 逃げたら、朝倉がどうなるか……」

そこで電話は切れた。舌打ちし、スピードを上げる。鬼に見つかる可能性が高くなるが、最短距離になる道を選んで駆けていった。

音亜が捕まったのは、燕を助けたからだ。あるとき燕を助けなければ、音亜が被害に遭う事は無かった……

交差点に差し掛かり、右に鬼を見つけた。急いで駆け抜けるが、気づかれてしまった。

「っ……！」

鬼を撒いて、音亜と安藤のもとへ行かなければならない。最短コースを考えるが、次の曲がり角でまた鬼に見つかった。二人の鬼に追われて逃げ惑う。

「くそっ」

なるべく使わないように音垂に言われていたが、仕方が無い。身体が耐えられることを祈った。

右手を地面に叩きつけ、鬼たちの足元が崩れるのをイメージする。「破壊者」の能力が発動し、地面が壊れた。これでしばらく足止めできる。

「朝倉さん……！」

すぐに反転し、音垂のもとに急ぐ。

四日目？（前書き）

買い物に行ったら、見回りの先生がいたので逃げてきました……
あぶねえ

四日目？

埃っぽい倉庫の中。音亜は後ろ手に縛られて、薄汚れた床に転がされていた。口の中に血の味が広がっている。

「さあ、王子様は助けに来るかな？　どう思う、朝倉？」

薄闇の中、安藤がこちらを見下ろしている。ニヤニヤと晒いながら、音亜から奪った銃をちらつかせていた。痴漢撃退用スプレーやナイフなどの武器はポーチの中だ。今朝家から持ってきたスタンガンなども入っているが、縛られているせいで使えない。

「神前くんは、きつと来てくれる……っ」

安藤を睨みつけ、搾り出すようにして声を出す。安藤の表情が固まった。こめかみに銃口が押し付けられる。

「本当にそう思うか？　朝倉。さっきのミッションで鬼が増えて、危険が増してる。そんな中、あの天才が来ると思うか？」

「……来る」

「ちっ」

首筋で小さく電気がはじける。身体が震えた。涙がにじんでくる。

「もう一回電話するか？　思いつきり泣き叫んで、助けを呼べよ。……そういえば、一昨日言ってたよなあ？　神前くんは私が守る、だっけ？　チヨ―晒えるっ」

俺はさあ、と安藤は言った。

「……俺はさあ、外に出たら、親父を殺すつもりだったんだよ。それを目的に『ゲーム』に出た。だけど今日、親父が死んだって連絡があつて、目的は無くなつたわけだ……」

「……それが、どうしたっていうの」

「ははっ。相変わらず冷たいねえ、朝倉。神前以外には心は開かないか？」

音亜は黙り、ただ安藤を睨んだ。涙でかすんで見えるが、手を縛られているので拭うことも出来ない。

「俺は目的を失った。おまけに神前には雷を破られて、恋愛でも負けちゃった。俺には何も、残っちゃいない……」

安藤は立ち上がり、倉庫の壁にもたれた。拳銃をもてあそんでいる。

「だから俺は、神前と闘う……。何でも恵まれてるあいつを見るとムカつくんだよ。だから……」

「そんなこと無い！」

音亜の声が倉庫内に反響し、消えた。安藤が銃口を向け、歩み寄ってくる。

「安藤くんは、神前くんのこと、何も知らない……っ」

「ああ、知らないね。だからどうした？ 恵まれてるやつのことなんて、知ったことか。何も辛いもの背負ってねえくせに……」

その言葉に、音亜は切れた。

「神前くんは、私たちより重いものを背負ってる！ 自分の能力に人の何倍も悩んで、苦しんでっ、それでもお姉さんのために、必死に走ってるんだよ！？ 神前くんの、邪魔をしないでっ！」

「黙れ！」

蹴飛ばされ、固い床を転がる。安藤のつま先が、何度もしたたかに腹を打った。こみ上げてくる吐き気と恐怖をこらえ、燕の到着を待つ。絶えず襲い掛かってくる痛みに、意識が朦朧としてきた。

——ゴメンね、神前くん……

燕は、何度か鬼に見つかったが、何とか倉庫の前にたどり着くことができた。薄暗い倉庫の間を、音亜の姿を捜して歩いていく。

「つつ……」

燕は右腕を押さえ、壁にもたれかかった。ここに来るまでに三回ほど能力を使ったが、すでに影響が出始めている。昨日回復したばかりだから、当然だった。

「朝倉さんっ」

名前を呼びながら先へと進んでいく。途中で吐しゃ物や血痕を見つけたが、音亜のものでないことを祈った。

奥へと進んでいき、わずかにシャッターが上がっている倉庫を見つけた。入り口付近に血痕がある。

呼吸を整え、右手を構えた。シャッターを壊して一気に中に入る。罠の可能性が高いが、急がないといけない。

先ほどの電話を思い出す。音亜はゴメンねと言っていたが、それはこっちの台詞だ。謝らなければならないのは、音亜を巻き込んでしまった燕である。

シャッターに向かって突進し、右手を叩き付けた。閃光が走り、粉々に砕け散る。鉄粉を抜け、倉庫に転がり込んだ。

「朝倉さん！」

四日目？

倉庫に飛び込むと、目の前に立っている人物に気づいた。相手も燕を見据える。

「よお、神前」安藤は、晒いながら右手をこちらにかざす。「やつときたか」

「……朝倉さんは？」

「そんなことどうでもいいから、俺の話を……」

「朝倉さんは？ いるんでしょ？」

やや強い口調で問うと、安藤は舌打ちして倉庫の奥へ消えた。すぐに音亜を引きずって戻ってくる。

「朝倉さん！」

「待て」

駆け寄ろうとして、安藤の言葉に足を止める。安藤は、音亜に拳銃を向けていた。こめかみに押し付け、引き金に指をかけている。

「下手な真似はするなよ？ 大切なお姫様が死んじゃうぜ？」

そう言って安藤は、音亜の髪を掴んで無理やり上体を起こさせた。泣きはらした顔の音亜が目を開ける。

「神前くん……」

音亜は身体のおちこちを怪我しているようだった。服に血がにじんで、綺麗な肌にあざが出来ている。すっかり疲れきった様子で痛々しい。燕はうつむき、自分のせいだと思った。

自分に関わったから、音亜の平和は壊れてしまった。

音亜が苦しんだのは、自分を助けたせいだ。

——全ては、ボクのせいだ……

「へへ。それじゃあ、そろそろ始めようぜ」

安藤は拳銃を置き、こちらに歩いてきた。右手で電気がはじける。

「なんで、こんなことを……？」

呟くような声で、燕は訊ねた。安藤が足を止める。

——音亜が傷ついたのも、姉さんと離れ離れになったのも……

「なんで？」

——何もかも、ボクのせいだ

右手を、構える。

安藤は、燕の声に思わず足を止めた。それまでうつむいていた燕

が顔を上げ、睨みつけてくる。

「なんで？」

いつもと変わらない、優しい声。しかし、燕の目は笑っていない。刃のような視線が次々と突き刺さってくる。

「お、れは……目的を無くして、それで、お前がム力ついて……」

膝が震えだした。恐怖に奥歯がカチカチと鳴る。燕の周りの空間が、暗く淀んでいるようだった。

濁って、歪んで、捻^ねじれて、壊れている。

「それだけ？」

燕の声が、倉庫に響く。安藤は鼓動が速くなっていくのを感じた。逃げ出したいのに、足が動かない。

能力を使おうにも、右手が震えて狙いが定まらなかった。

「それだけなんだ……？」

そう言って、燕は自分の頭に右手を当てた。閃光が弾け、思わず目を閉じた。

「……？」

恐る恐る目を開けると、燕はそこに立っていた。先ほどと変わらず、こちらを睨みつけている。ただ、何かが違った。

脅そうと思い、右手に力をこめる。しかしその瞬間、燕が動いた。瞬く間に間合いを詰め、安藤の側頭部を蹴り飛ばした。横に飛ばされ、壁に背中を打ち付ける。

「つつ……」

反撃しようと右手を上げる。しかし、電撃を放つ前に燕が接近している。顔面を掴まれ、壁に連続で叩きつけられる。視界が霞んだ。

次いで地面に張り倒され、みぞおちに踵落しを食らう。反撃することも出来ず、ただ殴られ続けた。

「やめて、神前くん。もうやめて！ 安藤くんが……」

音亜の声が遠く聞こえた。抵抗しようにも身体が動かず、意識をつなぎとめておくのが精一杯だった。

今の燕は、まるで獣のようだった。容赦なく獲物に襲い掛かる獣。燕ではなく、猛禽類だ。

——俺には、何も残されちゃ いない……

燕の右手が、目の前にかざされた。

四日目？

音亜は、狂ったように暴れ続ける燕を見ていた。

燕は、もう動けない安藤を殴り続けている。まるで獣のようで、全く理性が感じられない。

「もうやめて、神前くん！」

呼びかけるが、燕は振り向きもしない。先ほど、燕が自分の頭に右手で触れていたのを思い出した。

燕はあの時、自分の理性を壊したのではないか。本能に従って動いているのではないか。

以前燕は、「破壊者」の能力は手で触れられないものも壊せると言っていた。記憶などが壊せるのなら、ありえるかもしれない。

このままでは、安藤が死んでしまう……？

「っ……」

必死に身体をよじり、ポーチをひっくり返す。中身をぶちまけてナイフを取り出した。震える手を無理やり動かして、手を縛り付けているロープを切った。自由になった手で足を縛っているロープも切る。

「神前くん！」

駆け寄ろうとして転倒した。身体のあちこちが痛くて力が入らない。いつもより重たく感じられる身体を引きずって、燕に近づく。

「やめて、神前くん！ 安藤くんが死んじゃう！」

安藤の頭にかざした右手を掴むが、乱暴に振り払われてしまった。燕の手が頬を張り、後ろに倒れる。再び安藤に能力を使おうとする燕に、後ろから飛びついた。

「ねえっ、神前くん！ もうやめて！ 『破壊者』を使ったら、安藤くんが死んじゃう！」

獣のようなうめき声を上げて暴れる燕を、必死に押さえる。燕の肘や踵が身体を打ち付けるが、それでも抱きつくようにして離れなかった。

「お願い………もとに戻ってよ、神前くん！ こんな、いつもの優しい神前くんじゃない！」

暴れる燕を安藤から引き剥がすが、足がもつれて二人とも転んでしまった。まだ安藤を狙おうとする燕を、抱きしめるようにして押さえつける。音亜は泣いていた。

「お願いだから、もうやめて………こんな神前くん、私、見たくない………」

少しだけ、燕の身体から力が抜けたように感じた。音亜を押しつけようとしていた腕が離れる。

「私を、『独り』にしないで………お願い………」

呟くと、穏やかな声が聞こえた。

「……朝倉さん……？」

燕の目に、いつもの優しい光が戻っていた。大きな碧の瞳が瞬く。それを見て、音亜は心から安堵した。

「よかった……神前くん、もとに戻った……よかった……」

「？」

燕は事態を飲み込めずにあたふたしていた。燕の細い身体を抱きしめて、音亜は泣き続けた。

安藤は、燕と音亜をおいて倉庫から出た。

すでに全身はぼろぼろである。怒り狂ったような燕に対し、ただ殴られ続けたせいだ。口の中には血の味が広がっていて、吐き気がする。一歩踏み出すたびに痛みが走った。

「もう、どうでもいいか……」

何もかも、終わったのだ。結局自分には、何も残されていない。ぶつぶつと呟きながら、当ても無く歩いていった。

ふと気がつく、目の前から鬼が走ってきていた。いつもなら逃げるか闘つかするところだが、今はそんな気は起こらなかった。

鬼は全く逃げる様子を見せない安藤をいぶかしげに見ていたが、それでもゆっくり近づいてきた。両手を挙げて、抵抗の意思が無いことを示す。

抗ってみたところで、何も変わらなかった。音亜を傷つけて、燕を狂わせて、自分も傷ついて、ただ悪い方向へ流れていく。

鬼の手が、肩に触れた。

安藤、失格。

「ゲーム」終了後。音亜は燕の家で、怪我の手当てをしていた。燕が夕食を作りながら謝ってくる。

「ゴメンね、朝倉さん……。ボクのせいで、こんなことになったやつて……」

「大丈夫だよ、これくらいすぐ治るし。神前くんこそ、能力使ったんじゃない？ 大丈夫？」

「ああ、鬼から逃げるときにちょっとね。ちょっと身体が痛いけど、たぶん平気だよ」

「そう。よかった……」

燕が料理を運んできた。食欲をそそる香りが、疲れた身体に染み渡る。

「神前くんって、料理上手だよな」

「そんなことないよ。一人暮らしだし、最低限のことは出来るように練習したけど」

他愛ないことを話しながら食事を済ませ、シャワーを浴びた。お湯が傷口にしみて、小さく悲鳴を上げた。

パジャマに着替えてリビングに入ると、燕は携帯電話に見入っていた。

「何見てるの？」

横から画面を覗き込むと、燕が画面を見たまま答えた。

「さっきメールが届いたんだけど」

こちらに画面を向けてくる。明日の「ゲーム」について書かれていた。

「『敗者復活戦』？」

四日目、終了。

五日目？（前書き）

今日も学年閉鎖で休みです。遊びに行けないのが辛いです……

五日目？

「ゲーム」五日目の朝。安藤はドアを乱暴にノックする音に目を覚ました。

「誰だ？」

ここは隔離地区第三中学校の生徒たちの男子寮である。狭い部屋を横切って、ドアを少し開ける。

「よ、アンドー。久しぶり」

「……なんだよ、野々山。こんな朝早くから」

「まあまあ、そんなに怒るな。せっかく俺が呼びに来てやったんだ。もつと喜べ」

野々山とは、彼が一日目に失格になってから会っていなかった。何をしに来たかは分かっているが、今は誰にも会いたくない。

「帰れ、野々山。俺は『敗者復活戦』には出ない」

「なんで？」

ベッドに腰掛け、ニヤニヤと笑っている。いすに座り、安藤は答える。

「『ゲーム』に参加する目的が無くなった。俺が殺す前に、親父が死んだんだ」

「へえ。そりゃ残念だね」

「だから、俺はもう『ゲーム』には出ない。お前一人で行けよ」

「冷たいねえ、アンドーくん。本当にそれで良いのかい？」

「うるせえ」

右手を向けると、野々山は驚いたふりをした。わざとらしい演技にいらつき、本当に電撃を放とうとする。

「ぐっ……！？」

突然、全身が締め付けられた。巨大な手に握られているようで苦しい。見えない力に押さえつけられて、全く身動きが取れなかった。

「本当に出ないのか？ アンドー」

「てめえ……一体何を……」

「ああ、それ、俺の能力。暴れられると面倒だし、大人しくしておいてもらっよ」

野々山は軽くこぶしを握りながら、ゆっくりと歩み寄ってきた。じつと顔を覗き込んでくる。

「アンドー。お前はなんで、親父さんを殺そうと思ったんだ？」

「はっ………そんなの、あのクズがム力つくからに決まって……」

「本当に、それだけか？」

「あ？」

「お前はすぐにキレるし、救いようの無い馬鹿だけど、本当にそれだけで人を殺そうと思うのか？」

「……当たり前だ」

「本当に？」

野々山はポケットから写真を取り出した。それを見て、思わず野々山を睨みつける。

「てめえ、一体いつの間に……」

「悪いね。俺も、お前のプライベートを知ろうとは思ってなかったんだけど」

野々山が手にしている写真には、隔離地区に来る前の安藤と、妹が写っていた。安藤の顔にはあざが出来ている。殴ろうとする父から、妹を庇ったときのものだった。

「お前は、いつでも妹を助けてたらしいな。親父さんから守って、代わりに殴られてた」

「なんで、そんなこと……」

このことは、誰にも言っていないはずだった。同情されたり、や

たらと好奇心をもたれるのは嫌だった。

「だけど、お前が能力者になってここに来て、妹を守ってやる存在はいなくなった。ずっと心配だったんだろ？ 自分が能力者になったせいで、妹が傷つけられたんじゃないかって」

「……ああ」

「だから、この『ゲーム』に参加して外に出て、親父さんを殺そうと思った。だめだぜアンドー。そんな簡単に殺すとか言っちゃあ」

野々山ははがきを取り出した。それまで安藤を拘束していた見えない力が消え、それを受け取る。

「身内が死んだときとか、そういった特別な場合は、隔離地区と連絡が取れるらしいな。初めて知ったよ」

野々山はきびすを返し、ドアノブに手をかけた。突然振り返って言う。

「妹さんも、お前のこと心配してたみたいだぜ。会いにいってやれよ、アンドー」

「野々山……」

「おっと、礼はいらねえよ。感謝の言葉を並べるくらいなら、いい女を紹介してくれ。……そうだ、外に出たら、妹さんを俺に紹介して……」

「黙れ、人の身内に色目を使うな。このロリコンナルシスト」

「冗談だよ。俺、年上とメガネっ娘が好みだから」

笑いながら、野々山は部屋を出て行った。手紙を見る。妹からだった。

父が死んだこと。自分は元気だということ。安藤の身を気遣う言葉。そして、会いたい、と。

「絶対に、会いに行くから……」

動きやすい服装に着替え、「敗者復活戦」の準備をする。安藤は、この「ゲーム」に希望を見出していた。

外に出よう。怒りでも憎しみでもなく、ただ、大切な家族のために。

五日目？（前書き）

今日も学校が休みです。たまった宿題を片付けないといけません

……

五日目？

燕と音亜は、秘密基地に隠れていた。腕時計で時刻を確認し、もうすぐ正午を迎えようとしていることに気づく。

「ねえ、神前くん。そろそろお昼だよ」

「ん？ ああ、じゃあ帰ろうか」

今日は午後から、「敗者復活戦」が行われる。そのルールは聞かされていないが、昨日までに捕まった人たちが出るらしい。残っている燕たちは午前中で終わりだった。

「それにしても、ラッキーだったね。朝倉さんは怪我のことがあるし、ボクも能力の反動が不安だったから」

「うん。……復活戦って、何をするんだと思う？」

背の高い草むらを抜け、燕の家に向けて歩き出す。音亜が横に並んで訊ねてきた。

「やつぱり、ミッションみたいなことをするんじゃない？ ちょっと難しい内容だったりして」

まあ、ボクたちには関係ないけど。そう付け足して、音亜がうつむいて黙っていることに気づいた。

「どうしたの、朝倉さん。元気ないね」

「……うん。昨日、私たちが倉庫から出るときには、安藤くんはいなかったでしょ？ あの状態で、ちゃんと逃げ切れたのかなと思って」

「確かに。……ボクもちょっとやりすぎちゃったからなあ。今度会ったら謝つとかないと」

昨日燕は、「破壊者」の能力で自分の理性を壊した。そこからしばらく記憶が無いが、音亜から聞いた話では、狂った獣のようだったらしい。考えただけでぞっとする。

「痛っ……」

突然、音亜が脚を押さえてしゃがみこんだ。瞼を閉じて痛みを堪えている。

「大丈夫？」

「……ゴメン。ちょっと、休ませて」

「いいよ、ボクがおんぶしてくから。……ほら」

音亜の前にしゃがみ、背中に乗るように手で示す。音亜はしばらく躊躇していたが、最後は大人しくおんぶされた。

さすがに人に見られると恥ずかしいだろうと、人気の無い道を進んでいく。音亜が囁いた。

「……神前くん」

「何？」

音亜はしばらく間をおいたが、「やっぱりなんでもない」と言つてそっぽを向いてしまった。

会話も無く歩いていくと、途中で遠くにいくつか人影を見かけた。おそらく「敗者復活戦」に出るのだろう。とても張り詰めた雰囲気だった。

「？」

ふと安藤の姿を見かけたような気がして立ち止まったが、改めて見るといなかった。見間違いだろうか。

「どうしたの？」

「うっん……何でもないよ」

安藤は今、どうしているのだろう。

安藤は、遠くに燕と音亜を見かけた。反射的に自販機の陰に隠れる。昨日のことがあったから、あまりあの二人とは会いたくなかった。

「あの二人、ラブラブだねえ。うらやましいよ」

「野々山。なんでここにいるんだよ」

「俺も復活戦にでるんだから、当然でしょ」

野々山はニヤニヤと笑いながら近づいてきた。差し出されたコーラを開け、口に含む。

「神前と朝倉……いやあ、あの二人を見ると、レズカップルかと思っちゃうね。そうだアンドー、知ってる？」

「何を？」

「あの二人、同棲してるんだぜ」

「ぶっ……！」

思わず吹いた。コーラを顔面に吹きかけられた野々山が顔をしかめる。

「そんなに驚くことないだろ。……もしかしてアンドー、お前も朝倉を狙ってたの？」

「そんなんじゃないよっ」

全力で否定する。この話題は早く忘れてしまいたい。

「何だ、お前も朝倉のファンかと思ったんだけどな。俺はさあ、機会があつたらナンパしようかと思ってたんだけど、神前とかなり仲いいじゃん。『ゲーム』が始まってから、朝倉が神前の家に出入りするのを見たってやつがいて、それで諦めた」

安藤が何も喋らないでいると、野々山の携帯電話が鳴った。次いで安藤のものも鳴る。メールが届いていた。

——「敗者復活戦」のルール

シヨッピングセンター等、これまで立ち入れた場所も含めて、建物の中は進入禁止。時間は二時間。途中でミSSIONを与える――

「これだけ？」

野々山がいぶかしげに画面を見つめている。安藤も同感だった。てつきり鬼が追加されたりするものだ
と
思
っ
て
い
た
の
だ
が
、
予
想
と
違
っ
た
。

「まあいいか。よし、一緒に逃げようぜ、アンドー」

「一日目みたいなことになったら許さねえ」

「ははっ、俺に任せとけ」

「……すっげえ心配なんだけど」

敗者復活戦、スタート。

五日目？

「来たぞ、野々山！」

「こつちだ」

遠くから駆けてくる鬼の姿を見つけた二人は、目の前の交差点を左に曲がった。さすがに野々山は足が速く、安藤は必死についていく。アスファルトの照り返しが辛い。

「敗者復活戦」が始まって、すでに一時間が経とうとしていた。これまでミッションも無く、ときどき鬼に追われる以外はほぼ順調だった。建物の中に隠れることは出来ないが、これなら充分逃げられる。

先導する野々山を追いかけ、路地裏を駆け抜ける。道を何度も曲がり、鬼を撒いた。小さな公園に出る。

「やっと撒いたか……」

「今の鬼、しつこかったな」

安藤は木陰に座り込んだ。呼吸を整えていると、野々山が隣に腰を下ろす。

「アンドー、怪我は大丈夫か？」

「ああ、別に問題ねえよ。てゆうかこの怪我、悪いのは俺だし」

安藤は身体中あざや瘡蓋^{かさぶた}だらけで、あちこちが痛かった。全部燕に殴られた痕だが、鏡で見るとかなり痛々しい。

「お、メールだ」

野々山が携帯電話を開いた。安藤にもメールが届いたが、面倒なので、自分の携帯は開かなかった。野々山に訊ねる。

「何だつて？」

「ミッションだ。……それに、ちょっと厄介かもしれない」

野々山がメールを見せてくる。携帯電話を受けとって読んだ。

——ミッション

隔離地区内の何処かに置かれた旗を取り、自分の学校の屋上に持っていく。屋上に用意されたポールに旗をつければクリア。「敗者復活戦」が終わるまでにクリアできれば、明日からの「ゲーム」に復帰できる——

「旗か……」

「アンドー。旗がありそうなところ、心当たり無いか？ 俺は初日で失格したけど、お前はミッションやったことあるだろ？」

「そうだな……スイッチを探すミッションのときに、ヒントが用意されてた。赤い箱に入ってるから、それを探すか」

「おっけー。それじゃあ、行くか」

二人は並んで公園を出た。残り約一時間。心当たりのある場所を巡り、ヒントと旗を探しまわる。

水を噴き上げている噴水を見て、安藤は落胆した。以前、ミッシェンでスイッチを見つけたときのことを思い出して来たのだが、あては外れてしまった。

「くそっ、ここも駄目か……」

舌打ちしたとき、携帯電話が鳴った。野々山である。

「アンドー、旗はあったか？」

「あてが外れた。ここら辺にはヒントすらない。お前は？」

「ヒントなら見つけたぜ。お前が言ってたとおり、赤い箱に入ってた」

「そうか。……俺も、早く見つけねえと……」

「じゃ、また後で」

「おう」

携帯電話をしまい、公園を出る。近くの茂みも探してみるが、ヒントすら見つからない。だんだん苛立ってきた。

ショッピングセンターには入れないし、他の建物も駄目だ。公園の噴水やベンチにも無かつたし、他に思いつく場所が無い。

当ても無く走り回っていると、しばらくして大きな池の近くに出た。背の高い草が生い茂っていて、池には橋がかかっている。

「よし……」

鬼の姿がないことを確認して橋に向かう。橋の中ほどまで歩いていくが、何も無かった。

「ちっ」

すぐに折り返し、来たのとは反対側に向かう。そのとき、視界に入ったものが気になった。

「あれは……！」

橋の側面に、真っ白な旗が貼り付けられている。来たときは反対側だから気づかなかったが、端の中ほどにそれはあった。

怪我の痛みも忘れて駆け寄り、柵の隙間から手を伸ばす。テープで固定されていた旗を引き剥がし、頭上に掲げる。

「よっしゃあ！」

残り時間を確認し、第三中学校に向かう。野々山に連絡すると、彼も旗を手に入れたらしかった。学校の前で待ち合わせる。

ここまでは、順調だった。

五日目？

第三中学校には、鬼が待ち構えていた。家の陰に隠れて、野々山と相談する。

「どうする、アンドー。さっき見た限りじゃ、最低でもグラウンドと正門に一人ずついるぜ」

「裏から回ったほうがいいんじゃないか？」

「そうだな。行こう」

野々山は、安藤と違って真つ赤な旗を手に入れていた。旗をリュックに押しこみ、校舎の裏がわに向かう。フェンスを乗り越え、昇降口まで走っていく。

屋上に向かうには、一度校舎内に入って四階まで上り、窓から外に出てはしごを上る必要がある。上履きは無いので土足で進入した。

「やべえ、鬼だっ」

見つからないように気を配っていたつもりだったが、鬼が一人追ってきていた。一階の廊下を反対まで走り、階段を二段飛ばしで駆け上がる。三回にたどり着いたとき、一つ下の踊り場まで鬼が迫っていた。

「くそっ」

電撃を撃とうと右手を振りかぶり、やめた。鬼がその場で浮遊し

て悲鳴を上げている。周りから、見えない力に押さえつけられているようだった。

「全く……俺はあんまり、乱暴なことは好きじゃないんだけどなあ」

野々山が愚痴をこぼしながら、右手をだんだんと閉じていく。鬼の悲鳴が大きくなり、野々山が投げ捨てるように手を振ると、鬼は壁に叩きつけられて崩れ落ちた。

「よし、行こうぜアンドー」

さつさと階段を上っていく野々山を追いかけ、四階の廊下に出た。視聴覚室の窓を開け、そこから外に出る。窓枠を掴んで身体を支え、斜め上のはしごを掴んだ。野々山に続いて屋上にたどり着く。

「？ どうしたんだよ、野々山」

安藤が屋上に立つと、野々山が呆然と立ち尽くしていた。その視線の先には、旗を上げるために設置されたポールがあった。

野々山が、静かに言った。

「どっちが夏休みを手に入れるか……勝負しようぜ、アンドー」

ポールは、一本だけだった。

クリアできるのは、どちらか一方だけ――。

屋上に、電撃が走る。

ミッションのクリアを賭けた闘いで、安藤は苦戦していた。

安藤は自分の能力には自信があった。しかしそれは、この「ゲーム」が始まって打ち砕かれてしまった。野々山には、勝てない――

普段誰も利用しないせいで汚れてしまった屋上を、見えない力から逃げ惑う。ちらと腕時計を見ると、「敗者復活戦」の残り時間はあとわずかだった。

「くそっ」

安藤は右手を野々山に向け、電撃を放った。しかしそれは、野々山に到達する前に何かに衝突して消えてしまう。

「……そろそろ復活戦も終わりだ、アンドー」

野々山が、いつもと違った落ち着いた声で言った。右手を挙げ、何かを叩くように振り下ろす。同時に頭上から衝撃が走り、安藤は屋上に叩きつけられた。

「っ……っ、の……！」

起き上がり雷の槍を作り出すが、野々山が手を横に振ると、今度は見えない力に横に弾き飛ばされた。巨大な力にぶつかられて、頭が朦朧とする。昨日の怪我也響いて、安藤はかなり消耗していた。

「ぜ……はっ、は……っ」

「もう諦めようぜ、アンドー。妹さんには、俺がお前のこと連絡しとくから」

「……うつ……せ、ええ!!」

叫びながら両腕を振りかぶり、同時に突き出す。両手から放たれた電撃が野々山に迫り、野々山が掌を向けただけで、また途中で打ち消された。

「アンドー。お前に、俺は倒せない」

——安藤くんは、私は殺せない

「くそっ……!!」

三日目のミッション。あとき音亜に言われた言葉が思い出される。自分は、誰にも勝てない……

「もう時間がないな……種明かしだけど、俺のチカラは『神の手』……他人には見えない、巨大で頑丈な右手を操る能力さ」

野々山が右手を握った。安藤は強く締め付けられ、身体中が悲鳴を上げる。

「諦めろよ、アンドー」

見えない力が緩み、安藤はその場に崩れ落ちた。野々山は旗を取り出して、ポールに近づいていく。それを見て、安藤の視界がにじ

んだ。

「ま、て……野々山。外に出るのは、俺、だ……っ」

電撃を撃とうにも涙でぼやけてしまう。残りの力をかき集め、雷の槍を放った。野々山が何かしたように見えたが、涙でにじんでよく見えなかった。

安藤は昔、妹を庇って父から殴られ、家のことで周囲から蔑まれても、泣きはしなかった。泣くのは弱い奴のすることだと嫌っていた。

——俺はいつ、こんなに弱くなった？

そんなこと、答えはとっくに知っている。自分は、昔から弱かった。泣くから弱いのではなく、弱いから泣かないのだ。傷つくのを恐れて、泣かない。

「アンドー」

野々山が、呼んだような気がした。

五日目？

野々山に呼ばれて顔を上げると、黒く焼け焦げた布が目に入った。

「な……？」

安藤がそれが旗だと気づくのは、わずかに時間がかかった。野々山はそれを投げて寄こすと、踵を返しはしごへと向かう。驚きと共に呼び止めた。

「おい、野々山！ これ、お前の旗じゃ……」

「ははっ。いやまったく、さすがの俺もこんな展開は予想してなかったな」

野々山はいつもの通りニヤニヤし、言った。

「もう抵抗の意思はないと思ってただけ……アンドーって、意外とタフだったんだな。いきなり雷が飛んできたときは、びびったよ。不意打ちって酷くない？」

思わず旗を放り出したと、野々山は笑った。

「俺自身は『神の手』で守ったんだけどね、旗は黒焦げになっちゃったよ。これじゃ、さすがに駄目だろ」

「野々山……」

「早くしないと、ミッション終わっちゃうぜ？ 妹さんに会いに行

くんだろ？ アンドー」

「……もしかしてお前、わざと旗を……」

「さあね。……俺はそんなに優しい奴じゃないよ。ま、ナンパはここでも出来るし、せいぜいいい女でも捜すよ」

そう言って野々山ははしごに足をかけ、下へ降りていく。最後に一つ、余計なことを言っ去っていった。

「そうそう！ 夏休みを譲ってやった代わりに、妹さんの入浴シーン、撮ってきてくれない？」

「はあ？ このロリコンナルシスト！ 他人の身内に色目使っ言っただろ」

「まあ、気が向いたら頼むよ。妹さんによろしくー」

屋上に残された安藤は、リュックから旗を取り出し、ポールの紐にくくりつけた。紐を引っ張って旗を上げる。真っ白な旗が夏の風に揺れる。「敗者復活戦」の終了を告げるメールが届いた。

メールを確認し、屋上の端に立つて隔離地区の町並みを眺めた。あと二日逃げ延びれば、ここから出られる。家族に、会いにいける。

水着姿の写真くらいは、譲ってやってもいいかもしれないと、少しだけ思った。

燕は音亜と自転車を二人乗りして家に向かっていった。午後から始

まった「敗者復活戦」も終了し、辺りに人気は無い。自転車のかごに入ったビニル袋が、風に吹かれてかさかさ鳴る。

ビニル袋には花火が入っていた。先ほど音亜が提案し、二人で買に行ったのだ。二人だけなので大した量はないが、移動に時間がかかる。時刻はもうすぐ、午後六時を迎えようとしていた。

「ねえ、神前くん」

「何？」

後ろに乗っている音亜の声に、振り返らずに答える。

「ちょっと、池のほうまで行ってみない？ 夕日が綺麗だと思うんだけど、見てみたい」

「でも、帰るのが遅くなっちゃうよ？」

「いいじゃない、別に。門限があるわけじゃないし」

「そうだけど……晩御飯の準備もまだだよ」

「いいからっ、ちょっと寄ってみようよ」

「うん……」

結局音亜に押し切られ、帰り道は大きく遠回りすることになった。秘密基地のある辺りに出て、歩道をゆっくり走っていく。池に目を向けると、夕日を反射してたしかに綺麗だった。しかし、見たいといった音亜の反応がない。

「朝倉さ……」

「神前くん！」

「はいっ？ ……あ、ちよつ、ひゃあ!？」

話しかけようとして、音亜に遮られた。予想以上に大きい声に驚き、なぜか後ろから抱きつく腕に力がこもり、ちよつとドキリとし、バランスを崩し、状況を把握できずにおかしな声を上げてしまった。気づいたときには、すでに自転車は宙へ投げ出されていて、二人は茂みの中へ落下した。

「きゃあっ」

すぐ側で音亜の悲鳴が聞こえ、それと同時に地面にぶつかった。二人でもつれるようにして斜面を転がり落ち、傾斜が緩やかになったところでようやく止まった。

「いてて……」

うつすらと目を開け、音亜と目が合った。……近い。

「あの、朝倉さん……重いよう……」

「あつ、ゴメン！」

燕の上に覆いかぶさるようになっていた音亜が飛び退き、目をそらした。

「あの、そのう、朝倉さん。重いつていうのは、朝倉さんが太ってるってわけじゃなくて、むしろやせてる方だしっ……」

「……神前くん」

「？」

慌てる燕に対して、音亜の声は静かだった。上目遣いにこちらを見て、何か言おうとしている。その頬がわずかに紅潮しているように見えるのは、夕日のせいだろうか。

「あの、私……神前くんのこと……っ」

「あ、ゴメン。ちょっと電話が……」

ちょうどいいタイミングで電話が鳴った。音亜を遮り、携帯電話を開く。友人と会話しながら茂みを出て、自転車を起こした。

その後の音亜は機嫌を損ねていて、花火は明日に持ち越しとなった。

五日目、終了。

六日目？

六日目の朝。時間ぎりぎりまで寝ていようとする燕を、音亜は少々乱暴に起こした。昨日の夕方のことが原因である。

「うう……酷いよ、朝倉さん……何もぶたなくたっていいじゃない」

「いつまでも起きないからでしょ。ほら、早くご飯食べて。行くよ」

燕をひっぱって家を出て、秘密基地に向かう。そこに、意外な人物が立っていた。思わず硬直する。

「！　どうしたの？」

突然立ち止まった音亜にぶつかり、燕が訊ねてくる。横から顔を覗かせて、目の前の人物に挨拶する。

「おはよー、野々山くん。電話だと、夕方に来るって聞いてたけど、どうしたの？」

「いやあ、若い二人の共同生活がどんなものか、興味があつてね。待ちきれなかった。……しかしまあ、ずいぶんと仲がいいな。仲良く手をつないでお出かけかい？」

「からかわないで。撃つわよ」

「おっと！　これはこれは、ツンデレお姫様。デートの邪魔をして申し訳ありません」

拳銃をちらつかせると、おどけた様子で頭を下げられた。相変らず頭にくる。

「これから『ゲーム』なの。野々山くんも、早く逃げたら？」

「あいにく俺は、初日に失格してるんでね。昨日の『敗者復活戦』も、アンドーに譲って失格になったし」

「！ 安藤くん、失格になってたの？」

「おう。暗くふさぎこんでるところを、俺が元氣付けてやったんだよ。さすが俺、天才だね」

「……それ、天才少年と優等生を前に言う台詞？ ナルシストさん」

「朝倉さん、喧嘩はやめてよ」

スタンガンを取り出そうとして、燕に止められる。しばらく野々山を睨みつけていたが、渋々従った。

「で、なんの用？ 急いでるんだけど」

「いや、ただお前らを見に來ただけだよ。……しかし、やっぱりお前らを見ると、レズカップルに見えるな」

「「なっ……！？」」

音亜と燕の声が重なった。お互いの顔を見合す。……確かに燕の外見なら、それは分からないこともないが……

「あと、男女が逆に見えたりするな。神前が彼女で、朝倉が彼氏」

「なんですって?」

「朝倉さん、落ち着いて!」

燕が腕にしがみついて止める。……確かに音亜は中性的な顔立ちで、燕はかわいらしい顔だが……

「まあ、酔っ払って、神前を襲わないように気をつけなよ」

「なによっ、からかうのもいい加減にして!」

「朝倉さんっ」

六日目は、騒がしくも平和に始まった。

燕と音亜は、秘密基地で喋っていた。といっても、ほとんどは音亜が愚痴をこぼしていたのだが。

「あーっ、もう! なんであいつなんて呼んだの、神前くん!」

「だって、結構仲良いんだよ、ボクたち」

「なんで? あんな変態ナルシスト、顔も見たくない!」

「……朝倉さんは、どうして野々山くんを嫌ってるの?」

「え? あ……それは……」

昔、襲われそうになったから。そんなこと、燕に言えるわけが無い。

「……私が痴漢撃退用スプレーを持つようになったのは、あいつのせいだから……」

「？」

「なんでもない！　今は忘れてっ」

六日目の「ゲーム」は、平和だった。ミッションも行われず、ただゆっくりと時間が流れる。

嵐の前の、静けさだ。

六日目？（前書き）

学年閉鎖が終わり、月曜から学校が再開します。面倒ですねえ…

…

六日目？

「ゲーム」終了後、燕と音垂は昨日買った花火をしていた。夕食を終えて、庭に水を張ったバケツを用意する。

「ねえ、神前くん……なんで、線香花火がこんなにあるの……？」

「え？　だって、楽しいじゃん」

「……寂しい……」

他の花火はすぐに終わり、大量の線香花火だけが残っていた。二人並んでしゃがみこみ、不安定に揺れる小さな火球を見つめる。しばらくして落下し、次の花火を手にする。

「『ゲーム』、明日で終わりだね……」

「え？」

なんだか少し寂しげな音垂の声に、思わず横を振り返る。花火が揺れて、火が落ちた。

「いろいろあつたけどさ……『ゲーム』も明日で終わりだと思つと、ちよつと寂しくなる」

「そう？」

「うん。池に飛び込んだり、神前くんをビンタしたり、熱出した神前くんをおんぶして走ったり……いろいろあつたよ」

「ボクは、ビルの屋上から、隣のビルに飛び移ったりしたなあ……」

「……神前くんって、意外と馬鹿だったりするの？」

「そんなことないよ。鬼から逃げてて、仕方なくね」

二本まとめて花火に火をつけ、両手に持って眺める。隣で、音亜の花火が消えた。

「……明日逃げ切れば、外に出れるんだよね」

「一週間だけだけど」

「ねえ、約束……覚えてる？」

「ん？」

「二日目に、秘密基地で会ったときにさ……誘ってくれたじゃない」

「ああ、夏祭り？ 覚えてるよ」

音亜が黙り込んだので、ちらと横を見る。音亜がこちらを見つめていた。それから目をそらしてうつむき、小さな声で呟く。

「あるとき……誘ってくれて、うれしかった」

「……うん」

いつの間にか花火はなくなっていた。燃えかすをバケツに放り込

み、片付けを済ませて部屋に戻る。順番にシャワーを浴びて、リビングでバラエティ番組を観た。音亜は酒を飲んでいたが、前のことがあるので燕は遠慮した。

「ふわぁ……そろそろ寝ようかな……」

あくびして時計を見ると、午後十時を回った頃だった。明日は最終日だし、早めに寝て体力を温存したほうがいいだろう。

「もう寝るの？」

「うん。明日は最終日だし」

部屋に入ってベッドにもぐり、しばらくしてドアがノックされた。音亜が顔を覗かせる。暗くて表情はよく見えなかった。

「何？」

「ねえ、一緒に寝ない？」

「なっ……え、いやっ、ボクらはまだ中学生……」

今朝、野々山が言っていたことを思い出す。酔っ払って、神前を襲わないように気をつけなよ——先ほど音亜は、酒を飲んでいた……

「何考えてるのよっ。……私がそんなことするわけ無いじゃない」

音亜の目が、暗闇で妖しく光っていた。すぐに「千里眼」をやめて、音亜が言葉を続ける。

「『ゲーム』も今日で最後だし、一緒に喋りながら寝ようかなって隣の部屋に布団並べて……いいでしょ？」

「……まあ、そういうことなら」

ベッドから降りて、隣の部屋に入る。すでに布団が敷かれていた。豆電球を切ると真っ暗になり、互いの様子は見えなくなった。隣の布団で音亜が動く気配がする。

「明日、逃げ切れるかな……？」

「大丈夫なんじゃない？」

「……どうしてそんなに樂觀視できるの？」

「だって、そうやって明るく考えたほうが楽しいし、元気が出るよ」

それからしばらく、他愛の無いことを喋っていた。ふいに互いに黙り込む。この夜は、寮からも離れているので静かだった。

何か言わないといけないような気がして、三日目のことを思い出した。

「朝倉さん……ありがとう……」

「？ 何、いきなり……」

「三日目とかさ、何度も助けてもらって……今まで逃げ切れたの、朝倉さんのおかげだと思う」

思えばこの「ゲーム」の最中、燕は何度も音亜に助けられた。

「……あの路地裏で、安藤くんから守ってくれたとき、かつこよかったよ……」

「女子にかっこいいは無いんじゃない？」

「でも……うん、ありがとう」

「？」

少し恥ずかしくなり、毛布を頬の辺りまで引き上げた。このまま寝ようかと目を閉じ、音亜の手が指先に触れた。

「明日、絶対に逃げ切ろうね」

「うん……」

「夏祭り、楽しみにしてるから……」

「うん」

「おやすみ、燕くん」

「うん……おやすみ」

互いの細い指を絡め、眠りに落ちた。

平和な時間が過ぎ去るのは、速い――

六頁、
終了。

最終日？

夏休みを賭けた「ゲーム」最終日。燕と音亜は朝早くに起床し、万全の準備を整えていた。

「燕くん、そのスタンガン取って」

「はい……前から思ってたけど、なんでそんなに武器を持ってるの？」

「ここに来た頃、襲われそうになったことがあってね。それからいろいろ集めたの。……燕くんも、一つ欲しい？」

「いや、いいよ……」

「遠慮しないでっ。燕くん、女の子に間違えられて襲われそうだし」

痴漢撃退用スプレーを押し付けられ、ポーチに突っ込んだ。時間がまだあることを確認し、昨晚から気になっていることを訊ねた。

「ねえ、朝倉さん……昨日の夜から、ボクのこと『燕くん』って呼んでるけど、なんで？」

「？ 嫌なんだったらやめるけど……」

「いや、そうじゃなくて、……ただ、なんでかなあ？」と

返事が無いので振り向くと、音亜は目を背けた。

「別に……友達同士、名前で呼ぶのは普通じゃない？」

「そうか。それもそうだね、音亜さん」

「！」

睨みつけられ、思わず立ちすくむ。さりげなく名前で呼んだのだが、まずかったのだろうか。

「……な、何？ 朝く……」

テレビでは、今日は最高気温を更新するだろうと言っていた。音亜はテレビを切り、燕の手を引く。

「何でもない。早く行こう」

「今日は暑くなるっていつてたし、帽子被ったほうがいいんじゃない？ 予備の帽子があるけど」

「……別にっ、いらない」

音亜に引きずられるようにして外に出た。昨日のことを思い出してか、手を離す。

「『ゲーム』も、今日で最後だね」

「夏休みは、これからだよ」

「捕まったら、承知しないから」

「がんばってみるよ」

小鳥の絵柄のハンチングを手に取り、空を見上げる。今日も暑くなりそうだ。

——もうすぐ、姉さんに会える。

二人並んで、秘密基地に向かう。

「今日で、最後だ……」

安藤は必要最低限の荷物をまとめ、動きやすい服装に着替えた。妹からの手紙を取り出し、読み返す。

——夏休みは、すぐそこだ。

右手を一度バチリと鳴らし、能力を確認する。昨日は問題なく逃げ延びた。何も無くて逆に不安にもなったが、今日だってきつと逃げ切れる。

時間を確認し、部屋を出る。手紙はリュックにしまっていた。

寮を出て、軽く準備体操をする。今日は快晴で、気持ちの良い朝だった。ふいに後ろで足音が聞こえ、振り返る。野々山が、相変らずのニヤニヤ顔で立っていた。

「よ、アンドー。調子はどうだ？」

「それなりに、いいと思う。……絶対に逃げ切るよ」

「お前の足で逃げ切れるか、心配だけだな」

「確かに、お前と比べたら足遅いけど、それなりに速いほうだと思うぜ？」

「ま、せいぜいがんばれ、不良少年。最後の最後で失敗して、妹さんを泣かせるなよ」

「うつせー」

歩き出そうとして、呼び止められる。予想通りの台詞だった。

「アンドー。外に出たら、妹さんの着替えシーンを……」

「黙れ。他人の身内に色目使っなって、何度言ったら分かる」

すっぱりと断ち切って、今度こそ歩き出す。そこで思い出して、振り返った。

「でもまあ、水着姿くらいなら……写真、撮ってきてもいいぞ」

「まじで!?!」

「ああ。……お前も、ナンパでもなんでもがんばれ」

「ははっ。じゃあ、がんばれよ。俺はこれから、ハーレム三昧だ」

「勝手にしろ」

野々山と別れ、適当に歩き出す。しばらくして携帯電話が鳴った。

「ゲーム」最終日……スタート。

最終日？

時刻は午後三時を迎えようとしていた。これまでミッションが行われることも無く、秘密基地に隠れていた。何も無いのは楽でいいが、なんだか嫌な予感がする。

「ねえ、燕くん」

「何？ 朝く……音亜さん」

苗字で呼ぼうとしていることに気づき、慌てて言いかえる。その様子に苦笑しながら、音亜が言った。

「私、最終日だから何かあると思ってたんだけど、ミッションとか無いね」

「うん。……何もないと、逆に不安になるよ。これから何かあるんじゃないかって」

沈黙が訪れた。秘密基地は日陰になっているが、それでも暑いことに変わりはない。額に薄っすらとにじんだ汗を、シャツの袖で拭う。水に濡らしたタオルを首筋に当てると、ひんやりと心地よかった。

「……もう、今日で最後なんだよね」

「うん。もうすぐ夏休みだよ」

「あのね、燕くん……」

音亜が近づき、じっと見つめてきた。わずかに頬を紅潮させ、上目遣いにこちらを見ている。なんだか既視感を覚える。

「私、燕くんのことがつ……」

「あ、メールだ」

前回と同じような展開だが、救われたような気持ちと、がっかりしたような気持ちが一緒になった、不思議な気持ちだった。音亜の携帯電話にもメールが届く。

「ミッション……」

メールには、これから行われる最後のミッションについて書かれていた。

——最終ミッション

鬼の数を五十人まで引き上げる。午後三時から終了までの二時間、逃げ切ることが出来れば「ゲーム」クリア。ただし、逃走者が行動できる範囲を制限する——

「！ 何これ、隔離地区の三分の一が使えない……？」

「ここも駄目だね。ギリギリ範囲に入っちゃってる。移動しないと……」

秘密基地を出る前に相談し、細い道が入り組んだ辺りに行くことにした。普段あまり近寄らない場所なのであまり詳しくないが、鬼を撒くにはちょうどいいかもしれない。

「……でも、心配だね。鬼が五十人なんて……」

「今まで逃げて来れたんだから、大丈夫だよ」

弱気になる音亜を励まし、秘密基地を出た。移動中にミッションが始まり、緊張感が増す。足取りも慎重になった。

周囲を注意深く見回して警戒する。二時間逃げ切るには、体力を温存する必要がある。なるべく早く鬼を見つけて、気づかれる前に逃げたい。

「こつち！」

音亜の腕を引き、路地裏に隠れる。鬼が駆けていく足音が近づき、遠ざかっていった。なんとか、気づかれる前に隠れることが出来た。

そうして隠れながら移動し、最初に話していた辺りまで来た。建物の影に隠れ、鬼の姿が無いことを確認して座り込む。走ることは少なかったが、暑さのせいで予想以上に体力を消費している。

「音亜さん、大丈夫？」

「うん……燕くんこそ、大丈夫なの？ まだ使っていないからいいけど、能力はなるべく使わないでね」

「分かった……でも、鬼もかなり多いしね。いつまで使わずにいれるか……」

「そのときは、私が守ってあげるから」

「……強いね、音亜さんは」

休憩を終え、立ち上がった。音亜に手を差し伸べ、助け起こす。夏の日差しの下へ歩を踏み出した。

「くそっ……」

安藤は、鬼に追われていた。相手は一人だけだが、すでに息が上がつていて苦しい。最初ミッションで禁止された場所にいたため、開始前に慌てて移動して体力を使ってしまった。そこに鬼がやってきて、今に至る。

流れ落ちる汗を拭うことなく、全力で車道を駆け抜ける。交差点で振り返ると、かなり距離が詰まっていた。立ち止まり、右手をわざと。

「ちっ……せっかく、使うのやめようと思ってたのに」

愚痴をこぼしながら狙いを定め、鬼の足に電撃を放った。しかし鬼もいち早く反応していて、この攻撃を避けた。拳銃を取り出す。

「やば……」

反射的に左へ跳び、銃撃をかわした。暑く熱せられたアスファルトを転がり、倒れたまま二度目の電撃を放つ。今度は狙い通り足に当たり、鬼は悲鳴を上げて転倒した。

「今のうちに……」

重たい足を無理やり動かし、全力で逃走する。何度も道を曲るうちに、休むのにちょうど良い場所に出た。廃ビルに囲まれた空き地で、日陰になっている。

「ラッキー」

座り込み、ぜいぜいと肩で息をする。何とか逃げ切った。ここで体力を戻して、次に備えよう。

迫り来るピンチに、誰も気づかない。

最終日？（前書き）

明日、久しぶりに学校です。

最終日？

安藤は、次第に近づいてくる足音に立ち上がった。ここなら大丈夫だと思っただけ、鬼に見つかっていたのだろうか。

右手を構え、息を殺して待ち構える。そして、目の前に現れた人物に見覚えがあった。

「ぶへへ……追い詰めたぜ、安藤紀彦」

「お前は……！」

目の前に立っているのは、三日目のミッションで安藤が携帯電話を奪ったデブだった。全身汗だくで、荒い呼吸を繰り返している。

「なんでお前がここにいるんだよ？ 失格になったんじゃないのか、デブ」

「デブって言うな！ ……そう、俺は一度、お前のせいで失格になった。しかし！ 『敗者復活戦』で勝ち残り、見事復活を遂げたのだ！」

「お前が復活戦で勝った？ どうせ、他の奴ぶん殴って旗を奪ったんじゃないの？」

「な、ななななっ、何を！ 侮辱するな！」

「で、何の用だ？ 今はまだ、『ゲーム』の最中なんだが」

少しずつ距離を詰めてくるデブに、右手を向ける。足元に電撃を放って威嚇する。

「何の用かだつて？ もちろん、復讐に決まってるんだろ！ てめえを倒して、鬼の前に放り出してやる」

「はあ……なんで、こんなことになるかなあ……」

ため息をつき、右のこぶしを握り締めた。やはり最終日は、簡単には終わりそうにない。

「音亜さん、走って！」

燕と音亜は、鬼に見つかった。相手は二人。路地裏を抜け、日差しの下に躍り出る。音亜の手を引いて加速する。

気温のためか、音亜の体力の消費が激しい。ゆつくりと休ませてあげたいが、鬼五十人は多かった。人気の無い道を選んでも、すぐに見つかってしまう。

「は、はあっ……っ、はあ……は……」

苦しそうな音亜の呼吸が聞こえてくる。これ以上走るのは辛そうだった。

「先に行つてて」

「はっ、は……燕くんっ？」

音亜を先に行かせ、その場で振り返る。地面に右手を叩きつけ、鬼たちの足場を壊す。すぐに踵を返して音亜の手を取った。

「行こうっ」

二回ほど角を曲がり、公園に出る。土管の遊具の中に隠れた。タオルを取り出し、鬼の姿が無いことを確認して水道の水で濡らした。土管に戻り、首筋に当ててやる。

「大丈夫？」

「うん……ゴメン、ちょっと疲れちゃって……」

答える音亜の声はか細かった。水筒に入れたスポーツドリンクを少しずつ口に含んでいる。

おそらく、これまでの疲れが一気に出てしまったのだろう。この間の怪我のこともあるし、今日はかなり気温も高い。音亜は帽子も被っていないかった。

「ん？」

携帯電話が鳴った。メールを確認する。

——連絡

一分後から五分間の間、全ての鬼に逃走者の位置情報を送る

「どっしたの……？」

音亜が画面を覗き込んできた。事情を説明し、公園を出る。逃げやすい場所にいる必要があった。最悪、大勢の鬼に終われるかもしれない。

「……がんばってね、音亜さん」

音亜の手を握り、ハンチングを被りなおした。夏の日差しが、容赦なく降り注ぐ。

鬼たちが、やってくる。

最終日？

安藤は、デブの攻撃を避け続けていた。能力によって金属に変わった両手を振り回し、出鱈目に殴りかかってくる。電撃を放ちたいが、狭い場所なので逃げるのに精一杯である。逃げ道をふさぐように位置取られ、次第に追い詰められる。

「ちっ……」

携帯電話が鳴ったが、確認することが出来ない。そしてその隙を突き、デブのパンチが腹にめり込んだ。

「ぐっ、あ……！？」

背中から壁に叩きつけられ、全身に鈍い痛みが走る。勘で横に転がり、第二撃をかわす。デブの脇をすり抜け、逃走を図る。この狭い場所で闘うのは、こちらが圧倒的に不利だ。うまくいけば、これ以上の闘いを避けられるかもしれない。空き地を飛び出した。

「！」

正面に鬼が現れた。三人並んで、道をふさぐようにして走ってくる。ここならバれないと思っていたが、なぜ一度に三人も現れたのだろう。

「どけっ！」

右手を突き出す。鬼が反応して銃を構える前に、右手を横に振る。電撃でまとめて倒し、横たわる鬼を跳び越えて走り出した。

「！……なんで……」

道路に出ると、右から鬼が迫っていた。反射的に右へ逃げる。安藤を追ってきたデブも、鬼に気づいて全力で駆け出した。

「てめっ……ついてくんな！」

「うるせえ！ お前を倒すまで、いつまでも追い続けるぞ！」

交差点に差し掛かり、正面からも鬼が走ってきた。左右どちらに逃げようか迷うが、どちらからも鬼がやってきた。

——もしかして、俺らの位置がばれてる……？

「おい、安藤！ どうすんだよ、これ」

「知るか！ てめえが何とかしろっ」

安藤とデブは、交差点で四方を鬼に囲まれた。先ほど電撃で倒した鬼たちが道路に出てくるのが見えた。拳銃を構えている。

「……やばくね？」

「やばいな」

鬼たちの輪は少しずつ狭まってくる。安藤とデブは、確実に追い詰められていった。

音亜は燕に手を引かれ、鬼から逃げていた。後ろから追ってくる鬼は三人。体力を消耗している二人、特に音亜にとって、かなり危険な状況だった。

「はっ、ふう、は……はあっ……」

息が苦しい。足が自分のものではないように思えた。鬼がだんだんと迫ってくる。

「きゃっ」

疲れのせいで足がもつれ、転んでしまった。頬に触れるアスファルトが熱い。泣きたくなるのを堪えながら立ち上がった。

「逃げてっ」

燕が右手を地面に叩きつけ、鬼たちの足元を壊す。一瞬、燕の顔が痛みに歪んだが、すぐに反転して逃げる。「破壊者」を使うのは、これで四度目だった。

「こっち！」

遠くの交差点にたくさんの鬼を見つけ、横の道に飛び込む。細い道を何度も曲がり、黒く焦げた地面を抜けて空き地に出た。廃ビルに囲まれて日陰になっている。壁にもたれて座り込んだ。

「……音亜さん、大丈夫？」

「うん……燕くんこそ、何度か能力使ってたけど、平気？」

「まだ大丈夫。あと二回くらいは、足止めに使えそう」

転んだときに擦りむいた膝の手当てをし、互いに何も喋らず休憩した。すでに、鬼に逃走者の位置情報が送られるのは終わっているだろうから、しばらくここにいても大丈夫だろう。

「音亜さん、具合悪そうだけど……走れる？」

「……うん。まだ逃げれるよ」

「そう。よかった。具合が悪くなったら、すぐに言ってね」

「うん。……ねえ、燕くん」

「何？」

「音亜『さん』って呼ぶのやめない？ 呼び捨てにしてよ」

「……なんで？」

燕は不思議そうな顔をした。大きな目がこちらを見る。

「なんでって……普通男子って、仲がいい相手のこと呼び捨てにしない？」

「うーん……ボク、誰かを呼び捨てで呼んだことないんだよねえ」

「いいからっ。これから私のことは、音亜って呼ぶの。わかった？」

「うん……でも、音亜さ……音亜は、ボクのこと呼び捨てにしない」

の？
「

「それは、まあ、私は女子だし」

「そういうものの？」

「そういうものだよ」

休憩を終え、立ち上がる。空き地を出た。

まだ、「ゲーム」は終わらない。

最終日？（前書き）

今日から学校でした。期末テストが近づいてきました……

最終日？

燕と音亜が空き地で休んでいる頃。安藤とデブは追い詰められていた。

「くそっ」

鬼たちは、ゆっくりと包囲の輪を狭めてくる。安藤は吐き捨てるようにデブに言った。

「デブ、しゃがめっ」

「は？」

「こいつら全員、まとめてぶっ倒す」

理解したのか、デブが耳をふさいでしゃがんだ。同時に安藤は両手を左右に突き出す。

「くらえっ……！」

両手から電撃を放ち、その場で回転する。雷の鞭が鬼たちをなぎ払った。感電して崩れ落ち、輪が乱れる。

「逃げるぞ、デブ！」

しゃがみこんだままのデブの手を引き、そこから逃げ出す。無我夢中で走り、人気の無い公園にたどり着いた。

「助かった……」

安藤は木陰に座り込み、荒い呼吸を繰り返した。デブが訊ねてくる。

「なんで、俺を助けた？　まとめて電撃で倒せただろ」

「あー………ついでだよ。あの状況で俺だけ逃げるのは、納得できねえ」

「………礼は言わねえぞ？」

「別に、男に感謝されたってね………」

安藤は野々山のようなことを言うと、携帯電話を取り出し、先ほど空き地で受信したメールを見る。五分間、逃走者の位置情報を鬼に送るという内容が記されていた。

「………こういうことかよ………」

先ほど、鬼が大勢追ってきたのはこのせいだろう。納得し、デブをにらみつけた。

「？」

携帯電話が鳴った。メールが届いている。それを読んで、ため息をついた。こうなったら、何が何でも逃げ切ってみせる。

どうやら最終日は、簡単には終わりそうもない。

空き地を出て数分後。新しく届いたメールを見て、燕は鼓動が速くなるのを感じた。次第に焦りだす。

「なんで、こんなに……」

——ただ今より、鬼を十人追加する——

これで鬼は六十人になる。隔離地区の三分の二の範囲しか逃げられないから、かなり厳しい。

「どうしよう、燕くん……」

携帯電話をしまい、音亜が震える声で言う。燕は、なるべく冷静になろうと努めた。

「なるべく隠れて行動したほうがいいかもしれない。……さっきの空き地に戻ろう」

すぐに来た道を折り返す。と、道路に出たところで鬼に見つかってしまった。一人だけだが、消耗した音亜を連れて逃げるのは難しい。

「音亜……先に逃げて」

「でも……」

「早く!」

音亜を遮り、路地裏に逃がす。燕はその前に立ちふさがった。駆け寄ってくる鬼を見据えて、ポーチに手を突っ込む。目的のものを掴んだ。

鬼が目の前に迫った。燕がポーチに突っ込んでいる手に警戒しているようだだったが、それでも掴みかかってきた。その瞬間、今朝音亜からもらった痴漢撃退用スプレーを、鬼の顔面に吹き付ける。うるたえる鬼の背後に回り、後頭部に手を当てた。

「形が無いものは、難しいんだけど……」

能力が発動し、閃光が走る。鬼の意識を壊した。しばらくすれば起きるだろうが、気を失っているうちに逃げる。すぐに音亜に追いつき、手を引いて走り出した。

「っ……！」

左に二人、鬼を見つけた。来た道に戻ると、先ほどの鬼が目覚ましている可能性があるのです、右へ逃げる。

音亜を連れているので、最初に比べてかなり遅くなっている。燕の体力も確実に減っていた。

「どうすれば……」

鬼が少しずつ迫ってくる。廃ビルの中の細い道に入り、鬼を誘い込んだ。

「離れて」

音亜を背中に庇うようにしながら、右手で左右のビルを叩いた。壁面が崩れ、鬼との間に降り注ぐ。瓦礫の山が出来上がり、道をふさいだ。

踵を返し、廃ビルの間を抜ける。公園の近くの道路に出て、突然、全身に痛みが走った。

「っあ!？」

立っていることができず、アスファルトに転がる。頭がぼんやりし、吐き気がこみ上げる。必死に身体を起こそうとするが、力が入らなかった。

——なんで、こんなときに……

「燕くん!」

音亜に助け起こされ、公園に隠れる。遊具の陰に寝かされた。

「大丈夫?　しっかりして!」

音亜の声が遠く聞こえる。発熱のせいで意識がはつきりとしないう呼吸が乱れ、苦しさと痛みに涙がにじんできた。胸を押さええて丸くなり、呼吸とも悲鳴ともとれない声で喘いだ。^{あえ}差し出された音亜の手を、すぐるように握る。

——あと、少しなのに……

「ゲーム」終了まで、残り十五分。

最終日？

残り十五分。安藤とデブは、鬼から逃げていた。

「よし……なんとか撒いたな」

「もう、駄目だ……暑くて死ぬ……アイス食いてえ……」

「うるせえよ、デブ。あと少しなんだ、我慢しろ」

そう、あと少しだ。あと十五分で、「ゲーム」は終わる。そうすれば、外に出れるのだ。

「！おい、隠れろっ」

「んおっ！？」

デブを路地裏に引きずり込んで身を潜める。安藤は、慎重に周囲の様子を伺った。

「どうしたんだよ？」

「さっきの鬼だ。集団でいる」

先ほど電撃で一網打尽にした鬼たちだった。大勢の鬼が、隔離地区の端のほうへ向かって散らばっていく。誰かを集団で追っているのだろっ。鬼たちが全員いなくなったのを確認して、安藤は路地裏を出た。

そこで、あるものを発見する。

「行くぞ、デブ！」

「デブって呼ぶな！……て、おい！ そっちは……」

「いいから来い！ 誰のおかげで生き残ってると思ってんだっ」

嫌がるデブを無理やり連れて、安藤は駆け出した。

燕は「破壊者」の反動に悲鳴を上げる身体を引きずり、あてもなく走り続けていた。あと少しで「ゲーム」は終わりだが、それまで逃げ切れる気がしない。音亜の手を握る手にも、力が入らなかった。

「がんばって、燕くん！」

さっきとは違い、今度は燕が音亜に手を引かれていた。しかし音亜も、相当無理をしているようである。外に出たいという気持ちだけで走っていた。

しつこく追ってくる鬼から逃れようと、ただひたすら走り続ける。音亜が安藤に捕らえられた、倉庫の並ぶ場所を抜け、隔離地区の端へ向かっていた。途中でハンチングが落ちたが、拾う暇が無く諦めた。

「！？」

音亜は右に曲がろうとして、すぐに左へ切り返した。横目に見ると、右から鬼が追ってきている。次の角で右に曲がった。

「あれは……」

隔離地区を取り囲む、大きな壁が目に入った。あの向こうで、姉さんが待っている。

何度も何度も左右に曲がり、鬼を撒こうと試みる。しかし、鬼の数は増える一方だった。音亜の静止を無視し、何箇所も地面を壊して時間を稼ぐ。そして、

「そんなっ……」

音亜が悲鳴に近い声を上げた。目の前には高い壁が立ちはだかつていて、行き止まりである。横へ続く道も無かった。

「はあっ、はっ……は……はっ」

燕はふらふらと壁に歩み寄り、それにもたれて座り込んだ。もう、身体は限界だった。音亜が泣きそうな顔で横にしゃがむ。

燕は、消え入りそうな声で言った。

「ねえ、音亜……逃げて……」

「え？」

「ボク有能力で鬼を足止めすれば、音亜だけなら、逃げ切れるですよ……」

音亜の表情が凍りつき、それからすごい剣幕でまくし立てられた。

「何馬鹿なこと言ってるの！？ それじゃあ、燕くんが捕まっちゃうじゃない！ お姉さんに会って、謝るんじゃないの！？ 私との約束は？ 一緒に夏祭りに行くんじゃないの！？」

「……でもこのままだと、ボクのせいで、音亜まで捕まっちゃう……」

「三日目に言っただじゃないっ。私が燕くんを守るって！ 大丈夫、私が鬼と闘うから……」

「もう嫌なんだよ！」

燕の声が、音亜を遮った。たくさん鬼の足音が近づいてくる。燕はもう、逃げようとしなかった。

「もうボクは、ボクのせいで音亜が傷つくのを……音亜が傷ついてまでボクを守ろうとするのを、見たくないんだよ！ 『千里眼』なら、ボクの気持ち分かるでしょ？ もうこれ以上、傷つかないですよ……」

最後のほうは、ほとんどかすれて消えてしまっていた。音亜の頬を、涙が一筋伝った。

「このままだと……ボクの右手が、ボクたちの絆まで壊しちゃうよ」

あの日のようなことは、もうこりこりだ。

「ねえ、お願い……逃げてよ、音亜……」

二人の前に現れた鬼たちは、迷っているようだった。しかし、ゆつくりと歩み寄ってくる。もうすぐ、「ゲーム」が終わる。

——ゴメン、姉さん……音亜……

燕はゆつくりと目を閉じ、声を聞いた。

「神前、朝倉。てめえら何泣いてんだよ。諦めるには、まだ早いんじゃないねえの?」

最終日？

「神前、朝倉。てめえら何泣いてんだよ。諦めるには、まだ早いぜ？」

近づいてくる鬼たちの向こうから聞こえた声に、燕は目を開いた。音亜も、驚きのまなざしを向けている。

「おらっ、どけよてめえら、邪魔だ！ さっきみてえに感電したいか？」

電撃で威嚇して鬼を横に退け、安藤が歩いてきた。後ろから、太った少年がついてくる。

「安藤くん……なんで……？」

「……お前らには、メーワクかけたからな。俺なりのけじめだ」

安藤は、左手を差し出してきた。小鳥の絵柄のハンチングが握られている。

「落しただろ。持ち物くらい、ちゃんと管理しとけ」

「ありがとう……」

ハンチングを受け取って被る。なんとなく、少しだけ身体が楽になった気がした。太った少年が安藤に声をかける。

「用は済んだか？ 安藤」

「ああ。……神前、動けるか？」

「……何するの？」

「こいつらを、ぶっ潰す」

安藤は、こちらを取り囲んだ鬼たちを指差した。燕も理解し、立ち上がる。右手を構えた。まだ、動ける。

「そういうことなら、私も手伝うよ」

音亜も立ち上がる。その両目が妖しく光っていた。右手に拳銃を握っている。

「怪我したくない人たちは、今すぐ立ち去ってください。命の保障はできないので」

音亜が笑って言う。もう泣いてはいなかった。鬼の数人が怯え、安藤が威嚇すると逃げていった。

「くそつ、ガキになめられてたまるか！ こっちだって、生活かかってんだよ！」

珍しく鬼が叫び、銃を構えた。安藤に向けて発砲するが、デブに阻まれた。両手が金属のようになっていいる。

「なっ……！！」

驚き、呆然とする鬼たちに、燕と安藤が突っ込む。安藤が電撃の槍を連発し、動きを止める。何人が崩れ落ちた。

「神前！」

燕は、次々と鬼たちの頭に手を当て、「破壊者」を使った。意識と記憶を壊し、気を失わせる。起きた頃には、燕たちを追ったり闘ったりした記憶は消えているだろう。鬼たちは全員崩れ落ち、燕たち四人だけが残った。反動による身体の痛みも気にならない。

「終わっ、た……？」

携帯電話が鳴った。みんな一斉に携帯電話を開き、メールを確認する。

——「ゲーム」終了。生き残った皆さん、おめでとうございます

……

メールには無駄に長い文章で、褒め称える内容が書かれていた。外に出るための手続きについては、また後日連絡が来るらしい。

「終わったんだよね……」

音亜が呟いた。うなずいて同意し、安藤と太った少年の姿が無いことに気づく。

「あれ？ 安藤くんたちは？」

「先に帰るって言って、帰ってったよ」

「そう」

身体の痛みも、今は気にならなかった。音亜と並んで、家に向かって歩き出す。二人ともぼろぼろだった。

「ねえ、音亜……」

「何？」

何か言わないといけないことがある気がして声をかけるが、次の言葉が出てこなかった。

「……ありがとう」

とりあえず礼を述べ、うつむく。音亜が手を差し伸べてきた。顔を上げると、優しく微笑んでいる。燕も笑い返した。

手を握り返すと、音亜はすこしだけ肩を寄せてきた。思わず高鳴る心臓の鼓動を押し隠し、冷静を装って歩く。

空を見上げ、ようやく夏休みが始まることを思う。心の中で呟いた。

この幸せを壊さないように、大切に生きてみよう。ボクたちは、「独り」じゃない。

最終日、終了。

それぞれの夏休み（前書き）

やっとここまでたどり着きました……

それぞれの夏休み

夏休みを賭けて行われた「ゲーム」の終了から数日後。野々山は、相変らずナンパに勤しんでいた。

「むう……なぜだ、なぜ一人も手に入れることが出来ないんだ……」

朝から女子たちに声をかけ続け、ことごとく断られていた。それなりに顔もイケてると思うのだが、何がいけないのだろう？

「アンドー、どうしてるかなあ……」

安藤たち「ゲーム」をクリアした逃走者は、今日から外に出ている。うらやましい限りだったが、「敗者復活戦」で旗を譲ったことは、後悔していない。

「ちゃんと、妹さんの写真撮ってくんのかな……」

ぼやいてみると、目の前を歩いていく女性が目に留まった。隔離地区では珍しく、大人の女性である。見たところ年齢は二十代前半。スタイル抜群で、整った顔をしている。

「ちょっと、そこのお姉さん。かわいいね！俺とちょっと楽しいことでも……」

「なあに、キミ。かわいいわね。ニューハーフ趣味？」

「……は？」

「ニュー、ハーフ？ それは、つまり……」

「あ、いや、すみません。ちょっと用事を思い出しまして……」

「大丈夫。お姉さんたちがかわいがってあげるから、安心して。みんなあ、こつちこつちー」

女（？）が手を振った先には、女装した男たちが立っていた。

「ひっ……」

ニューハーフと女装男たちにもみくちやにされ、悲鳴を上げた。

「やっぱり俺がつ、外に出ればよかったああああ！！」

隔離地区を出てすぐ。安藤は電車を乗り継ぎ、久しぶりに我が家に帰ってきていた。

震える指でチャイムを押し、しばらく待つが誰も出ない。驚かせようと思って来ることは伝えていなかったため、出かけているのかもしれない。

「……あのう、どなたですか？」

後ろから声をかけられ、振り返った。安藤よりも背の低い、ショートヘアの少女が立っている。買い物の帰りなのか、ビニル袋を手提げていた。

「俺のこと、覚えてるか？」

訊ねると、少女はぽかと立ち尽くした。そして固まっていた表情が緩み、満開の笑顔になる。

「お兄ちゃん？ 本当に、お兄ちゃんなのっ？」

「ああ。この前、隔離地区で『ゲーム』があつたのは知ってるだろ？ あれをクリアしたんだ」

妹はしばらくポカンとしていたが、すぐに大声で泣き出した。

「うっ、うっ……お兄ちゃぁん！」

涙を流す妹に抱きつかれ、しばらく玄関前に立っていた。暑いから中に入ろうと言い、懐かしい家に入った。

「おかえり、お兄ちゃん」

「へへっ……ただいま」

燕は駅のホームに降り立ち、腕時計で時間を確認した。人の流れに押し流されて外に出る。なんとか予定通りの時間に着くことが出来た。目的の人物の姿を探す。

今日、隔離地区から出てくることは、すでに電話で伝えてあった。駅前の時計台の近くに、金髪の女性を見つける。昔は燕のほうが小さかったが、今では同じくらいの身長である。

「姉さん！」

大声で呼ぶと、こちらに気づいた。人ごみを抜けて駆け寄る。

「燕……！」

燕は姉に飛びつき、しっかりと抱き合った。うれしくて涙が止まらない。

「……今までゴメンね、姉さん……ありがとう」

「いいの。私こそ、燕に辛い思いさせて……」

あの時のことを互いに謝り、燕が泣き止んでから家に帰った。冷房の効いた部屋で、隔離地区での生活や「ゲーム」のことを話す。音垂が遊びに来ることを話すと、姉はからかうように言ってきた。

「燕も、そういう年頃かあ……どっちから告ったの？」

「べ、別に、付き合ってるとかそういうわけじゃ……ただの、仲が
良い友達だよ……」

「へえ……でも、その子のこと、好きなんですよ？」

黙りこむが、姉はしつこく訊ねてくる。聞こえないように、小さく呟やいた。

「……だよ」

「え？ 今、なんて言った？」

「別に、なんでもない……」

窓から空を見上げる。夏はまだ、これからだ。

夏休み四日目。音亜は新しい浴衣を着て、燕の隣を歩いていた。約束どおり、今日は夏祭りに来てい。人ごみの中、さりげなく手をつなぐとするが、なかなかうまくいかない。腹いせに少しからかう。

「燕くん、お姉さんに会ったとき泣いたんだって？」

「なっ……」

「たくさん人がいる前で、抱きついて泣いちゃったんでしょ？」

「……なんで、それを……」

「昨日の夜、お姉さんに聞いたの」

音亜は、昨日から燕の家に泊まっていた。燕の姉と同じ部屋に寝て、燕についているいろいろな訊いたのだ。

——ちよつと、大胆に攻めてみたらどう？

燕の姉が言っていたことを思い出し、今度こそ手をつなぐと手を伸ばす。

「ちよつと、燕くん！」

「ん？」

燕の腕を掴み、無理やり人ごみから連れ出す。人気の無い神社の石段に座った。

「何？ 音亜」

「あのね、燕くん……」

うつむき、それから上目遣いに燕を見る。頬が熱くなるのを感じた。

「私、燕くんのこと……っ」

「あつ、花火！」

また途中で遮られた。少し腹を立てながらも燕が指差す見る。色とりどりの花火が、夏の夜空にきらめいていた。横を見ると、燕は無邪気な笑顔でそれらを見つめている。音亜は少し身体を寄せた。

「ねえ、燕くん」

「？」

——ちよつと、大胆に……

こちらを振り向いた燕と、不意打ちで、言葉も無く、一瞬だけ、唇が触れた。

夏の疾走、終了。

夏の疾走 あとがき

みなさんこんにちは、イチゴダイフクです。「夏の疾走」を読んでいたいただき、ありがとうございます。まだまだ未熟ですが、少しでも楽しめていただけたなら幸いです。

燕たちは（野々山を除き）無事夏休みを手に入れました。おめでとう！

これにて「夏の疾走」は終了です。

ですが、燕たちの物語はまだ続きます。

「夏」の後は、当然「秋」！

新キャラも登場し、能力者たちの闘いはヒートアップ。隔離地区内を駆け巡ります。

第二部・「秋の戦争」もよろしくお願いします。

秋の戦争 プロローグ（前書き）

第二部です。「夏の疾走」のあと、隔離地区の二学期の話です。まだまだ未熟ですが、これからもよろしく願いします。

秋の戦争 プロローグ

「ごめんなさい……」

「……は？」

目の前でうつむき、震える声で呟く少女を見る。今言われたことが、理解できなかった。

「ごめんなさい、私、八代くんとは付き合えない……ごめんなさい……」

「あ、えっ……え？」

八代一は、隔離地区第一中学校の生徒会長だ。背が高く、顔も整っていて女子から人気が高い。その自分の告白を、気弱なこの少女が断るとは思っていなかったのだ。

「なんでだよ、豊崎……俺のどこが気に入らない……？」

「そうじゃなくて、ただ……私、恋愛とか、そういうの苦手だし……私なんかに、八代くんみたいな男子はもったいないと思うし……その、ごめんなさい……っ」

豊崎小尻はクラスメイトだ。色白で小柄な少女で、いつも眼鏡をかけている。控えめな性格だが、その整った顔立ちから、男子からひそかに人気が高い。

「その、八代くん……あの、ごめんなさい……」

小凧は眼鏡を外し、涙を拭いながら去っていった。八代は取り残され、呆然とする。なんで、ふられたんだろう？

「……ていうか、なんでふったほうが泣いてんだ……？」

十月。音亜は教壇に立ち、静まり返った教室内を見回した。先ほどこから意見が出ず、話し合いが全く進んでいない。代表で司会をしているが、引き受けなければよかった。

「……何か、意見がある人いませんか？」

沈黙。燕を見るが、居眠りしてしまっている。いつもは一つに束ねている金髪をおろしているので、寝顔が少し隠れていた。

隔離地区第三中学校では、近々学園祭が行われる。そこでクラスごとに模擬店なり劇なりするのだが、毎年のことながらなかなか決まらない。発案者は全体の指揮も任されるので、誰もやりたがらないのだ。

「燕くん、起きてくださいっ」

いつまでも幸せそうに眠っている燕に腹が立ち、机をバンと叩く。燕はゆっくりと顔を上げた。

「……ん。ああ、もう終わったの？ 話し合い」

「まだです。……居眠りするくらいなら意見を出してよ」

「えー、やだなあ……最近、夜眠れてないんだよ」

「だからって、今寝なくても……」

「はいはい！ 話し合いの途中でいちゃつかないでくださいーい！」

「！」

からかう声に振り向くと、後ろのほうの席で野々山が笑っていた。

「おいおい、そんなに睨むなよ。……それより意見なんだけど、劇をやらねえ？」

「劇？」

「ロミオとジュリエット……の、パロディ版。朝倉と神前が主役で、俺が監督」

「なっ……なんで私がジュリエットなんか！」

音亜がジュリエットで、燕がロミオ。嫌……ではないのだが……

「だあれが朝倉がジュリエットって言ったよ？」

音亜は一瞬、言われたことが理解できなかった。

「……は？」

翌日の放課後。体育館を借りて、音亜たちは早速劇の練習を始め

ていた。音亜、燕、野々山、安藤、デブの五人である。

「はあい、カット、カットー！ 駄目じゃん朝倉、肝心のところで恥ずかしがっちゃ」

「馬鹿言わないで！ こんな無理に決まってるでしょ！？」

「なんだよ。もうキスはしたんだろ？ いいじゃねえか」

「な、なんでっ、それを……！」

燕が教えたのだろうか。睨みつけると、燕は被りをふった。野々山が笑う。

「ひひひ。『千里眼』でも、引つかかるんだな……いやあ、いいこと聞いたぜ」

「騙したのねっ？ この……」

「音亜、暴力はやめて！」

「きゃあっ！？」

掴みかかろうとすると、燕に止められた。そこで燕がドレスのすそを踏み、二人まとめて転倒する。ドレス姿の燕を、音亜が抱きかえる格好になってしまった。

「かつこいいよ、ロミオ。もう少し胸が小さければ、完全に男女逆だね」

「うるさい！」

そう。音亜と燕は、男女入れ替わって役を演じることになっていた。中性的な顔立ちの音亜と、女の子のようで金髪の燕。残念ながら、完璧である。

「で、肝心のラストシーンだけど……」

「だから無理だっって言ってるじゃない！」

「神前は？ やっぱ、全校の前でキスすんのはきついかな？」

「え？ あ、いやっ……うん……」

燕は赤くなり、音亜から離れた。音亜も立ち上がる。

「じゃあ、代わりにもう少し、濃厚なラブシーン増やすかな？」

「それも却下！」

騒いでいると、誰かの携帯電話が鳴った。次いで、全員の携帯電話が鳴り響く。隔離地区の学校は校則が緩いので、携帯電話や音楽プレイヤーを持ってきても文句は言われない。

「……『ゲーム』？」

メールには、再び「ゲーム」を行うとあった。

戦争が、始まる。

前日

燕たちは、燕の部屋に集まっていた。今日は「ゲーム」前日である。

「しっかしまあ、今度はこんな『ゲーム』かよ」

「いいんじゃない？　ボク、修学旅行って憧れてたし」

「私も。京都行ってみたい」

先日送られてきたメールには、新しく行われる「ゲーム」について書かれていた。夏休みの「ゲーム」が好評だったため、また行うらしい。

——「ゲーム」

参加者…… 隔離地区第一・二・三中学生徒。三年生。希望者。

期間…… 一週間。

ルール…… 学校ごとにチームを組んで行う団体戦。午前九時から午後三時まで。

内容は旗とボールの奪い合い。隔離地区を三分割し、各校のエリアにボールを十個配置する。それを奪い取り、自分のメインエリアである学校のグラウンドにもって行けば得点。「ゲーム」終了時に、もっとも多くボールをエリア内に持っている学校が勝利。また、各校のメインエリアに一つだけ置かれた旗を持ち帰れば、ボール十個分の得点が入る。

優勝商品…… 優勝した学校の参加者には、隔離地区の外へ修学旅行（二泊三日）に行くことが許可される。

「で？ 作戦会議はいいけど、何か案があんのか？」

それまで黙っていた安藤が口を開いた。今日は作戦を練ろうと、いつものメンバーで集まったのだが、何も提案はなかった。

「……とりあえず、おさらいしておこうか？ ボクたちの中だけでも、役割を分担しておいたほうがいいと思うんだけど」

「そうだな。じゃあ神前、お前が仕切れ。これからお前が、俺らのリーダーだ」

「いいんじゃないか？ 頼んだぜ神前」

「俺も賛成」

「え？ は、いや、なんでボクが……」

勝手に話を進められてしまい、戸惑う。自分よりも、音亜や野々山のほうが向いているのではないか。

「じゃあ燕くん、リーダーお願いね。頼りにしてるから」

「なっ……音亜まで……」

抗議する燕を無視し、デブが声を張り上げる。

「よし！ じゃあ神前、さっさと会議進めてくれよ。早く飯にしよ
うぜ」

時刻はもうすぐ正午を迎えようとしていた。確かにお腹が減ってきているし、早く終わらせてしまおう。面倒だが、まあしょうがない。

「それじゃあ、それぞれの役割だけど……足が速いボクと音亜、野々山くんは、相手のボールを狙いにいこう。旗はきつと守りが堅いだろうから、最初はボールを取りに行こう」

「へへっ、いいじゃねえか。俺様の才能、見せ付けてやるぜ」

野々山はやる気満々である。次に燕は、安藤とデブを見た。

「安藤くんたちは、学校で旗を守って欲しいんだ。二人の能力なら大丈夫でしょ」

「ああ、任せろ」

程なくして作戦会議は終わり、昼食を作ることになった。しかし、他の男子たちは料理が出来ないので、燕と音亜が調理を担当する。

「ねえ、燕くん。修学旅行、楽しみだね」

「まだ行けるって決まったわけじゃないよ」

「でも、私たちならきつと勝てる。……そう思わない？」

「まあ、ね……」

「？」燕の反応に、音亜は首をかしげた。「なんか今日、元気ないね。どうしたの？」

「ん……別に、大丈夫だよ。ただの睡眠不足だから」

「ふうん……あまり、無理しないでね。能力のこともあるし」

「うん。気をつけるよ」

音亜に背を向け、出来上がった料理を運ぶ。テーブルに皿を並べながら、燕はある出来事を思い出していた。そしてそれは、睡眠不足の原因でもある。

二度目の「ゲーム」について、メールが届いた日のこと。夕方、一人の少女に出会った。

少女（前書き）

期末テストと学力調査が近いです。明日は進学模試です……数学、
やばいです

少女

「ねえ、キミ」

メールが届いた日の放課後。買出しに出かけていた燕は、見知らぬ少女に呼び止められた。秘密基地の近くの池にかかった橋に、制服姿の長い黒髪の少女が立っている。通り過ぎてしまったので、自転車を押して戻った。

「何？」

少女は整った顔立ちをしていた。中性的な音垂よりも、女の子らしさが出ている。少女は燕に歩み寄り、顔を近づけてきた。

「なっ、何を……っ」

「いやあ、かわいい顔してるなって思って。見とれちゃったよ」

少女は微笑み、少し後ろに下がった。名前を訊ねてきたので答えると、少女は顔を輝かせた。また抱きつくような勢いで近づいてくる。

「やっぱり神前くんだったんだ！ やつと見つけたよ」

「は？ いや、どこかで会ったっけ……？」

燕は、記憶力がいいほうだと自負している。一度会ったことのある相手は、大抵忘れないのだが……

「初対面だよ。でも、あたしは神前くんのこと知ってる」

「？」

少女は妖しく笑い、踵を返した。慌てて呼び止める。

「あの、名前……」

「そうだつ、言い忘れてた！」

燕を遮り、少女はまた顔を近づけてきた。そつと耳元に囁かれる。

「『破壊者』のチカラ、使い心地はどう？ まだ、反動とか受けちゃう？」

「なっ……」

「それからさ……」

歌うように呟く声に、背筋に悪寒が走る。訊ねようとしたときには、少女はすでに歩き出していた。こちらを振り向いて笑う顔の中で、目だけが鋭くこちらを見据えている。燕はそこに立ちすくんだまま、動くことが出来なかった。視界が黒くよどんでいく。

去り際に言われた一言が、心に突き刺さる。

「本当に、人との絆なんて信じてるの？」

「いつだってキミは、『独り』だよ？」

「っ……！」

ベッドの上。眠りから覚めた燕は、勢い良く跳ね起きた。乱れた呼吸を整えながら時計を見て、まだ明け方早いことを知る。あの日以来、ゆつくりと眠ることが出来ずにいた。

「誰なの……？」

——本当に、人との絆なんて信じてるの？

「やめてよ……」

夜。暗い部屋の中、一人でいると、少女の声が思い出される。歌うような声は、鋭く尖って燕の心を切り刻む――

「やめて……なんで、そんなこと……」

——いつだってキミは、『独り』だよ？

「いやだっ、そんなの……やだよ……」

薄闇に包まれた視界が涙ににじむ。燕は耳をふさぎ、必死に眠りに落ちようとした。助けを求めても、ここには誰もいない。

——キミは、『独り』だよ……？

一日目？

修学旅行を賭けた、学校対抗の「ゲーム」一日目。燕たちは、隔離地区第三中学校のグラウンドにいた。まだ開始までに時間があるが、すでに「ゲーム」に参加する生徒は集まっている。「ゲーム」の期間中学校は休みなので、他の学年の姿は無い。

「えーと……じゃあボクたちは、昨日言ったとおりの分担でいこうか。何も問題はない……よね？」

「ああ。準備万端だ」

「修学旅行か、楽しみだな。枕投げ、やってみたかったんだよねえ」

「俺は八つ橋をたっぷりと……じゅるっ」

「！？ 待てデブ、涎をたらしたままこっちに来るな！」

勝手にはしゃいでいる仲間たちを前に、燕は思わずため息をついた。結局、昨晚もあまり眠れなかった。肉体的にも精神的にも辛い。

「ちょっと、大丈夫？ すごいけど……」

「ん……まあ、平気だよ。能力の反動に比べたら、これくらい……」

「そう。何度も言うけど、無理だけはしないでね。今回は団体戦だから、他の人に任せてもいいし」

「うん、ありがと。……ごめんね、心配ばかりさせて」

心配する音垂に背を向け、グラウンドを離れる。昇降口の近くの水道で顔を洗った。冷たくなってきた水が心地よい。

「もしかして、最近眠れてないの？」

「！」

背後からかけられた声に振り向く。池で会った、長い黒髪の少女がそこにいた。第一中の制服を着ていた。

「そんなに驚かないでよ。だいぶ疲れてるように見えたから……」

「なんでここにいるの？ キミは、第一中の生徒だね。『ゲーム』開始までは、他の学校のエリアには入っちゃいけないんじゃないかなかった？」

「あはは、厳しいなあ。別に今日は、旗を取りに来たわけじゃないよ」

明るく微笑む少女を見据え、上目遣いに訊ねる。「じゃあ、なんで？」

「神前さんと話に来たのよ」

「ボクは、キミと話すことはないよ」

「そう？ 本当に何も無いの？」

歩み寄ってくる少女から距離をとる。この少女には、何か恐ろし

いものを感じられた。近づいたら何もかも壊れてしまうような、そんな感じ……

「たとえば、神前くん 능력について、とか」

「……ボクが、どうかした？」

燕の能力「破壊者」について知っているのは、一部の人間に限られる。この少女が知っているとは考えがたいが、少女はこの前「破壊者」という言葉を口にした。

「『破壊者』のチカラ……どんなものでも壊す、最強の能力。でも、反動によって回数は制限される……使いすぎれば、神前くん自身の身体が壊れちゃうから」

「なんで、知ってるの……？」

少女は、この質問には答えなかった。ただし少し苦笑して、囁く。

「ためらっちゃ、ダメなんだよ？」

「え？」

「壊して当然なんだから」

「それって、どういう……」

「燕くん？」

問い詰めようとすると、音亜がやってきた。少女はすぐに踵を返

す。

「じゃあまたね。くれぐれも気をつけて」

「……あの子、誰？」

「……知らない」

立ち去る少女を、音亜は不審そうに見つめていた。それから燕の手を引き、グラウンドに向かう。

「そろそろ始まるよ、『ゲーム』」

「うん……」

不安が残るが、考えていても仕方が無い。頭に響いてくる声を振り払った。

——壊して、当然なんだから……

「ゲーム」、スタート。

開始と同時に、野々山は第二中学校のエリアに向かっていった。事前に配布された地図を思い出し、ボールを探す。

辺りを見回すと、第一中の生徒も数人見かけられた。野々山と同じく、第二中のボールを狙っているらしい。

「ええと、確かこつちだったな……」

近道の路地裏を抜け、大きな通りに出る。道路の真ん中に台座が置かれ、その上にハンドボールサイズの青いボールがあった。第一中は赤色。第二中は青色。第三中は黄色だ。

「一、二、三……七人か」

台座の周りを、第二中の生徒が七人取り囲んでいた。それぞれがどんな能力を持っているかは分からないが、ぐるりと周りを取り囲んでいて隙が無い。ただ突っ込んだら、返り討ちになるだろう。

「『神の手』で足止めすればいいか」

能力を使おうと右手を構える。しかし、野々山が能力を使う前に、第一中の生徒がボールへ走った。こちらも七人で、能力による戦闘が始まる。遠巻きに見物していると、第一中はボールを盗ることに成功した。一人が集団から抜け出し、路地裏へ駆け込んでいく。後を追った。

相手は女子だった。精一杯走っているのだろうが、野々山にとってはかなり遅い。必死に逃げる少女の背中を見てニヤリと笑う。

「ははっ……この俺から、逃げれると思うなよ？」

瞬く間に近づいてくる背中に、右手——「神の手」を向ける。

一日目？

第二中のボールを奪った豊崎小凧は、全力で逃げていた。ちらと後ろを振り向くと、長身の少年が迫ってきている。少年は、ニヤリと笑った。……怖い。

「も、もうダメ……」

このままではボールを奪われてしまう。能力で攻撃される前に、大人しく渡そうか。闘うのは嫌だった。

ボールを渡そうと歩を緩め、とつさに横に跳んだ。何も無い地面に、何かが落ちたような衝撃が走る。先ほど小凧がいた辺りがひび割れた。

「!？」

追っ手の少年の能力だろうか。少年は右手を構えていて、振りかぶっている。反射的に脇道に逃れた。すぐ後ろで、何か大きなものが通る気配が感じられ、得体の知れない能力にぞっとする。

「きゃあっ」

走っていると、突然身動きが取れなくなった。眼鏡がずれて落ちる。巨大な手に掴まれているかのようで苦しい。必死に抵抗するが、見えない力は消えなかった。宙に浮いた状態でもがき続ける。

「つつかまーえた!」

「ひっ……」

後ろから、長身の少年が歩み寄ってきた。身動きを取れずにいる小皿を、じろじろと眺める。

「へえ……結構かわいいね、キミ。第一中の子でしょ？ 名前は？」

「っ……これ、何ですか？ 能力なら、ボールは渡しますから解いてください……」

恐怖で涙がにじんできた。少年が取り乱す。

「ちょ、待ってよ！ 泣かないで、お願いだから。俺、女の子に泣かれるのだけは嫌なんだよ」

身体を締め付けていた力が緩んだ。地面に倒れこむと、少年に助け起こされる。差し出された眼鏡をかけた。

「悪い、加減できなくて……本当にゴメン」

「……いえ、別に……大丈夫、です……」

よく見ると少年は、なかなか整った顔立ちをしていた。すらりとしていて背が高く、かっこいい。

「もうボールはいいよ。……本当にゴメンね」

「あっ、あのう……」

「？」

走り去ろうとする少年を呼びとめ、声を絞り出す。

「その、あの、ですねっ……お名前、は……？」

訊ねる声が裏返ってしまい、赤面する。それを見て少年は微笑んだ。もうすでに、さっきのような怖さはない。

「俺は、第一中の野々山椿。一応、陸上部のエースなんだ」

陸上部のエース。どうりで足が速いわけだ。小凧は自分も名乗ろうとしたが、緊張して上手く喋れない。

「えと……っ、わ、わたっ……わた……」

「わた？」

「……綿菓子って……おいしいですよね……？」

「うん。……？」

不思議そうに見つめてくる少年にボールを渡す。背を向け、その場から全力で逃げ出した。呼び止める声を振り切って走り続ける。近くの公園に入って休んだ。

「野々山くん、か……」

小凧を助け起こしたときの彼の顔を思い出す。思わず顔が熱くなり、頬を押さえてうつむいた。

燕と音亜は、第一中学のエリアに来ていた。奪取したボールを持つて、燕が走り出す。

「音亜！」

ボールを取り返そうとする生徒をかわし、パスしてくる。それを受け取って、音亜もスピードを上げた。「千里眼」で相手の思考を読み取り、フェイントをかけて抜き去る。

「先に行つて」

燕が立ち止まり、右手で地面を叩く。閃光が走り、追っ手の足元が崩落した。砂埃の中から悲鳴があがる。

「やったね、音亜」

燕はすぐに追いついた。第三中エリアに入り、歩を緩める。時刻はもうすぐ正午だ。

「燕くん、大丈夫？」

「何が？」

「能力使つてたじゃない。反動、平気なのかなって」

「まだ大丈夫だよ。一・二回くらい、どうってことないし」

燕は最近、夜にあまり眠れていないらしい。夏休みの「ゲーム」

でのこともあり、音亜はかなり注意していた。燕が「破壊者」の能力を使うのを、しっかり制限しなければならない。

「あれ？ 野々山くん」

少し前に見知った人影を見つけ、燕が呼ぶ。音亜は、思わず顔が引きつるのを感じた。

「よう、お二人さん。相変わらず仲がいいねえ」

野々山は、いつも以上にニヤニヤしながら近づいてきた。普通にしていれば、もう少しはかっこいいというのに。

「お前らもボール取ったのか。さすが、愛の力は偉大だねえ……ひっ」

「そんなんじゃないわよ！」

「音亜、そんなに怒らないで……野々山くんも、ボール取ったの？」

燕が訊ねると、野々山の顔が輝いた。……訊かないほうがよかつたかもしれない。

「もちろん！ しかも、今日の俺はついてるぜ！」

じりじりと迫ってくる野々山から燕を庇い、「千里眼」を使う。思わずため息をついた。

「……かわいい女の子に会ったって……それだけ？」

「なっ……能力を使うなんて、卑怯だぞ！」

「ていうか……」野々山を無視して続ける。「野々山くんって、眼鏡っ娘が好きだったんだ」

「うっ、うるせー！ このレスカップル！ 逆ロミオとジュリエット……！」

「何よそれ、酷いじゃない！」

「待つて音亜、喧嘩はやめて……っ」

燕に止められ、渋々引き下がる。ニヤニヤと笑う野々山に腹が立ったが、若干潤んだ燕の碧眼になだめられた。

戦争は、これからだ――。

一日目？

夕方の教室。カーテンの開け放たれた窓から、秋の日差しが降り注いでいる。その教室の隅で、小凧はうなだれていた。

「ゴメン、八代くん……」

教壇に立つ八代に、呟くような声で謝る。抑揚の無い、冷たい声が返ってきた。

「……ボール、取られたんだって？」

「うん……」

「そうか。……へえ……」

教壇を下り、八代がこちらに歩いてくる。無意識のうちに身体が硬直する。

「分かってるのか？ 豊崎。お前はもう、逃げれないんだ」

「……うん……分かってるよ」

「今度はしくじるな、いいな？」

他に人のいない教室の中、八代の声が響く。

「お前は、俺の『人形』だ」

学校を出て、小凧はとぼとぼと歩いていた。八代の言葉が、心に重くのしかかってくる。

「……『人形』、かあ……」

自分を縛り付けているものから逃れることは、もうすでに諦めている。小凧は、八代に逆らうことが出来ない。

成績が上位の小凧は、自分の家を持っている。そこだけが、心から休める唯一の場所だった。誰かの視線に晒されることも無く、失敗を責められることも、傷つくことも、傷つけることも無い。

「もう……ダメだよ……何もかも、ダメなんだ……」

ソファに倒れこみ、呟く。悪夢に怯えながら、浅い眠りに落ちた。

「ゲーム」一日目の夜。少女は散歩に出かけていた。

隔離地区には、夜中に外出しても咎める者はいない。そのおかげで、数少ない趣味である夜の散歩を、思う存分楽しめる。

「ん……？」

路地裏を進んでいくと、数人の少年がたむろしていた。タバコをくわえた少年が、少女に気づいて近づいてきた。

「かわいいねキミ。俺らと一緒に遊ばない？」

「もちろん」

少女があつさりと頷くと、少年は仲間たちを呼んだ。少女はすぐに取り囲まれる。少年たちは全員で四人。

「たった四人か……」

少女が不満げに呟いたが、少年たちは気づかないようだった。

「じゃあ、ちょっとあっちで……っ!？」

少女の手を引く少年が、突然手を離れた。自分の手を押さえ、うずくまる。

「なっ……なんで、血……」

「バキーン！」

傷口を見つめる少年を、右の掌で突き飛ばす。額から血を引きながら、少年が崩れ落ちる。

「て、てめえ、一体何を……!」

掴みかかってくる少年たちをかわし、蹴りつけ、右手で突く。少女は言葉を口ずさみながら、夜を舞う。

「ちょっと物足りないなあ……キミたち、弱すぎだよー。あははっ」

何らかの能力を使おうとする少年に接近する。斜めに手を振り下ろすと、肩から腰までぱっくりと裂けた。返り血を避け、次の少年をかわして壁を蹴る。跳躍し、少年の頭上に右手をかざす。

「ひっ……」

怯えた表情でこちらを見上げた少年は、顔面をひしゃげさせて、地面に叩きつけられた。

「やっぱり、ただの能力者じゃすぐ壊れちゃうな……複合能力者とか、いないかな？」

複合能力者とは、二つ以上の能力を併せ持った能力者だ。通常の能力者に対して圧倒的に少なく、珍しい。これまでに会ったことは、数えるほどしかない。

「ま、お楽しみもあるし……今はまだ、ね」

最後の少年の胸にそつと触れ、すれ違う。歩き去る少女の後ろで、傷だらけになった少年が倒れた。路地裏を抜け、真っ赤に染まった右手を見る。

「楽しみだなあ……」

一人の少年を思い浮かべる。思わず顔がほころんだ。

一緒に、遊ぼう……

一日目、終了。

二日目？

二日目。時刻は正午を少し回った頃。野々山は、第一中学のエリアにボールを取りに来ていた。

「ひやはっ。俺から取り返せると思うなよ、のろま！」

能力「神の手」で、ボールを守っていた生徒たちをまとめて足止めし、その隙にボールを奪った。一気に加速し、逃走を開始する。何人が追ってくるが、距離は少しずつ開いていく。

夏休みの「ゲーム」と違い、涼しくてやりやすい。体調的にも、全く問題は無かった。二日目にして、早くも勝利を確信する。

公園に入ったところで振り向くと、追ってはすでに一人だった。ポケットに手を突っ込んでいる。

「ふっ」

短く息を吐き出し、跳躍した。階段を飛び降り、膝で衝撃を吸収して着地する。

——はずだった。

「っああ!？」

右のふくらはぎに激痛が走った。体勢を崩したまま落下し、地面に叩きつけられる。

「な、んだ……これ……」

鉛筆サイズの棘が刺さっていた。硝子のように透明で、透き通っている。無理やり引き抜くと、血が溢れてきた。傷口から目をそらし、駆け出す。

「逃がさねよ」

「！」

背後から声が聞こえ、振り返る。ポケットに手を突っ込んだ少年が、不適に笑って立っている。右手を構えようとして、少年がポケットから何かを取り出した。それを野々山の周りにばら撒く。

「がつ……っ？」

逃げようとする野々山の身体に、鋭い棘が一斉に刺さった。とっさに能力で正面を守るが、全方向から襲い掛かってくる棘を防ぎすることはできなかった。地面に転がり、ボールを手放してしまう。

「まったく……大人しくボールを返せば、こんなことにはならねえのに」

そう言って少年はボールを拾い、階段を引き返す。

「待てっ、よ……」

遠ざかる背中に右手を伸ばし、必死に身体を引きずる。しかし少年は、野々山を気に留めることなく歩いていった。

「待てつつつてんだろつ、てめえ！」

力を振り絞って立ち上がり、右手を構えて階段を駆け上がった。
「神の手」で握りつぶそうと、右手を握り締める。

「!？」

少年は鋭く振り向くと、野々山的能力をかわして、逆に突っ込んできた。野々山の頭を驚づかみにする。

「うるさいよ、お前。雑魚は黙ってる」

頭に、細い針を刺されたような痛みが走った。

「『複合能力者』に勝てるでも思ったのか？ 普通能力者ノーマルの分際で、ナマイキなんだよ、雑魚」

再び離れていく少年を追おうとするが、身体が思うように動かなかった。

「っ……なんだよ、これ……?」

しばらく固まっていると、身体が自然と動いた。ゆっくりと階段を上り、振り向く。そして、階段の下へと、身体が傾いた。野々山の意味と関係なく、倒れていく。

「かつ……」

——身体が、勝手に……

「が、あつ……あぐつ、か、は……」

階段を勢い良く転がり落ち、身体から血が流れていくのを感じた。意識が朦朧とし、視界がかすんでいく。誰かが目の前に立ったような気がしたが、正体を知る前に意識を失った。

一日目の「ゲーム」は、終わりに近づいていた。燕と音亜は、今日も一つボールを取っていた。今は、もう一つ取りに行くところである。

「燕くん」

「ん？」

燕を呼びとめ、立ち止まる。不思議そうにしている燕の顔を、音亜は覗き込んだ。

「ねえ、体調悪いんじゃない？ 顔赤いし……大丈夫？」

「えっ？ ああ、大丈夫大丈夫！ なんとも無いよ……」

しかし音亜は、「千里眼」で燕の嘘を見抜いた。燕は、体調が悪いのを隠そうとしている。どうやら、朝から体調を崩しているらしい。

「もう、具合悪いなら休んでればいいのに」

「だって……夏休みの『ゲーム』よりは楽し、みんなに迷惑かけたくないし……」

そう言った燕は、再び歩き出そうとしてふらついた。慌てて支える。

「ほら……今日はもう休んだほうがいいよ。誰かに連絡して、今日は帰ろう?。」

「……うん。ゴメンね……」

燕を座らせ、安藤に電話をかけた。燕を家で休ませることを伝える。

「分かった。まあ、明日も無理はしないでくれ」

「うん」

「……ああ、そうだ朝倉。今、どの辺にいるんだ?」

「え? 第一中と、第三中のエリアの間辺りだけど……」

それがどうかしたのだろうか。訊ねると、野々山を見なかったかと訊ね返してきた。

「別に見てないけど?」

「そうか……」

今朝学校で会ってから、野々山を見かけていない。音亜としては、嫌な相手に会わなくてうれしいのだが。

「さつきから、電話が通じねんだよ。……まああいつのことだし、どっかで遊んでるだけかもしれないけど」

「分かった。じゃあ、見つけたら電話するから」

「頼む」

電話を切り、燕を助け起こす。燕の家に向かって歩き始めた。

「歩ける？」

「平気だよ、これくらい……」

なんだか、さつきよりも熱が上がっているようだった。頼が火照って、息が少し荒くなっている。横から細い身体を支え、さりげなく寄り添った。

今日は能力をあまり使っていないから、「破壊者」の反動ではないだろう。少しだけ安心し、今日は久しぶりに、燕の家に泊まろうと思った。

二日目？

真っ暗な世界。透き通った棘が、暗闇にまぎれて飛んでくる。次々と襲い掛かってくる硝子の刃は、少年の声とともに突き刺さってきた。

——雑魚……

「やめろ……」

——雑魚は黙ってる……

「うるせえ！ やめろ！」

必死に叫ぶが、声は止まない。身体に刺さった棘を抜き、再び飛んできた棘に貫かれる。

「はっ、は、だ……まれ……」

——雑魚のくせに……

——調子にのってんじゃねえよ、ナルシス……ト……

——女子に囲まれて……いい気になってんじゃ、ねえぞお……？

「やめろ……っ」

いつの間にか、別の声が混じっていた。暗い記憶が呼び覚まされる。ただニヤニヤ笑い、殴るのをやめない顔も知らない連中。自分

たちの兄を呼び、殴るように頼んだ同級生のクソガキども。

——ひやははっ、泣いてやがるぜ……！

——なあ、けつの穴に爆竹突っ込んでみねえ……？

——おいおい。それじゃあ、この前殺したカエルと同じじゃん……
…っ

——じゃあ、ライターで身体の毛、全部焼くか……？

——賛成！ でっけえ火傷作ってやろうぜ……！

真っ赤な火が、迫ってくる——

「黙れ！」

「ひやつ！？」

跳ね起きると、近くで悲鳴が聞こえた。荒い呼吸を繰り返しながら、そちらを見る。

「あ、あのっ、大丈夫ですか？」

昨日の少女だった。均整の取れた小さな顔に、大きな瞳。ショートヘアで、驚いた拍子に眼鏡がずれていた。

「えと……の、野々山さん……ですよ、ね？」

「……キミが、助けてくれたの？」

「はい……」

見慣れない部屋だった。少女のたどたどしい説明を聞きながら、状況を理解していく。ボールを奪い返されて階段から落ちて、気を失った。血を流して倒れている野々山を見つけた少女が、能力で傷を手当し、自分の家に連れ帰った——と。

「ねえキミ、名前は？」

「ふえ？ いや、あつ、小凧といいます……豊崎、小凧です……」

「へえ……ありがとう、豊崎さん。助かったよ」

「いえ！ 別に、大したことは何も……っ」

小凧は顔を真っ赤にしてうつむいた。小さな声であわあ言いながら、モジモジしている。それを見て、思わずくすつと笑ってしまった。

「……なんですか？」

「いや、ゴメン。かわいいなと思ってさ」

「そそそ、そんなことっ……ない、です」

「？」

いつそう顔が真っ赤になった小凧に、ふと思いついて訊ねる。

「俺の傷、能力で治したって言うてたけど、治癒能力か何かなの？」

「いえ……私の能力は『巻き戻し』っていつて、能力の対象の時間を巻き戻すことが出来るんです」

「時間を？」

「はい」

そう言うて小凧は立ち上がり、机から鉛筆を取ってきた。それを両手で持ち、懸命に力をこめる。

「……何してるの？」

「こ、これ、を……折りたいんです、けど……」

「貸して」

鉛筆を受け取り、二つにへし折る。それを小凧に返した。

「えっと……それで、これに『巻き戻し』を使うと……」

小凧が左手をかざすと、二つに折れた鉛筆が勝手に動き、元通りの形に戻った。

「これと同じことを、傷口にしたんです。怪我した部分の時間を巻き戻して、もとの状態に戻しました」

「へえ……すごいね」

「……えへへ」

それからしばらく、他愛の無いことを喋っていた。ふと時計を見て、「ゲーム」の最中だったことに気づく。外はすでに日が落ちて暗かった。今日の「ゲーム」は終わっている。安藤に電話をかける、何をしてたんだと怒鳴られた。適当になだめて電話を切る。

「お友達ですか……？」

「うん。『ゲーム』の途中で抜けてきたしね。……そうだ、訊きたいことがあるんだけど」

「なんですか？」

「第一中の三年生の男子で、複合能力者っている？」

「え……」

あの少年は、自分は複合能力者だと言っていた。複合能力者は珍しいし、同じ学校の小凧に訊ねれば分かるかもしれない。

しかし、なかなか期待通りにはいかなかった。小凧は小さく被りを振り、呟く。

「ごめんなさい……他の人の能力は、よくわからないから……」

「そうか……ありがとう」

そろそろ帰ろうとベッドから下りる。歩き出そうとして、体勢を崩した。小風が慌てて支えようとするが、そのまま一緒に倒れてしまう。野々山が押し倒した格好になって、慌てて離れる。

「っ……ゴメン……」

「い、いえ……血は足りなくなってるし、傷口が治っても完全に身体が回復するわけじゃないから……大丈夫ですか？」

「ははっ……ちょっと、きつい……かな」

立ってみると、だいぶ身体が辛かった。数歩も歩かないうちにこけてしまう。

「その……今日はもう遅いし、よかったら……ととっ、泊まってくださいませんか？」

「……へ？」

一瞬、言われたことが理解できなかった。しばらくして、「ああ、神前たちみたいなことか」と気づく。目の前にはかわいい眼鏡っ娘がいて、ここには自分と二人きり——答えは決まっていた。

「もちろん、喜んで！」

二日目？

安藤は、寮の自室でパソコンに向かっていた。隔離地区内の情報が載っているサイトで、一つのニュースに釘付けになる。

――夜間に外出していた少年四人が重症。現場に凶器は残されておらず、能力者同士の戦闘が原因と見られるが、少年たちはいずれも記憶を一部失っていて、有益な情報は手に入らない。また現場は、なんらかの能力によって大きくは存している箇所が見受けられる――

「これは……」

写真には、大きく碎けた壁や地面が写っていた。粉々に碎けたそれらを見て、夏休みのことを思い出す。

「おい、安藤！ サイダーとポテチ買ってきたぜえ」

菓子の買出しに出かけていたデブが戻ってきた。パソコンの画面を覗き見てくる。

「なんだよ、これ？」

「いや……何でもねえよ」

「？」

デブは、スナック菓子の袋を次々と開けていった。その一つをつまみながら呟く。安藤の脳裏に、地面が崩れ落ちていく光景が浮かんだ。

「……神前……？」

風邪を引いた燕を寝かしつけた音亜は、リビングで缶ビールを飲んでいた。夏休み以来、燕が飲酒に関してうるさいので久しぶりである。

「？」

簡単すぎるクイズ番組を見ると、電話が鳴った。ビールを置いて立ち上がる。

「もしもし、朝く……神前です」

「……朝倉？ ああ、神前の看病か」

電話の相手は安藤だった。こんな時間に何の用だろう。

「神前、起きてるか？」

「燕くんなら、さつき寝たところだけど……」

「そうか……頼みがあるんだけど、いいか？」

「何？」

「今日からしばらく、神前之家に泊まって欲しい」

「え？ 別にいいけど、なんで？」

安藤はしばらく黙り込んだ。「あまり詳しくは言えないけど……」
と呟く。

「神前を、見張っててもらいたいんだ。特に夜、出かけないように」

少女は、今日も夜の散歩に出かけていた。先ほど、隔離地区内の情報サイトを見たが、楽しくて仕方が無い。

自分が他人を傷つけたことがニュースになるのが、こんなにも楽しいことだとは思わなかった。いつにもましてスリリングに感じられる。

「ねえ……誰か、いないの……？」

小さく呼んでみるが、返事はない。一分か一時間か……獲物を見つけることなく歩き続けた。

「……みーつけた」

暗闇の中に、人影を見つけた。コンビニにでも行った帰りなのか、手にはビニル袋を提げている。しかも、隔離地区では珍しい大人だった。

能力者ではない大人では、一瞬で終わってしまうだろう。不意打ちで脚を狙って、少しずついたぶったらいいかもしれない。

背後から、息を潜めて接近する。右手を構え、右脚に狙いを定め

た。

「？」

大人は、ぎりぎりになってようやくこちらに気づいたようだった。振り返った大人の膝が砕け、転倒する。

「あつ……は、ひい……！？」

地面をのたうちまわる大人の、反対の脚に右手で触れた。次いで左右の腕を狙い、能力を使う。最後に、頭に狙いをつけた。

「ひっ……」

「バイバイ」

夜の隔離地区に、悲鳴が響き渡った。

二日目、終了。

三日目？（前書き）

今日は11月11日。今日はボクの誕生日です——また一歩、おじいちゃんに近づきました……

三日目？

三日目の朝。いつもより早く起きた小凧は、二人分の朝食を作っていた。

昨日野々山を助けて、家に泊めている。怪我の影響もあつてか、彼はぐっすりと眠っていた。三日目の

「ゲーム」には出ると言っていたから、時間いっぱい寝かせてあげよう。

昨日は楽しかった。久しぶりに人とたくさん喋ったし、野々山は面白かった。八代と喋っているときよりも、ずっと楽しい。

「おはよー、豊崎さん」

「あ、おはようございます」

テーブルに朝食の皿を並べていると、野々山が起きてきた。ちなみに服は、小凧が「巻き戻し」の能力で直してある。

「悪いね、いろいろと世話になっちゃって」

「いえ……私も、楽しかったし」

「はは。そう言ってもらえるとうれしいよ」

昨日の話の続きをしながら朝食を済ませた。時計を見ると、「ゲーム」の開始時刻が迫っている。

「そろそろ時間か。じゃあ、俺はもう行くよ」

「え……あ、はい……」

玄関を出て野々山を見送り、少し胸がちくりとした。何か、足りない感じがする……

「でも、今日は……行かないと」

昨日、野々山に刺さっていた棘。そして、野々山を階段から飛び降りさせた能力。あれらの能力の正体を、小凧は知っている。野々山を傷つけたのが、誰なのかも。

すぐに支度を終えて、家を出る。第一中学校に向かった。

「行くっ……」

音亜は、ベッドの脇でため息をついた。手には体温計が握られている。

「ちょっと、燕くん……昨日より熱上がってるじゃない……」

「うう……ゴメン」

燕は完璧に風邪を引いていた。これで「ゲーム」に参加するなんてどうかしている。燕の額に冷却シートを張り、頭を撫でる。

「昨日の夜も、あまり眠れてなかったんでしょ？」

「……うん……やな夢を見たんだ」

「だいぶ魔^{うな}されてたみたい。隣の部屋まで聞こえたよ」

昨夜、音亜は隣の部屋に布団を敷いて寝ていたが、燕のうなされる声が聞こえて起きた。それから一晩中、ずっとベッドの隅に腰掛けて看病していた。

「とりあえず、今日の『ゲーム』は休まないと。安藤くんに連絡しとくから」

「うん」

「朝ごはん食べれる？ 何かコンビニで買ってこようか？」
出かけようと立ち上がり、燕に手を掴まれる。

「……ボク、音亜のおかゆが食べたい」

「おかゆ？ ……分かった。じゃあ、作ってくるから待っててね」

「うん、ありがとう」

一階に下り、早速おかゆを作り始める。そこで電話が鳴った。

「もしもし？」

「朝倉か？ 俺だ、安藤」

「どうしたの？」

「昨日の夜、神前は出かけなかったか？」

「家にいたよ？ 風邪で寝込んだ」

「そうか……」

安藤はしばらく沈黙した。昨日から気になっていることを訊ねる。

「ねえ……昨日から、燕くんのこと見張っててとか言ってるけど、何かあったの？」

「いや……なんでもねえよ。たぶん、俺の思い過ごしだ」

「ふうん？」

直接会っているのなら「千里眼」を使うが、あいにく今は電話だ。安藤の言葉の真偽を確かめることはできない。

「あ、そうだ。今日一日、休ませてもらえる？ 燕くんの面倒見ないと」

「ああ、分かった。……また、何かあったら連絡する」

それで電話は切れた。台所に戻る。安藤の言っていたことが気になったが、すぐに忘れてしまった。

「……かわいい……」

朝食の後、また眠ってしまった燕の横に、音亜は座っていた。燕は、今はうなされることなく寝ている。顔にかかった金髪を、指先で軽くいじったりして時間を潰していた。

「逆ロミオとジュリエット……か」

先日、野々山に言われたことを思い出した。音亜がロミオで、燕がジュリエット。確かに、音亜よりも燕のほうが女の子っぽいかもしれない。それは、音亜も認める。

「うらやましいよ、燕くん」

燕がわずかにうなった。苦しげに寝返りを打つ。

「私は、守る側だから」

夏休みの「ゲーム」で、音亜は約束した。燕は、自分が守ると――

「でも、ちょっと悔しいよ……」

悪夢にうなされる燕の手を握り、頬を撫でる。

「私も、守られたいな……」

わがまますぎる……だろうか――？

三日目？（前書き）

11月12日。申し訳ありませんが、今日から一週間ほど、期末テストが終わるまで更新できそうにありません。なるべく時間を見つけて次話投稿できるようにします……

三日目？

第一中学校のグラウンド。「ゲーム」開始直後、小風は八代を呼びだしていた。

「なんだよ、豊崎。もう『ゲーム』始まってんだけど」

「……昨日のことで、訊きたいことがあるの」

「何？」

一拍間をおき、息を吸い込む。恐ろしい雰囲気を放つ八代の目を見て、口を開いた。

「昨日、野々山くんから、能力を使って奪い返したんでしょ……？」

「野々山？ ……ああ、あの雑魚のことか？ それがどうかしたのかよ」

「どうかしたかって……もしあの時私がいなかったら、野々山くんは死んじゃってたかもしれないんだよ？ なんだあんなに傷つけたの？ それに、階段から落したんでしょ？ そこまでする必要なんて……」

「それだけか？」

「！」

いきなり飛んできた透明な棘に、反射的に左手かざす。「巻き戻

し」が発動し、棘が本来の姿に戻る。ビー玉が地面に転がった。

「『人形』のくせに、ナマイキ言ってるじゃねえ」

八代の視線に圧^おされ、足がすくむ。思わず目を伏せた。「人形」……その言葉が、心の深くに突き刺さる。

「これから、第三中に一斉攻撃を仕掛ける。今のところ、あいつらがダントツで一位だからな。俺らが旗を奪ってる間に、お前らはエリア内の他のボールを奪え」

「……うん」

「相手が誰でも手加減するな。お前が本気出したら、俺にだって勝てる」

「！でもっ、他の人を傷つけるなんて……」

「これは命令だ。『人形』はただ、黙って従ってりゃあいい」

腕時計を見て、八代は踵を返した。最後に一言、囁いて去っていく。八代の姿が見えなくなっても、小凧はそこに立ち尽くしていた。頬を、一筋だけ涙が伝う。

——お前は、傷つける側の能力者^{ニンゲン}だ。

暗い気持ちで、安藤は携帯電話を閉じた。ネットで調べていたが、昨晚もまた被害者が出ている。しかも今度は能力者ではなく、大人

だった。両腕と両脚の骨が砕かれている状態で発見されたい。

「神前じゃない……か」

一つ目の事件では燕を疑ったが、昨晚燕は寝込んでいた。それは音垂に電話で確かめたから問題ない。仲間が犯人でないと分かって、少しほっとする。だが――

――燕でないとしたら、一体誰だろう？

――「破壊者」でなければ、一体どんな能力だろう？

「おい、安藤」

名前を呼ぶ声に、思考を中断された。デブはスナック菓子の袋を片手に歩いてくる。

「もう『ゲーム』始まったけど、野々山がまだ来てないぜ？」

「はあ？　なんだよあの馬鹿……どこかでサボってんじゃないだろうな」

愚痴をこぼしながらグラウンドを見回す。敵の姿は無い。午前中の間は、学校で旗とボールを守ることになっていた。

鉄棒の上に座ってぼうつとしていると、デブが突然声を上げた。

「！　おい安藤、あれ……！」

「あん？」

デブが指差す方向を見ると、他校の生徒が見えた。出番である。

「……ちつ、十七人……」

旗を取りに来たのは十七人。それに対して、第三中は十人だった。他にも校舎の裏側を見張っている生徒が三人いるが、人数的には少し不利だ。

「行こうぜ、安藤。先手必勝だ」

「……ああ、そうだな」

なんだか嫌な予感がするが、なんとかなるだろう。燕、音亜、野々山の三人がいない今、自分が旗を守らなければならない。

「デブ、そっちを頼む」

「任せろ！」

攻めてくる相手に合わせて、左右に別れて突っ込む。旗を守る生徒を残した六人が、それぞれ能力を使う準備をする。

「喰らえっ！」

射程に入った瞬間、右手から電撃を放つ。左右になぎ払い、正面の敵を一掃した。攻撃をかわしていた敵にすぐに接近し、首筋に触れる。崩れ落ちた敵を校外に放り出すと、デブも敵を殴り倒した後だった。

「ふう……なんだ、意外と呆気なかったな」

「……………ああ」

「？」

確かに呆気なかった。能力者同士の戦闘に慣れていなかったのかもしれないが、簡単すぎる。疑問に思いながらも、旗の下へ戻ろうとした。

「ぎゃあ！」

不意に聞こえた悲鳴に振り返る。旗を守っていた生徒が押し倒されている。そいつを押さえつけているのは、仲間である第三中の生徒だった。校舎の裏で見張りをしていたはずだったが……

「くそつ、旗を守れ！」

急いで駆けていく仲間たちに続いて安藤も走る。旗を取ろうとしているのは、見慣れない男子生徒だった。おそらく、見張りを倒して校舎裏から侵入したのだろう。

「返せ！」

旗を掴んだ少年に電撃の槍を放つが、容易く避けられる。少年はポケットに手をつ込むと、勢い良く何かを投げた。

「っ……………！」

とっさに後ろに跳んでかわすと、地面に透明な棘が突き刺さった。

安藤は連続して飛んでくる棘をかわし続けるが、他の生徒たちは次々と打ち抜かれていった。悲鳴を上げて倒れていく。

「んなもん、この俺に効くかああ！」

デブが咆哮し、能力「鋼鉄人間」を使って突っ込む。全身が鋼のように変わったデブは、棘を弾きながら少年に肉薄した。

「おらあつ！」

デブが金属の拳を振り下ろす。しかしそれは、少年に当たる寸前で止まった。少年の手がデブの頭を掴んでいて、そのままの体勢で固まったまま、デブは動かない。

「おい、デブ！ 何ふざけて……」

慌てて駆け寄り、少年に右手を向ける。電撃を放とうとして、腹に重い衝撃が走った。

「がつ……！？」

後方に大きく吹っ飛ばされ、地面を転がる。吐き気をこらえながら立ち上がると、目の前でデブが拳を振り上げていた。

「デブ……てめえっ」

「違っ……身体が勝手に……」

再び、金属の拳に殴り飛ばされた。地面に崩れ落ちると、もう起き上がることは出来なかった。

——なんで……？

朦朧とする意識の中、少年の笑い声だけが聞こえた。

三日目？

八代たちが第三中に攻め入っている頃。小風は、エリア内に配置されたボールを狙っていた。

「やっぱり、無理だよ……」

台座に置かれたボールを、三人の男子生徒が囲んでいる。闘わずに奪うのは無理だろう。八代に何と言われるか心配だが、他人を傷つけるなんてできない。

「……諦めよう」

肩を落し、その場を立ち去った。

「『ゲーム』……辞めたいなあ……」

公園のベンチに座り込んで、呟く。確かに修学旅行には行きたいが、誰かと闘って、傷つけなければならぬのは耐えられない。

「あれ？ 豊崎さん」

うつむいて考え事に没頭していると、不意に声をかけられた。一瞬、第一中の生徒かと思ってビクツとするが、目の前に立っていたのは野々山だった。

「……野々山くん……」

「また会ったね」

野々山は、小凧の隣に腰を下ろした。少し間をおいて、喋り始める。

「何かあったの？ 悩んでるみたいだったけど」

「なんで、そんなこと分かるの？」

「顔に出てたよ。かなり深刻そうだった」

「うん……」

小さな声で答えて、またうつむく。少し悩んで、もしかしたらと思う。

——野々山くんになら、打ち明けられるかもしれない……

「私ね……『ゲーム』なんか、やりたくないの。誰かを傷つけてまで、幸せになろうとは思わない……」

野々山は、黙って聞いている。上を見上げて、空の奥深くを見つめている。

「昔、いろいろあったの。すごく後悔して、怖くて、今でもはっきり覚えてる……。だから私は、誰も傷つけたくない」

まだ隔離地区に来る前。能力を手に入れたばかりの頃の記憶——

そこで小凧は言葉を切った。野々山がこちらを見ていることに気

づき、彼の顔を見上げる。

「それ、誰かに相談した？」

「……うつん。野々山くんが初めてだよ……」

「へえ……。じゃあ俺も、誰にも言っていないこと、教えてあげるよ」

そう言った野々山は笑い、少し悲しげな目をした。

「俺もさ……ここに来る前、いろいろあったんだ。今でも夢に見たりして、うなされたりする」

それを聞いて、小凧は昨日のことを思い出した。助けた後、野々山がベッドから跳ね起きたとき——あの時、その夢を見ていたのではないだろうか。

「ま、そういうことがあったから、今の友達はすっげえ大切に思えるんだ。喧嘩したりするけど、それでも、あいつらは俺の大切な仲間なんだ」

あいつらというのが誰かは知らないが、きっと信頼しあえる友達なのだろう。素直に、うらやましいと思った。

「俺は、夏休みの『ゲーム』で外に出れなかったけど……だからこそ、みんなで外に行きたいんだ。あいつらと、一緒にいたい」

野々山は強く言い切った。その強い意志に満ちた横顔を見ていると、小凧の頬を一筋、涙が伝った。

「え？　ちょ、豊崎さんっ？　なんで泣くの？　ねえ、泣かないで！　女の子には泣かれたくないんだよ」

「……ごめんなさい。野々山くんが、うらやましくて……」

「？」

「大切な友達がいって、信頼しあってた……私、友情とか恋愛とかよく分かんなくてっ、そういう友達、いないの……だから、すごくうらやましい……」

言葉にすると、感情が次々とあふれ出してきた。流れ出した涙が止まらない。

「ずっと『独り』だったの……寂しくて、逃げ出たくて、でも逃げれなくて……私は『人形』なんだって……」

そのとき、不意に手を握られた。驚きながら顔を上げると、野々山の大きな両手が、小風の小さな手を包み込んでいた。その温かさがうれしくて、さらに涙が溢れてくる。

「俺たちは友達だろ？　小風」

「……うん」

もう少し、がんばってみようと思った。

「ありがとう……椿くん」

三日目？（前書き）

やっと期末テストが終わりました……数学、やばかったです。
とりあえず、次話投稿再会です。

三日目？

燕は、暗闇の中を歩いていた。自分の手すらも見えない闇の中、冷たい風が吹き抜けていった。まだ秋なのに、真冬のように鋭く冷たい。

「音亜？」

声はすぐに、静寂の中へ消えていった。立ち止まって待つが、返事はない。

「……誰か、いないの……？」

もう一度、冷たい風が吹き付けてきた。身体を引き裂く冷気に縮こまりながら、辺りを見回す。歩き出そうとして、不意に声をかけられた。

「神前」

「安藤くん！」

振り向くと、安藤が立っていた。後ろから、デブと野々山も現れる。うれしさがこみ上げて、駆け寄って右手を伸ばした。

「！？」

右手が触れた瞬間、安藤の身体が硝子のように砕け散った。慌ててデブと野々山に近づくが、崩れ落ちて暗闇に溶けていった。

「そんな……なんでっ」

「燕くん！」

呆然と呟く燕に、聞き慣れた声が届いた。振り向くと、音亜がこちらに走ってきている。

「音亜！」

ただならない様子の音亜に、燕も慌てて駆け寄る。互いに手を伸ばし、指先が触れ合った。

「助け、て……燕……くんっ」

「音亜！？」

暗闇に閃光が走り、触れ合った指先から、音亜の身体が壊れていく。「破壊者」の能力が勝手に発動してしまったのだと気づいた。

「神前くん」

一人残された燕を、少女の声が呼んだ。あの少女が、長い黒髪を風に揺らして立っている。

「みんな、壊れちゃったよ？」

「キミは……」

歌うように言葉を呟き、少女は歩み寄ってくる。

「なんで……なんでみんな、壊れちゃったの……？」

「？ 分かってるんじゃないの？」

少女は燕の右手を取り、耳元で囁く。逃げたいのに、身体が凍りついたように動かない。

「この能力チカラのせいだよ。神前くんのせいで、みんな、壊れていくの」

「……やめて……」

「神前くんは、壊す側……周りを傷つける側だよ？」

「やめてっ……」

「みんな壊れて、離れていつちゃう」

「やめて！」

暗闇の中、悲鳴を上げてうずくまる。頭を抱え込んだ手が、指先から崩れ始めた。身体中にひびが入り、壊れていく。

痛みはない。苦しくもない。ただ、悲しかった。

「また今度、一緒に遊ぼう？」

最後に、少女の声が聞こえたような気がした。

「はっ……は、はぁ……」

夜中。悪夢から目を覚ました燕は、ベッドに起き上がった。荒い呼吸を繰り返しながら、ベッドを下りる。

最近見る夢は、いつもあの少女が出てくる。燕の心を揺さぶってきて、日に日に弱くなっていく自分を感じていた。

重たい身体を引きずって部屋を出る。隣の部屋に行けば音亜がいるはずだった。このまま一人でいるのは辛い。誰かと一緒に居たかった。

「……音亜、起きてる……？」

そつとドアを開け、中の様子を伺う。返事はなかったが、中に入った。

「音亜……？」

布団の中はもぬけの殻だった。唐突に夢の内容が思い出され、不安を煽られる。燕はその場で立ちすくんだ。

「ツ・バ・メ・く〜ん！」

「!？」

不意に後ろから抱きつかれ、布団に押し倒された。声で音亜だと分かって安心するが、すぐに後悔する。夏休み以降注意していたのだが、どうやら酒を飲んでいたらしい。だいぶ酔っ払っていた。

「勝手に部屋に入るなんて、私を襲おうとしてたのかなぁ？」

「ち、違っ……そんなんじゃない……」

「別に照れなくてもいいじゃない。私と燕くんの仲でしょ？」

普段とは別人のような音亜に抱きつかれ、身動きが取れない。夏休みには燕が酔っ払ったが、これでは立場が逆だ。

背中にやわらかい感触を感じながら、必死で抗議する。

「ちよつと！　ボクの話聞いてよっ」

燕の話聞きながら、音亜は布団に潜り込んだ。話を聞いているうちに、少し酔いも醒めた気がする。

「……でね、その夢の中で、みんな消えていつちゃうんだ……」

「消えてく？」

「うん……ボクが触れると、バラバラに壊れて無くなっちゃう」

言いながら、燕の声はだんだん涙声になっていった。

「それでっ……ボクは『独り』だって……壊す側だって……」

燕が泣き出してしまいそうな気がして、反射的に手を取った。布団の脇に座っていた燕を、無理やり布団に引きずり込む。逃げようとする燕を捕まえて、サラサラの金髪をくしゃくしゃと撫でた。

「燕くんは『独り』じゃないよ。私たちがいるじゃない」

「でも……っ」

燕はとうとう泣き出してしまった。少し考え、さっきのように抱きしめてみる。

「大丈夫。何度も言ったでしょ？ 燕くんは私が守るって」

こうして抱きついたり励ますことに、抵抗がないわけではない。むしろ、恥ずかしくて死にそうだ。誰に言ってもなく、心の中で言い訳をする。

——私、酔ってるから。

三日目、終了。

四日目？

四日目の朝。燕と音亜は、第三中学校に向かっていた。燕は病み上がりなので、家に置いてこようと思ったが、一緒に行くと言つて聞かなかった。

「なんか、一人だと不安で」

と言つていたが、音亜は少し心配していた。最近の燕は、なんだから弱いような気がする。肉体的ではなく、精神的に――

「音亜？」

ずっと黙っていたからか、燕が顔を覗きこんできた。

「別に、なんでもないよ。ちょっと考え事してただけ」

「ふうん」

しばらくして学校に着いた。時間を見ると、「ゲーム」開始五分前。他の生徒たちは、すでにほとんど集合しているようだ。

だが、なんだか違和感がある。

「？」

燕も同じように思ったのだろう。首をかしげて、グラウンドに集まった生徒たちを見ている。

「どうしたの、安藤くん」

「……ああ、朝倉か」

話しかけると、安藤は浮かない顔をしていた。隣のデブも、同じく表情が沈んでいる。周りの生徒もそうだった。

「実は昨日、第一中の奴らが攻めてきてな……ここで守ってた俺らは、たった一人相手に負けちゃった」

「……旗は……？」

「盗られた。しかも、これまでに他から奪ったボールも全部」

「！？」

差し出された携帯電話の画面に、各校の現在の得点が記されていた。

——第一中……三十五点（旗二枚。ボール十五個）

第二中……二十一点（旗一枚。ボール十一個）

第三中……四点（ボール四個）——

「そんな……」

呆然と、音亜は呟いた。安藤が悔しそうに唸る。

「悪い。全部俺たちの責任だ。俺たちがあいつを止めてれば……」

「よお、アンドー。朝っぱらからシケた面^{つら}してんなよ」

「！ 野々山……」

野々山が、いつものニヤニヤ笑いを浮かべて歩いてくる。ちょうど今来たところらしい。

「てめえ、なんで昨日来なかったんだよ！ お前がいない間に……」

「そいつ、どんな能力使ってた？」

「ああ！？」

「どんな能力を使ってたか、訊いてんだ。教えろ」

野々山の顔から笑いが消えた。思わず背筋が震える。この少年は、ときどきこういう雰囲気を持つのだ。こうなると、近づきたい。

「……なんか、透明な棘を飛ばしてきた。俺とデブ以外はみんな、それでやられたよ」

「そうか。……もう一つ、あっただろ？」

野々山が訊くと、デブが答えた。

「ああ。なんか、頭握られて、そしたら身体が動かなくなったんだ。それで、いきなり身体が勝手に動いて……」

「へえ……」

野々山の顔に、再び笑みが戻った。「じゃあさ……」と周りを見回して言う。

「これから、取り返しに行こうぜ」

「はあ!？」

それまで黙っていた生徒たちが、一斉に野々山を見た。そのうちの数人が詰め寄る。

「何言つてんだよ。これから逆転できるとでも思ってたのか？」

「できるね。せつかくの修学旅行だぜ？　ここで諦めるなんてもったいねえ」

ニヤリと笑い、もう一度周りを見回す。野々山に掴みかかるようにしていた生徒たちが後ずさった。

「ちつ……俺は降りるぜ。あんな危ねえ『ゲーム』、やってられるか」

「俺も。文化祭だつて近いんだぜ？」

「私も……」

「俺も……」

一人、また一人と、グラウンドを立ち去ろうとする。燕や音亜が呼び止めるが、誰も聞く耳を持たない。

「待てよ」

野々山の声が通りよく響いた。立ち去ろうとしていた生徒たちが、一斉に立ち止まる。「ひひひっ」と、気味悪く笑った。

「まだ諦めるには早いだろ？ 俺たちが……二日で逆転してやるよ」

四日目？

「ちょっと、どういづつもりよー！」

燕の部屋に、音垂の怒声が響いた。安藤とデブが後ずさり、燕はベッドの中で縮こまる。野々山だけが、机の椅子にもたれてヤニヤしていた。

「どうって、逆転すんだよ。やられたらやりかえす。ジョーシキだろ？」

「そんなこと訊いてるんじゃないのっ。二日で逆転だなんて……」

「できるね。俺たちで逆転して、他の奴らを『ゲーム』に連れ戻す」

「はぁ……」

あの後。グラウンドに残ったのは、燕たち五人だけだった。沈黙を破り、野々山が笑う。

「と、いうわけで。みんな、よろしく頼むぜ」

野々山は、二日で逆転することを約束してしまった。もしもできれば、第三中のみんなは「ゲーム」に復帰するが、できなければ燕たちだけになってしまう。

「じゃあ、早速動きたいんだけど……」

そのとき、燕の身体がふらついた。とつさに抱きとめた音亜に寄りかかる。

「……ちょっと……ゴメン。休んでもいい？」

「大丈夫？ だから、家で休んでてって言ったのに……」

額に手を置くと、熱がぶり返していた。頬が火照って、立っているのも辛そうである。

「……しょうがねえな。じゃあ神前と朝倉は、今日は家に帰ってろ。明日一日で逆転すればいいさ」

「今日は何すんだよ？」

「アンドーとデブはボールを守っててくれ。守れない二つは諦める」

「野々山は？」

「俺は、他にやることあるんでな。ま、楽しみにしてるよ」

そうして、一同は解散した。野々山たちはそれぞれボールを守り、燕と音亜は家に帰る。そして「ゲーム」終了後、もう一度燕の家に集まったのだった。

「それで、どうやって逆転するっていうの？」

音亜の質問に、全員の視線が野々山に集まる。

「ボールばつか狙ったって、とてもじゃないけど逆転は無理でしょ？」

「ああ。だから、旗を狙う」

「旗？」

旗は一つで十点分だ。三つ取れば三十点。それだけで逆転が可能だ。だが……

「旗は、守りが堅いんじゃない？ 第一中と二中の二箇所を回らないといけないし、私たちだけで三つとも奪うなんて……」

「ケータイ見てねえのか？ 今日の『ゲーム』で、第二中も旗を盗られたんだぜ？」

「と、いうことは……」

携帯電話を開き、得点を確認する。第三中は、ボールを一個とられていた。

——第一中……四十六点

第二中……十一點

第三中……三点——

「圧倒的に、第一中が有利なんだよ。このままじゃ、第二中も勝つことは出来ない。あの複合能力者にやられたらしいからな」

「……それで？」

「さっき、第二中のやつらと話してきた。手を組んで、第一中から旗を奪おうってな」

どうやら「ゲーム」の最中、野々山はそのことを話に行っていたらしい。椅子にふんぞり返り、得意げに笑っている。

「すっかり約束してくれたよ。第一中の旗を全部奪って、二中に一枚、俺たちに二枚分配する。で、あとはボールの受け渡しをして数を揃えて、終了」

「そうか。……でも二中のやつら、よく交渉に乗ってきたな」

「いや。リーダーっぽいやつらを、全員まとめてぶつとばした」

「……………」

沈黙が訪れた。しかしそれを、すぐに野々山が破る。

「じゃあ神前、明日は頼むぜ。期待してるよ」

「え？ あっ……………うん……………」

「ちょっと野々山くん！ 燕くんは……………」

「だあいじょうぶだって。神前のこと心配すんのは分かるけど、そのために今日は休んでもらったんだ」

「でも……………」

「大丈夫だよ、音亜。回数に気をつけてれば、能力を使っただけで平気だから」

「燕くん……」

「はい、ストップ！ みんなの前でいちゃつかない！」

野々山が二人の間に押し入った。不満そうにする音亜を無視し、高らかに宣言する。

「やってやろうぜ！ 全員で、修学旅行に行くんだ！」

闘いときは、確実に迫ってくる。

四日目、終了。

五日目？

五日目。八代はグラウンドの隅に立って、学校を取り囲む生徒たちを眺めた。思わずふっと笑いが漏れる。

現在第一中学校は、第二中と第三中の旗を奪ったので、得点がいずれ抜けている。今日も含めて残り三日間、守りきれば勝利だ。

当然、他校は旗を奪い返しに来るだろう。しかし、八代たち第一中と闘って勝つことはできない。こちらには、強力な能力者がいるのだから。

その能力者の一人に声をかける。びっくりと振り向いた顔が、恐怖に張り詰めている。怯えた小動物のような、弱さ。

「豊崎。旗は任せたぞ」

「……うん」

「絶対に盗らせるな。手加減はするなよ」

「……」

小風はうつむいて、旗の下に歩いていった。「ああ、そうだと途中で呼び止める。」

「お前、第一中のやつと仲良くしてんだろ？」

「……それが、どうかした……？」

「別に。ただ、忠告だ」

「？」

「あまり勝手なことしてると、どうなるか……分かってるな？」

暗い表情で目を伏せた小凧に背を向けて、その場を立ち去った。

「来たぞ、二中のやつらだ！」

グラウンドの端の方で上がった声に、小凧は顔を上げた。どうやら、旗を取り返しに来たらしい。大勢の生徒たちが、正門のほうへ慌しく駆けていく。

「はぁ……」

思わずため息をつき、上を見上げた。国旗掲揚代に、今は三つの旗が揚がっている。これを守るだなんて、自分には重過ぎる命令だ。

能力で他人を傷つけない。だから、誰とも闘いたくない。第二中の生徒たちが、ここまでたどり着くことがないことを祈った。

「！？」

突然、グラウンドの反対側正面のフェンスが吹き飛んだ。グラウンドに残って警戒していた生徒たちが集まっていく。おそらく、正門に攻めてきた以外にもいたのだろう。砂埃でよく見えないが、何人かいる

ようだ。

「来ないで……」

祈るように呟いた小風の足元で、閃光がはじけた。反射的に目をそらすと、グラウンドのあちこちで光が発せられている。

「これは、能力……？」

グラウンドの反対ではじけた光が、地面に網目状に張り巡らされている。無意識に後ずさりすると、不意に足元が割れた。

「きゃっ！？」

後ろに跳んだ小風の前で地面が崩れ落ちる。周囲を見回すと、どこも同じことが起こっていた。崩れた地面に脚を取られ、誰もが身動きをとれずにいる。

「あの人たち……か」

壊れたフェンスの元に立っている他校の生徒……数は、四人。

闘いたくはない……でも、旗は必ず、守らなければならない。

——「人形」は、黙ってしたがってれば……

「！」

弾かれたように前を向き、眼鏡を捨てた。視界はぼやけるが、これで他人が傷つくところを鮮明に見ることはない。

崩落を続ける地面に左手を向ける。小風は八代の命令に従い、旗を守るべく駆け出した。

五日目？

地面に手をつけたままの燕は、不意に右手に違和感を覚えた。

「？」

能力の反動とは違う。これだけの広範囲をまとめて破壊したのは初めてだからだろうか。何か、逆流してくる感じ……

「燕くんっ、あれ！」

隣に立っている音亜の声に顔を上げた。グラウンドに張り巡らされた光の線が集束していつている。同時に崩れた地面も元に戻り、そこを一人の少女が走って来ていた。

「あの子……」

おそらく、あの少女の能力だろう。他の相手とは安藤とデブが闘っている。右手に力をこめるが、逆流してくる「破壊者」の力と相殺されてしまう。

「燕くん、下がって」

音亜に半ば強引に後ろに退けられる。走ってくる少女に向け、ナイフを構えていた。

「相手、本気みたい」

音亜の両目が妖しく光っていた。呼び止めようとした燕をおいて、

勢い良く駆け出していく。慌てて後に続いた。

距離を詰めると、音亜はナイフを握った右手を振りぬいた。横に一閃し、少女はわずかに後ろに下がってかわす。服の胸元が裂けた。

「!？」

思わず目を覆おうとするが、少女が左手を向けると、服は元通りに戻った。音亜が驚いて目を見開いている。

「っ……!」

立て続けにナイフを振るう音亜は、敵の思考を読んだのか、とっさに後ろに退いた。次の瞬間、音亜の目の前で炎がはじける。

「音亜!」

間一髪でかわした音亜と入れ替わりに、燕は少女に接近した。こちらに向けられた右手から炎が現れるのと、燕が右手を突き出したのは同時だった。

「あ……っ!」

一瞬、右手に炎の熱を感じた。すぐに「破壊者」の能力によって炎は掻き消え、少女と至近距離で向き合う。

「逃げるぞ、神前!」

もう一度能力を使おうとしたところで、デブが呼ぶ声が聞こえた。こちらで闘っている間に、他の生徒を倒して旗を奪取したらしい。

旗を持った安藤は、すでに第一中学の敷地から出ていた。燕と音亜も続く。

「よっ……と」

少女の炎による攻撃を右手で壊し、全力で走って距離を開ける。学校を出ると、少女はもう追っては来なかった。

そのとき八代は、立ち入り禁止の屋上にいた。

遠くから聞こえてきた声に目を開ける。屋上を端まで歩いて視線を泳がせると、正門と西門に目が留まった。どうやら、他校の生徒が旗を取り返しに来たらしい。

「はっ……雑魚はおとなしくしてりゃあいいのに」

高みの見物を決め込み、座り込む。他校の生徒たちが奮闘し、少しずつ追いつかれていく様子を眺めていた。

「？」

不意に背後から聞こえた音に振り向く。グラウンドの向こうで、派手な音を立ててフェンスが吹き飛んだ。どうやら、まだ敵はいたらしい。

「……ちよつと、遊んでくるか」

遠くで見物するのに飽きたのと、小風旗を任せてあるのがいま

いち信用できないためだ。ポケットの中のビー玉を確認し、はしごを使って校舎内に戻る。昇降口で靴を履き替えた。

「？」

外に出ようとして、身体に違和感を覚えた。踏み出そうとした足が動かない。いや、首から下全身が、全く動かない。見えない力に押さえつけられているようだった。

「な……んだよっ……これ!？」

「『神の手』」

身動きを取れないでいる八代に、「ひひひっ」と笑う声が聞こえた。必死に首を捻って見回すと、下駄箱の陰から、一人の少年が出てきた。

「お前は……!」

「おっと、覚えててくれたのかい？ ナルシストの複合能力者さん」

二日目に、八代がボールを奪い返した少年だった。確か小凧は、野々山と言っていた。

「心配すんな。今日は別に、この前の仕返しに来たわけじゃない」

野々山はゆっくりと歩み寄ってくると、目の前に立ってニヤリと笑った。

「俺も、周りからナルシストって言われるんでね。キミと話してみ

たくなつたんだ、八代くん」

「何の用だ……？」

精一杯凄んでみるが、野々山はニヤニヤ笑いを崩さない。だんだん苛立つてきた。

「とりあえず、キミの足止め。それから、訊きたいことがある」

そこで、野々山の表情が変わったように思えた。さっきと変わらずニヤニヤ笑っているが、何か違う。

「小風は、何をした？」

「小風？ ……ああ、豊崎か」

「彼女に、何をしたんだ……？」

「豊崎に、聞いたのか？」

こちらの質問には答えなかった。一瞬顔を引きつらせて、一層大きく口元を吊り上げる。端正な顔が歪んだ。

「小風は……」

言いかけたとき、野々山の携帯電話が鳴った。「ちょっと待って」と言っ、電話に応じる。

「ああ、アンドーか。……そうか、うん。え？ 今何処かって？ ……別に、サボってるわけじゃねえよ……ああ、すぐ行く」

電話をしまつと、野々山はこちらに向き直つた。気の悪い笑みを浮かべ、踵を返す。

「旗は全部、いただいたよ。……キミたちに、勝ち目はない」

野々山が立ち去り、身体を押さえつけていた力が消えても、八代はそこに立ち尽くしていた。眼鏡をかけた、小柄な少女の沈んだ顔が浮かぶ。

「『人形』のくせに……！」

低く眩き、咆哮した。醜い叫び声は、人のいない校舎に響き、消えていった。

五日目？

「痛っ……」

右腕に痛みが走り、ベッドの中でうずくまった。部屋に入ってきた音亜が、心配そうに見てくる。

「大丈夫？ やっぱり、能力を使いすぎたんじゃ……」

「うん……さすがに、やりすぎたかも……」

旗を奪い返した後、軽い能力の反動が出た燕は、一足先に家に帰っていた。つい先ほど「ゲーム」が終わって、音亜が看病に来てくれたところである。

「でも、夏休みの『ゲーム』ほどではないよ。そんなに熱もないし、身体の痛みも軽いから」

「それならいいけど、無理しないでよね。面倒見るこっちが大変なんだから」

そう言いながらも、音亜は少し楽しそうに見えた。気のせいだろうか。

「それにしても、逆転できてよかったね」

「うん。これで、みんなで修学旅行にいけるよ」

今日の終了時点で、各校の得点は大きく変わっていた。

——第一中……十三点
第二中……二十三点
第三中……二十四点——

「ゲーム」終了後。小凧は自分の部屋にこもり、ベッドの中で震えていた。

旗を守れなかった。奪われてしまった。全部。もう勝てない。怖い。八代が、怖い。

「……いやだよ……私が、闘えるわけがない……」

無理だ。これ以上、「ゲーム」に関わりたくない。心に決めていたはずなのに、ついに使ってしまった。

「なんで、こんなことに……」

暗い、隔離地区に来る前の記憶が呼び覚まされる。

辺りを舐めつくす真つ赤な炎。立ち込める黒い煙と、その臭い。崩れ落ちる天井。焼け焦げて消えていく思い出の数々。大切な人たちの悲鳴——

「!？」

不意に鳴った玄関の呼び鈴に、びっくりと震える。八代だろうか。出たくない。だが、他の人かもしれない……

「……椿くん」

野々山から聞いた話では、彼を下の名前で呼ぶ人は他にいないらしい。照れくさそうな笑顔が目に見え、ベッドから出た。

階段を下りて、玄関の扉をそつと開けた。そこに立っていた予想外の人物に、思わず声を上げる。

「雪美^{ゆきみ}ちゃん……！」

「こんにちは……じゃなくて、こんばんはかな？」

池内雪美はクラスメイトだ。明るい性格と整った容姿で友達も多く、小風の決して多くない友達の一人でもある。

雪美を家に招き入れ、部屋に上がる。小風はベッドに、雪美はいすに座った。

「久しぶりだね。あたし能力が弱いから、『ゲーム』に出てないし」

「うん……」

雪美に悪気はないのだろうが、今はあまり「ゲーム」の話はしたくない。思わず返事が沈んでしまった。

「？ どうしたの、元気ないね」

「……実は……」

今日の「ゲーム」について、少しずつ説明する。小風が話している間、雪美は何も言わずに聞いていた。

「……で、もう『ゲーム』に出たくない……と」

「うん。私、あんな乱暴なこと、やりたくない……」

「そっか。……大変だったね」

雪美は立ち上がり、隣に座った。頭を優しくなでられる。

「大丈夫だよ、小風なら。辛いことがあったら、何でも相談して……ね？」

「ありがと……でも」

「八代くんのこと？」

「……うん」

うなずくと、雪美は深いため息をついた。「まったく……」と呟く。

「八代くんもさ、何かちょっと、強引だね。みんな慕ってるけど、あたし嫌い」

小風がうつむいたまましていると、不意に押し倒された。そのままそっと抱きしめられる。

「そんなに暗い顔しないで。かわいい顔が台無しじゃない」

雪美の細い腕の中でもがくが、なかなか放してくれない。他に誰もいないとはいえ、恥ずかしかった。

「小凧は『独り』じゃないんだから」

「雪美ちゃん……」

……少しだけ、心が落ち着いた。

五日目、終了。

六日目？

六日目。「ゲーム」開始ギリギリの時刻に起床した八代は、第一中学校には向かわなかった。

「くそっ……なんで、こんなことに……」

昨日、第二中と第三中に旗を奪い返された後。第一中学の士気は、それまでとは打って変わって、どん底まで落ちていた。

誰もがグラウンドに座り込み、うつむいている。それは八代も例外ではなかった。

つい先ほどまで、自分たちは一位だった。それも、旗を三つ揃えたダントツの一位。なのに、

「全部……とられた？ ふざけんなよ……！」

旗は全て奪い返され、ボールも幾つかとられてしまった。

「……もう、無理だよ……」

誰かが、呟いた。わずかな間を置いて、最初は小さな囁きだったそれが、だんだんと大きくなっていく。

「もうダメだ……俺、帰る」

「俺も……」

「別に、どうしても修学旅行に行きたいってわけじゃねえし……」

「めんどくせーよ」

「私も……やめようかな」

そんな声が、あちこちから聞こえてきた。諦めようとする生徒たち、反射的に呼びかける。

「待てよ、みんな！ まだ終わったわけじゃないだろ！？ 俺たちにも、逆転のチャンスは……」

「うるせーよ、八代。生徒会長だからって、いつまでもリーダー気取ってんな」

「！」

帰ろうとしていた一人が、八代の前に歩み出てきた。後ろから、その取り巻きたちがやってくる。

「もう飽きたんだよ。お前みたいなナルシ、マジむかつく」

「一人だけ張り切って、周りがしらけてるのに気づかねえの？」

全員で八代を取り囲み、口々にののしって来る。遠くからも、八代を非難する視線が突き刺さってきた。

「……そういえば、豊崎にもふられたんだって？」

「なっ……!？」

予想外の言葉に顔を上げる。取り囲む生徒たちの顔がにやけていた。野々山のニヤニヤ笑いと重なり、不快感がこみ上げてくる。

「そうそう！ 自信満々に告って、見事にふられたってね」

「豊崎って優しいけど……あいつにまでふられたかあ」

「結局、みんなお前のこと嫌ってんだよ」

豊崎、小凧……そういえば、先ほどからあの少女の姿が見えない。旗を守りきれず、逃げ出したらしい。

さりげなく、ポケットに手をつ込んだ。まだ喋るのをやめない連中を見据える。ビー玉をわしづかみにした。

「あ？ なんだよ、その目……」

一人がこちらの表情の変化に気づいたが、もう遅い。連中の真上に向かって、八代はビー玉をばら撒いた。手をかざし、能力を発動する。

「『人形』は、黙ってしたがってりゃいいんだよ……!」

ビー玉が鋭い棘に変わり、状況を把握できていない生徒たちに降り注ぐ。硝子の雨に身体を打ち抜かれ、次々に倒れていった。

「て、めえ……八代お……!」

「黙れ、クズ」

もう一本、長い棘を作った。傷ついた身体を引きずって逃げようとする生徒に突きつける。

「俺は、完璧なんだ……お前ら雑魚とは、違うんだよ！」

第一中学はもう、誰も「ゲーム」には参加しない。後は勝手に、二校で争っていればいい。

当てもなくさ迷い歩き、目的の少女の姿を探す。先ほど家を訪ねたが留守だったので、出かけているのだろう。家の付近を中心に探した。

「俺は完璧だ……」

低く呟き、ポケットの中身を確認する。いつでも使えるように、一つ手に取った。

「……完璧なんだよ」

誰かに負けるなんて、見下されるなんて、死んでも嫌だ。俺は、何事においても完璧でなければならない。そう、何事においても――

どれくらい歩き回っただろうか。わずかに疲労を覚え始めた頃、見つけた。喜びと共に、指でつまんだビー玉を放り投げる。

「復讐だ……！」

六日目？

買い物に出かけた帰り。突然足元に突き刺さった棘に、小凧は慌てて立ち止まった。硝子の棘が飛んできた方向を振り向く。

「……………八代くん……………！」

手でビー玉をもてあそびながら、八代が立っていた。反射的に逃げ出そうとするが、硝子の棘が続けざまに襲い掛かってくる。

八代の能力の一つは「硝子の刃」という。硝子の形状を変え、操る能力だ。それらを「巻き戻し」でビー玉に戻して防ぎながら、必死に声を張り上げて言う。

「なんで、こんなことするのっ？」

「……………」

八代は答えない。返事の代わりに、いきなり突進してきた。逃げる前に、頭を鷲づかみにされる。ぎりぎり締め付けられ、痛みに顔をゆがめる。

「……………『人形』はさあ……………黙って言うこと聞いてりゃあいんだよ……………」

「っ……………やめてっ！」

「命令どおり動けないんじゃないあ、存在する価値なんてないよな。ただのゴミだ……………」

八代は唇の端を吊り上げた。野々山とは違う、嫌悪感の塊の笑い。

「壊れた人形は、さつさと処分しないとなあ……？」

「やめてえっ！」

悲鳴を上げるが、頭に鋭い痛みが走った。自由を奪われ、身体が言うことを聞かなくなる。

「ほら、これを使えよ」

八代が差し出してきたのは、細長い硝子の棘だった。身体が勝手に動き、それを受け取る。その切っ先を、自分に向けた。

八代のもう一つの能力。それは、「操り人形」

「や、めて……お願い……やめて……っ」

かろうじて言葉だけは発することが出来るが、八代は能力を使うのをやめない。暗い笑みを浮かべながら、言った。

「斬れ」

どのくらい、時間が経っただろうか。三十分。一時間。……いや、もっと長かったようにも思えるが、気のせいだろうか。痛みのせいで、感覚が狂い始めているようだ。

「はっ、は、はあ……」

地面に崩れ落ちた小凧は、確かな痛みを感じながら、しかし涙を流すことは出来なかった。八代の能力によって、あらゆる動きが制限されているためだ。

「おい、まだ終わってねえぞ。立て」

「ああ……！」

無理やり立ち上がらせられ、がくがくと壊れたおもちゃのように動く。透明な棘を身体に突き立てた。そのまま連続で斬りつける。

「いやっ……ああ……やめ、て……」

八代に殺す気はないだろうが、いったいいつまでこれは続けるだろう。なんで、こんなことになってしまったのだろう。

もう一度倒れた小凧は、すでに動くことは出来なくなっていた。八代が無理やり動かそうとするが、わずかに身体が痙攣するだけである。

「あーあ……もう壊れたのか。つまんねえ」

八代のつま先が腹をしたたかに打ち、地面を転がる。まだ能力はかけられたままなのだろうか。痛みを感じ、うめいても、涙は出ない。

「たすけて……助けてっ……」

誰も助けてくれる人はいない。八代の笑い声が聞こえ、次の痛み

を覚悟した。

「ぐあっ……!？」

八代の悲鳴が聞こえた。寝返りを打ち、状況を確認しようと試みる。そして、

見上げたそこに、彼が立っていた。

六日目？（前書き）

期末テストが返ってきました。理数が微妙です……

六日目？

「大丈夫？ 小凧」

「椿くん……」

なんでここに。そう訊ねようとして、気づいた。先ほど吹っ飛ばされた八代が、野々山に棘を飛ばそうとしている。

「椿くん、後ろ！」

慌てて声を上げるが、すでに野々山は振り向いている。襲い掛かってくる棘に向かって、右手を伸ばした。

「！？」

八代が驚いたのが見て取れた。小凧も同様に目を見開く。何もない空中で、棘が弾き飛ばされたのだ。

「ひひひっ」

野々山が笑い、右手を振った。宙に舞った棘が一本動きを止め、八代に向かって飛んでいく。

「ちっ……」

かろうじてそれをかわした八代は、ビー玉を出そうとポケットに手をつっこんだ。しかし、野々山が拳を突き出すと、八代の身体が吹っ飛ばされる。次いで右手を縦に振ると、立ち上がるうとした八

代が地面
に叩きつけられた。

——強い……。

「くそっ……なんなんだよ、てめえはあ!!」

「通りすがりの俊足イケメンナルシスト」

「ふっ……ざけんなああ!」

咆哮した八代に対し、冷静に平手を振るった。八代の身体が横に飛ばされ、地面を転がる。あっという間に決着がついてしまった。

「あー、大変だったね、小凧」

「椿くん……ありがとう……」

「おっ? あ、いや、小凧! こういふ場所でそういうのは……!」

つい抱きついてしまい、野々山は軽いパニックになってしまったようだった。目を白黒させてうるたえる野々山の肩に頭を預け、目を閉じる。

「あの……小凧……?」

「お願い。……もうちょっと、このままでいて……」

「……ああ、うん」

野々山の体温を感じ、安堵した。涙も止まり、次第に落ち着きを取り戻す。小凧が離れるまで、野々山はずっと黙っていた。

「小凧……怪我が……」

「あ、うん。治さないかね」

傷口に能力を使う。傷口がふさがったところで立ち上がった。ふらついてしまい、横から支えられる。

「帰ろうか」

「うん……」

二人並んで歩き出し、不意に横へ突き飛ばされた。状況を理解できないまま転がり、眼鏡が落ちた。

「椿くん!？」

なんで野々山がこんなことを。そう思って顔を上げ、理解する。

「逃げる、小凧……」

一人の少年が、硝子の棘を野々山の脚に突き刺していた。その顔に見覚えがあり、第一中の生徒だと気づく。もしか……

「はっ……ひやははっ。ばっかじゃねえの、お前ら」

ボロボロの八代がこちらに歩いてくる。その後ろから、同じく第一中学の生徒たちが、棘を持って歩いてきていた。

「念のために、他の『人形』用意しといてよかったぜ。まさか、使うことになるとは思わなかったけど……」

「椿くんっ！」

身体のうちこちを刺された野々山が倒れる。慌てて駆け寄るが、取り囲まれてしまった。

早く野々山を助けないといけない。だがこのままでは、二人とも襲われてしまう。

「小凧……早く逃げろ……」

「ダメだよ、早く治さないと……っ」

どうすればいい？ どうすれば、野々山を助けられる？

答えが見つからず、いつの間にかまた泣いていた。自分は、野々山を助けられない。闘えない……。

マイナスの考えばかりが浮かび、頭が痛くなる。そのとき、ふと疑問が浮かんだ。

——私は、なんで能力を持っているのだろうか……？

こちらを取り囲む輪が、じりじりと迫ってくる。野々山の呼吸が荒くなり、八代の笑い声が一層大きくなり、心臓の鼓動が速くなる。

小凧は、立ち上がった。

六日目？

不意に立ち上がった小凧に、八代は驚いたようだった。

「なんだよ、豊崎。いまさら何を……」

下品に笑っている八代の真横を、炎が吹き向けた。髪が焦げる臭いが漂う。

——なんで私は、能力を持っているのだろうか？

これまでに、自分の能力で多くの人を傷つけた。その事実が消えることはない。でも……

「……守るんだ」

誰かを傷つけるためじゃなく、大切な人を守るために。

右手を頭上に掲げる。小凧と野々山の周りを、紅蓮の炎が包み込んだ。

「『インファイニティ・フレイム
無限の炎』……『フェニックス
不死鳥』」

隔離地区に来る前のこと。小凧の最初の能力は、「巻き戻し」ではなかった。

炎を操る能力「無限の炎」。最初はマッチ程度だったその能力は、日に日に強くなっていき、次第にコントロールが難しくなっていっ

た。

そしてある日、事件が起きる。

その日は家に友達を呼んで遊んでいた。しかし突然の能力の暴走で、大きな火災になってしまった。

守らなければと必死だった。その強い思いに影響されてか、二つ目の能力が発現した。壊れた家を巻き戻し、炎も消した。

そうして誰も死ぬことなく事態は済んだが、その後、小凧は自ら隔離地区に入ることにした。もう二度と誰も傷つけないと、心に誓って。

小凧たちを包んでいた炎が形を変え、巨大な鳥の姿になった。怯えた八代が後退し、他の生徒たちにかかっていた能力が解ける。

「な、なんだよっ、これえ!？」

悲鳴を上げて逃げる生徒たちの中に、水を操る能力者がいたらしい。無数の水の槍が不死鳥を襲い、散り散りに切り裂く。

「よし……!」

感嘆の声を上げる八代を無視し、今度は左手を伸ばした。炎の破片を視界に映す。

「『巻き戻し』」

炎の破片たちが集まり、再び不死鳥を形成する。二つの能力のコンビネーションだ。決して消えない、何度でも蘇る「無限の炎」

「くそっ……化け物が！」

八代がビー玉をばら撒いた。しかし、それらは全て不死鳥によって阻まれる。

「傷つけるんじゃないで、守るために……」

八代に向けて不死鳥が突っ込んでいった。激突の直前に進路を変え、地面にぶつける。八代の周りを炎が取り囲んだ。

「お願い。降参して、八代くん」

「っ……！」

「誰も、傷つけないの」

唇をかみ締め、しばらく八代はうつむいていた。しかし、徐々に炎の輪を狭めていくと、ようやく両手を挙げた。

「分かった……俺の負けだ……」

「もう、こんなことしない？」

「……ああ、約束する」

「よかった」

周りを囲んでいた炎を消すと、八代はそのまま地面に崩れ落ちてうなだれた。それを視界の隅に見ながら、野々山の傷を治す。

「小凧……複合能力者だったのか……」

「うん。……ゴメンね、今まで黙ってた」

「いや、別に。おかげで助かったよ……」

野々山を助け起こし、その場を立ち去る。心にかかっていた闇が、少しだけ晴れた気がした。

「……ねえ、椿くん」

「？」

自分よりだいぶ高いところにある野々山を見上げ、言う。

「私ね、もう迷わないよ」

「え……？」

「……うつんっ……なんでもない！」

「？」

もう、自分の能力に戸惑わない。これは、誰かを傷つけるチカラではなく、守るチカラだ。

わけが分からないというような顔の野々山の手を引き、駆け出す。

見上げた空は、綺麗に晴れ渡っていた。

六日目、終了。

最終日

最終日。大量にビー玉を用意した八代は、小凧と野々山の姿を探していた。

「ぜってえ復讐してやる……！」

昨日、小凧に約束させられたが、そんなもの守るわけがない。信じる奴は、ただの馬鹿だ。

そして、首尾よく二人を発見する。

一度路地裏に隠れ、二人が歩いてくるのを待ち構える。袋に入れたビー玉を構える。だが、

「っ、だあ!？」

襟元を引っ張られ、後頭部から後ろに倒れる。慌てて立ち上がり、硝子の棘を構えた。

「誰だ!？」

「こんにちは、八代くん」

そこにいたのは、同級生の少女だった。整った容姿で、周囲からの人気が高い。

「……なんだよ、池内」

八代はこの少女が苦手……いや、嫌いだった。おそらくそれは、相手も同じだろう。こちらを嫌っている雰囲気は、はっきりと伝わってくる。そのくせ親しそうに接してくるので、うっとうしい。

「べつつにい。ただ、ちょっとね」

「……用がないなら、さっさとどっか行け」

「なんで？」

すかさず訊ね返してくるので、返答に詰まってしまった。

「小風ちゃんに手を出すつもりなら、許さないけど？」

「……くそっ……！」

棘を振りかぶり、池内の胸元を狙って突き出す。しかし、あっさりとかわされ、額を突き飛ばされた。見る見るうちに、視界が暗くかすんでいく。

「うっ……！？」

わけも分からぬまま、視界が暗転した。

最終日、七日目の「ゲーム」は滞りなく終わった。

第一中学は完全に諦めていたので、六日目と七日目は完全に二中と一中との勝負だった。やる気を取り戻した生徒たちは良く動き、反動から立ち直った燕も参加して圧勝だった。

「じゃあ、ちょっと買い物に行ってくるよ」

「うん」

夕食の買出しに出かけた音亜を見送り、燕はリビングに戻った。ソファに身体を沈め、オレンジジュースをちびちびと飲む。

「ん？」

玄関のチャイムが鳴った。玄関を開けて、立ちすくむ。

「キミは……」

「久しぶりだね、神前くん」

髪の長い、整った容姿の少女が立っていた。「破壊者」の能力について、何かを知っているらしいが……

「話したいことがあるんだけど、ちょっとお邪魔してもいいかな？」

「……うん。どうぞ」

音亜が出かけていることもあって、リビングに招き入れた。椅子を勧め、紅茶を用意する。自分も一口飲み、訊いた。

「それで、話って……？」

少女は貌を上げ、わずかに微笑んだように見えた。

「神前くんの、能力について」

「……………」

やはり、予想通りだった。きっとこの少女は、「破壊者」の能力について、何か知っている。

「キミは、一体何者なの？ 『破壊者』について、何を知ってるの？」

「そうだねえ……………」

そういつて少女は考える素振りを示したが、質問には答えなかった。

「神前くんは、自分が『独り』だと思ったことはない？ すごく寂しくて、辛くて、怖いのに…………周りに誰もいない」

「そんなこと…………ないよ」

「ほんとに？」

少女は立ち上がり、側まで歩み寄ってきた。燕の頬に触れて言う。

「私はあるよ。ずっと…………ずっと前から、思ってる」

神前くんの答えを聞かせて…………と、少女は呟いた。

このときの少女の表情を見て、燕は思った。この名前も知らない少女は、自分と似ている気がする——。

すぐ前に少女の顔がある。真冬の雪のように冷たい瞳に見据えられ、身体が凍りついたように動かない。そんな感覚に襲われた。

「ボク、は……違う……」

やっとの思いで声を絞り出し、必死に言葉を紡ぐ。

「ボクは、『独り』じゃない。……さみしい時もあるけど、でも、みんながいる。音亜がいるから……だから、怖くない」

燕が言い切ると、少女はわずかに目を見開いた。まるで、その答えが以外だったように、理解できないというように、首をかしげる。

「分からないよ、神前くん。……でも、それがキミの答えなんだね……」

「うん」

はつきりと頷くと、少女はリビングを出た。見送りに玄関を出た燕に、後ろを振り返らずに言う。

「……気をつけたほうがいいよ、神前くん。その右手は、神前くん自身も傷つけちゃうから」

燕の家を出た後。少女は空を見上げて歩いていた。周りには誰もいない。一人きりだ。

冬はもう目の前だ。冷たくなってきた風と街の寂しさが、それを

物語っている。

——冬は、嫌いだ。

「気をつけなよ、神前くん……」

彼の細く、白い右手を思い出す。あのしなやかな手が全てを壊す力を持っているなんて、今になっても信じられない。

「今のままじゃ……何もかも、壊されちゃうよ……」？

最終日、終了。

文化祭？

修学旅行を賭けた「ゲーム」から数日後。小凧は、隔離地区第三中学校に来ていた。今日は第三中の文化祭である。

人ごみを歩くの苦手なので、目的の教室にたどり着くのに、予想以上に疲れてしまった。上がった息を整えて、模擬店の看板を見る。そのままの姿勢で固まり、声に出して呟く。

「……執事、喫茶……？」

ドアに張り付いて中を覗いていると、不意に内側から開けられた。

「きゃあっ!？」

前につんのめり、倒れる。しかしそこで、長身の少年に抱きかかえられる。

「お帰りなさいませ、小凧お嬢様」

「椿くん……!」

野々山は黒い執事服を着ていた。それが妙に似合っていて、かっこいい。小さく笑うと、芝居がかった口調で言った。

「お嬢様、こちらへどうぞ」

「ひゃあっ？　ちょ、椿くん!」

お姫様抱っこされ、教室中の注目を集めながら席につく。野々山がココアを持ってきて、すぐに去って言った。

「どうぞ。僕の奢りおごです」

「あ、うん……ありがと……」

小凧がココアを飲んでいると、野々山は制服に着替えて戻ってきた。向かいの席に座って小凧を待つ。

「じゃ、行こうか」

ココアを飲み終わった小凧の手を引き、野々山は席を立った。周囲の視線が集まるが、野々山は気にせず歩いていく。小凧は赤くなつた顔を隠すように、うつむいて歩いた。

「さて。どこか、ご希望の場所はございますか、お嬢様？」

「ねえ……お、お嬢様って呼ぶの……やめて……」

「あれ？ 嫌だった？」

「そうじゃなくて……恥ずかしいよ」

「ふうん？」

野々山に手を引かれ、幾つかの模擬店を回った。お化け屋敷を出たところで、ふと時計を見た野々山が声を上げる。

「あつ、やばい。もう劇始まつてる……!!」

「え？」

「最高に面白い劇があるんだよ。早くしないと、ラストを見逃しまう」

一階まで下りて体育館に向かう。入り口には、「パロディ版・ロミオとジュリエット」の看板。

体育館の中に入ると、観客たちの興奮は最高潮に達したところだった。舞台の上で、中性的な顔立ちのロミオと、金髪の小柄なジュリエットが演技している。

「ジュリエット、かわいい……」

純白のドレスを着て、ロミオに抱きかかえられるジュリエット。金髪が揺れ、細くしなやかな腕をロミオに伸ばす。

「男だけだな」

「……………」一瞬、野々山の言っていることが分からなかった。「……え？」

「だから、あのジュリエットは男だって。金髪は地毛だぜ？」

「うそっ？」

「ちなみに、ロミオは女だ」

「!？」

声にならない叫びを上げ、壇上の二人を見る。あの二人が、男女逆――？

小風が呆然としていると、場内を大歓声が包んだ。ジュリエットはロミオに抱きかかえられ、今まさにキスしようとしているところである。その二人に向けて、野々山が声援を送った。

「さあっ、いけ！ 勇気を見せろ、朝倉！」

文化祭？

劇を終えた燕たちは、舞台裏に引つ込むと座り込んだ。若干暗い顔をした音亜が隣に座る。

「おいおい、朝倉！　なんでラストでキスしなかったんだよ！」

「馬鹿言わないでよ！　あんな大勢の前でキ……キスしろ、なんて……」

野々山がやってきて、音亜と賑やかに言い争いを始めた。やれやれと眺めていると、野々山の後ろに、見覚えのある少女を見つけた。以前あったときはしてなかったが、今は眼鏡をかけている。

「こんにちは。久しぶり……って、ボクたちのこと、覚えてる……？」

「あ、はい……そのう、この前はごめんなさい。必死だったから、つい……」

「いや、こっちもちよつとやりすぎたよ」

少女は小凧と名乗った。どうやら野々山に気があるらしいことが、燕にも分かる。

その後、体育館を出て校舎に入った。ドレス姿のままなので注目を浴びてしまう。早く着替えようと想ったところで、安藤が息を切らして賭けてきた。

「神前っ……確かお前、ギター弾けたよな？」

「え？ ……うん、一応」

小さい頃、両親の勧めでピアノとバイオリンをやらされていたことがあるが、ギターは趣味でやったことがあった。もっとも、隔離地区に来る前のことだが。

「それがどうかしたの？」と訊ねると、安藤は渋い顔をした。

「いや、あのな……実はデブが、大食い大会の決勝戦に進んじまっ
て……これからバンド演奏の予定だったんだけど、ギター＆ヴォー
カルがいねえんだよ」

「うつ……」

嫌な予感がした。音垂の後ろに隠れるようにして訊ねる。

「要するに、ボクにギターをやれと……？」

「ヴォーカルもな」

思わずため息をついた。なんで、こうなるのだろう？

「頼む、この通りだ！ 失敗したっていい。俺は、お前の才能に賭
けたいんだ！」

その後。

安藤たちの練習は、これまでに何度か見ていたので、なんとか時間には間に合った。

——だが、時間ギリギリになって気づく。

「どうしよう……ボク、ドレスのままだよ……」

練習に集中していたので、着替えるのを忘れていた。我ながら見事なドジっぷりだが、もう着替えに戻っている時間はない。

「行くぞ、ジュリエット神前」

「いやだよ……」

慌てふためいていると、安藤によって舞台に引きずり出された。ドレス姿の燕を見て、観客たちがどよめく。「結婚してくれ、ジュリエットー！」という声も上がり、顔が真っ赤になるのが分かった。

「頼むぜ、天才」

「うう……」

今度デブに、おいしいケーキでもおごってもらおう。でなければ、割に合わない。

頭が真っ白になりつつある中、泣き顔でピックを振りかぶった。

「ジュリエットー！」

演奏が終わると、半ば放心状態の燕はフラフラと倒れそうになった。慌てて舞台裏から飛び出てきた音亜に、女子から「かつこいい！」との賛辞。

「は、早く戻ろ、燕くんっ」

「うん……」

音亜に支えられながら舞台裏へ戻る。そのとき一番後ろに席に、あの少女の姿を見つけた。

「！」

よく見えなかったが、一瞬目があつたような気がした。なんだか背筋に冷たいものが走る。

「どうしたの？」

「ん……なんでもないよ」

もう一度見るが、すでに少女の姿はなかった。見間違いだろうと思ひ込むことにした。

——あの子は、一体……？

冬は、もうすぐそこだ。

文化祭、終了。

修学旅行

無事に文化祭も終わり、修学旅行。

二泊三日の旅行で、今日は二日目の夜である。安藤はデブと一緒の部屋だが、やつは旅行の間、菓子を食べてばかりいた。

「うつめええええ!!」

「……静かにしろ、デブ。消灯時刻だぞ」

「おやおや。不良顔のアンドーが、そんな真面目な発現するなんてな。以外だ」

「野々山!? なんでここに……お前は神前と一緒にの部屋だろ!」

不意に現れた野々山に驚き、枕を投げつける。あっさりと「神の手」で防御した野々山は、いつものニヤニヤ笑いを浮かべながらベツドに座った。

「あの部屋は、今日は神前と朝倉の貸切だよ。邪魔したら悪いから、ここに来た。……ひひっ」

「なっ……!!」

安藤は耳を疑った。仲がいいカップルだとは思っていたが、まさかあの二人が、そこまで深い仲だとは……

「おやあ? 今、変なこと考えてないかい、アンドー」

「うつせー！」

まさか……そんなことは、ないよな。神前……？

少し時間をさかのぼり、今日の午後、京都の一角にて。

待ちに待った自由時間。集団から離れ、音亜はやつとの思いで燕と手を繋ぐことに成功した。近くの店を回り、少し緊張しながら会話を探す。何か言いかけたとき、燕の手に軽く力がこもった。

「あのね、音亜……」

「何？」

「ちょっと話があるんだけど……今日の夜、いい？」

思わぬ発言に足を止めた。隣を見ると、碧の瞳がわずかに濡れていた。

「野々山くんにはボクから話しとくから、部屋に来て……ダメ……？」

「え……あ、え？」

頬を染め、上目遣いにこちらを見てくる。こういうところは、おそらく燕のほづが女の子っぱいだろう。文化祭を思い出してしまった。

「……ダメ？」

まさか燕が……いや、でも、しかし……

思えばこのとき、「千里眼」を使っていればよかったのだが、このときはそこまで思考が及ばなかった。

「いいよ……じゃあ、夜、燕くんの部屋で……」

そして夜。音亜が燕の部屋を訪れると、すでに野々山はいなかった。シャワーの音が聞こえるので、おそらく燕は入浴中だろう。

「……………よし！」

決心し、部屋の明かりを消した。服を脱いで下着姿になり、やっぱり恥ずかしくて毛布に包まる。ベッドに丸くなって、燕を待った。心臓が早鐘を打つのが分かる。

そして、

「あれ？　なんで電気消してるの、音亜？」

「つつ、点けちゃだめ……！」

「？」

恥ずかしくて毛布に顔をうずめるが、ちらりと燕を見ている。暗くてよく見えないが、パジャマを着ていた。

「どうしたの？ 音亜……」

「え、あっ……燕くんも脱いでよ……恥ずかしい……」

「……へ？」

立ちすくむ燕の手を握り、ベッドに引き倒した。夏休みに、燕の姉から言われたことを思い出す。——ちよつと、大胆に……

ちよつとどころではないような気がしたが、燕のパジャマのボタ
ンに手をかけた。そこで燕が、慌てたように声を上げる。

「ねねねっ、音亜！ 一体何を……」

「は？」

「もしかして……何か、勘違いしてない……？」

その言葉を聞いて、「千里眼」を使った。暗闇に音亜の目だけが妖しく光り、すべてを知る。

「ボクはただ……せっかくの修学旅行だし、音亜と一緒に喋ったりしたいなあ……って。だから、その……そういう、意味じゃ……」

一瞬頭が真っ白になり、すぐに熱くなっていた。燕も頬を紅潮させているのが、暗い部屋の中でも見て取れる。

「……なんか……ゴメンね……？」

「燕くんの、ばかぁ!!」

——なんだか、いろいろ台無しだった気がする……

修学旅行、終了。

秋の戦争 あとがき

読者の皆様、こんにちは。イチゴダイフクです。

「夏の疾走」に引き続いて、第二部・「秋の戦争」も読んでいただき、本当にありがとうございます。

文化祭&修学旅行が終わり、第二部は終了です。……が、やっぱりまだ続きます。

「夏」のあとは「秋」！ そして「秋」の後は、「冬」！！
ということで、次回予告を少々。

新しく小凧も加わり、クリスマスに向けてテンションの上がつていく一同。平和に冬休みを過ごす中、能力に悩む燕の前に、あの少女が現れ「ゲーム」が始まります。

そして、燕と音亜の間にも亀裂が……

それでは、第三部・「冬の幻想」も、よろしくお願いします。m

（ ） m

冬の幻想 プロローグ（前書き）

先ほどサイクリングに行ってきましたが、下りのコーナーで転倒しました。見事なまでに無様に宙を舞いました……

……痛いです。・・（つム）・・。

冬の幻想 プロローグ

走る、走る、走る。

冬の冷たい風が、肌に突き刺さる。静かに冷え切った隔離地区を、音亜は全力で駆け抜けた。

「はあっ、はっ、な……ん……」

なんで？ さっきから、頭に浮かんでくるのはそれだけだ。必死に考えまいとするが、ふとした瞬間に、さきほどの光景が思い出される。

ようやく自分の家にたどり着くと、そのまま自分の部屋に行った。ベッドに倒れこみ、枕に頬をうずめて丸くなる。何かの間違いだ――そう思おうとしながらも、すぐに涙が溢れ始めた。次第に堪えきれなくなり、声を上げて泣き出す。

「なんでっ……なんで、あんなこと……」

悲鳴のような声で、彼の名前を呼ぶ。

「……なんでなの？ 燕くん……」

——もう、壊れてしまった。

あまりにも手ごたえの無い相手を見下ろし、少女はため息をつい

た。焦らすように、ゆつくりと歩み寄る。

「ひつ……来るな、ば、『化け物』！ ぎ……やああああー！」

醜い悲鳴を上げてのた打ち回る男に、少女は連続して能力を使った。瞬く間に気を失った男を一瞥し、その場を立ち去る。

「あー……ちょっとはすつきりした……かな？」

時折、強い衝動に襲われることがある。そのたびに少女は人を襲っているのだが、なかなか強い相手にめぐり合わない。だんだんストレスが溜まってきているのだが、我慢していた。

「『化け物』……か」

薄暗い空を見上げて呟き、先ほどの男の言葉を思い出した。思わずふつと笑いがこぼれる。そろそろ、始めてもいいだろう。

「始めようか、神前くん……『化け物』同士の、『ゲーム』を」

名前

「鍋が食べたい」

突然、デブが言った。その場の全員の頭の上に「？」マークが浮かぶ。

「いきなりなんだよ。お前、さっき夕食っただろうが」

「その体型になるのも頷けるね」

安藤と野々山がからかうが、デブは動じなかった。いつもの野々山のようにニヤリと笑う。

「そうじゃねえよ。ただ、今度みんなで鍋でもどうか……っ」と

冬休み初日。第三中の五人と小凧の六人は、燕の家に集まっていた。適当にダラダラと一日を過ごし、先ほど夕食を食べ終えたところである。

「いいんじゃない？ みんなで食べるの、楽しいし」

台所で洗い物をしていた燕が戻ってきた。後ろから音亜と小凧もついてくる。

「クリスマスとかも、みんなでパーティーでもする？」

「そつだな。じゃあそれも、神前の家で」

「えー、またボクの家？」

「いいじゃない。ちゃんと会費を請求すれば」

文句を言い頬を膨らませる燕を音亜がなだめる。修学旅行以来、少し触れるだけでも互いに赤くなっていたが、ようやく元通りになつてきた……たぶん。

野々山が起き上がり、「暇だよなあ……」と言つ。

「『ゲーム』が無いなんてな。暇でしょうがねえ」

そう、この冬休みは夏休みと違い、「ゲーム」が行われないことになつていた。外に出ることも出来ず、隔離地区の中でクリスマス、大晦日、元旦などのイベントを迎えるわけである。娯楽の少ない隔離地区の子供たちは、誰もが不満を募らせていた。

「なあ、鍋、いつにする？」

デブの質問に、場所を提供している燕が答える。

「うーん……明後日くらいでいいんじゃないかな。明日、準備してくよ」

「よろしく」

その後。またダラダラと時間を潰し、小凧がそろそろ帰ろうと腰を上げた。時計を見ると、午後九時を回っている。

「俺も帰ろつか。小凧、送ってくよ」

「……うん」

野々山も立ち上がり、それに安藤とデブも続いた。冬休みの間、音亜は燕の家に泊まることになっているので、燕と音亜だけが家に残ることになる。

「そつだ、豊崎さん」

「？」

玄関を出たところで、燕が小凧を呼び止めた。音亜の視線を気にしながら、周りに聞こえないように小声で訊ねる。

「第一中にさ……髪が長い、綺麗な子がいるでしょ？ 名前とか、分かる？」

「……か、神前くん……浮気はよくないんじゃない？」

「いやっ、そうじゃなくて。ただ……いろいろと事情が……」

あたふたと説明すると、小凧はすぐに、一人の名前を出した。彼女とは、仲のいい友達らしい。

「燕くん！ 髪が長い、綺麗な子がどうしたのかなー？」

「な、なんでもないよ！ うん、ほんとに……なんでもない、から……」

「話は、後でゆっくり聞かせてもらおうから」

両目が妖しく光っている音垂に手を引かれ、燕は家の中に連れ戻された。廊下をずるずると引きずられながら、小凧から教えてもらった少女の名前を思い出す。あの少女と同じ人物かは分からないが、少しでも情報が欲しかった。

——池内、雪美。

冬の「ゲーム」

翌日の夕方。燕と音亜は、明日の鍋の材料を買いに出かけた。六人分の食材を買い、自転車を二人乗りして帰る。背中に音亜の体温を感じ、わずかに頬が赤くなった。

「もうすぐクリスマスかあ……ねえ、何か欲しいプレゼントってある?」

「プレゼント?」

「うん。クリスマス・プレゼントだよ」

ふと思いついて訊ねると、音亜はしばらく考え込んだ。「別に……」と呟く。

「別に、プレゼントはいらないよ。……でも、行きたいところなら……」

「どこ?」

隔離地区の中に、音亜が行きたがるような場所なんてあったらうか。あれこれと思考をめぐらすが、いまいち浮かんでこなかった。

「中央公園の近くに、大きなクリスマスツリーがあるんだって。ライトアップとかもされて、綺麗みたいだよ」

「へえ……じゃあ、一緒に行く?」

「もちろん。約束だからね」

「うん」

それから池の近くまで、他愛ないことを喋っていた。橋を横目に見ながら通り過ぎようとして、慌てて停まる。

「どうしたの？」

「いや、ゴメン……ちょっと用事があるから、先に帰ってて」

「？」

不審そうにする音垂を先に帰し、その後姿が見えなくなったところで燕はため息をついた。まったく厄介だが、しかしこちらも探していたところである。

「今日は、何の用？」

「あはは、そんなに怒らないですよ。デートの邪魔したのは謝るからさ」

長い黒髪の、整った顔立ちの少女が立っていた。軽く微笑んで歩いてくる。

「久しぶりだね。修学旅行は楽しかった？」

「うん。……訊きたいことがあるんだけど、いい？」

「何？」

「キミの名前。キミは、池内……」

小凧から聞いた名前を口にしようとして、少女が動いた。

「!？」

すばやく繰り出された蹴りを紙一重でかわし、後ろに跳ぶ。少女は距離を詰め、右手を繰り出してきた。

「っ……」

もう一度距離をとると、髪を縛っていたゴムが切れた。金髪が風に揺れる。

「いきなり何を……」

「べつつにい……ただ、ちょっと遊んでみようと思って」

少女がまた動こうとしたところで、燕は地面に右手をつけた。「破壊者」の能力が発動し、少女の足元が崩れる。

「きゃっ」

少女はギリギリで後ろに跳んだ。連続で能力を使い、跳んだ先の地面を崩す。だが……

着地と同時に、少女は右手を地面につけた。短く閃光が走り、崩落が止まる。

「なっ……」

「えへへ。すごいでしょ」

一体何の能力だろう。秋の「ゲーム」では、小凧の「巻き戻し」によって相殺されたことがあったが、まさか同じ能力ということは無いだろう。

「よそ見してちゃ、危ないよ」

ふと聞こえた少女の声に思考を中断し、身体を捻って蹴りかわす。気絶させて逃げようと右手を突き出し、同時に繰り出してきた少女の右手とぶつかった。閃光が走る。

「っ……あ!？」

衝撃が右腕を駆け抜け、大きく後方へ吹き飛ばされた。ごろごろと地面を転がり、わずかに痛む右手を押さえて立ち上がる。

「今のは……」

——「破壊者」の能力が、打ち消された……？

「あっ！ 何この帽子、かわいー!」

呆然とする燕の前で、地面に落ちたハンチングを少女が拾い上げた。小鳥の絵柄を見つめながら言う。

「ねえねえ、この帽子どこで買ったの？」

「……姉さんから、もらったんだ」

「へえ……大事なものなんだね」

「……返して」

嫌な予感がして、少女に歩み寄る。上目遣いに睨みつける燕を見ると、少女はうれしそうに微笑んだ。その笑顔が、とても冷たく見える。

「返して」

「どーしよっかなあ……？」

「返して！」

目の前まで詰め寄った。手を差し出し、返すように促がす。

「じゃあさ、『ゲーム』をしようよ」

「？」

少女は一層優しい笑顔を浮かべて——しかし、視線だけは冷たく鋭かった。

「神前くんの大切なモノ、全部壊してあげるよ。……ちゃんと、守れるかな……？」

心の支え（前書き）

こんにちは、イチゴダイフクです。
読者の皆様、お待たせいたしました！
ようやく新しいパソコン
が到着し、投稿を再開できます。

心の支え

「ボクの大切なものを……壊す？」

「そうだよ、神前くん。だから……守りたかったら、あたしと闘って」

「なんで……？」

「もう、我慢できないの」

何を？ そう訊ねようとして、少女が地面に手をついた。燕の足元が崩壊し、転倒する。だが同時に、燕は少女の能力について確信を持った。

「キミも……『破壊者』なんだ……」

「うん。あたしも、自分と同じ能力を持った人がいるって知ったときは驚いたよ」

少女は笑って、こちらに向かって駆け出した。一瞬迷い、逃げ遅れる。突き出した互いの右手がぶつかった。またしても後方に吹き飛ばされ、地面を転がる。

「……なんで……？」

連続して繰り出されてくる少女の右手から逃れながら呟く。同じ「破壊者」の能力のはずなのに、なぜ打ち負けるのか……

「うあっ！」

一際大きく飛ばされ、高い位置から落下する。身体をしたたかに打ちつけた。

「っ……は、はあっ……」

すでに能力の反動が表れ始めていた。震える膝を抑えつけて立ち上がり、右手を構える。激しく体力を消耗している燕に対し、少女は全く反動が表れている様子はない。

「あれー？　もしかして、もう能力の反動が出ちゃった？」

余裕綽々で歩いてくる少女に向かって、燕は意を決して突進した。他人を攻撃するのは抵抗があるが、仕方がない。

しかし、燕の攻撃は容易くかわされ、代わりに腹部に強烈な蹴りを食らった。

「ぐっ……あ……」

痛みにつづくまる。喘ぐように呼吸していると、少女に身体を抱き起こされた。反射的に突き飛ばし、距離をとる。

「あはっ。……どうする、神前くん？　まずは何を壊そうか？」

「……………」

上目づかいに睨みつけるが、少女はひるんだ様子もなく歩み寄ってきた。素早く背中に腕を回され、抱き寄せられる。

「離せ……っ」

「そーだなあ……まずはやっぱり……」

必死にもがくが、反動のせいで身体に力が入らない。そうしているうちにも、少女の整った顔が近付いてきた。その瞳に吸い込まれるような感覚にとらわれる。

「んっ………」

「!?!」

不意に少女の唇が触れた。逃げることもできず、為されるがままにされる。

「な……にを……」

ようやく長いキスが終わると、少女は燕の後ろを指差した。それを追って振り向き、愕然とする。

「……燕、くん……?」

燕たちから少し離れた建物の陰に、音亜が立ち尽くしていた。帰りが遅いのを心配して、迎えに来てくれたのだろう。しかし、見られてはいけないところを見られてしまった。

しばらく沈黙し、その頬に涙が伝った。音亜は目元を押さえると、踵を返して走り出した。

「音亜！」

後を追おうと駆け出すが、踏み出した脚に鈍い痛みが走った。次いで全身が切り裂かれるような悲鳴を上げる。そのまま脚をもつれさせて転倒した。

「っ、う……ああ……」

痛みと悲しみに涙が溢れ出てきた。血がにじむほどに唇を噛みしめる。

「一つ目はやっぱり、キミの心の支えだよねえ。どう？ 今の気持ち」

冷たい笑みを浮かべる少女を見上げると、ふつふつと怒りが込み上げてきた。それがほかの感情を押し流し、ふらふらと立ち上がる。

「あ……ああああっ！！」

咆哮し、怒りに身を任せて突っ込んだ。振りかざした右手が衝突し、今度は吹き飛ばされることなく相殺される。

「……やっと、本気になってくれたね」

「うるさい」

後ろに距離をとった少女を見据え、あの日のように右手を構える。

——全部、ぶっ壊してやる。

「独り」(前書き)

高校の学校説明会に行ってきました。微妙です……

「独り」

——ぶっ壊してやる。

そう呟いた燕は、うれしそうに微笑む少女に向かって右手を突き出した。同じく右手で防いだ少女を吹き飛ばし、駆け寄って連続で能力を使う。

「あははっ。 そうだよ……もつと壊し合おうよ！」

「……黙れ……！」

反動で痛む身体を無視し、右手を振り続ける。しかし、

「っ……あ……？」

不意に身体から力が抜け、地面に倒れ伏した。身体はすでに限界を迎えていて、痛みすら感じない。ただ、胸の奥にぽっかりと穴が開いたような、そんな感情に包まれていた。

「もう限界みたいだね」

少し寂しげな声が聞こえたが、そちらを振り向くこともできない。耳元で、少女がささやく声が聞こえた。

「ちょっと物足りないけど……ご褒美に、いくつか教えてあげるね。あたしの名前は、キミの予想通りだよ。池内雪美っていうの」

頭が朦朧とし、視界が霞んできた。声を上げることも、指一本動かすこともできない。

「それからもう一つ。神前くと違って、あたしは反動を受けないよ。壊すことを、躊躇しないからね。……ていうか、むしろ楽しんでるし」

周囲の音、におい、色——すべてが遠ざかり、燕は意識を失った。

意識を失った燕を背負い、雪美は燕の家に向かっていった。燕とはまだ、「ゲーム」を楽しみたい。しっかり悩み、苦しんで、もっと壊れてほしい——自分のように。

「楽しみだなあ……次は、何を壊してあげようかな」

ねえ、神前くん。

「『独り』にしてあげるよ」

——キミと一緒にいられるのは、あたしだけだから。

目を覚ますと、燕は自宅のリビングにいた。ソファから身体を起こし、テーブルにメモが置かれていることに気付いた。どうやらあの少女、雪美が運んできたらしい。

感覚がマヒしているようで、反動による痛みは感じなかった。ふらつきながら浴室へ向かい、シャワーを浴びる。こびりついた血を

洗い流し、怪我した箇所を確認した。思っていたよりは少ない。

「はぁ……」

今はまだ平気だが、そのうち激しい痛みが訪れるのだろう。そんな風にぼんやりと考えながら、パジャマに着替えて二階に上がる。

「うっ……」

突然、ひどい吐き気に襲われた。トイレに駆け込み、嘔吐する。

「う……え……っ」

いくら吐き出しても吐き気は治まらず、無理やり絞り出すようにして吐き続けた。

数分が経っただろうか。ようやく吐き気が治まり、口をすすいで部屋に向かった。吐いている最中から身体が痛み始めていて、立っているのが辛い。

暗い部屋に入り、ベッドに倒れこむと、それまで忘れていた孤独感に襲われた。今ここには、いつも助けてくれた音亜はいない。もう、互いの関係は壊れてしまった。

「……音亜……」

これから酷くなる痛みや苦しみを恐れ、寂しさに押しつぶされそうになった。毛布に包まって丸くなり、必死に涙をこらえる。

「お願い、助けて……」

眩いた燕の身体に、全身を引き裂かれるような激痛が走った。

反動

「っ…………っ」

翌日。音亜が目を覚ますと、時刻はすでに午前十時を回っていた。昨日はずっと泣いていたから、あまり寝ていない。

食欲がなく、朝食は食べないことにした。そこでふと、今日はみんなで鍋を食べる予定だったことに気付く。だが……

「…………行かなくても、いいよね…………」

今は、みんなと一緒に遊ぶ気分ではない。それに——あれが何かの間違いだったとしても——燕に会うのが辛かった。もう一度会って、「千里眼」を使えばすべて分かるのだが、事実を知ってしまうのが怖い。

「…………もしもし…………小凧ちゃん？」

「あ、朝倉さん？ どうしたの？」

とりあえず小凧に電話し、今日の予定をキャンセルする旨を伝える。しかし、返ってきた言葉に耳を疑った。

「ああ、神前くんが風邪引いちゃったんでしょ？」

「…………え？」

思わず声を上げた。少し早口になって問い詰める。

「燕くん、風邪引いてるの？」

「？……朝倉さん、知らなかったの？ てつきり、神前くんの看病で来れないんだと……」

そこまで聞くと、音亜は電話を切った。慌てて着替え、家を飛び出す。小凧は風邪だと言っていたが、なんだか嫌な予感がする。息を切らして自転車を走らせ、燕の家に到着した。

だが……

「……どうしよう……」

玄関を開けようとして、そのまま動きを止める。来たのはいいが、これからどうすればいいのだろう。燕のことは心配だが、会う勇氣はない。

それでもやはり気になり、一度だけチャイムを押した。燕は出てこない。

「寝てるのかな。……大丈夫、だよね……？」

しばらく待っても燕は出てこなかったので、帰ることにした。踵を返したところで、背後のドアが開く。少し驚き、後悔しながら振り返り向いた。

「……音亜」

燕は壁にもたれて立っていた。顔は真っ青で、荒い呼吸を繰り返

している。その様子がなんだかただ事ではないような気がして、一つの可能性を疑う。

「もしかして、燕くん……」

音亜が訊こうとすると、燕の身体が揺れた。崩れ落ちるようになり、ちらに倒れこむ。慌てて抱きとめると、燕はかすかに笑っていた。

「よかった……音亜、帰ってきてくれた……」

音亜にすがりつくようにして、燕は意識を失った。

倒れた燕を部屋のベッドまで運ぶと、音亜はその横に座った。

「燕くん……」

呟くと、燕はうつすらと目を開けた。苦しそくに胸を押さえながら、声を絞り出す。

「ごめんね、迷惑かけちゃって……ごめんね……」

「別に。……ねえ、なんで？」

燕のほうを向かずに訊ねる。顔を向き合わせてしまうと、感情を見抜いてしまいそうで怖かった。

「なんで、風邪だなんて嘘をついたの？ 能力の反動だって分かっていたら、すぐに戻ってきたのに。なんで……」

「だって、あんなことがあって……音亜、きつと怒ってたと思うし……それに、泣いてた」

「……………」

このままでは泣き出してしまいそうな気がして、音亜は部屋を出た。後ろ手に閉めたドアにもたれ、うつむく。部屋の中に聞こえないように、声を上げずに、涙を流さずに、泣いた。

崩壊（前書き）

今日、合唱の中間発表がありました。とても、辛かったです。

崩壊

夕方六時。

この日の燕の容態は、おそらく今までで最悪だった。

全身が切り裂かれるように痛み、それが消えると突然胸が苦しくなる。身体中の骨が軋み、視界には幻覚がちらつく。

「つつ……ああ……」

身体から痛みが退き、次に訪れる苦痛に備える。といっても、何もできることなんてないのだが。

「つつ……！？」

足もとに気色の悪い感覚を覚え、身を縮める。おぞましいものが這い上がってくるようで、幻覚にはリアルすぎる。

「あつ……い……やあ……」

脚を、腕を、首筋を……気色の悪い芋虫や蛇、蜘蛛が這い上がってくる。必死に振り払おうとするが、幻覚は消えない。今まで、こんなにはつきりとした幻覚を見たことはなかったので、対処法も分からない。

「……ダメ……やめて、消えてよ……」

爪を立てて全身を引っ掻き、暴れる。しかし、身体が抑えつげら

れているようで、思うように動かない。逃れられない幻覚によって、精神は確実に追い込まれていく。

「やめ、て……助けて……」

「燕くん！」

音亜の声に意識を呼び戻された。いつの間にか部屋には電気がつけられ、幻覚が消えている。首筋や腕に、生々しいひっかき傷があった。呼吸を整え、身体を起こす。

「よかった。……悲鳴が聞こえたと思ったら、全身引つ掻いて暴れてるんだから」

そう言っただけ息をついた音亜を見ると、燕と同様にあちこちにひっかき傷があった。おそらく、暴れる燕を止めようとした時についたものだろう。痛々しい傷を見つめ、燕は呟いた。

「……もう、いいよ」

「？」

キョトンとする音亜を見て、懸命に言葉を探す。

「もういいよ。……これ以上迷惑かけちゃ悪いし……音亜、帰っていいよ。みんなと鍋でも食べてきて」

「……………」音亜は一拍遅れて訊ね返した。「…………え？」

「帰って。もう、見舞いには来なくていいから、早く出てって」

燕は泣き出したくなるのをこらえながら、言葉が続けた。これ以上は、一緒にいられない。音亜の傷を見て、目をそらす。

「何言ってるの、燕くん……」

「だからっ……早く、出てって。ボクに関わらないで」

だんだん口調が刺々しくなっていくのを自覚しながらも、止められない。これ以上音亜と、関わってはいけない。傷つけてはいけない。

「……なんで、そんなこと言うの？ 私はただ、燕くんが心配で……」

音亜を無視してベッドにもぐりこみ、聞きたくないという風に毛布を頭からかぶった。聞こえてくる音亜の声は、わずかに震えている。

「昨日のあれだって、何かの間違いでしょ？ 私、もう怒ってないから……。ねえ、燕くん……」

胸が痛むのは、苦しいのは、きっと反動のせいだ。涙がにじんでくるのも、無意味に悲しくなるのも、全部反動のせいだ。そうに決まってる。

「燕くん……」

「帰れ！」

叫ぶと、音垂は何も言わなくなった。やがて部屋を出て行ったころ、ようやく堪えていた涙を流す。昨日充分に泣いたというのに、涙は枯れない。

「もう、無理だよ……」

助けてくれる人は、もういない。何もかも、崩れ落ちて消えていくのだ。

——こんな右手、無ければいいのに……

忌々しい右手を握りしめ、痛みと眠りを待った。

こんな右手（前書き）

これから二者面談です。 ああ……嫌ですねえ……

こんな右手

夜。音亜はまだ、燕の家に行った。

燕には帰れと言われたが、やはり心配である。入浴を済ませ、リビングのソファに転がった。

燕はなぜ、あんな風になってしまったのだろう。秋の「ゲーム」のときから気になってはいたが、精神的に不安定に思える。原因は一体……

「そういえば、あの娘……」

燕にキスしていた少女……確か彼女は、秋の「ゲーム」のときに見かけたことがある。第三中学校に来て、燕と話していた。彼女が、何か関係しているのだろうか。

そこまで考えたところで、思考を中断された。リビングを飛び出すと、二階から悲鳴が聞こえる。

「燕くん……！」

急いで階段を上がり、燕の部屋に駆け込んだ。暗い部屋の中、燕は一人で反動に苦しんでいる。

「ねえ、大丈夫？ 燕くん！」

額に手を置くと、かなりの発熱だった。痛みに身体を押さえ、苦しげに喘ぐ。燕の手を両手で包みこみ、音亜はそばに寄り添った。

どれくらい時間が経ったか。燕はようやく落ち着くと、音亜に氣付いて手を振り払った。

「……帰ってなかったの？」

「うん。……だって、心配だよ」

「帰って」

燕は短く言うと、寝返りを打ってこちらに背を向けた。しかし、拒絶されたからと言って、見捨てて帰るわけにはいかない。腕を伸ばし、肩に触れた。

「燕くんっ、私の話を……」

「触るな！」

乱暴に振り払われた。少し頭にきて、問い詰める口調で訊ねる。

「あの子はいったい誰なの？ あの子のせいで、燕くんは悩んでるの？　なんで、こんなになるまで能力を使ったの？」

「……音亜には関係ない」

「関係あるよ！」

燕の身体を強引にこちらに向かせ、一気にまくしたてる。

「前に約束したじゃないっ……燕くんは、私が守るって。私なんかの能力じゃ頼りないかもしれないけど、でも、少しくらい相談してくれたって……」

「それじゃダメなんだよ！」

燕はベッドから身体を起こし、声を張り上げた。驚き萎縮する音
亜に、燕は続ける。

「夏の『ゲーム』のときとは違うんだよ！ これ以上関わったら、絶対に無事じゃ済まない……これは、『破壊者』同士の狂った『ゲーム』なんだ！」

夏休みの「ゲーム」で安藤に襲われたとき。燕は今、あのときのような空気を纏っていた。部屋の暗闇は、まるで燕の心そのものだ。
「このままじゃ、全部壊れるんだ！ だからもう、ボクには関わ
な！」

反射的に、身体が動いた。乾いた音が響き、一瞬遅れて、燕の頬を張ったということに気付く。しかしそれでも気持ちは治まらず、握りしめた両手をポカポカと振り下ろした。

「やめてっ、やめてよ！ ……なんでそんなこと言うの？ 私だけじゃない……安藤くんも、デブくんも、野々山くんも……小風ちゃんだっているのに、なんで『独り』になりたがるの！」

その時、燕が悲鳴を上げた。軽く殴っていたつもりだったが、反動によってダメージを受けている身体には堪え^{こた}えられない。身体を抱くようにしてうずくまり、痛みに震えている。

「あ……………」

守りたかったはずなのに、いつの間にか傷つけている。他人の心は読めるのに、自分の感情を制御することができない……

「ごめんね……………」

呟いたのは、燕のほうだった。細い指先が音亜の頬に触れ、そつと涙を拭う。

「でもね、音亜。守られてばっかじゃ嫌なんだよ。ボクのせいでみんなが……音亜が傷つくのは、絶対にやだ」

燕の背中に腕を回したが、今度は拒絶されなかった。

「こんな右手で何ができるかは分からないけど……ボクも、音亜を守るから」

襲撃（前書き）

最近けっこう寒いので、腹巻なしでは眠れません。友達に言ったら笑われましたが……腹巻って、すばらしいと思いませんか？

襲撃

鍋パーティーの翌日。小凧と野々山は、燕の家に向かって並んで歩いていた。

「ねえ、椿くん。安藤くんと、デブくんは？」

「あー。なんかあいつら、いろいろ忙しくて見舞いどころじゃないって」

特にするべきこともなく暇なので、これから燕の見舞いに行く途中だった。どうやら風邪をひいたらしく、昨日の鍋パーティーは小凧の家で行った。

「……椿くん。手、寒くない？」

「ん？ ああ、手袋無くしちゃってさ」

「もう……」

いつものように笑う野々山の手を、両手で包みこんだ。一瞬驚いたような顔をしたが、すぐにまた笑顔になる。少し恥ずかしかったが、小凧もつられて笑った。

寒さのためか、周りに家が少ないためか、周囲に人影はなかった。これなら、堂々と手を繋いでいられる。

曲がり角を一つ右に曲がり、不意に後ろから足音が聞こえた。何気なく後ろを振り返ろうとして、野々山と繋いでいた手が離れた。

「!？」

野々山が前方に吹き飛ばされ、地面を転がった。慌てて振り返り、仲の良い友人の姿を見つける。

「雪美ちゃん……？」

「おはよー、小凧。朝からデート？」

池内雪美は、こちらに右手をひらひらと振っていた。冬休みなので会うのは久しぶりだが、なにやら怪しげな笑みを浮かべている。

「小凧、逃げろ！」

「え？」

後ろから聞こえた声に振り向く前に、雪美が動いた。間一髪でかわし、突き出された右手が空を切る。

「……キミ、野々山くんだっけ？ 邪魔だよー」

雪美の目がすつと細められた。凶悪な光を宿し、小凧の脇をすり抜けて野々山に接近する。

「くそっ」

飛びかかろうとしていた雪美の動きが止まった。野々山的能力「神の手」により、雪美は全身を握りしめられる。

「？ 何、これ……？」

呟く雪美の手元で、短く閃光が弾けた。そのまま何事もなかったかのように動き出す。

「うそ……」

小凧も以前、「神の手」で握られたことがあるが、かなりの強さだった。それを簡単に破るとは、雪美の能力はいったい何なのだろう。詳しくは知らないが、確か弱い能力だと言っていたはずだ。

「あはっ」

はしゃぐ様な声とともに、雪美の右手が野々山の頭を一撃した。横に吹っ飛び、塀に身体を打ち付けて倒れる。

「椿くん！」

悲鳴のような声を上げて駆け寄り、野々山を助け起こす。野々山は顔をしかめて、小さく呻いていた。

「雪美ちゃん……なんでこんなこと……っ」

「べつつにい。ただの『ゲーム』だよ」

「……………？」

疑問に思いながらも、野々山の回復を優先した。手袋をとって左手を添え「巻き戻し」を使う。しかし、傷が完全に塞がる前に、雪美に左手をつかまれ引き離された。

「ちょ、離してっ……早く手当てしないと……」

「じゃあさ、小凧も一緒に『ゲーム』しようよ」

「……『ゲーム』？」

「うん」

うなずいた雪美の雰囲気を押され、思わず後ずさった。冷たい冬の風が肌に突き刺さる。

「野々山くんって、小凧の大切なものだよね」

雪美はそう言って、野々山の頭に右手を持っていく。最悪の展開を予想した小凧は、右手を振った。

「やめて！」

雪美の目の前で小さな炎が弾けて消えた。複合能力者である小凧の、一つ目の能力。「無限の炎」

「『ゲーム』、やる気になってくれた？」

「……『不死鳥^{フエニックス}』」

返事の代わりに、炎の巨鳥を作り上げた。真っ赤な炎が、冬の凍えた空気を焦がす。

「第二ラウンド、開始だよ」

雪

先に動いたのは小凧だった。右手を振ると、不死鳥が襲いかかる。

「へえ……」

雪美はいたって冷静に、不死鳥に向けて右手を突き出した。ぶつかった瞬間、閃光と共に炎が四散し、熱風が吹きぬける。

「……それだけ？」

雪美はクスクスと笑った。それに構うことなく、小凧は炎に「巻き戻し」を使う。

「もう一回……！」

再生した不死鳥が空に舞い上がり、その鋭い爪をかざして急降下した。雪美の周りが炎に包まれ、今度こそは効いただろうと野々山のもとに向かう。しかし、

「ほんと、今日はあったかいよね、小凧？」

「！」

またしても炎は破られ、雪美は平然とそこに立っていた。もう一度左手をかざすが、雪美が右手を振ると「巻き戻し」が打ち消される。

あたりに拡散した熱波が消える前に、雪美が動いた。飛び散った

火の粉をかいくぐり、瞬く間に距離を詰めてくる。

「きゃっ」

身体をひねって避けるが、右手がわずかにかすった。弾かれた眼鏡が宙を舞い、バラバラに碎け散る。戸惑っている隙に、脇腹に蹴りを食らった。

「っ……」

よろめき、塀の側まで追い込まれた。雪美はこちらを見ずに、空を忌々しげに見上げながら歩み寄ってくる。

「見て、小凧。雪だよ」

空からは雪が降り始めていた。舞い降りてくるそれらを眺め、雪美が呟く。

「雪って綺麗だね。真っ白で、ふわふわで……」

苦し紛れに炎で反撃しようとするが、その前に雪美の右手が頭を撫でた。

「……でもね、あたし、雪って嫌いなんだ」

「あ………」

頭にチクリと痛みが走り、小凧は意識を失った。

「だって、すぐに溶けて消えちゃうし。簡単に壊れるものって、っ

まんない」

二人を襲った後、雪美は小凧を倉庫まで運んだ。派手にシャッターが壊された倉庫を横目に、あらかじめ目星をつけておいた倉庫に入る。あらかじめ鍵は壊してあった。

「じゃ、ちよつと寝ててね」

気を失っている小凧を隅に横たえ、入り口にみを潜めた。耳を澄まし、近づいてくる足音を確認する。

「……小凧！」

倉庫に野々山が入ってきた瞬間、雪美は右手をかざして襲いかかった。野々山が能力を使う前に腹に触れ、衝撃とともに倉庫の端へ吹き飛ばした。

「ダメだよ。尾行はもつと慎重にやらなきゃ」

野々山が後ろからついて来ているのは分かっていた。もつとも、野々山まで運ぶのが面倒なので、わざと後を追わせたのだが。

「く、そ……！」

野々山は呻き、こちらに右手を向けてくる。全身を握りつぶされるような力がかかるが、問題ない。

「破壊者」の能力で打ち消し、余裕を見せつけながら歩み寄る。

「残念でしたー。……ま、八代くん到手間取ってるようだったし、

期待はしてなかったけど」

「てめっ……」

何か言いかけたが無視して、小凧と同様に意識を壊す。二人並べて床に転がし、携帯電話を探した。野々山のを手にし、電話をかける。電話の相手は決まっていた。

「……もしもし、神前くん？」

私が……

「んー……」

音亜が目を覚ますと、燕は穏やかな顔で眠っていた。寝かしつけている間に、一緒に寝てしまったらしい。思い返してみれば、いろいろなことがあって疲れていたと思う。

燕はまだ微熱が残るものの、だいぶ体調が良くなってきたらしく、痛みや幻覚に襲われることはなくなっていた。

「やっぱり、精神的なもの……なのかな」

「破壊者」の反応には、燕の精神的な問題が関係しているのではないか。音亜はそう予想していた。今

まで何度も反動に苦しむところを見てきたが、今回は一層酷かった。

「燕くんは、優しすぎるんじゃないかな……？」

燕は優しい。しかし、その優しさのせいで傷つきすぎるのではないか……

そんなことを考えていると、燕はわずかにこちらに身を寄せてきた。すやすやと眠る燕の頬をつつくと、くすぐったそうに微笑んだ。音亜もつられて笑う。

一緒にもうひと眠りしようか。そう思って毛布を引き寄せると、携帯電話が鳴った。音亜ではなく、机に置いてある燕のものだ。一瞬迷った後、ベッドから起きだして

手に取った。野々山からである。

「……もしもし、神前くん？」

「？」

しかし、電話の主は野々山ではなかった。女の声だが、小凧とは違う。

「……誰……？」

野々山でも小凧でもないとしたら、いったい誰だというのだろうか。少し警戒しながら訊ねた。

「えー？ そっちこそ、いったい誰なの？」

逆に訊ね返された。答えようか迷っていると、相手は勝手に納得したようだった。

「ああ、音亜さん……だっけ？ もしかして、仲直りしちゃった？」

その少女の言葉から、音亜は電話の相手に気付いた。あの……燕に近付いていた少女。

ふつつつと湧いてくる怒りを抑えながら、質問には答えずに訊ねる。

「なんであなたが、野々山くんのケータイから電話なんてしてるの？」

「神前くん、『ゲーム』の第二ラウンドのお知らせを、ね」

「……燕くん、何をするつもり？」

「だから、『ゲーム』だって」

少女は「あははっ」と笑う。「ゲーム」という単語が気になるが、訊ねる前に少女が言った。

「早く来ないと、二人がどうなっちゃうか、わかんないよ？」

——二人……？

「……野々山くんと小凧ちゃんが、どうしたって……？」

「気を失って、暗い倉庫に倒れてます。きゃはっ」

「なっ……」

大声を上げそうになって、燕を起こさないように部屋を出た。一階に下りて、会話を再開する。なんだか嫌な予感がした。

「神前くん、いるんでしょ？ 早く助けに来ないと、友達の二人が危ないんだけどなあ」

「燕くんは、今寝込んで……」

「知ってるよ。だって、あたしのせいだし」

音亜は、だんだんと心臓が早鐘を打つのが感じた。この少女は…

…危険だ。

「じゃ、ちゃんと伝えといてね。くれぐれも、一人で来るように」

「ちよつと、待つ……」

電話はそこで切れた。しばらく呆然とし、それからすぐに思考を巡らせる。

場所の予想はついている。では安藤とデブに助けを求めるか。しかし少女は、一人で来るようにと言っていた。だが、燕はまだ完全に回復していない。体調が戻ったとしても、燕を苦しめている相手なら、行かせたくはない。

「……私が、行かなきゃ」

呟き、急いで支度を始めた。燕にメモを残して家を飛び出る。ずっと家の中にいて気付かなかったが、今日は雪が降っていた。

静かに雪の降る隔離地区を自転車で駆け抜ける。冷たい風が身体を包みこみ、音歪を不安にさせた。

電話

夏休みの「ゲーム」で、安藤に捕まり、闘ったとき。少女がいるのは、おそらくあの大きな倉庫が並んだ場所だ。

そう推測した音亜は、一度家に帰って使えそうなものを探した。拳銃はもう弾がなくて使えないので、今ではただの観賞用だった。手頃なナイフを上着の下に忍ばせ、倉庫に向かう。

「野々山くん！ 小風ちゃん！」

自転車を降りて、立ち並ぶ倉庫の前を駆けながら呼ぶ。返事はないが、一か所だけシャツターが開いている倉庫があった。明らかに、怪しい。

ナイフを一本手に持って、慎重に踏み入る。倉庫の中は、ほこりっぽく汚れている。薄闇の中に目を凝らし、奥の方に立つ人影を一つ見つけた。背景に紛れる黒を基調とした服を着ていて、それとは対照的な白い肌がぼんやりと浮かび上がって見える。

「あれー？ 神前くんじゃないのお？」

「……野々山くんたちは？」

無視して訊くと、少女は黙って倉庫の隅を指差した。暗くてよく見えないが、二人、転がっているのが分かった。

「しょうがないなあ、もう。あたしは神前くんと遊びたかったのに」

少女の声が暗く淀んだ感じがした。とっさに「千里眼」を使い、攻撃を予測して横に跳ぶ。勢いよく接近してきた少女の右手が空を切った。

「へえ……」

少女はこちらに向き直ると、地面に右手をつけた。また思考を読み取り、その場を飛び退く。寸前まで音亜が立っていた場所が、ひび割れて崩れた。

「やっぱり……」

燕の言っていたことを思い出し、少女の能力に気付いた。燕と同じ、「破壊者」の能力だ。

少女の手元が光ったのに続いて、音亜の頭上に閃光が走った。音亜は一直線に少女に向かって駆け抜け、壊れて降り注いでくる残骸を避けた。暗闇に妖しい光の尾を引きながら、地面に手をついたままの少女に肉薄した。

「！……」

一瞬、少女が焦りを感じたのが読み取れた。微笑を浮かべていた顔が引きつる。

足もとが崩される寸前に跳躍し、ナイフを振りぬいた。銀色の刃が閃き、必死にかわした少女の長髪をわずかに散らす。

攻撃の手が予測できれば、こちらにも勝機はある。隙について二

人を助け出せばいいだけだ。

しかし、

「!？」

油断した隙に、ナイフの刃を少女が掴んでいた。閃光と共に刃が砕け、粉々になって舞い散る。

「……そんなモノ振り回しちゃ、危ないよ」

「っ……」

もう一本ナイフを取り出そうとして、少女の突き出した右手が上着を掴んだ。びりびりに引き裂かれ、中に忍ばせていたナイフが床に落ちる。

「……きゃあっ……!」

反射的に拾おうとした右手を、力いっぱい踏みつけられた。髪を引っ張られて床を転がり、みぞおちに一発食らう。

「だーいぎゃーくてーん!」

少女は残酷な笑みを浮かべて、うれしそうに声を上げた。音亜の上に馬乗りになって、あごを持ち上げる。

「どう? 今の気持ちは。神前くん、『助けてえ!』って言いたくない?」

少女は野々山の携帯電話を取り出し、音亜に差し出してきた。燕に電話して、助けを求めろというのだろう。

「早くしないと、危ないよ？ 助けに来てもらわないと、小凧たちもどうなるか……」

その言葉に、ちらと野々山たちを見た。唇を噛みしめ、渋々電話を受け取る。

思えば、こうして電話をかけるのは二回目だ。だが、今回はかなりまずい状況にある気がする。

「ごめん、燕くん……」

震える声で呟き、音亜は、燕に電話をかけた。

記憶（前書き）

最近地震が多いです。怖いですねえ……我が家なんて、一発でぶっ壊れそうで……

記憶

電話をかけ終えた音亜をロープで縛りつけ、野々山と小凧と一緒に床に転がした。口はふさいでいないが、必死で涙を堪えているように言葉が発さない。

「ちょっと、時間がかかったなあ」

当初の予定よりも、少し時間がかかっている。腹いせに音亜を痛めつけようかとも思ったが、弱い相手をいたぶるのは退屈で仕方ない。

外から吹き込んでくる風が身体を冷やす。動きやすいようにと厚着をやめたのだが、これならもう少し考えてくるべきだった。

「ん……来た、かな？」

静寂の中、こちらに駆けてくる足音が耳に入った。もたれていた壁を離れ、軽くストレッチする。

「みんな、大丈夫!？」

すぐに燕が倉庫に駆け込んできた。雪美の予想よりも回復しているようで、少しだけ驚く。

「こんにちは、神前くん」

いつもの微笑みを意識して、軽い感じで呼びかける。燕は立ち止まり、右手を構えた。

「みんなは無事なの？」

「もちろん。……じゃ、始めようか」

返事を待つことなく、雪美は襲いかかった。互いの右手がぶつかり、燕が後退する。挨拶代わりの一撃で、倉庫内がびりびりと震えた。

「この前の反動は、どうだった？ 結構辛かったんじゃない？ 泣かなかった？」

「……まあね」

「それは良かった。でも、やっぱりあたしとは違うんだね」

雪美は笑うと、注意深く構える燕の期待を裏切って踵を返した。音亜のもとに駆け寄り、無理やり引き立てる。

「あたしと同じになってよ、神前くん」

自分と同じように、狂ってほしい。

雪美の思考を読み取ったらしい音亜が、これから行われることに怯えを示した。目を固くつむって、身をよじる。その顔の前に、右手を持って行った。

「さて、神前くん、問題です。これからあたしは、いったい何をするでしょう？」

「やめてっ……お願い、やめて……！」

暴れる音亜を押さえつけながら、燕に問うた。助けに走ってくる燕の前で、音亜の額を掴み、「破壊者」の能力を使った。

「音亜！」

雪美が音亜を放り出すと、燕は駆け寄って抱き起こした。何度も呼びかけるが、しかし、音亜は目を開けない。

「っ……音亜に、いつたい何を……」

「別に。ただ、大切なものを壊しただけだよ」

燕が音亜に呼びかけている間、雪美はあえて邪魔をしなかった。燕から、音亜を奪わなければならないのだ。

「ん……？」

どのくらい時間が経ったか、やがて音亜が目を開けた。

「音亜！……よかった、気を失ってただけなんだ……」

「あの……」

次の瞬間、凍りついたように動きを止めた燕を見て、雪美は唇の端を釣り上げた。

「ゲーム」は、順調に進んでいる。

「……あなた……誰ですか？」

壊す右手

「…………え？」

目覚めた音亜の言葉に、燕は動きを止めた。縛られたままの音亜を抱き抱え、言葉を失う。

「なんで私、こんなところに……一体、何が……？」

「な、何言ってるの、音亜！ そんな冗談……」

「…………？」

燕は心臓の鼓動が速くなっていくのを感じた。まさかと思いながらも、恐る恐る訊ねる。

「音亜……ボクのこと、本当に覚えてないの……？」

「…………どこかで、会いましたか？」

——記憶を、無くしてる……

「どう？ 神前くん。自分のこと忘れられちゃって、やっぱり悲しい？」

「何でこんなこと……」

にこにこ笑う雪美の表情は、雪のように白く、冷たい。

「隔離地区での記憶、全部壊させてもらったから。頭の中、ここに
来る前に戻ってるよ」

「……っ」

燕は、ゆっくりと音亜を床に寝かせた。手足を縛っていたロープ
を壊し、解放する。

「……こっち、来て」

「？」

小さく呟いて、状況が理解できていない音亜の手を引く。近くま
で歩み寄ると、野々山がうつすらと目を開けていた。こちらを見上
げて、呻くような言葉を漏らす。

「……神、前……？」

「音亜をお願い」

「おいっ……」

呼び止める声を見捨て、さっきと変わらず笑っている雪美に向き
直った。薄闇の中、互いの視線が交錯し、一歩歩み寄る。

「ねえ、池内さん」

「何？」

「ボクさ……ここに来る前、怒って家をバラバラに壊したことがあるんだ」

「へえ」

「でもね……」

静かに膝をつき、ひび割れた床に指先を触れた。軽く目をつむり、忘れていたあの日、あの時の感覚を思い出す。

雪美は以前、壊すことを躊躇ってはいけなかったと言った。たしかに、そうだ。

「……今なら、もっとすごいことができる……そんな気がするんだよ」

すべてを壊す右手に、「破壊者」としての感覚が蘇る。

鋭い閃光が、薄闇の中に咲き乱れた。

頬に、冷たいものが触れた。

突然の出来事に、雪美は事態が呑み込めなかった。ただ真上を見上げ、呆然と呟く。

「何、これ……」

見上げた視線の先にあるのは、暗い天井ではなかった。

「ね？ 池内さん。すごいでしょ」

静かに雪の降り続く、冬の空が、広がっていた。

完全破壊

倉庫の天井には、大小様々な風穴がいくつも開いていた。そこから雪が降り注いでいる。

「きゃっ!？」

燕に視線を戻そうとして、全身を凄まじい衝撃が駆け抜けた。後方に大きく飛ばされ、わけもわからぬまま床を転がる。

「な、にが……」

羽織っていた上着の正面が破れていた。胸元に触れると、わずかに血が付いた。それを舐め取り、いつものような笑顔を繕う。

「あはは……。おもしろいこと、するね。今、何やったのかな？」

訊ねる雪美に対し、燕は床を見つめてうつむいていた。それを見て、違和感を覚える。

——私と、違う……？

どこがどう違うのか。分からない。分からないが、不意に恐ろしいと思った。近頃忘れていた、他人への——未知のものへの——恐怖。

「っ……!」

恐れを振り払うように駆け出そうとして、とっさに立ち止まった。

一瞬で足もとが深く削れ、

消滅した。

「っあ！」

それを視認した直後、右側から弾き飛ばされた。宙を舞い、地面につく前に今度は逆方向へ飛ばされる。袖や裾が破れ、血が流れ出ている。痺れたように動けない。

ひび割れた床に突っ伏したまま、雪美は可能な限り視線を巡らせた。ぼんやりと見開かれた視界の中で、倉庫の天井が、壁が、地面が、雪が、風が――次々と、音もなく穴を穿たれ消える。

跡形も残さず消し飛ばす、完全な破壊。

依然として、燕はうつむいたままだった。何やら呟いているが、聞こえない。

パーフェクト・デストラクション
「完全破壊」

すべてを壊しつくした燕は、能力の反動で倒れ伏した。右腕の袖が破れて消し飛び、深い傷がいくつも入っている。ぴくりとも動かず、嫌な予感が駆け巡る。

「神前！」

野々山は駆け寄ろうとしたが、先に音亜が動いた。記憶をなくし

ているはずなのに、燕を抱きかかえて何度も呼びかける。

「あのっ……大丈夫ですか！？　しっかりしてください……！」

音亜の腕の中で、わずかに燕が動いたのが見て取れた。しかし安堵もつかの間、ぼろぼろになったもう一人の「破壊者」が二人を狙い、右手を振りかぶる。

「ちっ……」

必死に食い止めようとするが、「神の手」はすぐに打ち消されてしまった。そして、ゆっくりと顔を上げた音亜の前に、右手が下りていく。

「あ、はは……ぜんぶ、壊れちゃえ……」

右手が音亜に触れる寸前、燕の左手が動いたように見えた。そして――

――一際強い閃光が走り、「破壊者」は何かに遮られた。

「？」

雪美の「破壊者」の能力が、打ち消された。

「……神前くん……」

ただ一人、状況を理解した雪美が踵を返した。おぼつかない足取りで、倉庫から立ち去りながら燕に言う。

「キミとあたしは、違みたいだね……」

「……なんなんだよ、一体……」

——わけがわからない。

冬の風に吹かれながら、野々山は倉庫の跡地に佇んでいた。

複合能力者

夜、燕の家。

簡単な夕食を済ませた後、小凧は燕の部屋に入った。

「……朝倉さん……ご飯、食べる？」

電気の消された暗い部屋は真っ暗だった。燕の寝ているベッドの横で、椅子に座った少女の影が動く。

「あ……えと……」

「小凧だよ」

「……はい。あの、小凧さん……」

「？」

「私とこの……神前くんは、いったいどういう関係なんですか？」

その言葉に、小凧は改めてショックを覚えた。あれだけ仲の良かった大切な人を、忘れてしまったのか。自分の友達は——雪美は——そんな酷いことをする人だったのか。

「大切な人だよ。本当に大切な……大好きな人」

「……そう、ですか」

「うん」

燕は苦しげに呻いていた。その手を取って、音亜はうつむく。

「思い出せないんです……何も、分からない」

うつむいたままの音亜から、わずかに嗚咽が漏れた。燕の手を握りしめて、震える声で続ける。

「神前くんが、私にとって大切な人だっていうのは、なんとなくだけど分かるんです。……でも、これ

までの思い出が、消えてなくなってるみたいで……」

「……………」

音亜の話を聞きながら、小凧はかけるべき言葉を探していた。しかしいくら考えても、記憶をなくしてしまった音亜をどう励ませばいいのか、分からない。

燕なら、いったいどうするだろう？ 音亜が記憶を消されて、自分のことを覚えていなくても、今までのように接することができるのだろうか。……雪美のように、狂ってしまったのだろうか。

「……ぜったいに、忘れちゃいけないはずなのに……大切な思い出ははずなのにつ、なんで……なんで忘れちゃったの……？」

なんで、なんでと繰り返して泣く音亜を見つめながら、小凧はしばらく立っていた。音亜にもう一度だけ声をかけて、一階に下りる。

「……あいつら、どうだった？」

リビングに入ると、野々山は普段は見ないニュース番組を見ていた。それを消して、テーブルの向かいに座る。

「朝倉さんは、まだ思い出せないみたい。神前くんも、だいぶ具合が悪そう……」

「そうか。……なあ、小風」

「何？」

野々山は少し間を置き、小風が気を失っていた間のことを話し始めた。

「神前は最後、あいつ……池内の攻撃を、打ち消したんだ」

「打ち消した？」

「正確に言うと、何かが遮った、って感じだった」

「……それは、神前くんの『破壊者』の能力じゃないの？」

「いや……あいつはあの時、もう闘えない状態だったはずだよ。右手はボロボロだし……それにあの時あいつが突き出したのは、左手だった」

それを聞いて、小風は一つの可能性に気付いた。おそらく野々山も、同じことを考えている。

「……椿くんは……神前くんが、複合能力者だっっていたいの？」

「ああ」

「でもそれは、すごく低い確率じゃない」

小凧のように二つ目の能力が発現して、複合能力者になる可能性はごくわずかだ。それは複合能力者の人数が極端に少ないことから伺える。

「だけど、可能性はゼロじゃないだろ」

しばらく様子を見よう、と野々山は言った。小凧も黙って首肯し、窓の外に目をやった。

外ではまだ、雪が降り続けている。勢いを増してきているようで、積もるかもしれないなど、ぼんやり思った。

守る左手

「うつ……ああ……」

身体を襲う痛みにも、燕は目を覚ました。深夜、冷たく静まり返った部屋に、燕のうめき声だけが響く。

「……っ、は、はあ……」

ようやく痛みが和らいだところで、隣で寝ている人物に気付いた。暗闇の中でも見紛うことのない、大切な人。

「音亜……」

ベッドに寄りかかって眠っている音亜を抱き寄せようとして、右腕が満足に動かないことに気付いた。包帯でぐるぐる巻きにされているが、おそらく酷い状態なのだろう。

「あれは……」

最後、雪美の攻撃を遮った能力。もしかして自分は、複合能力者ではないのか……。だとすれば、あれはどんな能力なのだろう？

自問してみるが、燕の中では一応見当がついていた。自分の能力については、感覚的に分かる部分がある。予想が正しければ、おそらく……

「っ……」

痛む右腕を無理やり動かし、包帯を解いていった。生々しい傷跡が、いくつも刻まれている。その一つに、左手をかざした。

「？」

しかし、しばらく待っても何も起こらない。代わりに他の傷を探した。雪美の攻撃によって受けた傷は、身体のところかしこにあった。腹部の小さな傷口に左手をかざし、意識を集中する。何も起こらず、見当違いだったかと思ったところで、手元がぼんやりと光った。

「やっぱり……」

燕は、左手の能力について確信を持った。実際に使ってみないと分からない部分もあるが、おそらくは予想通りだ。

腹部の傷口は、完全に消えていた。

燕は暗闇の中、自分の左手を見つめた。

身体の傷はほとんど治した。唯一治せない右腕が気になるが、おそらくはあれが原因だろう。

「音垂」

「……ん……？」

傍らで眠る彼女の肩を揺すり、起こした。

「……なんですか？」

「思い出して」

「？」

首をかしげる音亜の頭に、左手を置いた。一瞬ビクリとおびえたが、優しく撫でると安心したようだった。

音亜がおとなしくなったところで、左手の能力を使った。柔らかな光が、暗闇の中に二人を照らし出す。

「……燕くん？」

音亜に名前を呼ばれて、燕は安堵の笑みをこぼした。そして、

「ごめんね、音亜」

右手を無理やり動かし、音亜の意識を壊した。気を失った音亜をベッドに寝かせ、代わりに燕は部屋を出る。幸い、野々山たちも寝付いているようだった。

「……行こう」

——今なら治せる。守れる。

壊す右手と守る左手。両手を見つめ、確かな予感を感じた。

雪降る夜の隔離地区へ、燕は駆け出して行った。

「……決着をつけよう。池内さん」

この場所で

夜。雪美はぼろぼろの身体を引きずって、外に出た。薄く積もった雪の上を、何か予感めいたものを感じて、あの場所へ歩き続ける。

「……神前くん……」

信じていたのに。彼だけは、同じ「破壊者」の苦しみを分かってくれると思ったのに。

「……決着、つけなきゃね」

燕がそこに着くと、雪美は橋の中ほどに立って夜の池を眺めていた。

「池内さん」

「こんばんは、神前くん。……やっぱり、来たね」

「ここだと思ったよ」

この「ゲーム」に決着をつけるなら、この場所しかないだろう。そう確信していた。

「あたしたち、ここで初めて会ったんだよね」

「うん。秋の『ゲーム』の前だったよ」

「あのときは、苛めすぎたかな」

確かに、あのときは悲惨だった。だいぶ精神的に参っていたと思う。思えば、この「ゲーム」はあの日から始まっていたのかもしれない。

「神前くん……ぜんぶ壊して、終わらせよう」

雪美は右手を構え、橋の真ん中を一直線に駆けてきた。対する燕は、静かに左手を前に出す。

「!?!」

雪美の右手は、燕に到達する前に打ち消された。後ろに弾き飛ばされて転倒する。

「……あたしとは違うね」

「うん」

「それは、何ていう能力？」

「さあ？」

首を振り、でも……と燕は続けた。

「あえて名づけるなら、候補はあるよ」

雪美が足もとを狙ってきた。素早く飛びのき、ひび割れた地面に左手を向ける。すると柔らかい光に包まれて、瞬く間に修復された。

雪美の顔から笑みが消え、燕は強い意志を持って正面から見据える。

「左手の能力は、『守護者』……とても呼ばうかな？」

音亜は目を覚ますと、いつの間にかベッドで寝ていたことに気付いた。起き上がってしばらくすると、暗闇に目が慣れてくる。燕の部屋だった。

「……燕くん……」

燕がいない。今この部屋にいるのは音亜だけだった。そして次第に、これまでの出来事を思い出していく。記憶が消されていた間のことも覚えている。

燕の左手が触れ、温かい光を感じたのだ。そして記憶を取り戻したら、今度は意識を壊された。

「もしかして……」

燕の言葉を思い出し、ベッドから転がり落ちる。時計を見ると、まだあまり時間が経っていないことがわかった。

慌てて着替えて一階に下り、リビングで寝ていた野々山と小風を起こした。記憶を取り戻したことで、燕がいないことを手短に伝え、三人で外に飛び出す。

「ケータイは？」

「ダメ。部屋に置きっぱなしだった」

「神前くんが行きそうな場所に、心当たりとかないの？」

小凧の問いに、音亜は立ち止まった。これまでの出来事を順に思い出していき、もしかしてと思う。

「……きっと、あそこだ……！」

「おい、待てよ朝倉！」

燕と雪美のもとへ、音亜は走り出した。

障壁

燕は左手を突き出し、雪美の攻撃をはじき返した。

「っ……」

薄い光の障壁に阻まれた雪美は、後ろへ地面を転がった。これでもう何度目だろうか。でたらめに突っ込んで、燕の左手に振り返り討ちにあっている。

「ねえ、池内さん。……こんな『ゲーム』、もうやめよう?」

「……はっ、は……やだ……」

燕の提案を、雪美はやはり断った。届くことはないと分かっても、右手を伸ばし続ける。

「無駄だよ……『絶対障壁』このチカラは、破れない」

燕の左手の能力「守護者」には、燕が分かっているだけでも、幾つかの使い方があある。

一つ目は「絶対障壁」。おそらくこれは、あらゆる攻撃を遮断する能力だろうと燕は思っている。

「……信じてたのに……!」

何を? そう答えようとして、崩れる足もとから飛び退いた。建物の壁際まで下がり、割れた地面に左手を向ける。先ほどと同様に

元通りになった。

これが「守護者」の二つ目の能力、「修復」。右腕の傷が治せないのが疑問に残るが、能力によって壊されたものを修復することができる。小風の「巻き戻し」に似ているが、こちらは能力の対象が限定されている。

何か衝動に突き動かされているような雪美を見て、燕は呟いた。

「もうやめようよ……ボクには、勝てないよ」

「……やめてっ……」

燕の呟きが聞こえ、雪美は睨みつけた。降り続く雪の中、燕の碧眼には悲しみが浮かんでいる。それを見て取って、齒ぎしりした。

「その目は憐み^{あわれ}？ やめてよ、そんな目であたしを見ないで！」

燕の後ろの壁を破壊し、瓦礫が降り注ぐ。だがそれも、「修復」されてしまった。

「あたしは……！」

ふらふらと立ち上がり、自分と燕の両方に言い聞かせるように声を張り上げる。

「あたしは、いつだって『独り』だったんだ！ ……だから、同じ『破壊者』のキミを見つけたとき、

うれしかった……なのに、あたしが持っていないものを、神前くんはたくさん持つてる！」

身体中が、刃物で切りつけられているように痛い。胸が苦しくて、呼吸が酷く乱れている。視界が霞んできたように思う。

傷ついた身体を無理やり動かして、燕に向かって歩を踏み出した。何度も、何度も……光の障壁に向かってひたすら右手を振り、その度に痛みに身体を貫かれる。

「っ……は、あ……」

容赦なく襲いかかる痛みの正体に、雪美は気付いていた。間違いなく、能力の反動だ。

——なんで、反動なんか……

次の一撃で、最後だろう。きっと、もう耐えられない。涙ににじんだ視界の中、そこだけ温かな光の障壁に右手を振りかぶる。

「やっと……仲間を見つけたと思ったのに……一緒に居れる人を見つけたと思ったのに！　なのに……そうやってみんな、あたしを拒むんだ！」

こぼれ落ちた雫が、薄く積もった白に溶けて、消えた。

幻想

「……なんで……」

雪美は呟いた。涙を拭うことなく顔を上げ、燕を睨みつける。

「なんで、能力を使わないの……?」

雪美の右手は、燕の目の前ぎりぎりで止まっていた。当たる寸前に燕が障壁を消したため、反射的に攻撃が躊躇われたのだ。

「池内さんが、悪い人じゃないって分かったから」

「そんなこと……」

そんなことない。あたしは、すべてを壊したい。

「独り」じゃないなんて、ただの幻想にすぎないんだから。

無防備な燕に一撃を加えようとして振りかぶり、しかしその腕にしがみつかれた。後ろから抱きつかれ、驚いて動きを止める。

「それに、池内さんは『独り』じゃないよ」

首をひねって後ろを向くと、小風がいた。

「雪美ちゃん!」

「小凧……なんで、ここに……」

小凧は今にも泣き出しそうな顔をしていた。鼻をすすりながら、震える声で言う。

「ごめんね……私、雪美ちゃんがそんなに悩んでたなんて、ぜんぜん気づかなくて……ごめんね……」

雪美は、自分の中の破壊への衝動が、急速にしばらくのを感じた。次第に静かになっていく心に、温かいものが広がっていく。

「……気づいてなかったのは、あたしのほうだよ……」

「え？」

「ううん。……なんでもない」

反動のためか霞んでいく視界の中、音垂に抱きかかえられるようにして立つ燕が見えた。幸せそうに微笑んでいるようで、ほんのちよっただけ……

「……悔しいなあ……」

「……雪美ちゃん？」

呟き、小凧のか細くも温かい腕の中で、雪美は意識を失った。

約束（前書き）

十二月二十四日、クリスマス・イヴ。今日はついに終業式でした。いやあ、まったくうれしいかぎりですが、今夜は塾です。……受験生って、悲しいですね。

約束

音亜は、ふらふらと倒れかけた燕を慌てて抱きとめた。

「……音亜……」

燕は少し驚いたようだったが、それでもすぐに微笑を浮かべた。

「よかった。記憶、戻ったんだね」

「うん……」

燕は上着や防寒着を着ていなかった。冷たくなった手を両手で包み、燕が無事だったことに改めて安堵する。燕の存在を確かめるように抱きしめていると、野々山が燕に話しかけてきた。

「なあ、神前。あいつのことなんだけど」

「……池内さんのこと？」

「ああ」

野々山は横目に、小凧と雪美のほうを見た。それからこちらに向き直り、腰をかがめて燕に視線を合わせる。

「……あいつも、『破壊者』なんだろう？ 放つといて、危ないか？」

「大丈夫だよ。……たぶん、池内さんなら乗り越えられると思う」

「乗り越える?」

「うん」

燕がうなずくと、野々山は釈然としない様子で頭をかいた。

「よく分かんねえな……それは、同じ『破壊者』としての意見か?」

「同じじゃないけどね。まあ、そんなところだよ」

「そうか。……まあ、さっさと帰ろうぜ。神前、歩けるか?」

「ちよつと、厳しいかも……」

燕がそう言うと、野々山はいつものようにニヤリと笑った。燕の手をとり、音亜を見る。

「じゃあ、俺が抱っこしてやるうか? ジュリエット」

「ちよつと野々山くん! 燕くんは……」

「燕くんは……?」

「燕くんは……私の……」

「私の……?」

野々山は促すように合いの手を入れながら、燕をお姫様抱っこした。音亜のこめかみがピクリと震える。

「……小風ちゃんに言うよ？ 野々山くんは、同性愛の人だったって」

「お返しします」

野々山から燕を取り返し、お姫様抱っこした。途端に燕の顔が真っ赤に染まり、一瞬合った目をすぐにそらす。音亜も視線をそらして、家路につく。

「じゃあ、先に帰るね」

小風と雪美を待つという野々山を置いて、二人は燕の家に向かった。燕はだいぶ軽いので、音亜でも楽に持ち上げられる。燕は自分で歩けると言ったが、音亜はもう少しこうしていたかった。

「ねえ、燕くん」

「？」

「なんで池内さんは、あんなことしたのかな？」

ずっと気になっていたことを訊いてみた。燕なら、知っているかもしれない。

「池内さんは、自分は『独り』だった、って言ってた。たぶん、『破壊者』の能力のせいだろうけど」

「ふうん。……燕くん、知ってる？」

「何を？」

こちらを見上げてくる瞳が、気づいていないことを物語っていた。音亜は、一度言おうとしたことを口に出すのを止め、首を振った。

「……やっぱり、なんでもない」

「？」

音亜はさつき少しだけ、雪美に「千里眼」を使った。そして、雪美の気持ちに気づいたのだ。

——ねえ、燕くん。

——池内さんは、燕くんのことが……

「……音亜？」

不思議そうに見つめてくる燕に、なんでもないただだけ答えた。これは、燕が知らなくていいことだ。

「燕くん」

「ん？」

「私たち……これからもずっと、一緒だよね？」

思わず声が震えてしまった。足を止めて、燕を下す。その手を握って距離を詰め、上目づかいに見つめた。

「……ね？」

「もちろん」

「約束だよ？」

燕は頬を一層赤くし、こくりと頷いた。

「うん。……約束するよ」

舞い落ちる白色に彩られた夜——二人は約束した。

「ゲーム」終了（前書き）

今日から冬休みです。いやあ、うれしいですね。宿題は、最終日にでもまとめてやりましょうか。

「ゲーム」終了

雪美が目を覚ますと、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。

「……？」

見覚えのある部屋だった。置かれているぬいぐるみや部屋の雰囲気から、小凧の部屋であることに気づく。

「ん……雪美ちゃん、起きた？」

「こ、小凧……！」

後ろから聞こえた声に寝返りを打つと、眼鏡を外した小凧が隣で寝ていた。状況が理解できず、目を白黒させる。なんであたしが、小凧と一緒に寝ているのだ。

戸惑う雪美を見て、小凧は小さく笑った。雪美が気を失ってから
のことを教えられる。

「椿くんがね、帰る前に運んでくれたの。雪美ちゃんの家まで行ってもよかったんだけど、私の家の方が近かったし」

「でもっ……」

さすがにこのままは不味いだろう。誰かに見られているわけではないが、恥ずかしい。

慌ててベッドから出ようとして、身体に鋭い痛みが走った。今まで能力の反動を味わったことがなかったたので、忘れていた。

「痛っ……」

胸を押さえて痛みに耐える。小凧が心配そうに見つめてきた。

「大丈夫？」

「うん、平気……たぶん、すぐ良くなると思うから……」

しかし、しばらく経っても痛みは消えなかった。自然と小凧にしがみつき、流れ落ちそうになる涙を堪える。

「……ごめんね、小凧……」

ようやく落ち着いてきたところで、雪美は呟いた。小凧に抱きついたまま、震える声でつぶける。

「あたし、あんなことして……いろんな人を傷つけて……」

「……雪美ちゃん」

「ほんと、馬鹿だね。……わけわかんない衝動に負けて、何でも壊そうとして……」

最後の方は、ほとんど聞き取れないほど小さな声だった。雪美はとうとう泣き出してしまい、一度泣き出すと涙が溢れてきて止まらない。

「ねえ、雪美ちゃん。……覚えてる？」

小凧の声に顔を上げると、細い指が頬に触れた。小凧は微笑んで、優しく語りかけてくる。

「秋の『ゲーム』のときね……私、雪美ちゃんに励まされたから、がんばれたの」

泣かないで、と小凧は言った。

「雪美ちゃんは、笑ってるほうが似合ってるよ」

「……小凧……ごめんね……」

「別に、私は怒ってないから。……あつ、でも、椿くんまで狙ったのは……ちよつとだけ、怒ってるかも……」

頬を膨らませた小凧に、雪美はつい笑ってしまった。涙を拭いながら言う。

「そうだね……許してもらえるかわかんないけど……みんなに、謝んなきゃね」

「きつと、みんな許してくれるよ」

少しだけ安心し、雪美は目を閉じた。毛布を引き寄せ、小凧に寄り添って訊ねる。

「もうちよつとだけ、一緒に寝てもいい？」

「もう朝だよ……?」

「お願い。ちょっとだけだから」

「……じゃあ、ちょっとだけ、ね」

「ありがとう」

小凧に寄り添ってもらって、雪美はすぐに眠りに落ちた。その幸せそうな寝顔を、小凧は優しく見守っていた。

冬の幻想、終了。

始まりのクリスマス

「メリークリスマス！」

「！」

突然ドアが開き、パンツ、と乾いたクラッカーの音が響いた。ケーキを持った音亜が部屋に入ってくる。

「燕くん、ケーキ作ってきたから一緒に食べよ」

音亜はサンタの格好に身を包み（髭だけはしていなかったが）、右手にケーキと皿とフォークが載ったトレイ、左手に真っ白な大きいビニル袋を持っている。

「音亜……ごめんね、一緒に出かけようって言ったのに……」

今日はクリスマス・イヴ。前に約束していたのだが、反動のせいで燕が出かけれなくなってしまったのだった。燕としては、大変申し訳ない気持ちでいっぱいである。

「別にいいって。……ほら、たくさん食べて元気だしなよ」

「……うん」

大きく切り分けられたショートケーキを受け取った。右腕の傷はまだ治らないので、左手でフォークを持って少しずつ口に運ぶ。生クリームの柔らかな甘さと、イチゴの程よい甘酸っぱさが口につばいに広がった。

「どう？　おいしい？」

「うん。やっぱり音亜、料理上手だよ」

「燕くんほどじゃないけどね」

二人でケーキ台の三分の一ほど食べると、互いにお腹いっぱいになった。今度、デブに食べさせてあげよう。

「あ、クリームついてる」

「？」

燕の頬についたクリームを、音亜が指先で拭って舐めた。一瞬間をにおいて燕が赤くなり、音亜も赤面してうつむく。

「あつ、そうだ。燕くんに、プレゼントがあるの」

「プレゼント？」

音亜は袋から服を取り出した。一着だけかと思いきや、二着、三着と次々に出てくる。普段着からパジャマ、さらには今はまだクリスマスだというのに浴衣まで様々である。だが……

「……これ、ボクが着るの……？」

「かわいいでしょ？　燕くんに似合うと思うんだけど」

音亜のプレゼントは、かわいらしい服ばかりだった。燕は一応、

中学三年生の男の子なのだが、音亜はどう思っているのだろうか？

「ほら、着替えてみて！」

「ちよつ、音亜……！」

夜の隔離地区に、燕の悲鳴が響き渡った。

「うう……」

燕は半泣きになってベッドで丸くなっていた。この部屋には他に音亜しかいないが、恥ずかしくてたまらない。

「酷いよ、音亜……」

「ごめんね。……でも……かわいい」

「ううう……」

燕は今、メイド服を着ていた。音亜のプレゼントの一つで、これで一通り着てみたことになる。

音亜に頭を撫でられて慰められる。悪い気はしないのだが……なんだか、男としてのプライドを傷つけられた気がする。

「じゃあ、今日はこのパジャマを着て寝ようか」

「い、いやっ……やめて、音亜！」

女の子が着るような、らぶりいなパジャマを音亜が取り出す。本
当に泣きそうになりながら抵抗していると、燕の携帯電話が鳴った。

「神前か？」

「ひゃ、はい……」

電話の相手は野々山だった。音亜から遠ざかり、部屋の隅で話す。

「ど、どうしたの、野々山くん？」

「いいか、落ち着いて聞けよ？ いい知らせがあるんだ」

「いい知らせ？」

「ああ。最高の、クリスマスプレゼントだ。……実は、さっき知っ
ただけど……」

野々山から知らせを聞いた燕は、思わず声を上げた。

「外に、出れる！？」

次の「ゲーム」は、ここから始まった。

十二月二十四日、夜——某県某所。

「うぐっ……」

腹を力いっぱい踏みつけられた少年は、呻きながら地面を転がった。夜の闇に紛れて表情はよく見えないが、犯人は晒^{わら}っているように見える。

「お前は、だ、れだ……？」

少年の問いには答えず、犯人は手に持ったナイフを少年の右脚に向けた。恐怖に顔を引きつらせる少年に、銀色の刃が近付く。

「やめろ……右脚だけはっ……」

「くくくっ」

右脚に鋭い感覚が走った。一瞬ひやりとし、すぐに熱く、激しく痛む。

「……っ、あああああー!!」

悲鳴を上げる少年に、犯人は言った。低く落ち着いた声で、さっきの問いに答える。

「俺は、能力者だ」

「……さあ、『ゲーム』を始めよう」

冬の幻想 あとがき

読者の皆様こんにちは、イチゴダイフクです。最近寒いですが、いかがお過ごしでしょうか。

「夏」「秋」に続き、「冬」も終わりました。ですが、はい……申し訳ありません、まだ続きます。

……では、次回予告を少々。

新しい能力を手に入れた燕のもとに届きたい知らせと、とある少年を襲った事件。その犯人は能力者――

治らない燕の右腕。連続傷害事件の犯人。……そして、雪美の恋。

物語は、ついに舞台を隔離地区から「外」に移し、「春」の「ゲーム」が始まります。

それでは、第四部・「春の追走」も、引き続きよろしく願います。

春の追走 プロローグ（前書き）

第四部です。

春の追走 プロローグ

冬の「ゲーム」から時は流れ、四月。真新しい高校の制服を着た燕は、玄関を振り返って音亜を呼んだ。先日、ポニーテールからショートヘアにイメチェンした金髪が春風に揺れる。

「音亜ー！ 早くしないと電車に乗り遅れるよ？」

「まだ大丈夫だよ。……じゃあ雀さん、行つてきます」

「いつてらっしゃーい！」

燕の姉——神前雀——かんざきすずめに手を振って、音亜と並んで歩き始めた。朝からうきうきしている燕に、眠そうに瞼をこする音亜が言う。

「燕くん、朝からテンション高いね……私、眠いんだけど……」

「だって、『外』に出れたんだよ？ 他の人たちと同じように、普通に生活できるんだもん。うれしいに決まってるよ」

「確かにうれしいけど。……でもまさか、本当に隔離地区から出れるなんてね」

燕と音亜は今、隔離地区から出て生活していた。雀の家から一緒に高校に通っている。燕の両親は仕事で海外へ行っているので、部屋はたくさん余っていた。音亜の親も了承している。

「夏の『ゲーム』、頑張つてよかったね」

今年度から、一部の能力者は隔離地区の外に出て生活していた。夏の「ゲーム」で逃げ切った人たちで学力試験を行い、その結果、燕と音亜は一位と二位で通過した。安藤とデブ、そして雪美の三人も、外に出ている。雪美は同じ県内に住んでいたはずだ。野々山と小凧は、隔離地区で仲よくしている。

そして、なぜこのようなことが行われたか——聞いた話では、しばらく試験的に能力者を外に出し、その結果によっては能力者を隔離することをやめる——ということだった。

「……ん？」

燕たちが通っている高校は少し遠いので、電車で通学する。もうすぐ駅に着くところで、窓の外に見覚えのある人物を見つけた。

「池内さんだ」

「え？」

一瞬しか見えなかったが、雪美は誰かと一緒に歩いていた。隔離地区から出るとき、小凧と別れるのが辛かったらしいが、こちらでもしかかり友達はできたらしい。

「……そっか、池内さんってこの辺に住んでるんだったね。今度遊びに行こうかな……」

「私も行く」

「？」

「私も、一緒に、行くの！……浮気は許さないからね」

「……もしかして、まだ根に持ってるの？　ボクが池内さんとキス……」

「馬鹿！」

思いつきり、ビンタされた。周囲の注目を浴びながら、電車がホームに滑り込むと同時に音垂に引つ張られて外に出る。

「……みんな、元気にしてるかなあ……」

ヒリヒリと痛む頬を押さえ、友人たちのことを思った。

——まだ、誰も知らない。

春の「ゲーム」は、すでに始まっていることを——

ハル

時をさかのぼり、春休み。雪美は、これから世話になる従弟の家にやってきた。父親と一緒に暮らそうと言ってくれたが、母が反対したためである。

世間体を気にする雪美の母は、母子家庭の妹に雪美を押しつけたのだ。そしてそれを、大雑把で豪快で人の良い叔母さんは「任せなさい！」と二つ返事で承諾した。

「あらあ、ユキちゃん！ 久しぶりね。しばらく見ないうちに、こんなに綺麗になっちゃって！」

「う、こんにちは、叔母さん。……これから、よろしく願いします」

家に入るなり、叔母さんの丸々とした大きな身体に抱きつかれて、雪美は苦しげに挨拶した。首をひねって辺りを見回して、従弟の姿を探す。

「ねえ、叔母さん。……ハルは？」

池内春也いけうち はるやとは同い年だ。彼とは同じ高校に通う予定なので、いろいろ訊きたいことがある。

「ごめんねえ、ユキちゃん。ハルったら、恥ずかしかったみたいで……さつき出かけちゃったのよ」

「ああ……まあ、予想はしてたけどね……」

「小学二年のときだったけねえ。二人とも仲良かったんだけど、ユキちゃんがハルを押し倒してファースト・キスを……」

「お、叔母さん……！」

思い出して恥ずかしくなり、叔母さんから逃れるように外に出た。近くを少し見て回っておこうと思って歩きだす。幼いころの記憶を辿りながら、春也のことを思った。

少し足に疲労を覚え、日が西に傾き始めたころ。雪美は小さな公園を歩いていた。

「……そろそろ帰ろうかな」

あまり遅くなると、叔母さんが心配してしまう。春也も帰っているかもしれないし、と公園を横切る。

ぼんやりしながら、右手を空にかざして見つめた。冬休みの一件以来、「破壊者」の能力を使っていない。まだ破壊衝動に襲われることがあるが、燕の左手——「守護者」の能力で治療を受けている。少しずつだが、よくなってきているのだろう。

「きゃっ！？」

よそ見していたため、階段の手前で躓いてしまった。体勢を立て直せず、思い切って飛び降りる——だ

が、

「痛っ……」

着地で足を挫いてしまった。自分の判断を呪いながら、しゃがみこんで右足首を押さえる。

——どうしよ……帰れるかな……

ここから家まで少し距離がある。どうしようか迷っていると、近くに誰か立ったのか影が差した。

「大丈夫？」

見上げると、見覚えのある人がそこにいた。いや、正確には似ている人だ。

少年の容姿を一言で表すなら、燕に似ている、だった。女性的な顔立ちと、大きな瞳、長めの髪、細い身体。違うところといえば、髪と目の色が黒いことと、肌がほどよく日焼けしていることだ。

「立てる？」

「えっ、あ……ちょっと、無理かも……」

「家、この辺でしょ？ 送るよ」

少年はしゃがんで、背中を向けてきた。おんぶするから乗れ、ということらしいが、さすがの雪美も

気が退けた。初対面の少年におんぶしてもらうなんて……

「？ どうしたの？」

「あ、えと……その……」

「？」

「……じゃあ……」

このままだと家に帰れないので、とりあえず少年の背中におぶさった。万が一襲われたりしたら、能力で撃退すればいいだろう。政府からは、隔離地区の外では能力を使わないようにといわれているが、正当防衛だろう。

少年は軽い足取りで歩き始めた。特に雪美を気にするそぶりを見せないが、雪美は頬を真っ赤にしてうつむいていた。以前ならこれくらいで恥ずかしがることはなかったのだが、最近変わってきた気がする。

「家、こっち？」

「うん」

幸い家の方向は同じだったらしい。少しだけ振り返った少年の柔らかい髪が、頬に触れてくすぐったい。名前を訊ねようかと思ったが、少年も訊ねてこないのでもやめた。近くに住んでいるのなら、叔母さ

んや春也に訊けば分かるだろう。

互いに何も喋らないまま歩き続けた。しばらくして、家の赤い屋根が見えてくる。

「あ、ここでいいよ」

「そう？　じゃあ、お大事に」

「うん、ありがとう」

右脚を引きずるようにして歩いて、「池内」という表札を横目に玄関に向かう。

「ん？」

「あれ？」

二人同時に声を上げ、顔を見合わせた。隣で玄関を開けた少年が、雪美におそろおそろ訊ねる。

「……もしかして、ユキなの？」

長い、長い沈黙が流れた。互いに見つめあったままピクリともしない。その後雪美は、かろつじて声を絞り出した。

「ハル……？」

秘密（前書き）

連載が終わっていませんが、二作目の連載を始めてしまいました……。

とても受験までに終わるとは思えませんが、がんばります。

二作目「この空の物語」も、よろしければお読みください。お願いします。

秘密

あの後。

挫いた足首の手当てをして、雪美は春也の部屋に向かった。夕食まで時間があるので、先にすこし話しておきたい。

「ちょ、ユキ！ 入るならノックくらいしてよ！」

部屋に入ると、春也はノートパソコンを扱っていた。慌ててウィンドウを消すので、気になる。

「何見てたの？ エッチなやつ？」

「そ、そんなんじゃないよ！」

「じゃあ、サッカー関係か」

春也はサッカーが好きで、前は選手になりたいと言っていた。叔母さんからは、それなりに上手だったと聞いている。——しかしこの時、春也の表情が一瞬凍りついたように見えた。

「？」

気になるが、大したことではないだろう。棚のサッカーの漫画を眺めながら、ベッドに腰かける。

春也はパソコンを閉じると、椅子を回してくるりと振り返った。雪美がベッドに寝転ぶと視線で非難されたが、無視する。

「それにしても、あのハルがこんな美形になるなんてね。かわいい系って、けっこうタイプなんだけど」

一瞬燕のことが頭に浮かんだが、無理やり締め出す。燕は、ただの友達だ。

「冗談はやめてよ。……そういえばユキって、ボクと同じ高校行くんでしょ？ 近くに他の高校があるのに、なんで？」

「え……まあ、いろいろね。ハルと一緒にの方が、楽しそうだし」

また燕が浮かんできた。少し腹を立て、春也に悟られないようにベッドにうつぶせる。

「ユキと一緒にっていうのは、ボクはちょっと、その……心配だなあ……」

「そんなこと言わないでよ。あたしだって、中学校でだいぶ変わったんだから」

「へえ。ユキって、中学のときはどこに住んでたんだっけ？」

「か……」

「か？」

隔離地区。そう答えそうになって、慌てて口を閉ざした。春也が不審そうに見てくるが、「ハルには関係ないでしょ」と切り捨てた。

——ハルになら、教えてもいいかもしれない。

一瞬、そう思わなかったわけではないが、やはりやめた。なんだか、嫌な予感がしたのだ。

そして、そういう予感は大抵、当たる。

「ハルに教えちゃダメ？　なんで？」

春也が風呂に入っている間に、雪美は叔母さんに訊いてみた。が、叔母さんは珍しく深刻そうな顔を
して首を横に振った。声をひそめて、大きな身体を縮めて言う。

「去年から、ここらで連続傷害事件が起きてるでしょ？　……ハル、去年のクリスマスに襲われちゃったのよ」

「え……？」

初耳だった。思わず身を乗り出して訊ねる。

「それでっ……ハル、大丈夫だったの？」

「命に関わる怪我じゃなかったのはよかったんだけど……脚をやられて、もうサッカーできないって」

サッカーができなくなつて、春也は酷く落ち込んだらしい。周囲に当たり散らすことはなかったけれども、そのぶん部屋の中に引き籠ることが多くなった。そして、

「この前、また事件があったらしいの。怪我は軽くてあまり大きくは騒がれなかったけど、ハル、すごくこわい顔してね、『能力者なんて、いなくなればいいのに』……って」

だから、春也には黙っていてほしい、と。

「ユキちゃん、お願い……」

春也を襲った悲劇。それを聞いた雪美が呆然としてみると、叔母さんは細い目に涙を浮かべて、震える声で言った。

「ハルと、一緒にいてあげて。励まして、一緒に笑ってほしいの」

いつも元気な叔母さんが、こんなに弱っているところを見ると、雪美も辛くなってきた。

「大丈夫だよ、叔母さん。ハルのことは、あたしに任せて」

零れそうになった涙を拭い、雪美は得意の笑顔を浮かべた。

あたしも、だいぶ変わったな……と、改めて思った。

こうして雪美は、能力者であることを春也に秘密にして生活することになる。

春の「ゲーム」

そして、高校生活が始まった。

「ハルー！　一緒にお弁当食べよう」

「ちょ、ユキ……みんな見てるんだけど……」

昼休み。抗議する春也と向かい合い、いつものように弁当を広げる。高校生活が始まって数日、毎日恒例の風景だ。クラスの面々はすでに、勝手に納得している。

「ねえねえ、春也ちゃんと雪美ちゃんって、どういう関係？」

同じ学年の仲良し双子姉妹、ながせうきょう長瀬右京とさきょう左京が、興味津津といった様子でやって来た。ポニーテールが姉の右京で、縛っていないのが妹の左京だ。

「もしかして、もうキスとかしちゃったとか？」

姉の腕に抱きついたまま、左京が春也に言った。途端に真っ赤になっ
て後ずさり、壁際まで下がった。

「何言ってるの、長瀬さんっ……別にユキは、ただの従姉だし……」

「でも、高校一年生の男女が一つ屋根の下なんて……きゃっ」

右京は頬を染めて、両手で顔を覆った。左京もそれ真似たりして、教室中の視線が集まってしまう。

「うう……」

居心地が悪くなり、雪美と春也は自然と距離をとった。一瞬目が合ったが、春也はすぐに視線をそらしてしまった。そして、その横顔が――燕に似ていた。

その日の夜。

闇の中、一人の男性の悲鳴が木霊した。どこにでもいるような、会社帰りの、中年太りの男性。その男性が、人生最速のスピードで駆け抜ける。

「ひっ……や、やめ……ひい……！」

襲いかかってくる何かから逃れるように、男性はひたすら走る。自分が誘導されているとも知らずに、逃げ場のない狩り場まで全力で、走る。毎晩これを繰り返せば、あっという間にダイエットが成功するだろう。もっとも、その前に死ぬか、壊れるのがオチだが。

「ぐえっ!？」

目の前に何もない空間で、男性は壁にぶつかったように止まった。尻もちをついて見つめる先で、そこに行き止まりの壁が現れる。

「な、なんで……」

眩き、不意に月光が陰った。呆然と見上げた男性に、真っ黒なシ

ルエツトが見える。しなやかに宙を舞い、その右手が銀色に反射した。

「ひいつ！」

ダガーナイフの刃が空中から振り下ろされた。壁際ぎりぎりまで後退して、かろうじて避ける。ネクタイの先端が切れて落ちたのと同時に、ダガーナイフが繰り出される。

「安心しろ、殺しはしない……」

ナイフの切っ先は、腹部まで十センチほどのところで止められていた。しかし直後、男性は腹部に激しい痛みを覚えた。

「ぐ……う……？」

視界が歪み、再び直ると、腹にはナイフではなく剣^{つるぎ}鉞^{やぐら}が突き立てられていた。流れ出ていく血を見つめて、犯人に恍惚^{こころう}とした表情が浮かんだようだった。

——異常だ……

「……『ゲーム』だからな」

歪み（前書き）

明けましておめでとう御座います。お年玉を親に搾取されたイチゴダイフクです。

受験まであと約一カ月。気を引き締めて、連載がんばりたいと思います。

歪み

翌日。雪美が学校から帰ってくると、春也はすでにリビングでくつろいでいた。

「ちょっと、ハルってば！」

頬を膨らませて、ソファに座った春也に後ろから飛び着いた。長瀬姉妹から聞いた話では、雪美と二人で帰るのが恥ずかしくて先に逃げ帰ったらしい。

「もう、先に一人で帰るなんて、酷いじゃない！」

あたしだって恥ずかしいのに……と愚痴っていると、春也の様子がおかしいことに気づいた。いつもなら真っ赤になって大騒ぎするはずなのに、全くの無反応である。

「ちょっと、ハル……？」

「……だ……やっぱり……いや、まだ……」

「ハル……どうしたの？」

「……………」

春也はテレビの方をぼんやりと見たまま、すぐ側でも聞こえないくらい小さな声で呟いている。テレビでは、ニュースが流れていた。

「……………昨夜十一時半過ぎ、○県×市の会社員男性が襲われ、意識不

明の重体で病院に搬送されました……警察では、連続傷害事件に係するとみて捜査しています……また、これまでの事件と同様に、犯人が能力者であることも考えられ、警察では慎重な捜査を……」

「ねえ、ハルってば！」

「……ん……？」

肩を揺すって呼びかけると、ようやく春也は気づいたようだった。まだ少しぼんやりとした眼差しで、雪美を見上げてくる。

「ああ、ユキ……帰ってたの？」

「今帰って来たところ。……どうしたの？ 具合でも悪いんじゃない……」

「大丈夫だよ……最近、ぼうつとすることが多くて」

「……それならいいけど」

春也の笑みがなんとなく弱弱しい気がして、雪美は不安になった。それにさっきの、歪んだ雰囲気。

——あのときの、神前くんみたいだった……

一方、燕も悩んでいた。

風呂に入ろうとして、脱衣所で服を脱いだ。高校生の男子にしては細く白い、一見女子のようでもある身体が現れる。冬の「ゲーム」

のときの傷は、すでに消えて無くなっている。

——右腕以外は。

「っ……」

ぐるぐるに巻いた包帯を解いていき、思わず目をそらした。毎日
見ているが、いつまで経っても慣れることはない。

痛々しい右腕から目をそらしたまま身体を洗い、入浴剤を入れた
湯船に浸かった。乳白色のお湯が傷口にかかり、痛みに悲鳴を上げ
そうになる。

「なんで、治らないの……」

左手の「守護者」の能力も、小凧の「巻き戻し」も、市販の薬も
試したが、何一つ効果はない。病院に行こうかとも思ったが、音亜
や雀を心配させたくはなかった。

細い右腕に走ったいくつもの醜い傷跡から、小さな身体が壊れて
いきそうな気がした。精神まで蝕んで、ボロボロと崩壊していく。

「……ちよつ、雀さん……やっ……」

燕が泣きそうになると、脱衣所から音亜の焦った声が聞こ
えてきた。なにやらどたばたとしている。さっきまで、雀と一緒に
酒を飲んでいたはずだったが。

「えへっ。音亜ちゃん、綺麗な身体してるねえ……」

「や、やめて……きゃあ!？」

「!？」

——予想外。

傷

「!？」

突然浴室のドアが開け放たれ、一糸纏わぬ姿の音亜が飛びこんで――いや、雀に押し込まれてきた。そのすらりとした肢体が目飛び込んできて、燕は反射的に顔をそむけた。

「うふふ、若い二人で仲よくしなさい！」

「雀さん！」

雀は去っていく、浴室には二人だけが残された。互いに背中を向けあつたまま、音亜が小さな声で言う。

「そのっ……あのね、燕くん。これは別に、わざとじゃないんだよ？ ……まさか、雀さんがあんなにお酒に弱いなんて思わなかったから……」

雀は、弟の燕同様かなり酒に弱い。そのくせたくさん飲みたがるものだから、困ったものだ。

「こつちこそ、ごめんね。……姉さんもお酒に弱いこと、教えてなかったから……」

しばらく沈黙が流れた。音亜が髪を洗っている、シャワーの音だけが響く。燕は、右腕を音亜から隠すように抱き寄せた。

やがて髪を洗い終えた音亜が、顔をそむけたまま湯船に寄つて来

た。一応タオルは巻いているが、その、最近ちょっと発育がよろしいようで……目のやり場に困る。だがそれ以上に、右腕が……

「……燕くん……どうしたの？」

燕の様子に不信感を持ったらしき音亜が、少し身体を寄せてきた。しかし、恥ずかしさよりも右腕を隠す方を優先してしまつ。とつさに隠そうとして湯船にばしやりと浸けてしまい、今度は悲鳴を押さえられなかった。

「っ……あ……」

「燕くんっ？」

「見ちゃダメ！」

叫んだが、遅かった。右腕の傷を見た音亜が、燕をじっと見つめて言う。

「燕くん……これ……」

「やめて、見ないで……見ちゃダメだよ……」

こんな醜い傷を、音亜に見せてはいけけない。

傷の痛みか、それとも悲しいのか——堪え切れず、涙が流れ出てきた。簡単には泣かないようにしようと思っていたのに、やはり人間は、そう簡単には変われないらしい。いつまで経っても心は弱いまま、音亜に心配させる。

「痛いのか？」

「……うん……痛い」

心が、とは言わなかった。言葉にしてしまえば、その瞬間に壊れてしまいそうだったから。

「泣かないで」

音亜に後ろから抱きつかれた。腰に手を回され、優しく囁かれる。その囁きにわずかに嗚咽が混じっているのを聞きとって、燕は呟いた。

「音亜、泣いてる」

「燕くんが泣いてるから、泣いてるんだよ」

思えば、音亜には励まされてばかりだ。ボクだって、守ると言うたのに。

——音亜を、泣かせたくない。

だが一つ、心配なことがある。この前偶然気付いたが、音亜には言えない。

——池内さんなら……

「燕くん？」

燕が静かになったのに動かないので、音亜が心配して声をかけてきた。返答に困り思考を巡らせて、音亜と密着していることに気づく。

「……音亜……さすがに、この格好でこの体勢は……」

「え？ あ、やだっ……！」

音亜は慌てて脱衣所に飛び出していった。ほっとため息をついて、燕は脱衣所の音亜に言う。

「ありがと、音亜」

「……………」

反応がないので、聞こえなかったかと燕は首をひねった。本当は、恥ずかしすぎて音亜が一瞬意識を失っていただけだったのだが、燕は知らない。

治らない右腕の傷。

この傷が、後に大きな問題を引き起こすのだが——燕はまだ気づかない。

衝動（前書き）

絵を描きたくてペンタブを買いましたが、スキャナ
の存在を忘れていました……。また小遣いを貯めな
いといけません……。

衝動

土曜日。雪美と春也は、一緒に出かけていた。春也は認めていないが、事実上のデートである。

「けっこう泣けたね。特に、あのキスシーンとか」

「そう？　ボクとしては、イマイチだと思ったけど」

「もっとハードなのが良かった？」

「もっと健全なのが良かった。……長瀬さんたちお勧めの映画なんて、見るもんじゃないね」

長瀬姉妹から勧められた恋愛映画を見たのだが、どうやら春也には不満だったらしい。他にも、手を繋いで歩こうとしたり、バスで隣に座って肩を寄せようとしたりすると全力で逃げる。久しぶりに会ったときは、優しくおんぶしてくれたというのに。

「ねえ、ハル。最近、ちょっと冷たくない？」

「そんなことないよ」

「だって、あたしを避けてる感じだし……家でもさ、ぼうつとしてるっていうか、怖いときあるし」

「怖い？」

あれから何度か、能力者による連続傷害事件についてのニュース

が流れているが、その度に春也は暗くなる。自覚がないのか――あるいは、誤魔化そうとしているのか。

「……ううん、なんでもない」

春也をなんとか励ますことができないだろうか。せめて、事件の犯人が見つかれば……

「っ!？」

思考を遮り、唐突にそれは訪れた。久しぶりの破壊衝動に立ち止まり、震える右手を押さえる。

「……ユキ、どうしたの？」

「ハ、ハル……」

「？」

――壊したい。

首をかしげて見つめてくる春也が、燕の姿と重なった。隔離地区で、雪美が「ゲーム」と称して壊そうとした、優しい少年。

「……ちょっと、トイレ行ってくるね。待ってて」

「ん……？」

踵を返し、慌ててトイレの個室に駆け込んだ。鍵を閉めて、うずくまる。しばらく耐えていたが、堪え切れずに壁に手をついた。力

を抑えるように努めながら、少しだけ「破壊者」を使う。

「……は……はぁ……」

壁がひび割れ、わずかに崩れ落ちた。もっと派手に破壊したいという欲求を堪えて、握りしめた右手を壁から引き離す。いつまで経っても治まらない衝動に苦しみながら、何度も呟いた。

「か……神前、くん……」

夜。そろそろ寝ようかと思ったところで、電話が鳴った。ソファに寝転がってくつろいでいた音亜が受話器を取る。

「もしもし？」

電話に応じた音亜が、一瞬複雑な表情をした。ちらと燕を見て、手招きする。代われというジェスチャーらしい。

「誰から？」

「……池内さん」

「？ なんだろ」

受話器を受け取ると、なんだか元気のない雪美の声が聞こえてきた。

「……神前くん？」

「何？」

「今度、二人だけで会えないかな？ ……できれば、早い方がいいんだけど……」

「何かあったの？」

「……『破壊者』」

その弦きだけで、燕はだいたい分かった。こちら相談したいところがあるし、丁度いいだろう。……

問題は、音亜がどうするかだが。

「じゃあ、明日はどう？」

「うん。……そっちに行ってもいいかな？ こっちはちょっと、いろいろあって」

「いいよ。じゃあ、また明日。駅まで迎えに行くよ」

さて、音亜を都合よく外出させるにはどうすれば良いか。そんな風に考えながら電話を切ると、背後に凄まじい殺気を感じた。

恐る恐る振り返ると、音亜が上目づかに睨みつけている。音もなく身を寄せると、燕の顎を持ち上げて訊ねてきた。

「明日、家で、燕くんが、池内さんと、何をするのかな……？ なんで、私が外出しなきゃいけないのかな？」

どうやら「千里眼」を使っていたらしい。燕は冷や汗をかきなが

ら、必死に弁明した。

「えっ、と……ほら、ボクたちの能力関係で、いろいろと……」

「言い訳は後でゆっくり聴かせてもらいます」

「……はぁ……」

この後、音亜は尋問と称して燕を部屋に呼んだが、結局はやきもちをやいていただけだった。

悩み（前書き）

楽しかった冬休みも、今日で終わりです……終わってない数学の宿題、どうしましょうか……

悩み

翌日、午前中。雀に頼んで音亜を買い物に連れて行ってもらい、燕は駅に雪美を迎えに行った。

「おはよう、池内さん」

「おはよー。久しぶりだね」

燕の部屋に招き入れて、先に雪美の要件から始める。燕はベッドに、雪美は椅子に座って向かい合った。

「昨日、出かけた先でね……いきなり、壊したっていう衝動に襲われちゃって」

「まだ、治らないの？」

「うん。一応、頻度は減ってきてるけど……」

「うーん……なんでだろ……？」

「……やっぱり、精神的なことかな？」

その考えに、燕も首肯した。燕の能力の反動も、精神的に弱っているほどに酷くなるような気がする。同じ「破壊者」の能力だし、雪美にも当てはまるかもしれない。

「何か、悩みがあるんだね？」

「……うん」

燕が訊ねると、雪美の表情が陰った。ポツリ、ポツリと少しずつ話し始める。

「実は……」

雪美は、春也のことについて話し終わるとうつむいた。燕も天井を見上げ、考え込んでいる。

「それで、その……春也くんのおかしいって……どんな風になんか？」

「え……」

あの時の神前くんみたい——とは言えない。記憶を辿って、できるだけ鮮明に思い出そうとする。

「なんか、暗いっていうか……怖い……かな？ 雰囲気、歪んでるっていうか……」

「危険？」

「そういうわけじゃないけど……まあ、ちょっと心配なんだよね。だから……」

もしも春也が、犯人である能力者への復讐を企んでいたら——能力者と戦おうとしていたら——止めなければならぬ。そして、

「ハルの代わりに、あたしが犯人を捕まえる」

「……本気？」

「ハルが危ないと思ったら、ね。……なんていうか、あたし……犯人の気持ち、少し理解できそうだし」

隔離地区で、雪美が「ゲーム」と称して行った暴力。犯人たちもきつと、この連続傷害事件を「ゲーム」だと思っているに違いない。

「……それで。神前くんのお話は？」

「うん……実は、これなんだけど」

「……！？」

燕が右腕の包帯を解くと、いくつもの傷が現れた。冬の「ゲーム」で、「完全破壊」を使った際の傷だ。

「『守護者』の能力を使ってるんだけど、治らなくて」

雪美が傷から目を離せないでいると、燕は鉛筆を一本取り出した。それを右手で握り、能力を使う。粉々になった鉛筆が、指の隙間から零れ落ちた。

「？」

雪美は首を傾げた。燕はただ、能力を使っただけである。それが、一体どうしたというのだろう。

「……これ、この前気づいたんだけど……」

燕は身体をひねり、肩の付け根辺りを見せてきた。真っ白な肌に、赤い小さな線が一つ入っている。そこから血が一滴、滴り落ちた。

「能力を使う度に、壊れていくんだよ……」

壊れるとき

夜十一時。春也は雪美の部屋の前に立っていた。ドアをノックしても返事は返ってこず、一層心配にさせる。

昼過ぎに中学時代の友達の家から帰ってきてから、雪美はずっと部屋に閉じこもったままだった。一応、夕食と入浴は済ませたが、明らかに元気がなかった。

「ユキ、入るよ……?」

そつとドアを開け、部屋の中を覗き見た。真っ暗なので電気を点けると、パジャマ姿の雪美がベッドにうつぶせている。寝ているのか、春也が部屋に入っても反応がない。

「……ハル……」

寝ているのならと毛布をかけてあげると、小さな呟きが聞こえた。雪美はベッドにうつぶせたまま、注意していなければ聞き逃してしまいそうな声で言う。

「こつち、来て……」

「何?」

手招きされ、枕もとにしゃがみこんだ。そのまま雪美が黙ってしまったので、春也は首を傾げて声をかける。

「ユキ? ……どうしたの……!?」

突然、抱きつかれた。細い腕に抱き寄せられて、雪美の上に覆いかぶさる格好になってしまう。

「ちょ、ユキ……！」

離れようとして、雪美が泣いていることに気づいた。嗚咽の隙間から、か細い声が聞こえてくる。

「……どうしよう？ ……全部、あたしのつ……あたしのせいだ……」

泣き続ける雪美に、春也は何と声をかければいいのか分からなかった。

あの時。燕の右腕から滴る血を見つめたまま、雪美は動けずじまつた。

「なんで……」

「……この前気づいたんだよ。『破壊者』の能力について、いろいろ知れたかったし。音亜がいない間に試してみただけど……まさか、こんなことになるなんて……」

「痛く、ないの……？」

燕の傷だらけの右腕を見ている内に、雪美は自分の右腕も同じようになるのでは——と恐ろしくなってきた。燕のように、壊れていくのかもしれない……

「朝倉さんには、言ったの？」

「ううん……音亜を心配させたくないし」

燕は右腕に新しい包帯を巻きながら、小さな声で言う。

「あのね、池内さん。……誰にも……音亜にも言わないでほしいんだけど……いいかな？」

「？」

「同じ『破壊者』として、池内さんには言っておきたいんだ」

燕の碧眼に、涙がうつすらと浮かんでいるのが見て取れた。薄い唇から、わずかに震える言葉がこぼれ出てくる。

「なんとなく分かるんだ……ボクはもう、壊れちゃうときが近いのかもしれない……」

手帳

翌朝。雪美は玄関のが前で振り返り、春也を呼んだ。

「ハル―！ 早くしないと遅れるよ？」

しかし、リビングからは沈黙しか帰ってこない。もう一度呼ぶと、酷く暗い雰囲気の中春也が出てきた。若干ふらふらしながらも、力なく笑う。

「ごめん。……ちょっと、考え事してたから」

「大丈夫？ あまり元気ないけど」

「ゆうべはユキを慰めるのが大変だったから。理由を訊いても何も言わないし、なんか抱きついてくるし……かなり疲れた」

「あー……とりあえず、ごめんね？ いろいろあつてさ」

確かに、昨夜はだいぶ迷惑をかけた。様子を見に来た春也に抱きついて泣き続けたあげく、無理やり隣で寝させた。叔母さんや長瀬姉妹に知られたら――かなり、まずい。

しかし雪美は、春也が元気がない理由は分かっている。今朝の二ユースで、また連続傷害事件が起きたことを取り上げていたためだ。叔母さんは慌ててチャンネルを変えたが、変えた先でも能力者の危険性についてやっていた。

「ねえ、ハル」

「何？」

学校の前で、隣を歩きながら声をかけた。少し躊躇って、自然と小さな声になって言う。

「……約束して。危ないこと、しないって」

「危ないことって……？」

「約束して。お願い」

「……うん」

珍しく真剣だったからか、それとも昨夜のことがあったからか、春也は照れくさそうに目をそらしながらも頷いた。そこで雪美がさりげなく手を繋ごうとして、指先が触れた。

「おはよー！ 相変わらず仲がいいね、二人とも」

「仲よく手を繋いで登校か。朝からいちゃいちゃして……いいなあ」

「！？」

突然後ろから聞こえた声に、二人は手を離れた。横に跳んで互いの距離をとる。振り返ると、長瀬姉妹が仲よく手を繋いで立っていた。

「ごめんね、邪魔しちゃった？」

「別に、ハルのことなんて、あたしは……」

「何とも思っていないの？」

「……それは、その……ハルとあたしはただの従姉弟なわけで……」

言い訳しながら、雪美はちらと春也の方を見た。——ニヤニヤと笑ってこちらを見ながら、右京が春也に寄り添っている……春也も頬を赤く染めて、どこことなく嬉しそう……やっぱり、従姉なんかよりも普通の女の子の方がいいのか……

「……あう……」

「ユキ!？」

頭からしゅうしゅうと湯気を出しながら、雪美はしばし気を失った。

放課後。春也が忘れ物を取りに戻ると、雪美の席の近くに手帳が一つ落ちていた。ページを開いたままなので、文面が見える。手帳には、たくさんの図や文字列。

「これ……」

手帳を拾い上げ、中に目を通す。確信を持った春也は持ち主の名前を探したが、どこにも記名はない。

——この手帳は、もしかして……

「ハル？ 早く帰ろうよ」

「あ、うん……そうだね」

忘れ物と手帳をかばんに放り込み、教室の入り口で待つ雪美のもとへ小走りに向かった。並んで帰りながら、春也是無意識のうちに雪美と距離をとる。明るく笑いながら喋る雪美の声に感じながらも、春也是手帳のことばかり気にしていた。

「……ハル？」

「なんでもないよ……うん。きっと、ボクの勘違いだから……」

「？」

こんなこと、あつてはいけない。雪美が、そんなことするはずがない。

春也が拾った手帳には、連続傷害事件の詳細が事細かに――そして、これからの犯行現場が記されていた。

犯人の能力（前書き）

祝！ 連載百回目です！

犯人の能力

同日。ようやく昼休みになり、燕と音亜は教室で弁当を食べていた。初めは交代で作っていたのだが、最近は二人一緒に作っている。

「……ねえ、音亜」

「何？」

「連続傷害事件の犯人って、どんなだと思う？」

今朝のニュースを見て、昨日の雪美の言っていたことを思い出したのだ。能力者としては、やはり気になる。

「どんなって……能力が？」

「うん」

音亜は少し考えるそぶりを見せたが、首を横に振った。卵焼きの最後の一切れに箸を伸ばしながら、訊ねてくる。狙っていた卵焼きを食べられた燕は、わずかに唇を尖らせた。

「燕くんには、分かってるの？」

「だいたいの予想はついてるよ。……知ってると思うけど、最近は見回りが強化されてるんだ。それを避けて移動するためには、どんな能力が必要かな？」

「……『テレポーション瞬間移動』……だね」

「正解」燕は首肯した。「……タコさんもらっね」

タコさんウインナーを口に放り込み、ゆっくりと咀嚼した。それからまた、話し始める。

「次に、被害者の証言。襲われた人たちの証言では、犯人は大柄な男性だったり、長身の少年だったり、外人の女性だったり、様々なんだよ」

「じゃあ、それも能力？」

「たぶんね。『幻覚』か何かじゃないのかな」

空になった弁当箱を片づけながら、燕は言った。冬の「ゲーム」で、能力の反動で見た幻覚を思い出し、背筋が震える。

「つまり、犯人は複合能力者……いや、その可能性は低いから、二人以上いると考えるべきだよ」

「へえ……でも、それだと犯人は捕まらないね」

「うん」

大人には能力者がいないので、本来なら夜出歩いている子供を探せばいいだけだ。しかし、犯人が「幻覚」の能力を持っているとしたら、大人の姿に化けられる。いくら見回りを強化したところで、見つかりはしない。仮に現場を押さえたとしても、それは本来の姿ではないし、瞬間移動で逃げられてしまう。

「普通の人たちには、無理だと思う」

「……ねえ、燕くん」

「？」

音亜は他の生徒がこちらを見ていないことを確認し、「千里眼」を使った。すぐに妖しい光は瞳から消え、ため息をつく。

「……犯人、探すつもりなの？」

「まあ、機会があればね。たぶん、ボク有能力なら『幻覚』も壊せるし」

「心配なんだけど」

「大丈夫だよ。音亜もいるし」

「私も探すの！？」

「だって、ボク一人だと心配なんでしょ？」

燕は笑い、音亜はため息をついた。しかし、なんだか少し楽しそうである。

「手伝う代わりに、今度デートに連れてってよね。私、遊園地行ってみた。外に出てから、まだ行ったことないし」

「えー？ ボク、水族館の方が好きだなあ……」

「文句言わない！ 来週の日曜日、約束だからね」

こうして、燕と音亜も動き始めた。

目撃

犯人のものと思われる手帳を拾ってから、一週間が経った。見回りをしている警察の目を避けながら、手帳に記されていた公園に向かう。今日が、犯行が予定されていた日だ。

手帳には、幾つかの候補地が書かれていた。一昨日にも犯行があったが、そのときは春也が向かったとは別の場所だった。風邪気味だが、先に仮眠をとっておいて起きだしてきた。

「……捕まえないと」

最近、連日夜に出歩いているが、咎められることはない。母は仕事の関係でしばらくいないのだ。それに――雪美が心配するそぶりを見せるが、どこまで信じられるのか、分からない。自然と距離を置くようにしようとするが、春也が体調を崩し気味なために余計に心配される。

春也は、雪美を疑っていた。

目的の公園に着いた。しかし誰もいないので、慎重に踏み入る。遊具の少ない小さな公園で、隠れることのできる場所はほとんどない。またしても予想が外れたか。

「キミ、そこで何をしているんだい？」

「!?!」

「待ちなさい！」

背後から声をかけられ、ライトで照らされた。見回りしていた警官だ。反射的に春也は駆けだそうとし、右脚に痛みが走った。

「っ……」

転倒し、鼻を強く打ちつけた。流れ出てくる鼻血を拭いながら、慌てて立ち上がる。犯人にやられた右脚は、まだ完治していない。警官が駆け寄ってくる足音が近づく。しかし――

「……がつ！？ あ、ああああ……！！」

まさかと思いなながらも、春也は振り向いた。大柄な男性――犯人が、手にしたナイフで警官の腹を突き刺している。それに対して警官は、痛みを苦しむというよりも、何かに怯えて振り払おうとしているようだった。

「ああああ……いやだっ、あ、来るな……！！」

狂ったように叫ぶ警官から、犯人はナイフを引き抜いた。しかしそれで終わりではなく、崩れ落ちそうになる警官を連続で切りつける。弄ぶように、縦横に切り裂き、繰り返し突き刺す。

「っ……」

春也は流れ出てくる大量の血から目をそらして、必死に吐き気を堪えていた。グロテスクな音が耳朶を打ち、身体が震える。

――狂ってる……

「誰だ……？」

ゆっくりと顔を上げたとき、すでに警官は突っ伏していた。血にまみれたそれを見下ろしている人物を見て、春也はただ——やっぱり——とだけ思った。犯人のシルエットは、先ほどまでと違う。長い黒髪を夜風になびかせて、右手には赤く濡れた剣鉞。

「ユキ……なんで……？」

犯人はこちらを振り返らず、公園を出て行った。公衆電話を使って匿名で救急車を呼び、春也も帰宅した。

信じたくはない。雪美が犯人だなんて、信じられるはずがない。

——しかし、見てしまった。

風邪のせいか、それとも精神的な問題か、この夜は酷く寒かった。

亀裂

夜。今日もまた、なかなか帰ってこない春也を心配して、雪美は起きたままでいた。ソファに座ってテレビを見ながら、眠い目をこする。

「遅いなあ……」

春也は近頃、連日夜に出歩いては遅く帰ってくるということを繰り返している。今日はあまり体調も優れないようだったし、いつも以上に心配である。それに、なんだか春也に避けられている気がする。

はあ……と長い溜息をついた。さすがにそろそろ寝ようかと迷い始めたところで、玄関の開く音が聞こえる。雪美はリビングから飛び出した。

「お帰り、ハル。……こんな時間まで、どこ行ってたの？」

訊ねるが、無視された。少し頭に来て、すれ違う春也の腕を掴む。

「ねえ、ハルっ……」

「触るな！」

乱暴に、振り払われた。驚く雪美を睨みつけて、春也は声を荒げる。

「ハル……」

「見たんだよ！……もう、全部分かってる！　ユキが……お前が、能力者だってことくらい、分かってるんだよ！」

「なっ……」

なんでそれを、ハルが知ってる？　疑問に思い、しかし訊ねる前に突き飛ばされた。廊下に転倒した雪美を、春也が軽蔑の目で見下ろす。

「信じてたのに……ユキがあんなことするわけないって、信じてたのに……！」

「ちょっと、ハル！　何言ってる……」

「……なんで……久しぶりに会えて、一緒に学校に行けて……うれしかったのに……なんで、あんなこと……なんで、なんで……」

荒い呼吸を繰り返しながら、春也は呟く。だんだんその声が小さく、かすれていく。

「……もう、信じない……ユキなんて、大っ嫌いだ……」

「ハルッ！」

春也の身体が傾き、壁にもたれかかった。そのままずると崩れ落ち、廊下に倒れる。明らかに体調を崩している春也を抱き起こしながら、雪美の中にはいくつもの疑問が渦巻いていた。

そして——嫌われてしまった、と。

その後。倒れた春也を部屋に運んでベッドに寝かせた。上着をハンガーに掛けるとき、ポケットの中身が落ちる。反射的に、雪美はそれを拾った。

「？」

手帳だ。何気なくページをめくって、何について書かれているのか、春也と同じく気づいた。

「なんで、こんなものを……」

最近出かけていたのは、おそらくこれを見てのことだろうが、なぜ春也がこんなものを持っているのだろう。

「ハル……」

呟き、雪美は考えた。そして、燕を思い出す。燕なら、力になってくれるかもしれない。

「もしもし、神前くんっ？」

逸る^{はや}気持ちを抑えながら、燕の携帯電話に電話した。もう深夜を回っているのに寝ているかもしれないと思ったが、幸い起きていたようだった。

「んー……もしもし、池内さん……？ どうしたの、こんな時間に」

「あ、あのね、神前くん！ 実は……」

眠たげな声の燕が話の最中に寝てしまわないか心配だったが、とりあえず最後まで聞いてくれた。春也の部屋を出て自分の部屋に入り、ベッドに腰かける。

「……うん、分かった。……じゃあ、また……おやすみ」

一通りの説明を終えて、電話を切った。明かりを消して、ベッドにうつぶせる。春也の声がまだ頭の中に響いていて、雪美はなかなか眠りに落ちることができなかった。

——……ユキなんて、大っ嫌いだ……

決着の夜

犯行現場を目撃した翌日。春也は学校を休んだ。風邪をこじらせてしまったのだが、雪美と一緒にいたくないので、心配するそぶりを見せる雪美を追い払った。

雪美が犯人だとは信じたくない。何かの見間違いだったとしたら、どんなに楽か……

「……もう、夜か」

今日は食事もせず、ずっとベッドの中で丸くなっていた。寝ているのかいないのか分からないような状態から完全に目を覚まし、ようやく起き上がる。ハンガーに掛けられた上着から手帳を取り出し、次の犯行現場を確認した。駅から少し離れたところにある、人気のない路地裏である。

「……行こう」

身体がだるいが、文句を言っている暇はない。今日もまた、被害者が出るかもしれないのだ。手帳に記された犯行現場も残り少ない。一刻も早く捕まえたかった。

上着を着て静かに一階に下りると、すでに雪美はリビングにはいなかった。テーブルにはラップをかけてある夕食と、お腹が空いていたら食べてという手紙が置いてあった。空腹が気になったが、無視する。

玄関に靴が置いてあるのを見て、まだ出かけていないことを知る。

先回りすることになるが、早めに家を出る。熱くだるい身体を、涼しい夜風が撫でていった。

夜、十一時。雪美がベッドの上で眠れずにいると、春也が一階へ下りていく足音が聞こえた。遅い夕食を食べるのだろうと思って毛布にくるまるが、しかし、いつまで経っても春也は二階に上がってこない。

「？」

また体調を崩して倒れているのではないかと心配になって、雪美は一階に下りた。そつと覗きこんだリビングには明かりが点いておらず、夕食はそのままだ。

「まさか……」

弾けれるように玄関に駆け、春也の靴がないことから出かけていることを知った。それはつまり、今日もまた犯人を捜しに出かけたことになる。

「ハル……！」

雪美は急いで支度を整え、春也を追って家を飛び出した。あの手帳の内容を思い出し、駅の方へと駆ける。

「！」

大きな通りに出ようとしたところで、遠くにパトカーが見えた。慌てて建物の陰に身を潜め、通り過ぎるのを待つ。そうしている間

にも、焦る気持ちばかりが積もっていく。

春也がまだ体調を崩したままだし、相手は能力者だ。以前は怪我で済んだが、今度はもしかしたら、殺されるかもしれない……

「……一応、メールしておこうかな……」

携帯電話を取り出し、メールを送る。燕は寝ているかもしれないので、念のために音亜にも同じ文面のメールを送った。無事だったら、十二時半までに連絡する——と。

春也が犯人に会い前に連れ戻す。もし犯人に出くわしたとしても、雪美が時間を稼いで春也を逃がせば大丈夫だろう。問題は、春也が雪美を信じてくれるか、だが。

「大丈夫……絶対に、壊させたりなんかしない」

燕と違い、壊す能力しなくても——それでも、春也を守らなければならぬ。

たとえば、能力者であることがばれて——もう二度と、春也と笑いあうことができなくなるとしても。

——決着を、着けよう。

雪美

春也は、手帳に記されていた通りの場所にやって来た。駅から少し離れていて、人気もなく静かだ。背の高い建物に囲まれているため、月明かりだけが頼りだ。

「……ユキ」

月明かりに薄く照らされて、雪美は立っていた。綺麗な長い髪をなびかせて、静かにこちらを振り向く。数メートルの距離を開けて見つめ合った。春也の唇から、小さく言葉が漏れる。

「……なんで、あんなことしたの？」

「……………」

雪美は答えない。返事の代わりに右手を振り、次の瞬間、その手には剣鉈が握られていた。切っ先をピタリと春也に合わせて、笑う――いや、晒う。

「右脚の借り、返してもらっよ」

春也が呟き、同時に雪美が動いた。軽やかに地面を蹴り、瞬く間に距離が詰まる。剣鉈が振りかぶられ、春也はそのから空きの腹部に、隠していたカッターナイフを突き刺した。

「!？」

雪美が目の前から消えた。カッターナイフが空を切り、春也は体

勢を崩して前につんのめる。なんとか踏みとどまって周囲を見回すが、雪美がいない。まさか、逃げたのか。そんな風に思ったとき、月明かりが陰った。

「がつ……」

真上から、無防備な頭を蹴り飛ばされた。勢いよく地面を転がり、手放してしまったカッターナイフが遠くに落ちる。起き上がるうとして、雪美のつま先がみぞおちに食い込んだ。立て続けに一発、二発と蹴りつけられ、反撃できずに地面に倒れて呻く。

「っ……っ……」

髪を掴まれ、無理やり顔を引き上げられた。痛みに顔を歪めながら、冷たい笑みを浮かべたままの雪美を睨みつける。互いの鼻が触れ合うほど顔を近づけて、雪美は呟いた。

「ねえ、ハル……あたしのこと、好き？」

「……大っ嫌いだよ」

「なあんだ。残念」

突き飛ばされて、仰向けに倒れた。右脚に違和感を覚えて目をやり、凍りつく。

——右脚が、腐っていく。

肌が変色し、しおれ、朽ちていく。ずきずきと激しく痛み、肉の腐る異臭がした。その匂いと光景に吐き気を覚えながらも、目が離

せない。

「何、これ……」

これも、能力の一つなのか。こんな、狂ったことが……

「あ、ああ……ああ……！」

ぼろぼろと腐肉が崩れ落ちていく。脚の崩壊は左にも及び、つま先から腐り始める。春也は、自分の精神がすり減っていくのを感じた。

「ねえ、ハル。今、どんな気持ち……？」

雪美の声が、後ろから聞こえた。首だけで振り返り、うつろな目で見つめる。

「あたしのこと、好きだった？」

「……うん」

好きだった。信じていた。だから、今、こんなにも辛いのだ。

「……そろそろ、死んで」

「……うん」

雪美が右手を振りかぶった。ゆっくりと頷いた春也の首筋を狙って、剣鉞を振り下ろす。鋭く砥がれた切っ先が迫り、頭の片隅でぼんやりと死を意識した。

「!？」

「……？」

目を閉じて待っていたが、痛みはいつまで経ってもやってこない。疑問に思って顔を上げると、銀色の粉——おそらくは鉄粉だ——が宙を舞っているのが見えた。雪美は、刃を失った剣鉈の柄を握りしめ、驚きの表情を浮かべている。

そして、その視線の先には——雪美。

「……え？」

雪美が、二人。

「騙されないで、ハル」

新しく現れた方の雪美が、混乱している春也の臉を閉じさせ、優しく撫でた。閃光が走ったのが、臉を閉じていても分かる。雪美の手が離れ、目を開けたとき、壊れた剣鉈を持っているのは雪美ではなかった。

「ほんと、驚いたよ……まさか、能力者だったなんてね」

雪美は春也を庇うようにして立ち、犯人の名を呼んだ。

「長瀬……左京ちゃん」

喪失（前書き）

最近寒いですねえ……腹巻きをしているのですが、お腹の調子が芳しくありません……

喪失

春也を庇うようにして立ち、雪美は長瀬左京を睨みつけた。「破壊者」の右手を握りしめて、一步踏み出す。

「左京ちゃんだったんだね、連続傷害事件の犯人」

左京は突然現れた雪美本人に驚いたようだったが、それはすぐに、凶悪な笑みに変わった。――冬休みの、雪美と同じ。

「……どんな能力を使ったのかはわかんないけど……雪美ちゃんも、能力者だったんだね」

「……まあね」

ちらと春也を見て、目をそらした。それでもう、後戻りできない。春也に嫌われたまま、隔離地区に戻ろう。

この事件を、終わらせて。

「左京ちゃん的能力は、『幻覚』でしょ？ そんなのあたしには効かないから、降参したら？」

「ただの『幻覚』じゃないんだけど……ね！」

左京が右手を振り上げた。何もない空間からいくつもの鎖が飛び出して来て、雪美の身体を締め上げる。実際に鎖で締め付けられているような圧迫感と痛みを感じる。どうやら左京の能力は、視覚以外にも作用するらしい。

「……こんなの、効かないよっ」

「破壊者」で鎖を壊した。鎖は閃光と共にバラバラに千切れ飛び、すつつと空気に溶けるように消えていく。

「へえ……」

能力を破られたというのに、左京は余裕だった。上着の内側からナイフを取り出し、雪美に向かって一直線に走り出す。それを迎え撃つ雪美は、突き出してきたナイフの切っ先に右手を突き出した。しかし、ぶつかる瞬間、左京の身体が視界から消える。右手は空振りした。

「え……？」

左京が消えた。「幻覚」で姿を消したのなら、厄介だ。周囲に注意を払っていると、春也の声が聞こえた。

「ユキ、後ろ！」

「っ……！？」

とつさに身体をひねり、後ろへ跳んだ。横に一閃されたナイフの切っ先が、長髪をわずかに散らす。いつの間にか、背後に左京がいた。

「あははっ」

ナイフを弄びながら、かつての雪美のような嬌声を上げる。過去

の記憶を振り払って雪美が右手を突き出すと、またもや左京が消えた。先ほどのことを思い出して後ろを振り向くが、いない。

「上！」

また春也が叫んだ。しかし今度は、逃げる前に側頭部を蹴り飛ばされた。蹴られた頭を左手で押さえながら「破壊者」を使うが、また消える。

「っ……はあ、はっ……」

何度も「破壊者」をかわされ続けるうちに、右手に軽い痛みを覚えた。乱発しすぎたらしく、もう反動がきている。

しかし、慎重に戦わなければという思いとは裏腹に、あの破壊衝動に襲われた。何もかも、すべて壊してしまいたいという衝動に駆られ、姿を消した左京を捜して連続で能力を使う。

「あれー？ どうしたの、もうバテちゃった？」

衝動が消え、動きを止めたところで左京が目の前に現れた。荒い呼吸を繰り返しながら、右手を伸ばす。しかし触れる寸前に、鎖が手足を縛りつけた。体勢を崩して倒れるが、反動で頭が朦朧として能力が使えない。身動きをとれないしていると、縛られた手足に違和感を感じた。

「ひっ……」

いつの間にか、手足を縛りつけているのが鎖ではなくなっていた。黒く淀んだドロドロの液体状の触手が、蛇のようにのたうち、細長

く伸びて全身を締め付けてくる。

「……う、あ、ああ……」

苦しい。息ができない。能力が使えない。逃げられない。

全身が痛い。徐々に息苦しく、吐き気も込み上げてくる。骨が軋み、自然と涙が流れ出てきた。反動のせいか、意識が遠のいていくのを感じる。

意識を失う直前、雪美は呟いた。

「ハル……逃げ、て……」

——ごめんね、ハル……

ハルだけは、失いたくなかったのに。

もうそれは、できそうもない。

燕と音亜

雪美と左京が戦っている、少し前のこと。

「ん……？」

燕が目を覚ますと、隣で音亜が寝ていた。ぼんやりとしたままの頭で状況をゆっくりと呑み込み、次第に思い出す。

今日は珍しく音亜が風邪をひいてしまい、つきつきりで看病していた。そして、夜寝かしつけるとき。音亜はなんだか酔っているときと同じような感じで、隣で寝るようにねだってきたのだ。断ったが、目に涙をためて抱きつかれると、さすがに燕も折れた。

——まあ、ボクも嬉しかったけど。

ベッドから起きだし、音亜の寝顔を見つめた。すでに熱は下がったらしく、穏やかな表情で眠っている。音亜を起こしてしまわないように気をつけながら、机の上に置いてある携帯電話を手についた。メールが届いている。

「？」

メールは雪美からだった。文面に目を通し、もう一度時計を見て、慌てて自分の部屋に駆け込む。時刻は十一時半。メールに記されていた時刻にはあと一時間ほどあるが、燕は嫌な予感がした。

もしも雪美が犯人を発見し、戦闘になったら——「破壊者」の能力があるとはいえ、「瞬間移動」と「幻覚」の二つを相手にするの

は危険だ。それに雪美はもう、反動を受けるようになってる。

パジャマを脱ぎ棄てて服を着替え、髪を縛ろうとして今はショートヘアであることに気づいた。焦る自分に舌打ちしながら、小鳥の絵柄のハンチングをかぶって部屋を出る。

「……………燕くん？」

「ね、音亜……………」

階段を駆け降りるところで、音亜に呼び止められた。驚いて足を踏み外しそうになりながらも、手すりを掴んで踏みとどまる。

「……………ごめん、起こしちゃった……………」

「ううん。……………でも、こんな時間にどうしたの？」

「いや、それは……………別に……………」

笑って誤魔化そうとすると、音亜の両目が妖しく光った。――まったく、厄介な能力である。

「私も行くよ」

「でも、音亜は病み上がりだし……………」

「燕くんが行くなら、私も行かないと。心配だよ」

ちょっと待ってて、と音亜は部屋に戻っていった。すぐにスプリーヤナイフを準備してやってくる。雀は熟睡しているので、二人並

んで静かに家を出た。

「大丈夫かな……」

駅は幸い無人駅なので、誰にも咎められることなく電車に乗れた。いざとなったら燕の能力で記憶を壊せばいいのだが、反動のためにもそれは避けたい。

「大丈夫だよ」

席に座ってうつむいている燕に、音亜が言った。

「池内さんがそう簡単に負けるとは思えないし。燕くんも、危なかったら私が助けてあげるから」

「ありがとう」

励まされながらも、燕の不満は拭えなかった。音亜の手を握り、その手にも自然と力がこもる。雪美の無事を祈りながら、電車に揺られていた。

友達

春也は、倒れたままの雪美を呆然と見つめていた。黒いドロドロしたものに縛りつけられたまま動かない。

「ユキ……！」

ようやく我に返って雪美に向かって走りだすが、左京の姿が消えた。次の瞬間、目の前に左京が現れる。頬をかすめたが、繰り出されたナイフを間一髪かわして、雪美のもとまで駆け寄った。触手を掴んで力いっぱい引きちぎろうとする。

「っ……」

ドロドロの液体が手について気持ち悪い。手が滑って握る力が入らなかった。雪美を縛りつけている触手はびくともしない。

「よそ見しない方がいいかもね」

声に振り向いた春也の前で、左京の姿が消える。とっさに移動しようとするが、突然後ろから羽交い絞めにされた。

「!？」

身動きが取れない春也の前に、ナイフを構えた左京が現れた。必死で避けようと身体をひねるが、直後に腹部に鋭い痛みを感じる。一瞬冷やりとし、すぐに熱くなった。

「あっ……が……」

地面に倒れ伏した春也が首をひねって見上げると、そこには左京が二人——いや……

「私を忘れてもらっちゃ困るなあ、春也くん」

左京の双子の姉、右京がそこにいた。左京が犯人なら共犯の可能性も高かったというのに、今まで姿を見せていなかったせいで気づかなかった。

「どう、痛い？」

しゃがみこんで訪ねてくる右京を、痛みに顔を歪めながら精一杯睨みつけた。抵抗できずにいる春也に、種明かしとばかりに笑って右京は言う。

「大好きな雪美ちゃんが犯人かもって思ったときは、どんな気分だった？」

手帳が雪美の席の側に落ちていたのは、右京と左京がわざと落としたのだと言った。偶然、冬休みに襲った春也と同じ高校に進学し、もう一度標的にすることにした、とも。

「運が悪かったね、春也くん。今回は、右脚だけじゃ済まないよ」

——それは、殺す、ということだろう。

正体を知った相手を野放しにするほど、甘くはないはずだから。

「バイバイ」

死刑を宣告する声に、春也は目を閉じた。瞼の裏には、特に何も浮かんでは来ない。ただ心残りがあるとすれば、雪美に謝る前に離れ離れになってしまうことだった。

——ごめん、ユキ……

呟き、また閃光が走った。

「……え……？」

目を開けると、瀬川姉妹は後退して春也の後ろを睨んでいた。雪美は動けないはずなのに、一体誰が……

「……ほんと、今日はお客さんが多いね」

左京が吐き捨てるように言った。その視線を追って振り返ると、二つの人影。片方は中性的な顔立ちの美少女。もう一人は、一瞬女と見間違えるほど可愛い顔立ちの少年。少年の右腕に巻かれた包帯は、手のひらの部分が破れて無くなっていた。

「あなたたちが、犯人……だよね？」

少女が言った。こちらに一步踏み出すと、その両目が妖しい光の尾を引く。

「誰……？」

「能力者」

春也の問いに少年が答えた。小さく微笑み、ショートヘアの金髪が揺れる。

「池内さんの、友達だよ」

似ている二人

「大丈夫？」

倒れている少年——おそらく、彼が春也くんだろう——に歩み寄り、血が流れ出ている傷口に左手をかざした。左手の周辺が温かい光に包まれて、瞬く間に傷口がふさがる。春也の呼吸も少し落ち着いていったようだった。

「キミも……能力者なんだね？」

「うん。でも、安心して。ボクたちは、池内さんたちの味方だから」

穏やかに笑いかける燕の視界の隅で、双子の少女の片方が消えた。ということは、彼女が「瞬間移動」の能力者だろう。反射的に立ち上がり、左手を構える。

「燕くん、後ろ！」

攻撃の手を読んだ音亜の声が聞こえた。振り向くと同時に左手を突き出し、「守護者」の能力を使う。薄い光の障壁が現れ、その向こう側に現れた少女のナイフの切っ先を弾く。予想外の出来事に、少女の表情がわずかに引きつる。

「っ……」

ナイフを壊そうと右手を伸ばすが、ギリギリのタイミングで逃げられた。双子のもとに戻り、こちらを睨みつけてくる。

「燕くん、池内さんが……」

「うん。……こっち来て」

敵が動きを留めている今のうちに、倒れている雪美に駆け寄った。ついてくるように春也に手招きし、四人が一か所に集まる。

「音亜、見張っててね」

双子のことは音亜に警戒しておいてもらいながら、燕は雪美の様子を見た。身体に巻きついていているドロドロの触手は、おそらく「幻覚」の能力によるものだろう。それを右手で掴み、「破壊者」を使う。千切れ飛んだ触手は、空気に溶けるように消えていった。

「……神前くん……」

傷の治療をしていると、雪美がうつすらと目を開けた。すぐに目立った傷は無くなるが、呼吸が辛そうである。反動のせいかもしれない。

「ごめんね……迷惑かけちゃって……」

「大丈夫だよ。ちょっと、待っててね」

雪美と春也から離れ、二人を障壁で囲んだ。これで相手は、簡単に手出しができないだろう。ナイフを取り出した音亜の横に並んで、そつと耳打ちする。

「池内さん、反動が辛そうだった……早く、終わらせよう?。」

「うん。燕くんも、気をつけてね」

燕は「幻覚」の方に向けて走り出した。それに反応した犯人がこちらに手を向け、周囲から鎖が飛んできた。先ほどの雪美のように身体を縛られるが、あの触手よりはマシだ。右手で壊し、着地と同時に地面を蹴る。

「きゃっ!？」

紙一重でかわされ、突き出した右手は空振りした。意識を壊すことが目的なので、頭を狙って右手を振りかぶる。

「燕くん、上!」

「!」

とつさに上へ左手を伸ばすと、もしかしてもナイフと障壁がぶつかった。再び消えて、後ろに。そこを狙うと、今度は少し離れた位置に現れる。

「……このっ……?」

駆け寄ろうとして、背中に違和感を感じた。不快な感覚に襲われる。

「えっ? やっ、ちょっと……やだ……蟲……!？」

背中を芋虫が這い上がってくる感覚に、背筋が震える。腕や脚にも様々な蟲が纏わりついて来て、冬休みに反動で見た幻覚を思い出す。あれ以来、少し昆虫が苦手なのに……

「あ、あう、あう……」

「燕くん、しっかりして！」

危うく意識が離れかけたところを、音亜の声に呼び戻された。不快感を我慢しながら、冷静に「破壊者」で「幻覚」を打ち消す。右腕がチクリと痛み、少し傷が入ったのが分かった。

「……って、あ！ 待て！」

燕がうろたえている間に、双子は手を繋ぐと二人同時に消えた。音亜に視線で問いかけるが、首を横に振る。

「ダメ。逃げちゃった」

「……ごめん……ボクが蟲なんか怖がらなければ……」

燕はうなだれて歩き、雪美と春也を囲っていた障壁を消した。もう一度二人に謝り、それから訊ねる。

「どうする？ とりあえず、池内さんを家に送った方がいいよね」

「うん……でも、瀬川さん……犯人は、どうしよう……」

「んー……音亜、犯人がどこ行ったか分かる？」

「一応、最後に読み取れたよ」

頷いた音亜に、それまで黙っていた春也が顔を上げた。ふらつき

ながらも立ちあがって、音垂に訊ねる。

「あいつらは、どこに行ったの？」

このとき燕は、春也が自分に似ていることに気づいた。外見の問題ではなく、そう、雰囲気というか……

「教えて。……ボクが、捕まえに行くから」

隔離地区

「待つて、ハル……行っちゃダメ」

犯人の居場所を音亜に訊く春也を、雪美が止めた。反動で苦しうにしながらも、声を絞り出す。

「普通の人じゃ……ハルじゃ、勝てないよ……」

「そんなの、分かってる……！」

春也にしがみ付いて引きとめる雪美を、春也は少々乱暴に振り払った。声を荒げて、しかし、震える声で言う。

「ボクじゃ勝てないってことくらい、分かってるよ！ だけど、このまま……このまま、引き下がれるわけないだろ！」

右脚を——大好きな、サッカーを奪われて。

雪美のことを疑って、傷つけて。

他人に任せて黙って見ているなんて、できるはずがないじゃないか。

「でも、復讐なんて間違ってるよ」

声に振りがえると、能力者の少女——音亜が、両目を妖しく光らせていた。金髪の少年、燕に寄り添うようにしながら、伏し目がちに言う。

「……春也くんが、そんなことしても……誰も喜ばないんじゃないかな」

「そんなこと……！」

「犯人は、ボクたちが捕まえるから」

燕が言った。

「だから春也くんは、池内さんの側にいてあげなよ」

その優しい声が、なぜか心に突き刺さった。

ただ、雪美を抱きしめて。その頬に、涙が一粒落ちた。

「まだ、いるかな？」

「たぶん、いると思うよ。最後に読み取ったのだと、私たちを誘ってる感じだったから」

雪美たちが通う高校に向かって、燕と音亜は歩いていた。初めてのうちは走っていたが、どうせ犯人が待っているのなら急ぐ必要はないだろう。警察を呼ぼうかとも思ったが、あの二つの能力が相手では捕まえられない。

「でも、良かったね。池内さんたち、仲直りできたみたいで」

「うん。後は、ボクたちが犯人を捕まえて、全部終わりだよ」

右腕をさすりながら、包帯を見つめた。「破壊者」の能力を使つたのと同じだけ、血がにじんでいる。暗いおかげで音亜にはまだ気づかれていないが、時間の問題だろう。心配させるわけにはいかないので、できるだけ能力を使う回数を減らしたい。

「ねえ、燕くん……」

「ん？」

「普通の人たちから見たら……能力者^{わたしたち}って、変……なのかな？」

今にも消えてしまいそうな、か細い声だった。包帯に巻かれた右腕から目をそらし、音亜を見つめる。

「テレビで、能力者の危険性とかについて話してる人とかさ……春也くんみたいに、怪我させられた人とかさ……そういう人たちからしたら、怖いのかな……」

「音亜……」

「最近、ニュースでやってたよ。今は試験的に、一部の能力者を外に出してるけど……その中にも、能力を悪用したりする人がいるんだって。だから、また、隔離地区に送ろうって……そういう意見が、沢山あるって」

それはつまり——もう一度、隔離地区に戻って。

大人になって能力が消えるまで、あの場所に閉じ込められるということだ。

「もしも、そうなったら……きつともう、『ゲーム』は行われないよ。閉じ込められたまま、逃げだせない……」

そこで、音亜は立ち止まった。少し遅れて燕も歩くのを止め、振り返る。

「……戻りたくないよ……」

早く、犯人たちのもとへ行かなければならない。——しかし、分かっていても、歩きだせない。

「野々山くんも、小凧ちゃんも……他の人たちも、私たちも、みんな……ずっと、外で普通に暮らせたらいいのに……」

「……うん」

「なんで私たち、能力なんて手に入れちゃったのかな……？」

泣きそうな顔で力なく笑い、音亜はまた歩き始めた。燕の手をとって、夜の学校に向かう。事件に終止符を打つために、戦うために……

「行こう、燕くん」

少しだけ、先ほどもでよりも肩を寄せて歩く。それからずっと、目的の高校の校舎が見えるまで、燕は音亜の言葉について考えていた。

——なんで私たち、能力なんて手に入れちゃったのかな……？

「……分かんないよ……」

呟いて、右手を握りしめた。

——「ゲーム」を、終わらせよう。

窮地（前書き）

読者の皆さまこんにちは、イチゴダイフクです。お久しぶりです。だいぶ長い間、連載が止まってしまっていました。すみません……いえ、サボっていたわけではありませんよ？ ただちょっと、受験があったり久しぶりに買ったゲームをやったり自転車で走り回ったりしてただけで……はい、申し訳ありませんでした。反省しております。

それでは、連載再開です。

窮地

程なくして、双子が待つ高校に辿り着いた。やはり鍵は閉まっている。校門を乗り越えて中に入る。

「痛っ……」

着地の際、突然の痛みに膝をついた。隣に着地した音亜に、慌てて抱き起こされる。

「大丈夫？ やっぱ、反動が……」

「うん……大丈夫。……早く、終わらせて帰ろう」

身体が全体的に重たく、時折鋭い痛みを感じるが、それでもまだ戦える。わずかに血のにじんだ包帯の上から、右腕を抱きしめた。

「……どこにいるんだろ」

歩きだし、周囲を見回しながら音亜が呟いた。四階建ての校舎を指差して燕を見る。

「校舎に隠れられてたら、見つけないかも。陰から狙われるかもしれないし」

「先にグラウンドを見に行った方がいいんじゃない？」

警戒しながら校舎の横を通り、暗闇に沈んだグラウンドの隅に立った。目を凝らして双子の姿を捜し、音亜が囁いた。

「いたよ」

「ん……？」

斜め前方を指差して、音亜が駆けだした。それに遅れて燕も走り出し、危険に気づいて音亜を押し倒す。

「危ないっ……！」

地面に倒れた二人の上を、ナイフが一閃した。雪美から聞いたので名前は知っている。確か、こちらが左京だったはずだ。

「燕くん、後ろ！」

「っ……」

右手を地面についたまま、身体をひねって左手を突き出した。ナイフの刺突を弾き、音亜を庇うようにして立つ。

「……雪美ちゃんは？」

「池内さんなら、帰ったよ」

「そっか……春也くんとは、どうなったの？」

「ちゃんと仲直りしたよ」

「なあんだ、残念。じゃあ……」

左京の言葉を遮って、燕は右手を振りかざした。距離を詰め、手に握られたナイフを狙って右手を繰り出すが、「瞬間移動」によってかわされた。燕が慌てて振り向くと、音亜の目の前に左京が現れるのはほぼ同時だった。

「音亜！」

音亜は「千里眼」を使って攻撃を先読みし、振り抜かれたナイフをかわした。しかし連続で突き出され、燕が助けに入る前に左の肩を切りつけられた。ひるんだ隙に、右の腿も刺される。

「きゃあぁっ！！」

切られた左の肩口を押さえて音亜が後退した。追い打ちをかけようとする左京の腕を掴み、振り向き様に突き出されたナイフの刃を右手で握りしめる。わずかに皮膚が切れたような気がしたが、すぐに粉々に砕け散った。左京が驚きに目を見張っている間に、うずくまっている音亜に駆け寄る。

「大丈夫？」

「っ……うん……平気だよ」

裂けた袖の隙間から、傷口が覗いていた。それを押さえる右手は、暗闇の中でも分かるほど赤く濡れている。口では平気だと言っているが、表情は痛みに歪んでいる。

「一回隠れよう。左手で治せば大丈夫だよ」

音亜に肩を貸して立ち上がった。燕も反動が辛い、音亜の身の

安全の方が優先である。

「とりあえず、校舎に隠れ……」

「逃がさないよ」

校舎に向かおうとした二人の前に、左京が立っていた。反射的に後ずさり、後ろからの声に振り向く。

「だから、逃がさないって」

「!?!」

背後には左京が立っていた。注意深く見てみるが、右京ではない。左京だ。

「え……あれ? ……??」

「私の能力、便利でしょ?」

困惑する燕の前に、意地の悪い微笑みを浮かべた右京が歩み出てきた。パチンツ、と指を鳴らす。

「……さて、問題です。私は何人いるでしょう? あははっ!」
「」

三人、四人、五人——突然現れた左京たちに、燕と音亜は取り囲まれた。おそらくはそのどれもが幻覚なのだろうが、しかし、多すぎて誰が本物か分からない。

「……音亜、分かる……？」

「ごめん……ちょっと、無理っばい」

音亜の「千里眼」を使えば見抜けるかと思ったが、ダメらしい。そうすると、風漬しに破壊者で消していくか……

「燕くん！」

「……え？」

パチンツ。もう一度右京が指を鳴らした。その音が夜の校庭に響くと同時に、ナイフを構えた左京たちが一斉に消えた。危険に身を強張らせる音亜を庇う燕に、暗く晒^{わら}う右京の声が聞こえた。

「そろそろ、『ゲーム』は終わりかな？」

怖いもの（前書き）

読者の皆さまこんにちは、イチゴダイフクです！

ちよつと遅くなりましたが、昨日は合格発表でした。いやあ、とりあえず合格していましたので、これで落ち着いて遊べ……いえいえ、こちらも頑張ります、はい。

怖いもの

「なっ……！？」

驚きの声を上げたのは、右京だった。それから、「幻覚」による分身を消された左京も、突然の出来事に目を見張る。

一斉に消えた左京に襲いかかれた燕は、少しだけ、「完全破壊」を使った。力を上手くセーブできるか心配だったが、分身を消すことには成功した。

——ただ、一気に身体が辛くなった。

「……変わった能力、使うね……」

音亜を後ろに庇い、燕は地面に右手をついてしゃがみこんでいた。自分の能力を破られた右京が、憎々しげに呟く。

「それ、何て言う能力？」

「……『破壊者』」

乱れた呼吸を整えながら、燕は答えた。後ろ手に音亜の傷口に触れ、左手で傷口を治す。会話で時間を稼いで、音亜を安全な場所に避難させたい。

「なんで、こんなことしたの？」

「……『なんで？』……って、なんで？ 私たち、何か悪いことし

た？」

心底不思議そうに、左京が訊ね返してきた。理解できない、と右京も首を傾げる。

「私たち能力者の方が、普通人^{ノーマル}よりも優れてるじゃない。それなのに今は、本来なら私たちが上に立つべきなのに、普通人が能力者を支配してる。化物だって罵って、閉じ込めてるじゃない」

「そうだけど……だからって、他の人たちを傷つけていい理由になんかならないよ」

誰かを傷つければ、自分だって傷つくのだ。

それを燕は、知っている。それから——大きな力には、代償が必要なもの。

「ねえ……こんな『ゲーム』、もうやめてよ」

双子に向かって、燕は言った。傷口のふさがった音亜から左手を離して、自分の右腕に能力を使う。効果がないのは分かっているのに、で気休めでしかないが、それでも何もしないよりはマシだった。

「……はあ……分かったよ」

「……え？」

「分かったって言ってるの。『ゲーム』はもう終わりにするよ」

予想外の返答に燕は驚いたが、本当に反省している様子の双子に

疑うことはしなかった。左京はまだ不満そうにしているが、右京がそれをなだめている。

「よかった。ありがとう……」

「燕くん、騙されちゃダメッ！」

「!？」

悲鳴と共に、音亜に突き飛ばされた。地面を転がって立ち上がる。

「音亜!？」

音亜は地面にうつ伏せに押し倒されて、その脇腹からは血が流れ出ている。「瞬間移動」した左京が、逆手に握ったナイフを突き刺している。

「あれー？ バレちゃった？」

「っ……」

「音亜っ！」

燕は駆け寄ろうとしたが、左京は手に持ったナイフを刺したまま擦じった。悲鳴を上げる音亜を押さえつけて、燕に警告する。

「あまり抵抗しない方がいいと思うなあ。大切な彼女ちゃんがどうなるか……」

左京はナイフを引き抜いて、刃についた血を舐めた。その切っ先

を燕に向けて、音垂を踏みつける。

「さっきは何されたのか分かんなかったけど……今度はおとなしくやられてくれるよね？」

殺しはしないから——と、後ろで右京が笑う。

「私たちは、殺したりはしないんだよ。その代わりに、一生分の恐怖を与えるんだ」

燕の足元の影が蠢いた。気のせいではなく、おそらくは「幻覚」の能力だろう。黒い影が鎖のように伸びてきて、燕の身体に絡み始める。

「キミが一番怖いのは、何？」

影の鎖に縛りつけられた燕を、右京が妖しい笑みを浮かべて見つめてきた。

「あつ……か、は……あ……」

苦しくて答えるところではない。それを察したのか、若干締め付けが弱くなった。酸素を求めて喘ぐ燕に、右京がもう一度問う。

「キミが一番怖いのは、何？」

「ボク、が……怖いもの……？」

怖いもの——虫は、冬休み以来苦手だ——いや、きっとそんなことを訊いているわけではないだろう。では、何だ？

「あまり知られてないけど、能力者ってね。その人の心が、能力に関係してくることが多いんだって」

「心……」

「そうだよ。キミの、心の闇は……？」

心の闇。怖いこと——死ぬのは、怖い。音亜を失うのは、もっと怖い。雀も、安藤も、デブも、野々山も、小凧も、雪美も——誰かを失うのが、怖い。

「……ははっ……そうだったんだ……」

「？」

突然笑い声を上げた燕に、右京が眉をひそめた。

「どけよ」

まだ音亜を踏みつけていた左京に言った。特に大きい声だったわけでもないのに、突然の口調の変化のせいでもあるのだろう、一歩後ろに退いた。

——思い出したのだ。

壊れた記憶を思い出した燕は、影の鎖を握りしめた。

夏

「つつ……あつ……」

影の鎖を右手で壊すと、これまで以上の痛みが走った。「破壊者」の能力を使うのも、そろそろ限界だろう。

「ボクが、怖いのは……」

身体を支えていた鎖が消えると、眩きながら、燕は地面に跪いた。燕が動かなくなったのを好機と思ったのか、左京が消える。

——壊れること。壊されること。

「『完全破壊』」

夜の校庭に、眩いばかりの光が弾けた。地面が砕け、夜気が爆ぜ、燕の周りからすべてが壊れていく。

「きゃあ!？」

左京か、右京か、それともその両方か、悲鳴が聞こえた。音亜の横たわる場所を除いて、あらゆる空間が壊れる。

そしてそれは、燕自身も例外ではなかった。

右腕までだった消えない傷が、さらに先を傷つける。すでに右腕を巻いていた包帯は散り散りに無くなっている。

「ボクが、怖いのは……」

燕がもう一度呟いたときには、校庭には再び静寂が戻っていた。遠くでサイレンの音が聞こえるのは、燕の能力で発せられた光を見た人が通報でもしたのだろう。集まって来る野次馬の騒ぎ声も聞こえた。

——壊れること。壊されること。

「……じゃあ、壊すことは……？」

かすれて、ほとんど声にならない呟きを漏らして、目を閉じた。音垂の声が聞こえた気がしたが、意識はすぐに、深い闇へと引きずり込まれた。

時は流れ、連続傷害事件の終結から一週間。能力の反動から無事に立ち直った雪美は、市民病院の一室を訪れていた。

「神前くん」

真っ白な病室の中で、ベッドに横たわっていた金髪が揺れた。上体を起こして目が合うと、燕は明るく微笑んだ。

「久しぶり、池内さん。元気だった？」

「うん。……神前くんは？ 朝倉さんから、だいぶ反動が酷かったって聞いたけど……」

「ん……もう大丈夫だよ。怪我は残ったままだけど、近いうちに退

院できるだろうって」

「そっか……」

燕の右腕の傷は、今では右の胸元まで及んでいるらしい。詳しくは聞いていないが、おそらく「完全破壊」を使っただろう。アレが一体、どんな能力なのか——「破壊者」である雪美にも、よく分からない。

「ねえ、そういえばさ」

「？」

燕がベッドから身を乗り出して、少女のような悪戯っぽい笑みを浮かべて訊ねてきた。

「春也くんとは、どうなったの？ 仲直りしなんでしょう？」

「えっ？ あ、うん……まあ……」

まさか、燕から春也との関係について訊ねられるとは思っていなかったのだ、かなり焦った。しどろもどろになりながら弁明する。

「おかげ様で、ちゃんと仲直りできたよ……うん。ただ、なんていうか、ハルが……」

「ん？」

「ちょっと、変わったような……」

あの日以来、春也は能力者を毛嫌いするのを止めた。ついでに、雪美への態度も変わっている。

——ねえ、ユキ。今度、二人で遊びに行かない……？

「ふふっ……何かいいことがあったみたいだね」

「……うん」

赤くなつてうつむきながら、雪美は勧められた椅子に座った。

「ハルに、デートに誘われちゃった」

「へー……いいなあ。入院してるから、音亜と出かけなくて……」

「でも、毎日お見舞いに来てくれるんでしょ？ 二人とも、本当に仲がいいよね」

「うんっ！」

本当にうれしそうに笑う燕に、雪美も笑い返した。

「……じゃあ、そろそろ帰るよ。お大事に」

「うん。またね」

しばらく雑談を交わした後、雪美は病室を出た。夕日の下に躍り出て、軽い足取りで家路につく。ふと寄り道をする気になって、春也と再会した公園に向かった。

空気が少し、湿り気を帯びている気がする。春は終わって、梅雨
が来て、夏が来る。春也と一緒に、海水浴にでも行こうか。それか
ら、夏祭りにも行きたい。とびきり可愛い浴衣姿を見せてあげよう。

今年の夏休みが、楽しみだ。

春の追走、終了。

春の追走 あとがき（前書き）

読者の皆様こんにちは、イチゴダイフクでございます。

先日投稿しましたこのあとがき兼次回予告ですが、ちょっと予告に変更がありますので訂正します。すみません……

春の追走 あとがき

読者の皆様こんにちは。受験が終わって遊び呆けている、イチゴダイフクです。

毎度毎度、このような拙い話を読んでいただいて、ありがとうございます。ようやく、第四部まで終わりました。

舞台を隔離地区の外へ移して物語が進行しました。連続傷害事件の被害に遭い、能力者を恨む春也と、第三部から引き続き登場の雪美。——しかし今回は、書いていてあることに気がつきました。

1……このお話、美少年・美少女率が結構高いです。違うのは、安藤とデブくらいじゃないでしょうか？ 今回初めて名前が明かされた雀も、当然のごとく美人という設定です。さらに言っておくと、第一部以降出ていませんが、安藤の妹も可愛いという設定です。

2……今回、野々山と小凧が登場していません。——いや、まあ、安藤とデブも出ていませんが——それにしても、割と自分が気に入っているキャラクターを登場させられないのは辛いです。

……と、1・2のような反省も踏まえて——はい、まだ続きます。

「春」の後は、再び「夏」！そしてついに、最終部です（たぶん）！！

まあ、まだプロットが完成していませんけど……

とりあえず、現時点で書けているところまで次回予告です。

新キャラクターも含め、メインキャラクター総出演でお送りする、能力者たち最後の「ゲーム」

隔離地区の「外」で、能力者たちと「鬼」の壮絶な追いかけつこが始まります。

そして、傷ついていく燕の身体や野々山の過去に関する、それぞれの戦い。

燕は無事「ゲーム」を終えることができるのか？ 野々山は過去の傷を乗り越えられるのか？ 音亜、小凧、安藤、デブ、雪美、そして……

最終部・「最後の疾走」も、よろしくお願いします！

登場人物リスト（前書き）

ようやくプロットができましたので、再開したいと思います。

それではまず、ここまですに出てきた登場人物と、これから出てきそうな登場人物の紹介をさせていただきます。

登場人物リスト

1 神前 燕……複合能力者 能力「破壊者」「守護者」 全部登場

2 朝倉 音亜……能力者 能力「千里眼」 全部登場

3 安藤 紀彦……能力者 能力「鬼人の雷」 1・2・3・最終部登場

4 デブ（本名？）……能力者 能力「鋼鉄人間」 1・2・3・最終部登場

5 野々山 椿……能力者 能力「神の手」 1・2・3・最終部登場

6 豊崎 小凧……複合能力者 能力「無限の炎」「巻き戻し」 2・3・最終部登場

7 池内 雪美……能力者 能力「破壊者」 2・3・4・最終部登場

8 八代 一……複合能力者 能力「硝子の刃」「操り人形」 2部登場（最終部？）

9 瀬川 右京……能力者 能力「幻覚」 4部登場（最終部？）

10 瀬川 左京……能力者 能力「瞬間移動」 4部登場（最終部？）

1 1	神前 雀……燕の姉	1・4・最終部登場
1 2	池内 春也……雪美の従弟	4・最終部登場
1 3	安藤 和花……安藤の妹	1・最終部登場
1 4	平岡 賢……?	1部登場（最終部?）
1 5	所長……?	最終部登場
1 6	佐々木……?	最終部登場
1 7	小糸 雲雀……?	最終部登場
1 8	鳥遊 神威……?	最終部登場

最後の疾走 プロローグ（前書き）

読者の皆様こんにちは、イチゴダイフクです。プロットもようやく完成し、これからいよいよ最終部に入ります。

春休み中に、なるべくストックを用意するくらい書いておきたいですねえ……。

まあ、頑張ります。はい。

ではでは、最終部・最後の疾走、はじまりはじまりー。

最後の疾走 プロローグ

「能力者どもは人類の敵だ！ やはり、『外』に出すべきではなかったのだ！」

脂ぎった身体を揺らしながら、額の広くなった男が怒鳴った。お茶の入ったコップが倒れるのにも構わず、長テーブルに拳を叩きつける。室内にいる男女の視線が集まった。

「この資料を見ての通り、能力者による事件の発生件数は年々増加している。国民の敵を野放しにしておくわけにはいかないだろう！？」

「だからって、どうするんです？ 全ての能力者を隔離するなんて不可能です。新たな能力者は、今この瞬間にも次々に現れている」

眼鏡をかけた白衣の男性が、冷静な口調で言った。ここに集まっている中では比較的若い彼に意見されたのが癢に障ったのか、太った男——「所長」のこめかみがピクピクと痙攣する。

「それに、所長は知っていますか？」

「何がだ！？」

「先日解決された連続傷害事件ですが……犯人の女子高生二人を逮捕に追い込んだのは、あなたが毛嫌いしている能力者の少女たちです」

「！」

若い男性がスクリーンを指した。そこに、金髪碧眼の少女——いや、少年が映し出される。通学途中の写真なのか、電車の中にブレザー姿で座っている。隣の席に座って彼と話している中性的な美少女も、同じく事件の解決に関わっていた。

「少女の名前は『朝倉音亜』。隔離地区にいたときのデータでは、人の思考を読み取る能力を持っていたとあります。それから——」

金髪の少年を指し示し、手元の資料を掲げる。

「——金髪の少年は『神前燕』。彼の能力は『破壊者』と呼ばれています」

「『破壊者』？……それは確か……」

「連続傷害事件の被害者の血縁者であり、事件の解決に関わった『池内雪美』と同じ能力です。この二人の能力は、人の記憶や他の能力者の能力まで『壊す』ことができます」

「危険じゃないか！ それを直接一般人に使ってもしたら……」

「彼らは、我々一般人を守りました。十分に信用できるのではないのでしょうか」

「できないな」

「なぜですか！」

若い男性も立ち上がり、先ほどの所長と同じように怒鳴った。そ

んな彼の様子を見て、所長は下品に笑う。

「ようするにキミは、『あの計画』を取りやめにしたいのだろう?」

「!?!? ……どうして、それを……」

「キミの息子も能力者なんだろう?」

その言葉に、彼——「佐々木」は凍りついた。

「佐々木くん。自分の子供を守りたいと思うのは親として当然のことだ。たとえそれが、能力者だろうとな。だが、これは仕方がないだろう?」

所長は部下を呼び、あらかじめ用意しておいた書類を持ってこさせた。それを室内の全員に配り、得意げな顔で語り始める。

「先日、ようやく例の薬が完成した。まあ、ごく少量だがな」

「……それをエサに、彼らを釣ると……?」

「ああ。現在、能力者のリストアップを始めている。……そうだな。諸々の準備も含めて、夏休み頃までには用意できるか」

夏休み。

もう、止めることはできない……

「さて、『能力者研究開発所』最大のプロジェクトだ」

所長は自信たっぷりに笑い、部下に指示を出した。スクリーンに浮かんだ三文字のカタカナを、佐々木は呟く。

「……『ゲーム』」

うなだれる佐々木を冷たい目で見下して、所長は立ち上がった。拳を突き上げ、叫び、呼びかける。

「やつらが死ぬか、それとも我々と共に生きていくのか、これで決まることになるだろう！　そしてそれは、やつらの好きな『ゲーム』で決定する！！」

佐々木を除いたほとんどが、所長の声に賛同し拳を突き上げた。飛び交う怒声が室内を震わせる。味方のいない中、佐々木は息子の未来を想っていた。

先ほど見た、金髪の少年を思い出す。佐々木は、彼のことを知っている。

「……神前くん……キミに、賭けさせてもらっよ」

季節は巡り、すべての始まりとなった夏休みがやってくる。

最後の「ゲーム」まで、あと少し。

日常？燕と音亜（前書き）

とりあえず、前振りも兼ねてそれぞれの夏休みから始めます。

日常？燕と音亜

もうすぐ夏休みだ。

音亜は高校の終業式の帰りに、燕が入院している病院に向かっていた。流行りの歌を口ずさみながら、見舞いのために何度も通った道を軽い足取りで歩いていく。今日の音亜は、かなり機嫌が良かった。

今日は、燕の退院日。

結局、一学期中に退院することはできなかったが、これから夏休みだ。一緒に出かける約束もしているし、そのために新しい服も燕に内緒で買ったし、綿密なスケジュールも立てた。——完璧だ。

「燕くん！」

病院に入ってすぐ、燕はロビーのソファに座っていた。隣には、小柄な可愛い女の子が一人——だが、問題ない。

「……あ、音亜！ 迎えに来てくれたんだ」

燕は立ち上がって小走りに駆け寄って来た。左手だけで持つのは大変そうなので、代わりに荷物を持ってあげる。最近少し伸びた金髪が軽やかに揺れる。

「音亜さん、こんにちはです」

燕の後ろについてきた少女が、人懐っこい笑顔で挨拶してきた。

すっかり顔見知りになった音亜も、笑顔で返す。

「こんにちは、雲雀^{うずく}ちゃん」

すこし腰を曲げて、雲雀の頭を撫でた。ちょっとおとなしいこの少女は、なんとなく小凧に似ている感じがする。中学三年生で、燕と音亜が通っている高校のすぐ近くの中学に通っていたはずだ。

「えへへ」

頭を撫でてあげると、雲雀はとても幸せそうに笑う。燕も音亜も、妹のように思えるこの子が可愛くて堪らない。

「じゃあ、またお見舞いに来るからね」

「はいっ、待ってます」

雲雀は手を振りながら見送ってくれた。二人は手を振り返し、病院を出て、帰路に着く。

「いい子だねー、雲雀ちゃん」

「うん。優しいし、可愛いし……」

「……燕くん」

「ん？」

「頬っぺたが緩んでる……」

音亜は燕の頬を軽くつまんだ。燕のペースに合わせてゆっくり歩きながら、つまんだ頬をぷにぷにする。唇を少し尖らせて、音亜は呟く。

「やっぱり男の子って、ああいう可愛い子が好きなのかなあ……小凧ちゃんとか雲雀ちゃんみたいな、ロリコン受けするような可愛い子がいいのかなあ……」

「……音亜……痛いんだけど……？」

「あーあ……」音亜は頬をつまむ指に力を込めながら言う。「……どうせ私は、ロミオだし……男の子の方が可愛いんだし……」

音亜はまだ、去年の文化祭を根に持っていた。

「ねえ……ヤキモチやいてる？」

「そ、そんなことないよ！……ない、けど……やっぱり不安になるよ……」

燕が入院している間、音亜よりも雲雀の方が長く一緒にいたのだ。いくら雲雀がいい子で、音亜自身が信頼していようと、不安にならないはずがない。

「あはは、大丈夫だよ。心配なら、ボクの心見てみる？」

「……いい。……それより、約束覚えてる？」

「もちろん。今日から夏休みだから、遊びに行くんだったよね。全部音亜に任せてたけど、行き先とか決まったの？」

「うん。まだ内緒だけど、楽しみにしてて」

ほどなくして、家に着いた。音亜は玄関を開けて先に入り、後から入ってくる燕を笑顔で迎える。久しぶりの我が家に、燕は少し恥ずかしそうに笑っていた。

「おかえり」

「ただいま……！」

こうして、燕と音亜の夏休みは平和に始まった。

日常？安藤兄妹（前書き）

あああ……高校の宿題が終わりません……数学残り19ページあります……

日常？安藤兄妹

「和花^{のどか}ー！早く起きろよー！」

朝に弱い妹の部屋のドアをノックしながら、役立たずの目覚まし時計の代わりに呼びかける。隔離地区を出てから、これが日課になっていた。

「……ふああ……おはよ、お兄ちゃん」

「おはよう。……って、おい！ちよつと待て、待て待て待て！」

部屋から出てきた妹の和花を、すぐに部屋に押し返す。――和花は、スレンダーな身体にタオルケットを一枚巻きつけただけだった。

「んー……何い……？」

「裸で寝るなっつていつも言ってるだろ！早く着替えてこい！」

「裸じゃないもん、ちゃんと下着は着けてるもんっ！」

プクツと頬を膨らませて部屋に戻った和花を置いて、安藤は一階に下りた。頭から和花のセミヌードを必死に締め出す。どうやらあの妹は、服を着ていると眠れないらしい。

家具や調度品の少ない簡素な部屋の中、シンプルなテーブルに二人分の朝食の皿を並べる。和花と一緒に住むようになって、燕や音亜ほどではないが、最近料理が上手になってきた。自分と妹のために、栄養のバランスを考えている。

「いただきます」

しばらくして着替えて下りてきた和花と一緒に、朝食を食べ始めた。目玉焼きをつつきながら、安藤は兄として妹に説教する。

「和花。今日から夏休みだからって、いつまでも寝てちゃダメだからな。——それから、夜更かししないように。——早寝早起きを心がけて……あ、野菜を残すな」

今の安藤を、隔離地区の仲間が見たら——きっと、目を疑うだろう。

「なんかお前、最近変わったな」

この台詞は、先日会ったデブの言葉である。休日に遊びに来たデブは、家庭での安藤の様子に口をポカンと開けて驚いていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「あん？」

「私とデートしない？」

「ぶっ！？ ……げほっ、げほっ ……」

驚き、飲んでいた牛乳を吹いた。床にこぼれた牛乳を拭きながら、和花を見上げる。

「デートって、お前……」

「いいでしょ？ 二人でお出かけ。……そうだなあ……やつぱ夏だし、海とか？」

「この辺には海がねえだろ」

「だけど、ほら……この前遊びに来た、えっと……本名忘れちゃった」

「デブか。まあ、あいつ、名前で呼ばれることないもんな。……それで、デブがどうした？」

「うん。デブさんのお家、割と海が近いんだって。歩いてすぐのところ、海水浴場があるって言ってたよ？」

「へえ、そうなのか……知らなかったな」

——そういえば、デブの家に遊びに行ったことはなかった。

「……まあ、後で電話してみるよ」

「やった！ ありがとお兄ちゃん、大好き！」

はしゃぐ和花に抱きつかれて、安藤は長い溜息をついた。

しかしまあ、ちょっと楽しみではある。

安藤兄妹の夏休みは、愉快に始まった。

日常？デブとばあちゃん

デブの夏休みは、土と汗と日差しの匂いで満ちていた。

「――あつちいー……」

首にかけたタオルで額の汗を拭い、デブは立ち上がった。憎たらしい太陽を睨みつける。今日は雲ひとつない快晴だ。午後は自転車で海に遊びに行こうか。

「よっ……と」

収穫したトマトを持って、デブは畑を後にした。この畑はデブの家の敷地内にあり、毎年野菜を作っては近所にお裾分けしている。

大きな平屋建ての日本家屋の横に回り、縁側に出た。そこに座って、膝に猫を載せている老婆にトマトを見せる。

「ばあちゃん。トマト採ってきた」

「ああ、●●。いつも悪いねえ……どうも最近、腰の調子が悪くて……」

名前で呼ばれたことに居心地の悪さを感じながらも、デブは笑って言う。

「いいよ。自分が食う分くらい、自分で採ってくるさ。……昼飯、そうめんでいい？」

「ほほ、●●が作った料理なら、ワシは何でもおいしいよ」

「……へへっ」

少し照れくさく思いながら、デブはトマトを持って縁側から上がった。一人で調理するには少し広い調理場で、そうめんを茹で、トマトを洗って他の野菜と一緒に皿に盛りつける。使っている野菜は、どれもデブの家の畑で採れたものばかりだ。

「うん……やっぱ旨いな」

トマトを一つ拝借して、丸ごとかぶり付いた。隔離地区にいる間は食べられなかった味だ。こういう些細なことに、幸せを感じる毎日だ。

「みんな、今頃どうしてるかなあ……」

好き嫌いせずに、ちゃんと野菜を食べているだろうか。

「……んん？」

昼食を食べ終えて、午後。海に行くのをやめて昼寝をしていたデブは、電話の音に目を覚ました。のろのろと立ち上がって、受話器を取る。

「もしもし……×××ですが……」

「ああ、デブ？ 俺俺、安藤」

「あー……どうしたんだよ、安藤。かき氷の食べすぎで腹下したかあ？」

「俺はお前と違ってかき氷十杯に挑戦したりなんかしねえよ！……
……でさあ、早速本題に入るけど、今度お前んち行ってもいいか？
……
和花が海行きたいってうるさいんだよ」

「いいんじゃないの？ なんなら泊ってくか？」

「おつ、太っ腹だな。……デブだけに」

「……寒いな」

「冷房効きすぎてんじゃないの？」

安藤の寒いギャグはさておき——デブは「せっかくだしさ——」
と思いついたことを口にする。

「神前とかも誘わねえ？ 俺んち、ちょっとした旅館並みに広いしさ。余裕だろ」

「……中学一年生の妹と二人暮らしの貧しい庶民から言わせてもら
うと、今のお前の台詞はただの自慢にしか聞こえない……」

「あー……まあ、ばあちゃんにも相談して、それからまた連絡する。
神前たちには俺から連絡するよ」

「おう。……そういえばさ、隔離地区の『ゲーム』っていつだったけ
？ 野々山と豊崎はどうすんだ？」

「あん？ 何だよ安藤。お前、ニュース見てねえの？」

「は？」

安藤は何も知らないらしいので、デブは親切に教えてあげることにした。

「今年の夏休みは、隔離地区は解放されてんだよ。つまり、能力者は全員『外』にいる。……たしか、今日じゃなかったっけ？ 野々山たちがこっちに来るの」

日常？ユキとハル（前書き）

昨晚、久しぶりにテレビを見たら、逃げ切ったらお金がもらえる鬼ごっこをやっていました。僕が小説を書こうと思った原点です。懐かしいですねえ……。

日常？ユキとハル

水しぶきが上がった。夏の日差しを反射して、飛び散った水の粒がキラキラと煌めく。

「きゃ——っ！！」

「ダメダメダメダメ無理だって！——ちよっユキ、離し……ごぼごぼっ！？」

雪美は春也の腕にしがみついたまま、プールに突っ込んだ。もがく春也をプールサイドに引き上げて、雪美は言う。

「ハル……ほんとにカナヅチだったんだ……」

「げほっ、げほっ……だから何度も言っただじゃないかあ！ボク、泳げないんだって！」

プールにやって来た雪美は、嫌がる春也と一緒に無理やりウォータースライダーを楽しんだのだった。

「ごめんねー、ハル。……でも、怖がつてるハル、可愛かったよ」

「高校一年生にもなって、可愛いって言われたくない……」

「しょうがないじゃない。可愛いんだから」

にこっと笑って、雪美はプールサイドに座り込んだ春也の手を握んだ。その手を引っ張って、歩きだす。

「ちょっとユキ、どこ行くの？」

「ん？ プールが嫌みたいだから、温泉。たしかパンフレットに、混浴があるって書いてあったな！。一緒に入る？」

その言葉に、春也は周囲の人の視線がわずかに気になった。雪美はその整った容姿で周囲の注目を集めているので、ただでさえ一緒にいるだけでも恥ずかしいのに……

「温泉じゃなかったって、他の施設があつたでしょ？ ゴルフとかテニスができる場所も載ってたよね？」

二人が来ているここは、プールを始めとしたスポーツ施設だけでなく、カルチャー施設、エステ・ボディケア施設、宿泊施設、ウェディング施設（？）など、様々な施設が集まっている。

「スポーツは却下。暑いじゃない」

「温泉だって熱いじゃん」

「水風呂だってあるでしょ？」

「……分かったよ。ユキに任せる……」

「ほんと！？」

「混浴は反対だけどね」

「神前さんと朝倉さんは、一緒にお風呂に入ったことがあるんだよ

「？」

「あの二人が？ 確かに仲いいけど……まさか、そんなことはないでしょ」

「でもこの話、神前くんのお姉さんから聞いたんだけど」

「……………」

真っ昼間から露天風呂に入る——それはなんて贅沢だろう。

——だがそれも、今の春也にとっては修行に等しかった。

「…………あ、あのさ……ユキ」

「なあに？」

「やっぱり、プールに行こうか……」

「なんで？ 泳げないんでしょ？」

「だって、その……ほら、こういうのはさすがに不味いんじゃない……」

シャワーを浴びていた春也は、ちらと雪美を見た。しかし直視することができずに、すぐ目をそらす。

身体にタオルを巻いているとはいえ、その下は……と考えると、いくら燕と同じく可愛い女の子のような春也でも、堪えられない。これでも一応、高校一年生の男子だ。

「ハル―、背中流してあげよっか？」

「!？」

突然背後から抱きしめられた。一気に顔が真っ赤になり、頭がパニックに陥る。

「あ、ううう……」

「ちょっと、ハル―！ どうしたの!？」

温泉と緊張と羞恥と欲求と混乱にのぼせて倒れた春也は、しばらく天国とこちらの間をさまよった。

雪美と春也の夏休みは、騒がしく始まった。

夜。春也が宿泊している部屋。

疲れた春也は早々に寝てしまっていて、遊びに来た雪美は少しがっかりした。

「ハル―……起きてー」

……暇だ。

春也が寝ていて全く楽しくない。明日の午前中にはここを出て、家に帰らなければならぬので、なんだか夏休みの貴重な一日を損

した気分になる。

「ハルってばあ……………」

横に寝そべって春也の頬をぷにぷにとつついてみると、携帯電話が鳴った。燕からだ。

「もしもし？」

「あ、池内さん？ 実はさ、今度デブくんの家でね……………」

「！」

どうやら、夏休みはこれからのようだ。

日常？野々山と小凧（前書き）

昨日、中学の離任式でした。ボクのペンネームがイチゴダイフクになるのに深くかわった愛しの先生が転任するということで、若干悲しかったですね。卒業式に、三年間借りたままだった白玉粉を返すことができて良かったです……。

日常？野々山と小凧

「椿くん……ねえ、起きて……椿くんってば」

「——っは！？」

小凧に散々肩を揺すられて、ようやく野々山は目を覚ました。電車が停まっていることを見て取って、ようやく到着したらしいということを知る。

「ごめん……俺、どのくらい寝てた？」

電車から無人駅に降りて、野々山は伸びをしながら訊ねた。

「だいぶ寝てたよ。うなされてたみたいだったけど、大丈夫？」

「ああ……ちよつと、昔のことをな。ま、よくあることだから気にしないでいいだろ」

「？」

小凧の分の荷物も持って、野々山は目的地に向かって歩き始めた。のどかな田舎道を小凧と喋りながら歩き、しかしその最中も、ずっと別のことを考えていた。

——あれは先日、隔離地区を出る日のことだ。

今年は「ゲーム」をすることなく「外」に出れるということだ、

野々山はだいぶ浮かれていた。小凧と一緒に、「外」への送迎バスを待っていたときだ。

「あれ？ お前、椿じゃねえの？」

そんな自分の名前を呼ぶ声に顔を上げると、髪を染めた少年が立っていた。野々山も茶色に染めているが、この少年は銀色だ。

「あー……誰？」

「俺だよ、俺。分かんねえ？ お前がこっちに来る中一んときまで一緒だったじゃねえか」

「！」

まさかと思い、野々山は銀髪の姿をよく見た。背は割と高く、野々山と同じくらい高い。おどけた風を装っておきながら、その目は鋭い。なんとなく自分に似ているその少年を、野々山は知っていた。

「……カムイ……」

「おっ！？ やっと思い出したか」

「……なんで、ここに……」

「なんでって、俺も能力者になったからさ。……まあ、来てすぐにまた『外』に戻るわけだけど」

ところで、隣の子、可愛いね——と、カムイの目が光る。

「カムイ……ちょっと、こっちに來い」

「あ、椿くん……もうすぐバス來ちゃうよ!」

「悪い……すぐ戻るから」

バスを待つ集団から離れたところで、カムイは口の端を上げて笑った。

「あの子、可愛いね。彼女?」

「……それがどうした」

「ははっ、そんな怖い顔するなよ、椿。 ”まだ”……何もしてねえだろ?」

「……お前のそういうところが嫌いだよ」

「そうかい? でもまあ似た者同士ってことで、これからよろしく!」

予想以上に短く話を終えて、カムイはバスを待つ列に戻り始めた。野々山も歩きだすと、途中で止まって振り返る。いつもの野々山のように、ニヤリと笑っていた。

「今年の『ゲーム』、楽しみだな」

「はあ? 今年は『ゲーム』なんて無いんじゃない?」

「おつ、バスが来たぜ」

訊ねようとした野々山を遮って、カムイはバスに向かって駆けていった。

「椿くん……どうしたの？」

隣を歩く小風にシャツの裾を引っ張られて、野々山は自分が回想に浸っていたことに気づいた。

「あ、ああ……何でもない。まだちょっと眠くてさ」

「？」

小風は首を傾げたが、それ以上追及してこなかった。ポケットから地図を取り出して、道順を確認する。

「こつち」

先を歩く小風についていくと、しばらくして平屋建ての大きな日本家屋が現れた。ちよつとした旅館程度の大きさがあるその建物は、これから三泊四日で二人が泊る場所だ。

「ここがデブの家か……予想以上にでかいな……」

「うん……ちよつと、羨ましいかも……」

呼び鈴を押して立派な玄関で待っていると、燕が出てきた。ポニ

「テールじゃないことにちよつと違和感を感じる。

「あ、野々山くん、豊崎さん。久しぶり。みんなもう来てるよ」

「久しぶり。……って、どうしたんだよ、その包帯」

燕はノースリーブ姿だったので、包帯でぐるぐる巻きになっている右腕が丸見えだった。——いや、それは隔離地区にいるときに見ていたから知っているが、包帯の範囲が大きく広がっている。

「あ……これは、春にいろいろあって……」

「？ ……おじゃまします」

「おじゃまします」

燕の包帯に疑問を持ちながらも、屋敷の中に入った。

野々山と小風の夏休みは、わずかな疑問と不安と一緒に始まった。

日常？ヒバリとスズメ

プリントアウトしておいた地図を折りたたんでポケットにしまい、雲雀は玄関に歩み寄った。

「……ふふっ」

燕にはまだ、退院したことを教えていない。燕の驚く顔を思い浮かべて、雲雀は笑いそうになるのを頑張つて堪えた。頭の中で、これまで何度もシミュレーションした言葉を繰り返す。呼び鈴を押した。

「はあい」

玄関を開けて現れたのは、燕と同じく金髪の、綺麗な女性だった。そつえば、燕が姉がいると言っていた。

「あ、あの、初めまして……私、燕くんの友達の、雲雀っていいます！」

「ああ、燕のお友達？　へえ……やっぱりあの子の友達、可愛い子が多いなあ……」

「！」

可愛いと言われ、雲雀は顔を真っ赤に染めてふらついた。雲雀は大人しい上に、恥ずかしがり屋なのだ。

「え、ええと、燕くんは……」

「あー……そのことなんだけどね……」

雲雀が訊ねると、燕の姉——雀は、申し訳なさそうに頭を下げた。

冷房の利いた部屋。ソファに座らされた雲雀は、雀が出してくれた麦茶をありがたく頂いた。冷たく冷えた麦茶を一気に飲むと、身体が熱がわずかに下がった気がする。

「いやあ、ごめんね。燕、音亜ちゃんと一緒に旅行に行っちゃったんだ」

「旅行ですか？ まさか、二人きりで！？」

仲のいいあの二人のことだから、別に当り前なのかもしれないが——
——なんだか雲雀は、ちよつと心配だった。

——だって、二人ともお年頃の高校生でしょ……？

「いったい、どんなことが……」

しかし、いろいろと勝手に想像して悩んでいる雲雀に、雀は小さく笑いながら教えてくれた。

「友達の家に泊まるんだってさ。大きなお家みたいで、中学とかの友達も集まるみたいだよ」

「へえ……いいなあ……」

仲の良い友達と集まって、遊んで、ご飯を食べて、お風呂に入って、布団を並べて寝て——きっと、修学旅行みたいに騒いだりするんだろう。そう思うと、やっぱり羨ましかった。

雲雀がお土産に持ってきたカップアイスを食べながら、「それにしても……」と訊ねる。

「——燕くんと音亜さんって、すごく仲いいですね。なんかもう、こっ……『恋』っていうより、『愛』みたいな……」

「確かに。まあ、二人ともいろいろあったみたいでさ。ちょっとワケありっていうか……ね」

「ワケあり……ですか？」

「そう。ワケあり」

雀はよくわからないという風に首を傾げた。いろいろって、何？

「ねえ、雲雀ちゃんは、どんな男の子が好き？」

「！？」

金髪碧眼の可愛らしい少年の顔が浮かび、勢いよく頭を振って追いつく。あわあわとうろたえながら、雲雀は語る。

「え、ええつとですね……わた、私が好きなのは……朝倉さんみたいな、綺麗な人……です」

「えーっ？ 雲雀ちゃんって、百合だったの!？」

「そ、そうじゃなくて！……ほら、朝倉さんって、中性的っていうか、綺麗でかっこいいじゃないですかっ！！」

「へえ……」

雀は意地悪く、ニヤニヤと笑っていた。

夕方。玄関先まで見送りに来てくれた雀に、雲雀は頭を下げた。

「あの、今日はありがとうございましたっ。すっかり長居しちゃって……」

「別にいいって。私も、燕と音亜ちゃんがいなくて暇だったし。雲雀ちゃんとも仲良くなれたし、ね」

また遊びに来てねー、と手を振る雀に手を振り返し、雲雀は家路に着いた。燕には会えなかったが、今日は楽しかった。雀はいい人だったし、燕や音亜について新しい一面を知ったり、本当にいい一日だった。

「……ただいまあ」

返事なんて期待せずに玄関を開け、そこに高級そうな靴が乱雑に脱ぎ捨てられているのを見つけた。雲雀は思わず立ち止り、それから呼吸を落ち着けて、そろそろトリビングに入る。

「お父さん……おかえりなさい。泊りこみで仕事じゃなかったの？」

「ああ。『計画』の準備がようやく終わったからな。しばらくは家にいる」

「……そう」

父の言う「計画」というのが何なのか、雲雀は知らない。前に一度訪ねたら、「お前は知らなくていいことだ」と拒絶された。

雲雀は、父があまり好きではない。

父に背を向けて、自分の部屋に逃げ込んだ。

雲雀の夏休みには、憂鬱な雰囲気が漂っていた。

全員集合

デブの家。ようやく野々山と小凧が到着し、全員集合した。

燕、音垂、安藤兄妹、デブ、野々山、小凧、雪美、春也の合計九人の大所帯である。しかし、デブの祖母は快く了解してくれた。まったくありがたい限りである。

「えっと……ユキの従弟の春也です。よろしく」

「お兄ちゃんの将来のお嫁さんの、和花です」

春也と和花が自己紹介すると、ちょうど正午だということでおばあちゃんが昼食の用意ができたと呼びに来てくれた。ちょっと高級な旅館のような広い和室に通され、料理の皿が並べられたテーブルの前に座る。

「いただきます」

昼食を食べ始めてしばらくの間、誰も喋らずに黙々と食べ続けた。そのくらい、美味しかった。

「この野菜、うちの畑で採れたんだぜ」

「へえ」

ちょっと自慢げに語るデブの野菜の蘊蓄に耳を傾けながら、燕は一口大に切られたトマトを口に運んだ。甘くて瑞々しくて、確かに市販のものよりおいしい。

「なあ、神前」

「ん、何？」

「お前、料理得意だったよな。今度、野菜を使ったの何か教えてく
んない？ バリエーション増やしたいんだよ」

「うん、いいよ」

燕は喜んで引き受けた。右腕が今のようになってからしばらく料理はしていないが、レシピは覚えている。

「しかしまあ、神前って何でもできるよなあ。うらやましいぜ」

「野々山くんだって、足速いし、かっこいいでしょ」

「いや、まあそれは否定しないけどさ」

「否定しないんだ……」

「お前ほどの天才も、滅多にいないだろ。確か、
●●高校だったけ？
通ってるの」

「うん。音亜も一緒だよ」

隣に座った音亜を見て、燕は笑った。少し赤くなった音亜を、野々山が冷やかす。

一方、小凧は、久しぶりに会う親友との恋バナに花を咲かせてい

た。

「へえ。雪美ちゃんと春也くん、一緒の高校に通ってるんだ」

「うん。一緒に登校して、一緒にお弁当食べて、一緒に帰るの」「へー……一緒に住んでるんだっけ？ いいなあ」

「この前二人で出掛けてさ、一緒に温泉入っちゃった」

「うそっ、そこまで進んでるの!？」

「ユ、ユキツ……みんながいるところでそういう話は、ちょっと……」

春也が慌てて止めに入ろうとするが、和花が嬉々として首を突っ込んできた。

「お風呂なら、私もお兄ちゃんと一緒に入りますよ！ 背中流しあったり、いろいろしてます!」

「おお……兄妹愛……」

「の、和花……ここでそういう話をするな……」

「……お互い辛いね……」

「……ようやく仲間に出会えた気がする……」

安藤と春也はなんだか共感するところがあるらしく、しくしくと泣きながら愚痴をこぼし合っていた。

「ふふ……やっぱり、みんなで集まるのっていいね」

にぎやかな一同を見つめながら、燕は本当にうれしそうに呟いた。

その目にわずかな悲しみが混じっていることには、「千里眼」の音亜も含めて、誰も気づいてはいなかった。

海水浴

「海だあああつー!!」

熱く焼けた砂浜を、野々山と安藤とデブが駆けていく。周囲の視線を気にしながら、他の面々も後に続いた。

三泊四日の、二日目。燕たちは、近くの海水浴場に来ていた。

「音垂。みんなと遊んできなよ」

「で、でも……」

燕に言われて、音垂は困ってしまった。燕は傷のことがあり、海には入らないと言う。燕だけを海の家に残して遊ぶのは不安なのだが……

「……だって、燕くんがナンパされたら……」

「うっ……」

燕は少し傷ついた表情をしたが、すぐに笑顔を取り戻した。

「せっかく海に来たんだし、遊ばなきゃ。ね？」

「……燕くんは？　ずっと待ってるの、暇じゃない……？」

「ボクは、みんなが楽しかったらそれでいいから。……あ、でもやっぱり、ときどき戻って来てくれると嬉しいなあ」

「……うん。じゃあ、ちょっと遊んでくるよ」

音亜は残念そうにしていたが、迎えに来た雪美と小凧と一緒に波打ち際へ歩いていった。野々山たちも、とても楽しそうにはしゃいでいる。

——他の人たちに、迷惑かけなきゃいいけど……

燕は苦笑しながら、売店で買ったかき氷を少し口に運んだ。練乳をたっぷりかけたイチゴ味だ。頭が痛くならないように気を付けながら、少しずつ食べる。

そして、その男性が話しかけてきたのは、かき氷が溶けてジュースになりかけているときだった。甘いシロップをストローで吸っていると、低く落ち着いた声に話しかけられた。

「キミ、ちょっとお話したいことがあるんだが——いいかい？」

「！」

まさか本当にナンパかと、燕は怯えて縮こまった。ハンチングを深くかぶって目を隠し、上目づかいに見つめる。どうしよう、音亜たちは遠くで遊んでいるのに……

「お、おいおい……そんなに驚かないでくれよ」

燕に声をかけてきたのは、眼鏡をかけた落ち着いた雰囲気男性だった。この暑い中、ピシッとスーツに身を包んでいる。ナンパしたりするような歳ではないだろう。——まさか、援助k……

「キミ、神前燕くん……だよな？」

「……だ……」

見ず知らずの男性に名前を呼ばれ、燕は一気に警戒を深めた。何かあつたらすぐに対処できるように、左右の手を構える。

「……誰……ですか？ 初めてお会いしますよね……？」

「ん？ ……ああ、いや、そうだったね。失礼。名乗ることはできないが……別に、そんなに警戒する必要はないよ。今日は、キミのために来たんだ」

「……ボクのため……？」

「そう、キミのためだ」

男性は一度周囲を見回して、燕に小声で話し始める。

「まず、一つ目。三日後から、『ゲーム』が開催される予定だ」

「今年の夏は、『ゲーム』は行わないんじゃないですか？ それにボクは、外で生活してるわけですし、隔離地区での『ゲーム』は関係ないんじゃない……」

「隔離地区で行われるわけではないよ。舞台は『外』だ」

そうして男性は、「ゲーム」について説明を始めた。話が進むにつれて、燕の表情は曇っていく。一通り説明した男性は、「協力し

てくれるかい？」と訊ねてくる。

「ボクは……」

燕はうつむいて、返答に困ってしまった。

「……ボクは……みんなを……音亜を、裏切ったりなんかできません……」

「だがっ、このままではキミは、自分が危険なことは分かっているだろう？ 春の連続傷害事件の後、キミは長期間入院したね？ 能力については、一般の機関には解明できていないことが多すぎる。また同じようなことになったら……」

「それでも、ダメ……です。ボクが、音亜を守らなきゃ……」

「……そうか」

男性は溜息交じりに――しかし、どこか安心したように微笑んだ。どこかで見たような、誰かと似ているような気がしてじっと見てみるが、燕には誰と似ているのか、はつきりと分からなかった。

「神前くん。私は、キミを助けたいと思っている。困ったら、連絡をくれ」

電話の番号やアドレスが書かれたメモを燕の手に握らせて、男性は挨拶もなく去っていった。その後ろ姿を見送っていると、音亜が慌てた様子で駆け寄って来た。

「っ、燕くん、大丈夫！？ 変なことされなかった？」

「あ、うん……」

燕はこっそりとメモをポケットにしまった。後でケータイに登録しておこう。

燕は微笑んで見せるが、音亜はまだオロオロしていた。

「本当に何もされてないよね？ ナンパなんてされてないよね？」

「うん、大丈夫だよ」

音亜が「千里眼」で見抜かないことを祈りながら、燕は微笑んだ。

幸福な時間（前書き）

読者の皆様こんばんは、イチゴダイフクでございます！

いやあ、今日は遂に、高校の入学式でした！　うれしいですねえ。
楽しみですねえ。うへへへ……じゅるっ。

勉強、部活、通学——いろいろ大変そうですが、時間を見つけて
更新していきたいと思っています。ではでは、引き続きよろしくお
願いいたします。

幸福な時間

海から帰り、夕食後。傷を見られたくないこともあり、燕は先に一人で風呂に入っていた。これまたちょっと広々とした大きな浴槽に浸かり、「ふう……」と息を吐き出す。あの男性に言われたことが、ずっと頭の中を飛び交っていた。

——私は、キミを助けたいんだ。

——神前くんに、ぜひ協力してもらいたい。

「湯加減はどうかね？」

不意に声をかけられた。浴室の曇ったガラスの向こうで、デブのおばあちゃんが言う。

「みんなは、外で花火をやっているよ」

「分かりました」

おばあちゃんが脱衣所を出たのを確認して、燕は湯船を出た。脱衣所で、鏡に映った自分の身体を見る。相変わらず細い、華奢な身体。白い肌に刻み込まれた、消えない傷。

生々しい傷から目をそらし、身体を拭いて、右手から胸までを清潔な包帯で巻く。また、あの男性の声が思い出された。

——能力者を、やめることができる。

——キミは、普通の人間に戻るんだよ。

——助かるんだ……。

「……ボクだつて……分かつてるよ……」

呟き、音亜が選んでくれたパジャマを着て、燕は脱衣所を出た。髪を拭きながら声の方へ歩いていくと、みんなが外で花火をしていた。縁側に腰かけた音亜の隣に、燕は座る。

「賑やかだね」

「うん。……あ、これ、燕くんの分ね」

大皿に並べられたスイカを一切れ手に取り、燕はそれを口に運んだ。少しずつ食べながら、はしゃぎまわる友人たちを見つめる。

「……ねえ、音亜」

「何？」

「音亜は……能力者じゃなくて、普通の人に戻れるとしたら……うれしい？」

「それはもちろん、嬉しいんじゃない？」

当り前の回答を口にして、音亜は首を傾げた。燕を上目遣いに見て、訊ねてくる。

「それが、どうかしたの？」

「うっん……なんでもないよ」

燕は笑みを浮かべて誤魔化した。デブが鼠花火に火をつけ、驚いた小凧が野々山にしがみつく。安藤は、大切な妹と一緒に笑いながら、線香花火を手にしゃがんでいる。春也は、一緒に風呂に入ろうとついてくる雪美に慌てている。

——こんな時間が、いつまでも続いたらいいのに……

「そうだね」

「！」

音亜の目が妖しく光っていた。どうやら、今考えていたことを見抜かれたらしい。本心なので何もやましいところはないが、やはり恥ずかしかった。

「私も、ずっとこうしてたいなあ……」

「ね、音亜……！」

燕の肩に頭を預けて、音亜は悪戯っぽく微笑んだ。恥ずかしさに頭が沸騰しそうになりながらも、燕はずっと、音亜に寄り添っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3601i/>

夏の疾走～夏休みを手に入れろ！～

2010年10月15日20時54分発行